
あなたに囚われた

黒蜜白石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたに囚われた

【Nコード】

N56800

【作者名】

黒蜜白石

【あらすじ】

何でもない日常を送っていた本編主人公、朝月玲治。だがそれは前触れもなく崩壊した。

目の前に現れる銀髪の少女。

彼女はガリア王国有数の軍家、そして貴族のご令嬢でした。使い魔として異世界に生きることになった彼はどうなる！そして迫る運命は如何に！！見たいな話です。

大体オリジナル要素で、感想ご意見、お待ちしております。批判大

歡迎。

プロローグ（前書き）

初投稿です

勢いに任せて書きました

若干改行・誤字脱字があるかと思いますが
そのときはご一報ください。

プロローグ

それは突然起こった。

今までになにか予兆があったんじゃないかと言われても全く覚えがない。

いや本当にただの何でもない日常に生きていたのだ

俺の名は朝月玲治。あさつきれいじ

まあ某の高校に通うごく普通の高校生だ。

今朝の日差しを浴びて、優雅な散歩……いや登校している。

「おはよう朝月君っ！」

そういつてポンツと俺の肩を叩きながら元気な笑みをむけてくるのは姫野佳奈。

なによりも行動派で運動面においては飛び抜けた才能を持っている。ボーイッシュなボブヘアがその性格とよく合う、クラスの中でも人気者の女子だ。

「おおおはよう、朝から元気だな姫野は。ううつ、さぶ」

首に巻いたマフラーをいっそうきつく巻きながら挨拶を交わす。季節は冬。吐く息白く、血はとどこおる季節だった。

「へへん、それが私の取り柄だからねー。ほら朝月くんももつとシャキツとする！」

「すまんが俺は学校までの道のりを無事生きて登校するというミッシヨンがあるんだ。こんなところでHPを消費しては教会行きだからな。」

「もうつれないなー。棺桶になったら私が魔法かけてあげるのにな」

そういつてなぜか何かを期待するような目でこちらを覗き込む。
なにかと幅広い知識を持っていて、人当たりも良いので、好きだと勘違いされることも多いらしい。

「ふむ、俄然やる気が出てきたぞ！可愛い女の子にそこまで言われちゃあ朝月家の名折れと言うもの！」

玲治は大げさに腕を振り回してアピールする。

「おっ、ついに火がつかしましたかっ」

「よし！あの校門まで二人で競争だレディゴー！」
先手必勝。走るなら走るでさっさと終わらせてしまおうと言うわけだ。何に勝つか知らないが。

「あ！待ってよーそんなの反則ー」
後ろから姫野の声が追いかけてくるが俺は構わず走り続ける。

走り……

走り…

はし

「負けないからねっ！朝月君！」

横を見ればさっきまで後ろ彼方だった姫野の姿がそこに……

「くっ！負けるかああ」

すかさず俺もスピードを上げる。

登校している他の高校生たちが好奇の視線を注ぐなか、二人は校門まで横一線に走りきった。

「やったー、私の勝ちい！」

ゴール手前で僅差だったのを大きく開いて見事一等をとったのは姫野だった。

「はあはあ、やっぱり姫野って運動神経いいのな」

と称賛の言を述べるが、途端、姫野は頬を膨らませた。

「とかいって、さっき手加減してたでしょ？」

「あらん？バレてたか」

「ふっふっふー、私の目は誤魔化せないよ。女の子に嘘つくなんてさーいーてーいー」

「すまん、女の子に花を持たせるのが男の役目だからさ」

「もうー、んなこと言っちゃってー」

そう言いながらも姫野はなんだか嬉しそうだ。

その後は他愛もない話をして教室に入っていった。

そして放課後

「朝月くんちょっといいかな？」

「ん？どうした、姫野」

「ちょっと話したいことがあって」

そういう姫野は深刻というか何やら思い詰めたような顔をしていた。

「？」

俺は訝^{いぶかし}んだ。

（これはあれか？これから告白しますーなムード見せてあとからドツキリ作戦か？）

全くいまどきの女の子は何を考えるのか分からないな。

まあここはひとつ騙されてみるのも悪くないかなと思い、二人、人気のなくなるのを待った。

そして教室には、この階層には二人だけが残った。

「……………あのね！」

姫野はもじもじしながら切り出す。

「えっと…その…」

（これは予想通りか？）

下を向いて指を弄ってる素振りからしてあたかも人に『好き』を伝えるかのごとしだ。

むしろかなり適当な予想があたっていることに自分自身驚く。

「わ、わたしねっ！」

姫野はバツと顔をあげた。

そして一息。

「あなたが好きなの！」
愛を告げられた。

「ああ、俺も好きダゼッ！」

と大袈裟に顔に手をあてナルシストなポーズをとる。

我ながらふざけてることは丸出しだった。

「ほ、ほんとに？」

だがいつもと反応が違う。

『あちゃあ、バレてましたかー』とかいってエヘへと頭を掻きそうなものなのだが。

今の姫野は心なしか頬が上気していて――

まるで本当に告白をしたかのようにだった。

ん？なんか展開が違うぞ……？

「ええと？もしかしてさっきのはマジ？」

「私は本気。嘘だったらこんなこと言わない」
そして少しずつ近づいてくる。

（あれ？今のはドッキリじゃない？てことは本当に告白されたと言
うことか？いやまさか俺なんかを好きになるやつなんかでも現に好
きと言ってたしここはいったいどうすれば――）

予想外の展開に焦った思考を弄んでいるといつの間にか目の前は姫
野の顔が……。

「付き合って」

次の瞬間にはお互いの唇が重なっていた。

思考が止まる。

目の前の姫野の顔と唇の感触だけがが五感を支配する。

背景が歪んだ。

「ーッ！」

「!?!」

俺は驚いて姫野から唇を離した。
そして辺りを見渡し、見慣れた教室が歪みに歪んでいることに気がついた。

「これは一体なんなの!?!」

姫野も訳がわからないと言う風に辺りを見渡している。

「わからない。とにかくここから出よう」

と教室から出ようとして、
そして足をつく床すらもなくなっていることに気がつく。

途端に全身に走る浮遊感。

内臓が上へ上へと引っぱられる。

手を伸ばすが上にも横にも何もない。

ただ虚空をつかむだけだった。

「うわあああああ!?!?!?!」

「きゃあああああ!?!?!?!」

二人は真っ暗などこまでも続くような穴に落ちていった。

「んん……」

頭に意識が戻り始める。

ふらつく体を起き上がらせ、なんとか辺りを見渡す。

「うわ………なんだこれ」

そこには西洋風の建物が建っていた。

まさに城。古い西洋映画の攻城戦で見たのがそっくり目の前に現れたのではないかという迫力。

城壁は長年の塵と垢によって黒っぽく変色し、老兵のような剛健な雰囲気を感じている。

そして一番高いと思われる尖塔には家紋らしき旗がひるがえっていた。

玲治はものものしい雰囲気にとただただ圧倒される。

「人間ですって?!」

後ろから鈴のような声が聞こえた。

振り替えばそこには――――

「どこの平民? 名を名乗りなさい!」

銀色の風が吹いていた。

それは突然に起こった。

前触れもなくただ無情に

何気ない日々と別れを告げ、

少年は異世界を駆ける。

プロローグ（後書き）

これ書くの一時間も使うなんて……

携帯は難しいです。

続きが気になると言う方がいらっしやればがんばって連載をば……

H 2 2 . 1 2 . 1 7 加筆修正しました。

第一話 ハジマリの始まり（前書き）

駄文です

詰め込みすぎた感じがしなくもないですが

とりあえず今は雰囲気を紹介からと言うことでひとつ

第一話 ハジマリの始まり

「人間ですって?!」

後ろから鈴のような声が聞こえる。

玲治が声のするほうへ向くと、銀色の風が吹き渡っていた。

というのは形容的文句だが、実際違う人が見たとしても、同じ感想を抱いたに違いない。

そこにいたのは長い銀髪を腰あたりまで伸ばした少女だった。

その髪が風に揺られ、なんともいえない神々しさ纏っているがため、思わず玲治も綺麗だなと思っていた。

「どこの平民？名を名乗りなさい！」

目の前の名前も知らぬ少女は高圧的な態度で玲治に問いかける。

「ん？俺のことか？」

「そうよ。」

まだうまく回らない頭を動かして自分の名前をおもいだす。

「俺は朝月玲治。……………というかここはいったいどこだ？」

「どうしよう……ねえクラリス、こういう場合って儀式は無効？」
玲治の問いかけを無視して銀髪少女が問うと、その後ろに控えていたメイドらしき人物が近寄ってきた。

「そうですね、人間が召喚されたのは異例ですが、召喚した以上、使い魔にせざるを得ないと思われます」

「そんな……」

メイド姿の女性の言葉に銀髪の少女は肩を落とす。

「まさか平民を召喚するとは……」

「まさに異例。仕切りなおすことになるのだろうか……」
なにやら変わった服装をした大人たちが遠巻きにこちらを見つめている。

「おーい、もしもしー？聞いてんの？」

キツと銀髪少女がこちらを向く。

「なによあんた。というか名前早く名乗りなさいよ」

「いやだから朝月玲治だって。てかここは一体どこなんだ？なんか城みたいなのが建ってるんだが……」

「アサツキレイジ？変わった名前ね。ここはガリア王国よ」

「ガリア王国？」

「ガリアのこと知らないわけ！？あなた一体どんな田舎から来たのよ？」

目の前の少女はあきれたのか、がっくりと肩を落としている。

「日本だが……ん？いやちょっと待てよ」

ようやく思考が調子を取り戻し始めた玲治は重要な事実に気が付いた。

「俺はなんでここにいるんだ？確か教室がゆがんだかと思ったら大きな穴に落ちていったはずなんだが・・・死んだのか、俺」
享年、16歳。

彼は夢も未来もある人生をここで断つ運命となった…………。

「…………私がサモン・サーヴァントを行ったからよ。使い魔召喚の儀式であなたが呼ばれたってわけ」

目の前で目を瞑り、静かに黙祷する玲治を苦々しげに見つめる。

「はぁ…………なんでもっといい者が出なかったんだろう」

「いやだからな、サモン・サーヴァントって——「お嬢様」
クラリスとか呼ばれたメイドが玲治の話を遮って、少女に顔を近づける。

「今日は王侯貴族方もいらっしゃっております。一旦ここは場をしめた方がよろしいかと」

「う…………今日は具合がわ——「お嬢様？」わ、わかったわ！」

自分の召使であるはずのメイドに問い詰められ、少女は諦めた表情になる。

ゆっくりとこちらに向き直り、杖を向ける。

「ちょ、何するつもりだ!？」

「我が名はリルウ・ヴェルシャル・ド・ノアイユ。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ」

またしてもこちらの言うことを無視し、なにやら変わった文句を述べる。

そしてすうっと、顔を近づけてきた。

だんだん近づいてくる少女に言い知れない不安を感じ、後ずさろうとするが、体がまるで動かない。

なにかに縛られたかのようだ。

そして気が付けば目の前に顔があった。

数秒のち、直ぐに少女は離れる。

「いきなりなんなんだ——っ！ぐっ！！」

いきなり唇を奪われたことに抗議しようとするも、その直ぐ後に左手に激痛が走り、おもわず口を閉じる。

やがてそれも止み、気が付けば左手には見たこともない文字が刻まれている。

「『ティワーズ・エオロー』。まあよくある使い魔の称号ですね。

無事儀式は終了いたしました」

クラリスが観衆に向けて完了の旨を告げると、それまで遠巻きに眺めていた大人たちがぞろぞろと少女に群がり、口々に祝辞を述べはじめた。

「おめでとうございます、ノアイユ嬢」

大の大人が頭を下げ、褒め称えていると言うのに、少女はなにか嫌

そんな顔をしている。

一行はどうやら城の内部へと向かっているようだった。

出る場面を逸し、展開にすら置いてきぼりにされた玲治は、集まる視線に耐えながら城の中へ入って行く集団についていく事しか出来ずに

（一体何がどうなってるんだ……俺の日常はどこへ……？）
と己を嘆くのみだった。

そのとき彼はすっかり失念していた。

この地へ来る前まで一緒にいたはずの少女のことを。

その事に気づくことになるのはもう少し先のことである。

第一話 ハジマリの始まり（後書き）

『ティワーズ・エオロー』

簡単な意味として『戦の神の恩恵』ですかね。

まあ当然主人公ですから？ノーマルなんかで終わるはずもなく……
その辺のことはまだ考え中です。

次回は設定説明回になります。

なにか不備がありましたら是非ご指摘ください^^

H22. 12. 17 加筆修正しました。

第二話 説明会開催詳しくはここをクリックな回（前書き）

まだ投稿して間もないですが

読んでくださった方、お気に入りにもしてくださった方、
本当に感謝です！！

今回は物語を進めるにあたっての説明を混じらせた文です。

第二話 説明会開催詳しくはここをクリックな回

トリステイン王国とガリア王国をわけた境界上にあるラグドリアン湖。

水の精霊が棲むその湖畔にはガリア王家の紋章が掲げられる屋敷があった。だがその紋には十字型の傷が醜くついている。

ご存じの通り、オルレアン公が住居である。

数年前、ガリア国王が崩御したとき、その嫡子である兄弟の間に、王位継承問題が起きた。

権力欲しさあまりに兄であるジョゼフは弟のシャルルを殺し、ついに冠を手に入れた。

その後オルレアン公夫人は薬を飲まされ心を失い、その娘は王政府に囚われの身となってしまった。

しかしそれだけではなかった。

ジョゼフはそれに飽きたらず、自らの脅威となるオルレアン派の貴族を事あるごとに排除するようになったのだ。

隠密裏での確。オルレアン派は急激に数を減らしていった。

そして、本主人公である玲治が使い魔として呼び出されたノアイユ家もオルレアン派の貴族である。

軍家であるノアイユ家はガリアの軍事力の大半を統る、いわば王政府の爆弾なのだ。

「……とここまでが私が仕えさせておりますノアイユ家の現状況なのです」

と茶色の長髪を後ろで束ねたメイド姿の女性、クラリスが告げた。

今、玲治とクラリスは城の一室で向かい合っている。

確かりルウとかいった少女が祝宴に出ている間にここに連れてこられたのだ。

まず最初に、玲治はこの世界が『地球』とは全く異なる法則世界であることを知らされた。

俄には信じがたいが、この部屋に来るまでに目の前で”魔法”を目撃してしまった以上、信じざるを得ない。

「ふーん。ま、お前たちの家がどんなに危険な状態なのかはわかった。要するに軍事的影響力で家名を剥奪されずに済んでるわけだ」と

「おっしゃる通りでございます。しかしそれももう限界。先ほど前庭であなた様が呼び出されましたとき、青い髪の男がおりましたでしょう。」

「ああ、覚えている」

高級そうな椅子に腰掛け、周りに何人もの大人をまとわせていたのはあの状況において異質だった。その男が何やら意味ありげな薄い笑みを浮かべていたのも印象に残っている。

「あの方が現ガリア王、ジョゼフ。今日ここへ来られたのも名目上

は使い魔召喚の儀式の視察ですが、恐らくは肅清が狙い。いずれか王政府と剣を交えることになりましょう」
クラリスは淡々と告げた。

「でも俺は無関係だろ？なんで巻き込まれなくちゃならないんだ？」

「それはあなたが使い魔だからよ」
後ろから声が聞こえた。

振り返ると扉の前に、ドレスを着込んだ銀髪の少女が立っている。
ガチャンと扉を閉めるとこちらに向かってきた。

「……………」

「な、なんだよ」

少女は玲治を冷たく睨むように見ている。

「…べつに……」

何も語らずそのまま顔を背ける。

心なし頬が赤いのは数時間前の……のせいだろう。

玲治も唐突な出来事を思い出し、顔が熱くなるのを感じる。

「そもそも使い魔ってなんなんだよ？なんかその…キスされた後左手に妙な文字が浮き出たんだが」

「使い魔は魔法使いの召し使いと言えば分かりやすいでしょうか。
その左手の文字は契約の印です。あなたはこれからリルウお嬢様に
仕えることになるのです。」

「は？いや無理矢理連れられてそりゃないって。日本に帰らせろよ」

「日本？ ああさつきもそんなこと言ってたわね。どこだか知らないけど無理な話よ」

銀髪少女は無情にも告げる。

「なんでだよ」

「そんな魔法知らないもの」

「んな冗談じゃねえ。無責任な事言うなよ」

「あーもううるさい！ 知らないものは知らないの！ 次言ったら檻の中ぶちこむわよ」

少女の脅迫じみた言葉に玲治は黙るしかない。

「俺に選択肢はないって訳かよ……」

玲治はがっくりとうなだれる。

「はあ…こんなのが使い魔だなんて恥ずかしくて外にも出られないわ。…なんでこんなのが召喚されたんだろう」

対する少女はさらに悔しそうだ。

「お嬢様。いくら相手が平民であろうと『こんなの』呼ばわりは要らぬ恨みを買うことにもなりますよ。もう少し言葉選びを慎重になさってください。」

「で、でも…」

「でもではありません。」

クラリスはきっぱりと言い切る。

玲治は目前光景に少し不思議な印象を受けた。
主従がまるで逆転したような会話。

少女はこのメイドに頭が上がらないのだろうか。

「ねえそのあんた」

「朝月玲治だ。名前の方が玲治で家名は朝月」

「じゃあレイジ。私の名前はリルウ。リルウ・ヴェルシャル・ド・ノアイユよ。これからいっぱい仕事してもらうんだから覚悟してよね」

「……はあ」

やっぱり選択肢はなかった。

一方その頃……

「んん……」

目が覚める。

ジンジンする頭を押さえながら姫野佳奈はなんとか体を起こす。

どうやら自分はベッドに寝かされていたようだ。

「ここは一体……？」

そこは見たこともない部屋だった。

床には所狭しと雑多なものが置かれ、壁には食べ物突き刺さったレイピアや、絵画、人形などが脈絡なく飾られている。

天井を見れば何本もの傘がぶら下がっている。

あつ、そうか。これは夢なんだ。目が覚める前の夢ってほんとカオスよね。

そのとき部屋の扉がギィと音をたてて開いた。

そちらを見て、入ってきたものを見て仰天する。

「あら、起きたのね。気分はどう？」

なんとその人間は耳が長かったのだ！

「七福神……？」

「いやちがうから！？」

「駄目よ私！夢に惑わされてちゃ！」

「夢じゃないわよ」

「夢から覚めろー目覚めよー我が肉体ー南無妙法蓮華経ー…」

「だから夢じゃないってば！」

その後彼女が落ち着くまでしばらくかかったという……

第二話 説明会開催詳しくはここをクリックな回（後書き）

感想、不備報告ありましたらどうぞ

H.
22. 12. 17 加筆修正しました。

登場人物紹介 第二幕編（前書き）

とりあえずキャラ設定考えてみました

登場人物紹介 第一幕編

朝月玲治

16歳

身長176cm

体重59kg

本物語主人公。

某高校一年生。

日本人的容姿（黒髪で黒い目）をもち、平均以上の格好よさ。サイトよかっかしい（笑）

成績は中の上と無難だが運動能力はかなり高い。

冷静に物事を判断する方で、いざというときに頭が切れる。

He is cool!<(。∀。)>b

(by黒蜜

姫野佳奈

16歳

身長155cm

体重「女の子に聞くのは失礼だよ？」

本物語サブ主人公。

某高校一年生。主人公と同じクラスであり運動神経も成績も優秀な明るく快活な女の子。

異世界に飛ばされる寸前に主人公に告白しているが、答えを聞く間もなく飛ばされたため、うやむやのままという悲しい結果。

主人公としてよりもむしろヒロイン側に回る予定

リルウ・ウ、エルシャル・ド・ノアイユ

15歳

身長148cm

体じゅ「聞いたら殴るわよ」

ワンオブメインヒロイン。

細くさらさらとした銀髪が印象的な女の子。

ノアイユ家ってフランスに实际した公爵（爵位不正確、どなたか詳しい方教えてください）らしいです。

軍家の長女って新鮮でいいかな！。

オルレアン派とだけで政敵、肅清の対象とされた不運の家。

魔法属性は考えちふ。

クラリス

26?歳

身長164cm

体重56kg

サブキャラ

茶髪なメイド。

お嬢様はいつも彼女に頭が上がない。

※数値はあくまで指標です。実際の数値とは若干異なる場合がございます。

登場人物紹介 第二幕編（後書き）

この時点のプロフですので、変更、加え等々あります。
ご了承下さい。

第三話 朝稽古（前書き）

日曜効果は素晴らしい。

読者さんを増やしてください

そんなこんなでユニーク数が600突破です！

こんなにもたくさんの方に見ていただけたことに驚き（笑）。

感謝感激なりき。

とと、それでは続きをどうぞ

第三話 朝稽古

次の日の朝、玲治は朝もやがかかった城の広場にいた。

「ふあ…こんな朝早くから一体何をするんだ？」

あくびを噛み殺しながら目の前にたたずむ少女に訊ねる。

「レイジは昨日召喚されたばかりでしょ？軍家に来たからにはまず大事なのが武術よ。というわけでテストさせてもらおうわ」

「まさかお前とやるのか？」

「いいえ、クラリスと手合わせてもらおうわ。」

リルウの横に無表情で立っているメイドを見る。

有能な仕事人という感じはするが、あまり戦闘が得意とは思えない。

「大丈夫なのか？あまり戦うようなイメージがわかないんだが」

「ご心配には及びません。多少のたしなみはしておりますので。小手調べ程度ならば相手になることはできます」

「そういうことよ」

なぜかリルウが誇らしげな表情をする。

いや……お前の事じゃないだろ

「では倉庫より武器を幾つか持って参りましたので、その中から一つ手に馴染むものをお選びください」

すぐ横にある荷台に近寄る。

そこには数本の剣や鉄槌、槍が載っていた。

（すげえな……本物だ）

どれも名前だけは聞いたことがある。だが実物を見るのははじめてだ。

その重厚な威圧感と新しいものに触れる喜びに思わず身震いする。

玲治は初めて見る武器たちを手にとっては撫でるように見ていく。

最後に剣の中で一番長いものを手にとってみた。

バスタードソードと呼ばれるそれは重すぎもせず、軽すぎもせず、手によくなじんだ。

（長剣は男のロマンだな）

少し素振りをして具合を確かめてから向き直ると、リルウは少し離れたところに移動しており、真ん中の開けた場所にクラリスが立っていた。

手には短剣を握っている。

「そんなのでいいのか？」

自分で言うのもなんだが、刃渡りも10数いかない得物相手に2メートル近くある剣で挑むのはどうかと思うのだ。

「私には馴染みあるものですので。準備はよろしいですか？」

「ああ、いつでもこいだ」
そういつて5メートルほど離れた位置に移動する。

「それでは始めます。先手をどうぞ」

そう言うのを聞いたがはいか、玲治はクラリスに飛びかかった。

「だああっ！！」

横一線に剣を振るう。クラリスはそれを交代することで避けた。

玲治は避けられたのを見て、すぐに剣先を移動させる。
これも見事にかわされた。

クラリスは攻撃に打ってでようとはせず、玲治の力量をはかるように静かに目を光らせている。

玲治はぶんぶんとバスタードソードを振り回すが、その度に軽々と避けられてしまう。

横へ薙いでは後ろへ、縦に裂いては横へ。

「くっ：はあはあ」

何十と斬ってはかわされを繰り返すうちに段々に息が上がり始めた。

剣を持つ力がぬけ、剣先がぶれる。

玲治の攻撃に勢いがなくなってくる。

クラリスはもう潮時と悟ると一気に攻勢にでた。

玲治が振り下ろした剣を進み出て自ら短剣で受け止める。

ガギイインンン！！！！

鋭い金属音が響く。

だが短剣は押し負けることもなくその場に止まった。

と次の瞬間、クラリスは低く伏せ、玲治に回し蹴りを叩き込む。

足をとられた玲治は為す術もなく芝生の上に倒れ込んだ。

その上にクラリスがのし掛かり、首元に短剣を突き付けた。

「こ…降参だ…」

いとも簡単にねじ伏せられてしまった。

「全然弱いじゃないの！手つきが初心者よ」

一部始終を見たリルウが驚きとばかりに声をあげる。

「そうですね。大振りで振り回したことが一番の敗因でしょうか。見たところこれが初めてのようですが…剣に触れたことは？」

「はあはあ…まえに木刀で遊んだくらいだ」

息切れをなんとか押さえながら答える。

中学生の頃、友と戯れでチャンバラ程度はやったことはある。その時は連戦連勝だったのだが……。この世界ではそんなものは通用しないようだ。

「なるほど遊び程度ですか。」
クラリスは何か考え込み始めた。

「どうしたのクラリス？」

「いえ…玲治様は剣にはほとんど手をつけていないそうですが、太刀筋はなかなか安定していました。これからの鍛練次第では立派に剣が振るえると思います」

「えっそうなの？」

「ほ…ほんとか？」

「今のところは」

「ふ、ふーん。クラリスに誉められたからっていい気にならないでよね！」

なにか不機嫌そうな顔をしてリルウがそっぽを向く。
そしてずかずかと城の中へ戻ってしまった。

「……………」

「では玲治様、我々も城へ戻りましょうか。」

「あ、はい」

リルウの帰った跡をみながら、
(これがツンデレってやつか……萌えだな)

なんて思ってしまったことに気づき、思わず笑いそうになってしまった。

「片付けは私がしておきますので自室で休息をとられてください」
そんな玲治をすこし不思議そうな目でみるクラリス。

「あ、いえ俺も手伝いますよ」

何となく朝の空気が清々しく感じられた。

それはこちらへ来てからはじめての体感だった。

ふと空を見れば、既に朝日が上っていた。

第三話 朝稽古（後書き）

原作キャラとの接触も考えているのですがそれまでの展開上の必要な伏線がいろいろと：

まだまだ先になるかもです

今のところは主人公の奮闘劇が上演されていますが新展開も！？

これからに乞うご期待！です

H 2 2 . 1 2 . 1 8 加筆修正しました

第四話 あの子は何処(いづこ)へ(前書き)

はいこんばんは。

黒蜜です

今回は場面が変わっています

気になるあの子は何処へ？

その運命の行方は如何に？

そんな話をしましょうか

告知・ユニーク総計1000突破！！おめでとうございます！（何

ではでは稚拙文ですがつづきをどうぞ

第四話 あの子は何処（いづこ）へ

戦争は何時なんどきにも

終わることを知らない

終結は絶えることのない憎しみを糧に

永遠と遠くへ

果たして終わりは来るのだろうか

争いと隣り合わせのまま

人はなお先へ先へと生き続ける

憎しみのない平和な世界を求めて……

『とある軍人の遺した言葉』

玲治がクラリスと闘うよりも少し遡った時のこと、

姫野佳奈はエルフに遭遇した。

どうやらこちらに来たときに気を失っていたらしく、起きたときはもう日が傾きかけていた。

「落ち着いた？」

「ええ…お陰さまで」

目が覚めたときはそれはもう取り乱した（詳しくは第二話を参照のこと）。

何故ってそれは起きたときに知らない場所にいたのなら当然の反応である。

そして目の前に七福神が現れたのなら当然である。

金髪の長身という外国人体型の七福神？

姫野はこれが西欧と東洋の融合かと、拝みに拝んだ。

まあすぐに誤解だとわかったのだが。

「よかったわ、いきなり私のこと拝み始めるんだもの。びっくりしちゃったわ。」

七福神こと金髪耳長の女性がベッドから体を起こしている姫野に話しかける。

「はは…その節はほんとうにすみません。何か誤解してしまったみたいで」

「ううん、気にしてないわ。むしろ怖がられるかと思ってたもの」

「怖がる？あなたの事をですか？どうして？」

キョトンと姫野は首をかしげる。

「ええ、大抵の人間は私を怖がって逃げるか、襲ってくるかのどちらかだもの…だって」

「エルフだから」

「へえ……………!!」

姫野は数秒固まる。

口をパクパクさせてものも言えない状態だった。

女性はまたいつものように怖がられて何も話せずに逃げられてしまうのかと諦める。

もしくはそこら辺のものをとって斬りかかるのか。

いずれにせよ後には何の利もなかった。

そして――

「エ、エルフですか！？凄いい！」

「……………、え？」

予想外の言葉に女性は戸惑った。

「私始めてみました！最初はコスプレかなんかだと思ってましたけどよく見たら本物だ！あ、握手してください」

そう言って何か嬉しそうに手を差し出す姫野に呆氣にとられ、思わず握り返してしまった。

「わあい、これで友達にも沢山自慢できるわ。伝説上の生き物に出

会えるなんてことないもの」

握手した手を頬に当ててそのままスリスリする。

「……あなたって不思議ね。驚かないの？怖がったりしないの？」

「そんな、ここに寝かせてくれたのはあなたでしょう？感謝こそすれ、怖がるなんて失礼だわ」

それを聞いてエルフは、

「ふふ、こんなの初めてよ。あなたのこと気に入ったわ。わたしはルクシャナ。良かったら、お友達になりましょう？」

「私は姫野佳奈。こちらこそよろしくです！」

そう言って二人はもう一度握手した。

「ねえ、早速なんだけど人間の生活について教えてくれる？ホントあなたたちには興味があるのよ」

「私もエルフの暮らし方には興味があります！」

「「今夜は沢山お話ししよう」」

二人は同じ言葉を口にして、

それに気づいて、

どちらからともなく笑いあった。

それは会って間もない二人が打ち解けあった瞬間であった。

次の日の朝、姫野は早くに目が覚めた。

どうやら話をしているうち、そのまま寝てしまったらしい。

目覚めたときルクシャナはソファですやすやと寝息をたてていた。

昨日は沢山話し込んでしまった。だがそれが心地よい疲れを引き出しぐっすり眠ることができたのだった。

ルクシャナを起こさないようにそーっと部屋からでる。

外に出てみるとどうやら砂漠の中のオアシスにいるようだった。

日の昇り始めたばかりの気温が少し肌寒くて、着ていた冬用のコートをきつく巻く。

「綺麗なところ……」

家を取り囲むように木々が生え、中心には直径百メートルほどの大きな泉が湧き出していた。

泉の水を軽く掬ってみる。

ひんやりと冷たい感触が心地よい。

その水で顔を洗うと眠気がスパッと消えていった。

と同時に疑問がわいてきた。

（そういえばここにどうやってきたんだろう）

辺りを見ればここは砂漠のど真ん中。どう見ても人が通りそうな場所ではないし、第一、日本にいたのだからここにいるはずがない。

鳥取の砂丘がこんな風なのなら可能性も否定できないが。

昨日の夜、ルクシャナからこんなことを言われた。

「貴女はこんな生せいのない砂漠のど真ん中へどうやってこれたの？ 人間が使う魔法が使われた気はしなかったけど」

魔法——普段ならここで驚くなりするのだが、やはり“異世界に来た”ことの方が大きくてイマイチ凄さが沸かない。

ところでここが砂漠の真っ只中と言うのを確かめるため小高い場所まで行こうとしてみた。

当然地理が分かる場所なら家まで帰ろうと言うわけである。だがすぐに壁に突き当たった。

家を囲むようにした木々の壁、その境界を越えた途端に暑くなったのだ。

朝とは思えない熱波が体をヒリヒリと刺す。

堪えきれずにオアシスへ戻る。

すると先程までの暑さが嘘のように掻き消え、穏やかな朝の冷たさ

が戻ってきた。

そのときルクシャナの言っていたことがわかった。

つまりはこの家は見えない“何か”で守られているわけだ。

外は砂漠そのものが鎮座している。

この中にいたから分らなかったが、要するに外からここまで来るのは人の身ではほぼ不可能だというのだ。

それにルクシャナもここが『地球』とはまったく異なる世界であることを暗示していた。

ために時流の話をして見たが全くわからないといった風だった。

「ここに来る前は確か……教室にいたはず。でもなにか変な感触があった」

教室が歪んだ。

机も壁もそこにあるのに掴まろうとしてもすり抜ける。

そして

「下に落ちていった」

一年生の階は4階建ての校舎の中でも最上階だ。

仮に床が抜けたとしても3階へ落ちたはずである。

「でもそのまま落ちていった」

気がつけばここにいて、ベッドに寝かされていた。

「うーん……」

千思万孝。考えても頭を捻っても堂々巡りを繰り返す。

「ええい、やめっ！」

パンパンと頬を叩いて気をとり直す。

元々、何事にも前向きな性格の姫野は、今ここにいるならここでの生活になれて、少しずつ…もとの世界へ変える方法を探そうと決めた。

「私は姫野佳奈。雨に降られても嵐に遭おうと負けないんだから！」

天性の強さはここに来てても健在だった。

そしてルクシヤナに本当のことを話しておこうと思った。

「おはよう、カナ。気持ちのいい朝ね」

「おはよう、ルクシヤナ」

屋敷に戻ると既に起きていたルクシヤナが挨拶をする。

「…あの昨日話してなかったんだけど実は」

姫野は唐突に話し始めた。

自分が違う世界から来たこと。

この世界のことを全く知らずどうやって来たかもわからないこと。
そしていつかは自分が元居たところへ帰りたいこと。

ルクシャナは最初は驚いていたが、その口調から嘘を言っていないことを知り、黙って聞いていた。

「…だから人がいる場所へいつてみたい。右も左もわからない私だけど、まずはこの世界に生きてみたい。」

少し不安になりながらも、

「協力して…くれないかな」

そしてじっとルクシャナを見つめる。

「……そうね。薄々はあなたが他の人とは違うんじゃないかと思ってた。エルフのことを怖がらないし、聞いたこともない話をしてくれたし」

この世界のことを知らない姫野は必然的に『地球』の話をしていたのだった。

「あなたは私が見た中で一番変わってたわ」

「……………」

「新しい体験をさせてくれたあなたと出会えたのは本当に良かった。だから」

にっこり笑って、

「私ができることなら…協力するわ」

「あ、ありがとうルクシャナ」

「礼なんていらないわよ。だって私たち友達でしょ」

と手をヒラヒラと振ってそう言っただけだ。

「まあエルフと人間が友達だなんて例がないけどね」

姫野は一瞬キョトンとしたが、掛けていることに気づいて思わず吹き出した。

「あははははっ」

「ふふふふっ」

二人して笑いあった。

そう前例がない。

この二人は気づかないうちに、過去の人々がなし得なかったことをやってのけたのだった。

「さあっ、善は急げよ。早速準備するわよ」

「うん！」

二人の一日が始まる。

第四話 あの子は何処（いづこ）へ（後書き）

ルクシャナって結構使いやすいのかもしれないなー

さて今回の話はどうでしたか？

姫野ちゃんここに居ましたー（笑）

次回はノアイユ家に戻ります

今日は文化の日！（時事ネタ）自然と平和を愛し、文化を進める日
だそうですb v 広辞苑

みなさんよい日を！

それでは ノシ

H. 22. 12. 18 加筆修正しました

第五話 楽しきかな ピクニック 前半（前書き）

4日ぶり・・・かな？

どうも黒蜜白石です。

いや、更新遅れて申し訳ない。

我が拙文を待ってくださる方を思うとともに申し訳なく（略。

実を言うと、学生の敵（？）、テストが学校を襲撃しましてですね、いろいろ忙しかったんですよー^^；

ま、そういうわけで久しぶりの投稿です。

これを読んで、良いと思っていただければ幸いです。

第五話 楽しきかな ピクニック 前半

「こちらステーキのワイン仕込み4皿出来上がりましたー」

「へい、ただいま!」

「こっちは山菜サラダ大皿ー」

「いつ、いま運びます!」

「こっち鳥のロースト焼き」

「い「パイできましたー」

「おい新人! しっかりしろ! てきぱき動け!」
コック長の怒鳴り声が聞こえる。

「わあってるよ!」

あたりは喧騒に包まれていた。
たちこめる煙、香ばしい匂い。

(ああ畜生、黙って自分の部屋に戻ってりゃ良かった)
心の中で呟くが現実は無情にも待つてはくれない。

玲治は今、厨房で仕事をしていた。
事の顛末はこうである。

朝、クラリスと共に片付けを終えた玲治が、与えられた自室

——といっても三畳もいかな小ぢな部屋——に向かっていたのだが、

何かをカートに載せて忙しく動くメイドをみて、
なんだろうなー俺も手伝ってやろうかなーと安易に近づいたのがまずかった。

近付いて話しかけてみれば無視して素通り。

もう一度、他のメイドに話しかけてみるが、忙しさあまりかこちらを見向きもしない。

諦めて背を向けようとしたとき、

「俺の料理人にちよっかい出すんじゃねえ」
後ろから低い声が聞こえた。

肩をがっしりと掴まえられる。そしてそのまま宙に持ち上げられてしまった。

肩に指が食い込んだまま無理矢理後ろを向かされる。

目の前に現れたのはコック姿の筋肉が眩しい大男だった。

ゆうに二メートルはあるだろう。

横幅が玲治二人分とっていて視界が全くひらけない。

「お前見ねえ顔だな」
脅すように低く唸る。

「……ちよっと前に飛ばされてきたばっかだからな」
内心ではビクビクしているのを表には出すまいと必死になって返す。

「飛ばされた？………なんだそういうことか。」
すると途端にしてゴツい顔が満面の笑顔になった。

「それなら早く言ってくれよ！丁度忙しくて困ってたところなんだよ。
ほら付いてこい」

「え？」

そう言っ て玲治を床に下ろすと背を向けて歩き始めた。

「どうした？早く来い」

「え？…いやだから俺は飛ばされてきたんだって」

「んなこたあわかってるよ」

「だったら——」「人事異動だろ？よくあることさ」

「え？いやっ、ちが…ってうわっ!？」

大男は玲治の体をヒョイと持ち上げたかと思うと、そのまま肩に担いで歩き始めた。

「時間がねえんだよ、身の上話なら後から聞いてやるからさっさと
いくぞ。仕事がつまってるんだからな」

「誤解なんだああ……」

そしてそのまま今に至る。

これが朝の食事なのだろうか。そう思うほど料理は重いものであった。

しかも玲治の思惑に反して一向に運ぶ量は減らない。

本来厨房に運ばれてくる過程で誤解を解くのに成功していたはずなのだが、どうやら筋金入りの頑固者らしい。一度決めたことは曲げないと言うか、直線的すぎてまともに話せないと言うか。

しかもこの大男、どうやらノアイユ家の専属料理人のトップらしい。時々若い料理人たちに指示を飛ばしては、食材を手際よく捌いていく。

それは確かにプロの腕であった。

捌きの速さは他を圧倒し、出来上がりの良さは速さに反比例しない。まさに厨房の豪傑であった。

（くそっさっさと逃げ出したいがどうすれば網の目をくぐれるか・・・）

あまりの途中逃げ出そうとしたが、そのたびにあっさり捕まって引きずり戻されてしまう。

「ほらよ！！行って来い！！」

食堂から厨房に帰ると、すぐまたカートに料理が載せられる。

「はあはあ・・・くそっ・・・」

そして

「おう、お疲れ！！なかなかいい働きっぷりだったぜ！！」

「そりゃどーも・・・」

ついに食事の支度が出来上がったらしい。

結局、玲治は最後まで働かされることになってしまった。

「足が痛てえ………」

厨房を出た玲治は足をさする。

往復するのに、城内を良く知らない玲治は、他のメイドについていったのだが、その距離が並みではなかった。

玲治が元いた学校のグラウンドは円周が約500m程なのだが、ここから食堂までは道のりだけなら軽くグラウンドを越えている。なれない重労働に疲労困憊の玲治はその場に座り込んでしまった。

「あー！！こんなところで何やってるのよ」

女の子の怒ったような声が聞こえる。

声のした方を振り返ってみればリルウだった。銀色の髪の毛がたなびいて、一瞬

「私の使い魔だっていうのに必要なときにいないなんて使い魔失格よ！」

そして玲治に指を突きつけた。

「知らねえよそんなこと……。俺は今まで厨房の大男に捕まって無理やり働かされてたんだよ。しばらく休ませてくれ……」

「厨房の？ ああ、あの筋肉の塊ね……まったくもういいわ。それはもう置いておいて、今から私についてきなさい」

「ついていくって一体どこにいくんだよ？」

急におとなしくなったのでほっとしつつ聞き返す。

「私のお母様のところによ。あなたの事まだ紹介してないもの」

「も、もう少し待ってくれ・・・疲れてうごけ・・・痛ってえ！」
廊下に横になろうとした途端、リルウに腕をつねられた。

「男でしょ、そのくらい我慢できて当たり前よ、みっともない」
確かにみっともない姿を晒していた。すれ違う使用人たちは廊下に座り込む玲治を見てくすくす笑って通り過ぎていく。

「ちっ、わあったよ」
渋々立ち上がるとリルウの後ろをついていくのだった。

着いた先は城の上部にある尖塔のひとつだった。
部屋の前を二人の従士が守っており、リルウを見咎めると扉を叩いて、

「リルウお嬢様がいらっしゃいました」

「どうぞ、入れてくださいな」
扉の奥からくぐもった声が聞こえた。

中はまるで書斎だった。
壁際を沿うようにずらりと本棚が並んでいる。
背表紙を流し読みしたが、やはり複雑な字で書かれていて、読めなかった。

「いらっしゃい、この方がリルウの使い魔さんね」
窓際のベッドに上体を起こして座る一人の女性がいた。

リルウと同じ、長い透き通ったような銀色の髪を後ろでまとめている。

聖女のような高潔さを放っていた。

「はい、お母様。ほら自己紹介しなさい」
手をヒラヒラとさせて促す。

「俺は朝月玲治。名前の方が玲治で家名が朝月です。あなたがもしかしてこい：お嬢様のお母様ですか？」

「ええ、私はリルウの母、マリーと申します。当日に会えなくてごめんなさいね。体が弱くて寝込んでしまっていたの」

「いえ、別に構いませんよ。病気なら無理に出て悪化させるよりはましですから」

「ふふ、ありがとうレイジ君。優しいんですね」
とマリーは柔和に微笑んだ。

「普通は動物が召喚されるから少し驚いたけれど安心したわ。リルウは少し我が侘なところもあるけど素直な子なの。これからよろしくお願いできるかしら？」

「まあ召喚された以上は使い魔やっていくつもりです」
まだこちらに來たばかりで実感のわからない玲治は、無難な答えを口にする。

「そう、今はまだそれで構わないわ。急に呼び出されてびっくりしているでしょうし。少しずつ慣れていくといいわ」
マリーも解っているのかそれ以上を要求しなかった。

「そうさせていただきます」

玲治は拙いながらも一礼した。

「……………」

と隣から刺すような視線を感じる。

「なんだよ」

「あんたはお母様に対しては礼儀正しいのに、私に対しては物言いが悪いわよね。さっきもこいつって言いかけたじゃない」

「お前は貴族っぽく見えないからな。俺と同等としか思えん」

「なんですって!?!」

「あらあら」

自分の娘を貶されたのにマリーは楽しそうだ。

「そうだ、いい事を思い付いたわ。みんなでピクニックにでも行きましょう」

「え?」「は?」

これには玲治もリルウも驚いた。

口論していた口があんぐりと開く。

「ほら、まだレイジ君、昨日来たばかりでしょ? 丁度天気もいいし、親睦を深めるのにはいいんじゃないかしら?」

この女性、見た目病気でひ弱そうに見えるが、有無を言わせない迫

力がある。

そのままうまく丸め込まされてしまい、結局朝食のあとからピクニックへと行くことが決まった。

というか……

（俺、休みたいんだが……）

玲治の苦難は始まったばかりだ。

第五話 楽しきかな ピクニック 前半（後書き）

後書き

続きます。以上！！

第六話 楽しきかな ピクニック 後半（前書き）

うい

ピクニック後半 続きを数時間後に書き終えて、とーこー。

やっぱりPCはかどりますなあ。

携帯なんか及びもしませんぜ。

がんばれよ文明の利器！

ではつづきをどぞ。

第六話 楽しきかな ピクニック 後半

今、玲治含め、ノアイユ家ご一行は自然に囲まれていた。

森の中の開けた場所にシートを広げ、持ってきたバスケットを置く。

「ん〜！久しぶりね、こんないい天気にお外へ出たの」

リルウの母、マリーことノアイユ夫人は思い切り伸びをする。

「そうですね、お母様。今日はこれまでにない良い天気ですわね」

リルウもシートの上に座ってのんびりくつろいでいる。

そして玲治はというと、

隅っこの方でちょこんと座っていた。

「どうしたの？レイジさん。もっとこちらにいらっしやいな」

とノアイユ夫人が声をかけてくるが、

「はは・・・」

と玲治は苦笑いを浮かべてお茶を濁す。

（いくらのにびりしろといわれても・・・）

横目で辺りを見渡せば、使用人たちがシートから少しはなれた場所で直立しているのが見える。

そのもつと奥には武装した人たちがあたりを警備していた。

（さすがにこんな状態じゃありラックスなんて出来ないよな・・・）

と一人ため息を漏らす。

それを分かっているのか分かっていないのか、

「ほらほら、遠慮なさらないで♪」

「は、はい」

仕方なく、申し訳分にちよこつと進み出た。

「ところで、レイジさんは何処出身なんですか？」
と純真な目で聞いてくる。

「日本って言うんですけど、知らないですよね」

「ニホン？そうねえ、残念だけどよく分からないわ」

リルウはまたか・・・、という顔をする。

「そういえば、あんた昨日もニホンとか何とかから来たって言うってわね。異世界だっけ？お母様にも嘘つかないの」

「嘘じゃねえよ。これは本当の話だ」

「ふーん、じゃ証拠見せて御覧なさいよ」

ふふん、と小ばかにしたような眼で見ってくる。

むっときた玲治は目に物見せてやると、着ている服の中に手を突っ込んだ。

制服のズボンのポケット・・・・・・・・何もない。

上着のポケット・・・・・・・・紙切れ、はさみ、ボールペン。

鞆・・・・・・・・ってあれ？

（そういえば、ここに来るとき机に置きっぱなしだったな・・・・・・・・・・）

今頃、我が相棒は家に帰っているのだろうか……一人取り残されたかと思うと、なぜか悲しくなった。

「どうしたの？何もないのかしら？」

固まった玲治を見て少しニヤニヤと笑いながらリルウが追い立ててくる。

「ちょ、ちょっと待ってろ！」

少しあせりながら答えた。

続いてコートのポケットをまさぐる。

（頼むから何かあってくれよ……）

と、何か硬いものが指に触れた。

「おっ」

取り出したものは携帯電話。

地球上ならどの場所にしようと、地球の裏側の人とも話ができる、現代文明の利器。

超高度に発達した技術より発明されたそれは、多分この世にはないものだろう。

「ふっふ、いいもの見つけたぜ」

そういつてリルウに突き出す。

「なにそれ？」

リルウは不思議そうな顔をした。

「携帯電話って言って、俺の世界でなら誰でも持ってるものだ」
ぱかっと開いて操作し、音楽ファイルを開く。

すると、携帯電話から有名な音楽家の曲が流れ始めた。

「凄い！！なんか音が鳴ってる！本当に魔法じゃないの？」

リルウは音のなる小さな箱に興奮して、歓声を上げた。

「ああ、科学の結晶だ」

「すごいね、そのカガクってやつ」

「私も数十年と生きてきましたが、このような物は初めて見たわ」

ノアイユ夫人も口に手を当てて、驚いている。

「どうだ、俺が違う世界から来たのがこれでわかっただろう」

「う・・・、悔しいけどハルケギニアじゃ多分こんな作れない。信じざるをえないわね」

「だろ？」

玲治はえへと胸を張って、まるで自分のことかのように威張った。リルウは、そんな玲治を悔しいような羨むような目で見つめる。

「ところでハルケギニアってなんだ？」

せっかくの自分の良いところ台無しだった。

もって来たお昼を食べ、その辺の泉やら、川のほとりをしばしば散歩していると、
ようやく日も暮れ始めた。

「今日は楽しかったわねー。日も暮れてきたし、そろそろお城に戻りましょうか」

ノアイユ夫人の一声で帰り支度があっという間になされていく。

ふと、玲治は着たコートのポケットにまだ何かがあることに気がついた。

コートからそれを取り出す。

それは包装紙でラッピングされた小さな箱だった。

「なにそれ？」

気づいたリルウがたずねて来るが、

「・・・分かん」

玲治には見に覚えのないものだった。

（こんなものコートに入れてたかな・・・）

「ねえねえ、それ開けてみてよ」

言われなくても玲治はすでに包装を破りにかかっていた。びりびりと破ける音だけが、束の間の沈黙を支配する。

「ヘアピンか？」

プラスチックの容器に入れられた小さなヘアピン。

黒を基調とした本体に、青の蝶々のアクセントがついていて可愛い。いい。

「へえー、なかなか可愛いじゃないの」

「ん？欲しいのか？」

「べ、べつに欲しいなんて思わないけどー？」

とリルウは顔を背けるが、目はチラチラとヘアピンに向いている。

（欲しいのばれただろ……）

「お前にやるよ、これ」

そういつて差し出した。

「い、いらないわよそんなの。自分で着けるか誰かにあげる予定だったんじゃないの」

「いやー、それが良く覚えてなくてな、誰にあげるって言っても、もう遅いっていうか……それに俺がつけるなんて考えられんからな。お前なら似合うと思うぞ。」

それでも迷っているのか、うーうー、言いながらじっとしている。

そこに後押しとばかりにノアイユ夫人が声をかけた。

「こう考えたらどう？あなたがレイジ君を使い魔にした証としてもらうのよ。そうすればきつと引け目もないでしょう？それに私もリルウにならきつと似合うと思うわ。」

「……しよ、しょうがないわね、だったらもらってやらない事もないわ」

ようやく折れて、リルウはヘアピンを受け取った。

「頭に着けて御覧なさいな」

ノアイユ夫人に促されて、ゆっくりと髪を留める。

「どう・・・かな？」

上目遣いでおずおずと聞いてくる。

「・・・・・・・・ああ、似合ってる」

リルウの銀色の髪に、咲いたような黒。

その上に鮮やかな青い蝶がむしろ、花となって明色と暗色のコントラストを引き立てている。

まあ、とにかく玲治は見とれてしまったのである。

「何じろじろみてんのよ・・・・・・・・」

赤くなってもじもじとするリルウは、いつもの強情な雰囲気と相まって、

なんだか可愛く見える。

「いや、別に・・・・・・・・」

なんだか玲治も恥ずかしくなって、顔を背けた。

「うふふ、今日一日で仲良くなったわね。」

ノアイユ夫人だけが、いつもと変わらず微笑んでいた。

「そんな事ありません!!」

「はいはい。それじゃ行きましょう」

軽く流されてしまったリルウは頬を膨らませた。

それから一行は夕食の前までにお城に着いたのだった。

200

第六話 楽しきかな ピクニック 後半（後書き）

構想内ではとあるイベントを発生させる予定だったのですが、残念ながら彼らの雰囲気にかけて入り込む余地ありませんでした。

作者不甲斐無い（・ω・）

まあ、それにしても今回でかなり進展ありましたねー
作者的にも一安心。なぜなら視聴率がとれるから！！

皆さんほんとうにありがとうございます！！
前話は午後11頃に投稿したのですがたった一時間で100以上も
の方が！！

皆さんほんとうに（以下略

それでは次回にまた会いましょう^^

第七話 平坦な道一方通行（前書き）

ども、黒蜜白石です。

この間PVが10000を突破しました！

内心プレッシャーに押されてビクビクしてますW

物語は進展しているのかしていないのか！

駄文っぷり發揮しているのかしていないのか！

全てはあなたの感性によって決まります！

どうぞお目こぼしをうあわわわ・・・・・・・・

第七話 平坦な道一方通行

深く息を吸って呼吸を整える。
手に持つ剣を低く構え直す。

「だああ!!」

正面にいる巨人でも入っているのかと思うほど大きな鎧武者へ、
手に持っている剣を逆袈裟斬りに振り上げる。

鎧武者はそれに合わせて、その重さを全く感じさせないほど軽やかに後ろへ下がった。

玲治も間髪入れずに次の斬撃を繰り出す。

避ける暇がなくなった武者は己の持つ大剣を一振りした。

剣と剣が交差する——刹那、

「ぐわっ！」

あまりの力に押し負けた玲治は後ろへ吹き飛び、壁に背を打ち付けた。

「いつっ！」

武者はゆっくりとこちらに近づいてくる。

素早くその場から逃げようとしたがさっき打ち付けた衝撃で体が麻痺して動けない。

そうこうもがくうちについに目の前に迫られてしまった。

ゆっくりと剣が持ち上がっていき、玲治目掛けて振り下ろされる。

訪れるであろう痛みに、思わず玲治は目をつぶった。

「……試合終了」

いつのまにか横に立っていた茶髪を後ろで束ねたメイドの一声で、ガシャンと鎧が崩れ落ちる。

「ただいまの試合の検証を開始します」

とクラリスは毎度恒例の検証会を開始し始めた。

「玲治様も多少上達されたようで、動きも以前と比べ俊敏となりました。ですがあのように自分よりも大きな相手とまみえる場合、力では圧倒的に不利なため、前後左右への多彩な動きで相手を攪乱させるのが的確です。」

目の前のメイドは淡々と告げる。

玲治はそれを壁にもたれたまま黙って聞いていた。

「付け加えますが、相手が後退したからといって無闇に追撃してはいけません。罨の場合も十分に有り得ますし、逆に手玉にとられる可能性もあります。ですから――」

「評価点をとるならば30点というところです」

「……へへ…厳しいなあ」

あまりの低さに苦笑いする。

「俺がいた学校でもそこまで低い点数とったことないぜ」

剣を地面に刺して杖代わりにしつつ、痺れがとれてきた体をゆつくりと持ち上げる。

「演習のような場面では良い動きとも言えるでしょう。しかし、戦闘に際しては、たった一秒その場に居続けるだけでいつの間にかあの世行き、も考えられます。相手の力量をはかるのも、それに合わせて戦略を変えるのも力です」

とクラリスは地面に転がった鎧を回収しながら言う。

「少し休憩にしましょうか」

玲治は中庭の木陰で横になっていた。汗をかいた顔が風になでられて心地いい。

クラリスはそのそばで無表情のまま直立している。

玲治がこの世界、ハルケギニアへ召喚されてから、すでに一週間程経つ。

当初は急に異世界と言われて困惑したものの、少しずつここに慣れてきていた。

リルウやメイドのクラリス達が暮らすこの城、城壁の外には小さな城下町があるらしく、

近隣諸国より来る交易で賑わいを見せているようだ。

外国へ行ったことない玲治は、このヨーロッパのようなレンガ造りの家が立ち並ぶ風景に、優雅さを感じずにはいられなかった。

後で時間があつたら言ってみようと思っていると、

「……さきほど玲治様は学院に通っているとおっしゃっていましたが、もしかして玲治様はそちらの貴族出身でしたか？」

玲治が地球から来たことを知っているクラリスは、無表情のまま訊

ねる。

「俺は平凡な家庭生まれだ。特別お金持ちって訳でもないしな」

「貴族でもないのに学院を？それでは貴族の方々の怒りを買うのでは？」

「いや、俺の世界じゃ人間は全て平等ってことになってる。ま、完全に平等って訳にはいかないがな」

学校で習った部落差別やらなんやらを色々と思い出しながら答える。

「『地球』という場所は素敵なところですね……」

クラリスはなにやら物憂げな顔で呟いた。

「この世界でも身分が平等であつたなら、わたしも……」

「ん？」

「いえ、なんでもありません」

玲治が顔をそちらに向けると、すでに元の無表情に戻っていた。

「さあ、そろそろ続きをはじめます。あなたにはリルウお嬢様を守る役目があるのですからがんばってもらわなくては」

と言ってつい先ほど使用した『鎧武者』の起動に取り掛かりはじめた。

その姿になんとなく自嘲めいた感じがしたのはきつと気のせいではないのだろう。

「よっと」

玲治はそれをあえて追求しないことにした。

(あいつを守る、ねえ……)

ヘアピンをつけたリルウが脳裏をよぎる。

ヘアピンをつけた少女はなかなかかわいらしかった。

「？」

唐突に、なにか変な違和感を感じた。

形容できないもやもやした感じ。

寂寥と焦燥感が入り混じったような、胸の痛み。

それが一体なにか来るものなのか全く分からない。
でもなにか重要なことの気がする。それだけは分かる。ええとたしか――

「どうかなさいました？」

ふと気づくと、どうやら木陰で立ち上がったままぼーっとしていたらしい。

クラリスが心配そうに声を掛けてきた。

「ああ、いや別に何も」

頭を振り振り、思考から追い出しする。

そしてガシャリと音を立ててこちらに剣を向ける鎧武者と対峙する。

「覚悟してろよ！鉄の塊！」

本日の二度目の戦いを宣告する。

「ただいまより軍事会議を開始する」

ガリア王国の首都リュティス。その郊外に位置するヴェルサルティル宮殿にて厳粛なる会議が行われていた。

「本会議の議題は、いまや政敵となったド・ノアイユ公に対する制裁についてである。会議を行う前に、まず同席なされた諸君らの意見を聞きたい。何かあるかね」

中央に円卓の置かれた広い会議室。その中の議長とおぼしき老年の男性が会議室を見回す。

「議長」

とそのうちの一人がゆっくりと手をあげた。

「何かねクラヴィル卿」

「何故今ごろになって、長きにわたりガリアに貢献してきた名家を潰しにかからねばならないのだ？」

自らを歴戦の将軍だと自負するクラヴィル卿が問う。

この戦いが国にとって無利益となるように思えてならなかったのだ。

「ド・ノアイユは王政府と対立する旧政府側に身を置いている。か

の名家は軍事の大半を支配するガリア王政府の脅威なのだ。放っておけばいずれ何十万の兵を以て進軍するやもしれん。事態は一刻を争うのだ」

「し、しかし！」

議長の諭すような説明にもいまだ納得できないクラヴィル卿は語気を強める。

「まだ他に手があるのではないのか？！今すぐ翻意を促せば国内を紛争で傷つけるようなことにはなりませんぞ！」

「そうだ！俺も派兵には賛成できない！あれほどの大家ならば、味方につければ他の王弟派の者等にも示しがつくはずだ」

「そうだそうだ！」

「出鱈目を言うな！ノアイユ家はガリアの恥だ！生かしておけぬ」

にわかに会議室が騒がしくなる。

「ええい静まれ！これ以上勝手に物を申すなら出ていってもらうぞ！」

議長が木槌で円卓を叩きつつ、力の限り声をあげる。

未だ不服な顔をするものの辺りは静かさを取り戻した。

「ノアイユ公には何度も翻意を促した。だが結果は以前とて変わらぬ。『我が主君はただ一人のみなり』だそうじゃ。それに――」

とその時部屋の扉が開いた。

「いやー、すまぬなあ。会議に出ると言っていたはずが、来るのが遅れてしまったようだ」

「ジョゼフ殿!!」

会議室に集まった軍人、貴族全員が、来るのを知っていた議長を除いて驚いた。

ガリアの王候の象徴である青色の髪。もう30を過ぎたというのに、美青年のような顔立ち。

紛れもないガリア王ジョゼフだった。

「ジョ、ジョゼフ殿!」

この機をとばかりにすかさずクラヴィル卿が、進み出る。

「どうか此度の出兵をお考え直してください! 国土を衰退させる危険性があります!」

「残念だがこれは決定事項だ。今お前たちが議論することは、やるやらないではなく如何に奴等をより多く殺せるかだ」

その言葉で一同は啞然とした。中には罪もない老人子供もいるはずなのに、目の前の男はそれすら気にもしないと言うのだ。

「その様子では戦略はまだ決まっておらぬだろう。ならば『コード・ヴ・エイグ』を発令する。思いきり蹴散らせ」

そういうと騒然とする議員をおいて、ジョゼフは会議室を出た。

(ふふふ……あそこの娘は確か人間の使い魔を召喚したなあ。記録が正しければ、あの小娘もおそらく虚無か。せいぜい俺を楽しませ

てくれよ……)

そして密かに計画は進行していく。

第七話 平坦な道一方通行（後書き）

小説は書くのは楽しいんですけど、書いて表現すること自体はなかなか難しさを感じますね。

登場人物の微細な感情の起伏だとか、風景になぞらえた掛け言葉とか。

そういうの書けたら格好よく決まるのになあ・・・。

今回、伏線いろいろとあるのですが微妙なまま展開してしまったかもしれません。

うーん難しい。

次話一体何からはじめようか。

新展開？新伽羅？新世界？（あ

表現だとか変な部分ありましたら、是非ご指摘、いやさアドバイスをお願いします。

第八話 夕導く朝（前書き）

本来もっと長くなる予定でしたが、とりあえずここでカッティング。

第八話 夕導く朝

リルウは困っていた。

学院に通えないのである。

元々このぐらいの歳で、しかも爵位が公爵の令嬢ともなれば、魔法を教わるも含め、世間的にも通っていなければならない。

だが5年前、前ガリア王が崩御したときより、歩むべき道は大きく歪んだ。

それによりガリア王立学院へ入学することは叶わなかった。

親は専任教師を雇おうとしたが、王政府から監視を受けている以上報復を恐れた貴族たちは引き受けてはくれなかった。

そういうことで今リルウは、たまの父上による魔法の練習と、城内の図書を用いて独学に勤しんでいる。

「ふう……」

自室で分厚い魔法書を読んでいたリルウは背もたれに体を預ける。

なんだか自分だけ損しているような複雑な気持ちが入み上げてくる。

「……なんで学院にも行かせてくれないんだろ」

「なんで王様は人を殺したがるんだろ」
自分の不満が一人勝手に漏れ出てくる。

「召還したいわ……」

いや、とリルウは首を振る。

（何が来るかなんて結局神頼みじゃないのよ。）

ねえブリミルなんとやら、私にドラゴンとかもつと強い使い魔を召喚してくれたっていいのに……。

そんな思いがリルウの中を駆け巡る。

「はあ……」

机の上の呼び鈴を持ち上げてゆっくり鳴らした。

「失礼します」

程無くして一人のメイドがカートを押して部屋に入ってくる。メイドはティーカップに紅茶を注ぐとそっと机に置いた。リルウは黙ってそれを口にする。

「ねえちよつといいかしら」

横で待機するメイドに話しかける。

「は、はい。何でございましょうか」
びくつとメイドは身をすくませる。

「私の使い魔は今どこにいるのか知ってる？」

「え？はい、ええとリルウお嬢様の使い魔様は中庭でクラリス殿と

朝の鍛練を行っておりますが……」

不意を突かれたのか、安心したような声で答える。

「そう……わかったわ」

（気分転換に少し外に出るのも悪くないわね）

そしてリルウは立ち上がり扉に向かった。

「あ、そうだ」

出様に振り向いて、

「あなたの淹れたお茶は美味しかったわ。誇りに思いなさい」

リルウが出ていったあとには哑然とするような嬉しそうなメイドだけが残った。

「お疲れさまです、玲治様」

クラリスがそっとタオルを差し出す。

「ああ、どうも」

受け取って汗をぬぐう。

「あの鎧だけで一戦争起こせそうだな」

魔道具というらしい『鎧武者』は相当に強かった。

「まあ演習用ですから。実践にはどうか分かりかねますが一般兵士

なみに強いのは確かですね」

「へえ」

と玲治とクラリスが雑談を交わしていると、

「中々の太刀捌きじゃないの」

見ればリルウが中庭沿いの廊下から眺めていた。

「ああ、おはよう」

「ん、おはよう——————
——————じゃなくておはようございますでしょ
！」

「御早う御座います御ぜう様」

「うむ、よろしいわ」

玲治のふざけたような態度にも満足したのか腕を組む。

「早速だけど私の相手になってもらいたいのよ」
クラリスが微かに眉をひそめる。

「相手について試合か？」

「そんなところねー、まあ肩慣らしにならちようどいいでしょうし」

「まだ体力なら余ってるからな、何時でもかかってこいだぜ」
あの鎧と互角にやりあえたという自信が、玲治のやる気を起こした。

「いいわね、そのくらいの活きじゃないとつまらないわ」
そして腰から長いものを取り出す。

「あのー御ぜう様？お前魔法使いとかいってなかったか？」

「ん？そうだけど？」

「じゃあ何で剣なんか持ってるんだ？」

地球で言えば細身の刺突剣、レイピアを構えている。

「貴族のたしなみよ」

となにやら不気味な笑みを浮かべる。

（ああ…こりゃ断つときゃ良かったか）

「ラグース・ウォータル・イス・イーサ・ウィンデ」

少女が剣を杖のように構え、呪文を唱えたとその周りに1メートル（約1メートル）を越える氷の矢が何本も……

「あなたは動く的よ！せいぜい串刺しにならないよう逃げ回りなさい！」

「あり得ねえええ！！」

「はあ…」

目の前の嵐のような光景にクラリスはため息をつく。

……抱いた自信が全くの間違いであったことにすぐに気づかされるはめとなった。

「死ぬかと思った……」

「よくここまで避けられたわね。誉めてあげるわ」
リルウは腕を組み、感心したようにうなずく。

「お嬢様、いい加減にしてください。誰がこれを片付けると言うのですか」

中庭はリルウの放った氷の矢によって酷いくらい滅茶苦茶になっていた。

己を襲い来る無数の矢を見ればそれがどんなに恐ろしいことか。玲治がこれに当たらずにすんだのはまさに行幸と言えるだろう。

「……クラリス、頼んだわ」

「全く……今度このような真似をされたら、夫人に報告しますからね」

そう言ってせっせと穴を埋めにかかりはじめた。

「さてと冗談はこのくらいにしてー」

「これが冗談だったのか!？」

玲治は走り回ってももう体力が残っていない体をガバリと起こす。

「もちろんこんなことのためにあんたのどこに来るわけないじゃない」
「いい」

悪びれた風もなくリルウは言う。

「魔法とお前がどれだけ怖いものか身に染みたよ……」

「ふふん、私にひざまずくがいいわ」

なんかもう疲れた玲治は地面に突っ伏した。

「で本題。町に行きましょう」

「いいよ。お前がいなくても一人で行けるわ」
地面に突っ伏したまま噛みつくように答える。

「あらそう。一人で行くだなんて勇敢なのね。それとも愚か者？」

「……どういう意味だ」

「知ってると思うけど城下町っていうのはね、元々攻城の妨害を妨げるための一種の迷路なのよ」

確かに一理ある。

日本の場合は城と町が近い方が交易にも便利ということで城下町ができた。

しかし欧米さながらの城と町。道を知らないものは出られなくなるのではなからうか。

「レイジはここに来て間もないし、私も一人で行ってもつまらないから案内ぐらいはするわよ？」

「うぬぬ……分かった。」

上手く口車に乗せられた気がしなくもないが、もともと興味のあった玲治は渋々了解した。

「だが昼過ぎからでいいか？お前のせいでなんか体が痛い」

「あら悪かったわ。じゃあ休んでから中庭にまた来てちょうだい」
そう言って中庭を滅茶苦茶にしたまま嵐のように去っていった。

「もう滅茶苦茶だ……」

色々と意味のこもった声色で玲治はため息をつく。

そして玲治も疲れたからだを引きずって、とぼとぼと自室へ戻っていった。

第八話 夕導く朝（後書き）

『鎧武者』……魔道具。兵士を訓練する際に用いられる。体長2メートルで、重量型の大剣を握っており、一風ぎの威力が半端ではない。

戦争に出せそうな能力をもつが元が訓練用なので動きも規則性があり使い物にならない。

オリジナル

城下町……学校では貿易の利便性から町ができたと聞いたが、実は敵兵による攻城をより困難にする、戦略上計画的につくられたものでもあるのだと思っています。

少女の杖……レイピア。細身で通常の剣には歯が立たないが、主に護身用として使われる

さてこれからが本番になってきます
気を張っていかねば！

感想等々、ここがよくわからないなどありましたらお待ちしていますのでどうぞ

第九話 闇夜導く夕（前書き）

こんばんはっ！

続き投稿です。

かなり自信作

エッヘン私。

と言いつつお気に入り登録1つで一喜一憂する私です。

皆さん読んでくださって本当にありがとうございます！！

第九話 闇夜導く夕

飛び交う売り文句、子供達の笑い声。

人口数百人ながら町はどこにも勝る活気に溢れていた。

「すげえな、予想とは大違いだ……」

通りすぎていく町並み。すれ違う店の客たち。

全てが玲治にとって新鮮だった。

「城門を出てこの道がルーアンリ通り、こっちがフレール・ドウエイル通りで……」

リルウは途中途中で道の順序、広場の名前などを玲治に教えていく。

はじめ、行動の読めないリルウが何か企んでいるのではないかと疑ってはいたものの、普通に楽しんでいるようなので玲治も観光を楽しむことにした。

リルウはよそ行き用か、黒のジャンパースカートを着込んでいた。

帽子と組み合わせていると庶民的な小可愛らしい雰囲気がある。

二人は、特に玲治は露店の品々を興味深げに眺めながら練り歩いていた。

どれも『地球』のそれと違うような異世界感が、玲治の目を引き付けた。

「おお！久しぶりだなあ、お嬢ちゃん」

とそのとき声がかかる。

並ぶ店のうち青果物店を経営する、白いハチマキに白シャツという、
がかいのいいおじさんが声をかけてきた。

「あら、ダンテンさん。ごきげんよう」

リルウは貴族らしく優雅に一礼する。

「最近めっきり見なくなったもんだから、具合でも悪いかと心配して
たんだぜ？」

「ええ、少し勉学に励んでおりましたので」

「はあー、流石は我らがお嬢だ！俺たちなんかとは出来が違うな！
ほら、そんな嬢ちゃんにプレゼントだ」
そう言って紅色の丸い果物を手渡した。

「まあライチね。いただくわ」

好物なのかリルウは嬉しそうにしている。

「ちょっとばかり時期が早いがこらじゃ丁度熟してるぜ」
美味しそうに頬張るリルウを見ながら腰に手を当てる。

「その坊主はもしかしてお嬢の友達かい？」
ダンテンは玲治を指差して言う。

「私の使い魔よ。先日召喚したの」

「ほー、お前さんが使い魔になったんか。平民が使い魔だなんて面白
い事もあるもんだな。名前は何て言うんだい？」

「俺は朝月玲治。名前がレイジだ」

「いい名前持つとるな。ほれお前さんにもひとつやろう。その名に掛けてお嬢を守ってやれよ？」

笑いながら玲治にもライチを手渡してくれた。

「ありがとうございます」

軽く礼をして受け取る。

小さいながらもずっしりとしていて、一口かじればたっぷりの水気と共に甘みが口の中に広がる。

「…うまい！」

「はっはっは、そうだろそうだろ！この地でとれる特産品だからな。味も見た目もどこにだって負けはしねえよ」

日焼けで黒くなった顔が満面笑顔になった。

「そんじゃな、坊主。お嬢も体気をつけてな」

別れるときも手を振って見送ってくれた。

（優しそうでいい人だな）

なんだか地元の人の人に触れたような、ほんわかとした感じがした。

道なりに歩くと噴水を中心にした大きな広場に出た。

十数人の子供たちが、噴水の周りを追いかけてっこして遊んでいる。

「あ、リルウお姉ちゃんだ！」

その中の一人がこちらに気づき、みんなして走りよってきた。

「うわわ!？」

群がる子供に囲まれて玲治は困惑する。

「ねえねえ、遊ぼうよー」

リルウの腕を引っ張って遊びに誘う。

「ねえねえ、この人誰?もしかしてお姉ちゃんのカレシ?」
「ませたガキが一言。」
すると

「リルウお姉ちゃんは渡さないぞ!」

「こらしめてやる!」

「みんななかかれー!」

「うわっ!?!?よせつやめろ!」

「カレシ」の言葉に反応した子供たちが一気に飛び掛る。

リルウの腕を引っ張っていた子も騒ぎに心とられ加勢に入った。

子供の力ではそれほど痛くはないが、こうも密集されてはたまったものではない。

「痛っ!重い!離れろこのっ!うわー!」

一瞬にして玲治は子供の群れに押し潰されてしまった。

「こら。その人はただの従者よ。そろそろやめてあげなさい」
「はーい」

リルウの一言であっという間に子供たちが離れる。

あとには散々踏みつけられてボロボロになった玲治だけが残った。

「やっぱこんな奴がお姉ちゃんのカレシなわけないよな。ブサイクだし」

「そうだよ、こんな気の小さいそうなのがリルウお姉ちゃんに釣り合うわけなんかないよ。ブサイクだし」

「お、お前らなあ……」

肩を震わせて、ゆらりと立ち上がる。

「そこに直れ！！俺が今からお前らに格の違いってもんを見せてやる！」

「うわー！不細工な兄ちゃんが鬼になった！逃げろー」

「待ちやがれえ！」

ぎゃあぎゃあ叫んで逃げ回る子供達、そしてそれを追いかける玲治。

町行く人はそれを見て微笑ましげに笑ったと言う。

「全く子供のお守りは大変だぜ」

そう言って、噴水の縁に座るリルウの横にどっかと座り込む。

「その割には楽しんでるように見えたけど？」

「……まあ……な。それはそうとお前も町の人々と仲がいいのな」

玲治が子供達を追いかけている間、リルウは町の住人達に囲まれて楽しそうに会話していた。みんなの反応からしてそれが普通らしいが。

「まあ……ね」
同じように返される。

その後は沈黙が続いた。
夕日が暮れていくのを見ながら、終わりを告げていく町の喧騒に耳を傾ける。

「……私確かめたかったの」
唐突にリルウが口を開く。

「正直言ってもっと他の、ドラゴンとか強い生き物が良かったって思ってた。もちろん今でもそう思ってる。レイジが出てきたときにはびっくりしたわ。人間がでるなんて、しかも異世界から来ただなんて誰も思わなかったもの。使い魔として本当に大丈夫なのかまるで分からなかった。」

「だから今日、町にレイジを連れて行って様子を見てみたかったの。そしてやっと決めたわ。」

何か決心したかのような真剣な眼差しを玲治に向け、びしりと指を突きつける。

「あんたを私の使い魔に任命するわ！」
リルウもリルウなりに悩んだのだろう。
今までの間、他人とは違う事へのコンプレックスや不安が複雑に交

じり合っていたのだろう。

だが今、その顔には不敵な笑みが浮かんでいた。

「……んー盛り上がってるようで悪いがな」

「？」

「俺は地球に戻りたい」
はつきりと断言する。

「俺の世界はあそこだけだ。できるものなら帰る。今は帰る方法が見つからないんだろ？ だったらいつかそれを見つけ出して帰ってみせる。」

「……………」

言うたびにリルウの顔が曇っていく。

「でもな」
と

「見つかるまでのその間、お前がそこまで望むんだっていうならやってやるよお前の使い魔とやらを」
これもまたはつきりとした口調で応えた。

「……契約成立ね」
にこりと微笑む。

「ああ」

そう言って玲治は手を差し出す。
一瞬リルウは躊躇っていたがそれも短く、すぐに握り返した。

「よし！これからはもっと厳しくしていくから覚悟していなさい！」

「マジ勘弁」

そして紅い日は少しずつ沈んでいく。

「ふー。今日は色々大変だったなー」
そんな独り言を漏らすは玲治。夕食も済ませ、自室のベッドでごろごろしている。

朝から晩までハードであった。
重役は夜を徹するってやつだ、よくわからないが。

でも今日は異世界へきて初めてくつろぎ、ほっとした時間でもあった。

『地球』と全く『異なる世界』でも、やはり人々の心の温かさというのは存在するのだ。

それが今の玲治を元氣付けてくれた。

「ま、明日も頑張りますかな」
そう思って目を閉じようとしたとき、

ドォンドォン！

城が揺れる。

窓の外が一気に明るくなった。

「おお！花火か！？すげえな！」

まるで今の玲治を祝福しているかのようだ。

見れば町の明かりと共に下方がゆらゆらと赤く染まっている。人々の笑い声も聞こえてくるようだ。

「お！手で持つタイプもあるのか！俺も花火やりてえ！」
なんだかテンションが上がってきて、急いで扉に手をかける。

そこで一瞬思考が止まった。

最初のは打ち上げか？にしては衝撃がでかすぎる。城が揺れる程大きな花火は遠くにうつはずだ。

でも光るのと音は同時。するとかなり近距離で炸裂したことになる。手で持つ花火？町全体覆うだなんてまるで……

もう一度窓の外を見た。

町は赤く燃えていた。

笑い声と思っていたのは人々の叫び声だった。

玲治は部屋を飛び出した。

第九話 闇夜導く夕（後書き）

最後うまく締めましたかね？かね？

そうだ。ここでひとつお知らせがあります。

感想が一般解禁です！ハイ。

いやね、やっぱり自分の腕上げるにはやっぱり人の意見ですよ。

そこでこの物語を「なんだよー、この作者どんだけ非才なんだ？」とか思ってるあなた！！そうです、あなたです。

批判、感想、あれこれしたほうがいいんじゃないか等、どしどしと送ってきてください！！

べ、べつに対象指定とか知らなかったわけじゃないんだからね？

（あゝ恥ずかしい・・・w

・・・なんかテンション高いなあ・・・まあいいや

次回戦闘シーン！！主人公活躍させてあげたい！！

※←より雑学？

・最初にリルウが通りの名を言っていました、これは実際のノアイユ領付近の通りの名前を借用しました。

・ライチ・・・別名「竜眼」「レイシ」。玲治と名前が近いのはすごい偶然！

5～7月が収穫期らしくて、物語内の異世界時間ではまだ時期が早いんですね。

・オルレアン領とノアイユ領。地図を見たらなんと300km近く離れていました！

これはまあ許容範囲ですかね？

ではそろそろお暇します。またの御機会に！

第十話 夜襲（前書き）

前二話と合わせて今回で締める予定でしたが、残念ながら終わらず、
よって特別にかなり長くなりました。

勿論まだ続けていくのでご安心ください

第十話 夜襲

城の中は慌ただしかった。

武装した兵が駆り立てられて、階下へと走っていく。
使用人すら大慌てな様子で幾度となくすれ違った。

そんな中、玲治は自分の主であるリルウを探していた。

「どこだ！？どこにいる！？」

上の階に確かりルウの部屋があったはずだ。
そう思って階段をひとつ走りにのぼる。

「くそっなんて長い階段だ！」
流石に城といったところか、その巨大さを今は疎ましく思う。

「玲治様、こちらへ！」
三階程まで駆け上がったところで、横から声がかかる。
クラリスがこちらに手招きしているのが見えた。

「おい、町が燃えてるぞ！一体どうなってるんだ？！」
併走しながら早口に聞いたです。

「襲撃です。おそらく、いや間違いなく王政府が攻めてきたのです」

「それって一体――？」

ドオオオオン！

城が再び揺れる。

さっきの揺れよりもはるかに大きい。

「この件は後でお話があります。急いでください！」
クラリスの切羽詰った口調に、玲治も黙って付いていった。

付いていった先は会議室らしき部屋だった。

「敵はヴェルサルテイル方面だけなのか！？」

「わからない！くそっ、夜襲とは卑怯な手を使いおって！」

武装した人間が口々に言い合っていて、玲治の回りは一気に喧騒に包まれる。

「遅い！どうして感覚共有できないのよ？」
入るや否やリルウが大声をあげる。

「知るか。一体どうなってるんだ」

「彼も状況に反応してお嬢様の部屋へと向かわれていたようで、出くわしたところを連れて参りました。」

「そう。いまからお父様が話そうとしているところよ。お父様、私の使い魔もここに」

「うむ、わかった。」

部屋の奥から落ち着いた低い声が聞こえる。

そこには厳格そうな軍人の代表といふべき初老の男性が立っていた。

「皆のもの！戦だ！」

会議室は一瞬にして静まる。

「知っての通り、現在、我らがシェーンブリッツ城は王軍の攻撃を受けている。偵察兵の報告によると数はおよそ二万。東2リーグ先で行軍中であり、斥候がすでに城下を荒らしておるとのことだ。」

「二万！？我々の何倍もの兵力ではありませんか！」

「数ではな。見くびられたものよ。我らがたかが二万の軍勢で敗北するとみておる。」

我々にかかればあの青二才めものの繰る人形など容易く葬れよう。」
一旦言葉を切る。

「これより戦闘に入る。各員戦闘準備につけ！」

第一班！東門を砲撃する砲兵を蹴散らせ。第二班、北門ルートより敵陣の側面を突け！陣形を崩し、行軍を遅らせろ！竜騎班は敵陣へ斬りこみ、メイジと士官を優先して殺せ。

艦長らは『ドレッドノート』出撃の準備をせよ。

その他はワシが指揮を担当する。

我が主君シャルル陛下の御名を辱しめた、国王ジョゼフを見返してやるのだ！」

「はっ！！」

指令を受けた軍官たちはいっせいに部屋を飛び出していった。

「リルウよ」

指示を終えて、白髭を生やした男性が近づいてくる。

「お父様、私も戦います。一人で見ていただけなど出来ません」
リルウは胸に手を当てて身を乗り出す。

「流石は我が娘だ」

それを聞いてノアイユ公は笑う。

「だが可愛い娘の傷ついた姿など見ていられん。竜騎を一人寄越す。
お前は後ろから援護しろ」

「わかりました。行くわよレイジ」

「いや待て、その少年と少し話がしたい」

リルウは一瞬迷ったが、頷いて部屋を出ていった。

後にはノアイユ公と玲治だけが残る。

長い間隔を開け、重々しく話始める。

「……玲治と申したか。オヌシは血肉の争いというものを知ってお
るか？」

「家系が繋がっている血縁関係出の争い事…だろ？」

「その通りだ。現王のジョゼフとシャルル陛下。二人は兄弟であつ
た。それは知っておろう。そしてもう一つ、ワシの体にも王の血が
流れている。」

「！」

今日の前に立つ男は、そしてリルウは王族だと言うのだ。

「ワシには分かる。ジョゼフは恐れているのだ。誰にも見てもらえないことを、自分を認めてもらえないことを。即位してからあやつは壊れた。弟であるシャルルを手につけ、臣下をも殺し、遂にはこの老体ときた！」

この戦いは不毛になるだろう」

「……………」

「オヌシにこの戦い、足を踏み入れる覚悟があるか？」

射抜くような視線。

長い年月を経てきた眼が玲治を見つめる。

「俺は……………」

何かが振り切れなくて、答えにつまる。

あれだけ練習を重ねたというのに、ここに来た時から分かっていたはずのに、まだ戦うことを躊躇うというのか。

「……………フン」

そんな迷いを見通したのかノアイユ公は笑った。

リルウに向けていたのとは違う笑い方だった。

「来たばかりのオヌシにはまだ決められぬか。お前にはまだ我が娘の後ろを付いていく資格などない。」

そして扉へ歩いてゆき、外へ出る。

「この『殻』の中から眺めているがよい。城内なら安全だからな」
そう言い残して去っていった。

「……………くそっ！」

昼間使い魔としてやっていくと決めたばかりなのに、何をためらうんだ俺は！

この『城』の中にただ一人取り残された気がして、玲治は立ちつくしたままだった。

ド・ノアイユ領のはるか上空。

双月照らすなか、何十もの船舶が重力の概念を無視して飛行していた。

ハルケギニア随一とうたわれるガリア両用艦隊である。

それらの中でも、ある王子の名を冠する旗艦は一際大きい。

「目標：シェーンブリッツ城視認しました！」

一人の兵士がスコープを覗き込みながら、報告する。

「うむ、わかった」

クラヴィル卿はゆっくりと立ち上がった。

「いよいよですね」

隣にいた、まだ若い艦長が呟く。

「これほど大規模な内戦が起きるだなんて正直信じられません」

「ああ、此度の戦いはきつとガリアの命運を分けることになるだろうな」

クラヴィル卿は窓の外を眺めながら言う。

結局彼の抗議もむなしく、瞬く間に戦いは迫ってきていた。

（所詮私も一介の貴族にすぎない……か）

辺りは闇に包まれ、黒よりなお暗い。

まるでガリア王国の未来を示すかのようだ。

「せめて泥舟でないことを祈ります」

「口を慎め。どこに耳があるともわからんのだぞ」

怯えたように艦長が回りを見回す。

「はは……脅かさないでくださいよ総司令官殿」

誰もいないことを確認して艦長はほっとため息をついた。

ジョゼフの配下には得体の知れない暗部も存在するのだ。

（もう後には引けぬ）

クラヴィル卿は覚悟を決めた。

「全艦隊に告ぐ。これより戦闘空域に入る。明かりをすべて消して城上空にまで前進せよ」

「艦隊連絡！これより戦闘空域。各艦はただちに消灯を開始せよ！」
下士官がクラヴィル卿の言葉を繰り返した。

クラヴィル卿の搭乗する旗艦をはじめとし、少しずつ広がるように明かりが消えていく。

遂にはガリア艦隊は闇夜に消え、まったくの不可視となった。

「さて……狩りの始まりだ」

その声にはもう慈悲の色は見えない。

夜鷹は獲物めがけて飛翔をはじめたのだ。

「死ねえ！腐った王の手先があ！！」

「国に逆らうものは皆敵だ！一人残らずぶち殺せ！」

「うわあああああ！」

戦いは熾烈を極めた。

激しい乱戦。数え切れないほどの兵が剣を交わし、槍を突き、矢を放ち、砲を撃つ。

メイジは周りの兵士らに指示を飛ばしては、敵陣へ魔法を飛ばす。

先ほどのノアイユ軍の側面からの奇襲により、王軍は大きく傾いた。敵陣がかき乱された間に竜騎兵が士官を目ざとく見つけては、ブレスと魔法で焼き殺してゆく。

だが、敵も然る者。

有能なる将校の手により、広がる波乱をまとめ上げ反撃が行われるのにはさほど時間がかからなかった。

「このままでは押されてしまいます！！」

「むう……」

ノアイユ公の傍らで馬上する軍人がうろたえる。

「発艦まで耐えるのだ！この前線を破られてしまっっては守りきれぬ！」

そう叫ぶ合間にも魔法を唱える。

敵陣に大きな竜巻が出現し、その場にいた兵士が吹き飛ばされる。

「後方部隊より伝令！！『ドレッドノート』が発進しました！間もなく爆撃を開始します！！」

「そうか！よくやった！！」

ついに待ちわびた連絡が入る。

「全軍後退！！」

角笛の合図と共に、最前線にいた兵達が一気に後退を始めた。敵兵も合わせて前進する。

「援護射撃撃てー！！！」

だが、魔法や火砲の雨により追隨を許さない。

ノアイユ公は後ろを振り返った。

ピカッ！！

夜空におぼろげに浮かぶ艦隊が一斉に光を放つ。

数秒後、王軍の中心でいくつもの爆発が起こった。

「ワアアアアアアア！！！！！」

ノアイユ軍より雄たけびが上がる。

艦隊の出撃が完了した今、こちらの勝利は確実となったのだ。

「よくやったぞ！敵兵達が逃げていく。残兵を始末して撤収だ！」

皆浮かれに浮かれていた。

自分達の何倍もの人間を相手にして退けることに成功したのだ、当

然だろう。

だから皆、ノアイユ公でさえ心の底から安堵していた。

だからいきなり『ドレッドノート艦隊』の旗艦が炎上、爆発するところをみても理解できなかった。

皆立ち止まって振り返る。

火の華となって散っていく旗艦『ドレッドノート』。

誰かが叫んで後ろを指差す。

それを見た瞬間全ての人間が凍りついた。

「『パイラテラル・フロツテ』……………」

ガリア王国所属、ハルケギニア最大規模の艦隊。

何十もの戦艦が闇夜より忽然と現れる様は、まるで地獄からの使者のよう……………」

ピカッ！

相手方の戦艦が光を放った。

数秒と経たずしてノアイユ公の立つ位置から少し離れたところへ着弾。

一気に数百の命が途絶えた。

ノアイユ公は目を疑った。

「『シャルル・オルレアン』だと……………」

ノアイユ公の顔が苦痛に歪む。

「バカな！？今までどこに隠れていたというのだ！」

こちらの艦隊から両用艦隊に向けて一斉に大砲が放たれるが、その厚い装甲に阻まれほとんどが弾かれる。

敵艦隊が今度は一斉射を放った。

ドレッドノート艦隊の半数が根こそぎ沈められる。

そして艦隊の隙間隙間に竜騎兵がちらほらと飛び交い始めた。歩兵を狩ろうというのだ。

そのあまりの恐ろしさに兵たちが一人、二人と逃げていく。

公軍は総崩れ。

武装を放棄して我先にと逃げ出す。

「なんということだ、見くびっていたのはワシだったとは。あの若造め……撤退だ!!」

ノアイユ公も弾幕に追い立てられるまま、城へ逃げ帰るしかなかった。

リルウは上空に飛ぶ竜の上でその様子を見ていた。

「……なんてことなの」

自軍は引き潮のごとく逃げていく。それを追いかけるかのように大砲が着弾し、辺りの兵隊を風ぎ払う。

悲惨な光景だった。

「敵は仲間の兵すら無差別に攻撃している！」
竜騎士の指差す先には撤退していく王軍が上空からの爆撃で跡形もなく散っていく光景だった。

「酷い……………」

あまりの光景に思わず顔を押さえる。
ガリア王は人の命をなんとも思わないのだろうか？

「お嬢様、我々も合流しましょう」
竜騎士は静かに言った。

竜は城へと翼を翻す。

その時、後ろから魔法の矢が迫り、竜騎士の体ごと竜の体を貫いた。

「がはっ！」

口から噴き出す鮮血。

竜は苦しい嘶きを上げて暴れだす。

「あ……………」

気づけばリルウの体は宙に浮いていた。

この高さではレビテーションも効かないわね…………。
不思議とリルウの頭は冷静だった。

御父様は無事なのだろうか…………。
脳裏に使い魔の顔がよぎる。
レイジはいったいどこにいるのだろうか…………。
こんなときにいないなんて使い間失…………格…………。

リルウはそのままゆっくりと暗い闇に墜ちていった……………。

第十話 夜襲（後書き）

以前の話でジョゼフが発した言葉、『コード・ヴ・エイグ』。これは波状攻撃を表します。今回の話がそれです。

ヴ・エイグの部分をもそのまま書く这么简单にわかってしまうのでアレنجシしましたが、分かっていた人いますか？

シェーンブリッツ城……今回の話で城の名前決めさせていただきました。

即席なので意味はありません。もう少し計画的に物語を進めていけばよかったと今更ながら悔やむ始末。

ドレッドノート……第一次大戦頃のイギリスの戦艦。
当時の戦艦を上回る装備で他国を圧倒したとのこと。
かじっただけで詳しくは知りません^^;

さてと佳境です。

リルウが竜の上から墜ちてしまいました。
一体どうなる！？

第十一話 使い魔の印（前書き）

お久しぶりです。

黒蜜白石です。

ひらがなでかくと「くろみつはくせき」です。
でも本当の名前は違います。

本当は「ぶらっくオパール」
といいます。

蛋を蜜と書いたのがミソです。

どうでもいいですか、そうですか。

はい！それでは第十一話続きをどうぞ！

第十一話 使い魔の印

話は少し遡り、シェーンブリッツ城城内。

玲治の視点に戻る。

ノアイユ公が最後に部屋を出てからおおよそ10分。
公軍と王軍はすでに剣を交えていた。
衝突にはそれ以上の時間は必要なかったのだ。

兵士らの雄叫び。金属の擦れあう音、遠くに聞こえる大砲の発射音。

弱きものは強きに食われ、強きものもさらにその上の肉となる。
世界の構造をより大きく、より鮮明に映し出したかのよう。
それが戦争というものなのだろう。

そんな中玲治は城の中を走っていた。
階下へと降りる。

じれったい階段を何段も無視して跳ぶ、跳ぶ。
足を衝撃が襲うが、構わず足を速める。
一気に一階まで駆け降りた。

廊下を走り抜け、途中、運ばれたままに置かれたカートを蹴り飛ばす。

カートが倒れ、上に載っていたティーポットやらカップやらが落ちて割れてしまう。

だがそんなことを気にかけている余裕はない。

玲治は怒っていた。

玲治を嘲け笑うように去っていったノアイユ公、にではない。攻めてきた王軍、にでもない。

自分にだった。

「何で迷ったりなんかしたんだ」
思い起こせばノアイユ公は玲治を試していたのだ。

資格なき者は戦場に出るべきではないと。

意思無き者には抗う術などないと。

争いは護りたいものがなければ行えない、

お前にはその覚悟があるのかと。

そう伝えていたんだ！

町の人たちの顔が脳裏に浮かぶ。

ダンテンとか言った優しそうなおじさんの顔。

自分の名前をいい名前と言い、がんばれと励ましてくれた。

それだけで十分だった。

町でやいのやいのうるさく騒いだ餓鬼達。

カッコつけたりもしたが結局一緒に遊んでしまった。

それだけで十分だった。

町の人々。城のみんな。

助けてくれた人間だっている。迷惑かけられた人ももちろんいる。

そして、ここに来る原因となった少女。

いまだに親しいというまでにはいらないが、少しでも少女の事が分かってきた気がする、そして使い魔としてやっていってやると決めたこと。

それだけで十分だった。

今の玲治には

これ以上の理由はいらなかった。

不良に絡まれた女の子を見かければ堂々と助けに行ったこともあった。

カッアゲにあった少年を見かければその子のために犯人を探したこともあった。

その度に殴られたり殴ったりした。

でも最後には笑う顔が見れた。それだけで十分なのだ。
困った人間を放ってはおけない、玲治はそういう性格なのだ。

「町の人みんなを殺した、俺はみんなを殺させた自分が許せねえ！」
燃える火の中で悶え苦しみながら死んでいった様子がありありと浮かぶ。

「知らねえよ、そんなこと」
王だろうが、貴族だろうが。
魔法だろうが、それよりもっと大きな力と対峙することになるだろうが。

「俺は――」
武器が雑多に納められた小屋に突っ込む。

「誰かが傷つけられるのは大っ嫌いなんだ!!」
棚にかけられた一本の剣を力強く握り締めた。

そしてついに、印が目覚めた。

「!!」
手に浮かぶルーンが一気に熱くなる。
身体中に力が湧いてくるのを感じる。

（なんだかよく解らないが……これがルーンの力なのか？）

ルーンは燃えているかのように熱いのに、今はそれが心地良く感じる。

左手に浮かぶルーンは戦場へ急かすかのように疼く。

玲治はもう一度己が持つ剣を構え直した。

「俺は護ってみせる！」

そして玲治はリルウやみんなが戦っているであろう場所へ猛スピードで駆け出した。

銃声や怒号が段々と近づくにつれて、玲治のルーンの疼きが強くなる。

すでに腕にまでしびれるような感触が広がってきていた。

「うおおおおお！！！」

玲治は腹の奥から力一杯叫んで敵陣に突っ込んだ。手近にいた敵兵に斬りかかる。

わき腹を打たれた兵士は思いつきり吹き飛ばされ、地面に頭をしたたかに打ち付けた。

《背部より首へ横薙ぎ》

予感が頭に浮かんだと同時にしゃがむ。

数瞬後、頭上をサーベルが通過した。

玲治の回りを数十人もの敵が取り囲んでいく。

《左肩へ袈裟斬り》

玲治が身を振ると、その通りに戦斧が振り下ろされた。

その斧の上に跳び乗り、跳躍。

空中で剣を真下へ振ると、一回転しながら囲いの外へ着地。

後頭部を打たれた兵は前のめりに倒れ込んだ。

（体が勝手に動く……！）

まるで一騎当千の戦士のごとく、相手の動きがわかる。身軽に動ける。

今までにクラリスから教わってきたことが身体から自然に放たれていく。

「オヌシ、ようやっときたか！」

後ろから微かにノアイユ公の声が聞こえる。

「ああ来てやったさ！」

そう叫びながらも動きを止めない。

玲治が跳躍すると元居た場所を槍袈が貫いた。

「前に出過ぎだバカ者！後ろに下がれ！」

その通りだった。

自陣より抜きん出ていて、近くても10メートル近く離れている。もう一度しゃがんで斬撃を避けると、一気に後方へ下がった。

「なかなかいい動きをしよるな。レイジ」

ノアイユ公の隣につけるとわずかか感心した口ぶりで言う。

「ああ自分でも正直ビックリだ。ところでリルウはどこにいる？」

「我が娘は頭の上で戦っておる」

見上げると真っ暗闇だけがある。

だがよく目を凝らすと双月に照らされて、おぼろ気ながら竜が飛んでいるのが見えた。微かに銀色の風が輝いてみえる。

「しっかり前を見据えろ。余所見しておる暇などないぞ」

ノアイユ公は上を見上げたままにいる玲治を叱咤する。

「もうじき艦隊がやって来るはずだ。角笛の合図があるまで前線を守り抜け」

「やれるだけはやるつもりだ！」

そう言うのと玲治はまた、今度は独りにならないよう気を付けながら乱戦に加わった。

剣の軌道を掻い潜るように戦場を駆ける。

長大な攻撃範囲を持つ槍を剣ではじき、身をねじってよけ、敵を翻弄する。

時折放たれる銃弾は……流石に避けられないと感じ、出来るだけ死角になるよう自分の位置を意識した。

「ファイアーボール!!」

敵将校が魔法を唱える。

放った大きな炎がこちらに向かってきた。

「!!」

あきらかに玲治の体よりも大きく、そして速い。

(避けきれない)

そう判断した玲治は、しかし冷静に炎というものを捉えていた。

(炎にはその現象を持続させるための核があるはず)

物質、つまり供給源から切り離された状態の下では炎は十数秒と持たない。

予想が当たっていれば、あの炎の真ん中にはなにかあるはずなのだ。

剣身を捻り、腹の部分を炎に向けて構える。

炎球が玲治にぶつかるまで3秒……2……1……

「ホオムランツ!!」

野球の要領で剣を振り上げた。

間近に迫った1000℃を超える炎の塊が、玲治の皮膚を焦がしていく。

だがそれよりも先にコン、と何かが当たった衝撃が伝わる。そして

それが、玲治の感があたたったことを知らせた。

炎球は空高く舞い上がり、夜空に紛れて消えていった。

だんだんと玲治の存在が回りに広まっていく。

「あいつを殺れ！」

馬に乗った誰かがそう叫ぶと一気に何十人もの敵兵に取り囲まれてゆく。

「まじかよ!？」

刃、槍、鈍器。全てが玲治の命を奪おうと迫ってくる。

「ジジイ!! 援軍とやらはまだなのか!？」

誰ともなしに叫ぶ。

かなり口の利き方が悪くなっているが、事情が事情だ。それに敵味方入り乱れるこの中じゃ聞こえもしないだろう。

「はぁ、はぁ……」

息が切れはじめた。

避けるのだけに専念すればなんとかあってはいるものの、一時気を抜けば、あつという間に自分の血が拝める。

槍が脇腹をかすってそこから血が流れた。

「ッつ！」

カミソリで切られたかのような鋭い痛みが体中を走る。

しかもどうやらルーンの力が切れかかっているらしい。心なしか剣を握る腕に力が入らなくなってきた。

「ッ早く！早くなんとかしろ！」

ブオオオオオオーン！

そのとき角笛の音が聞こえた。

程なくして多数の大きな発砲音が聞こえる。

ドオン！ドオン！ドンドン！

着弾。

敵陣営が一掃されていく。

「ワアアアアアアア！！！！！」

味方から勝利への雄たけびが上がる。

王軍はこれ以上は無理と判断したのか、進攻をやめ、撤退を始めた。そんな王軍を味方の兵士たちが逃さないとはかりに追っていく。

「た、助かった・・・・・・」

玲治は心のそこから安堵した。

（ああ、俺は護り切ったんだ）

力が抜けてその場に座り込んだ。

「これで俺もゆっくり・・・・・・？？」

突然玲治は不思議な感覚に包まれた。

「逃すかああ!!」

「待ちやがれええ!」

その横を何人もの兵士が走りすぎてゆく。

地面を踏みしめる音、ガチャガチャと鎧の擦れる音、だが全てがまるで聞こえない。

周りと玲治との間に見えない障壁が出来たかのようだ。

玲治は耳を澄ました。

そんな中にひとつだけ、『外』とは違う声が響いていた。
虫のなるような、ほんの微かな声。

何度も何度も同じことを繰り返している。

《オ・・・ノ・・・・・・ヲス・・・エ》

・・・もう一度。

《・・・マエ・・・アル・・・スクエ》

玲治はそこで全てを理解した。

途端、急激に周りの騒音が戻る。

後ろから爆発音が聞こえ、誰もかもが立ち止まる。
だが、玲治はそんなこと気にもかけなかった。

「まだ・・・終わってない!!」

玲治はゆっくりと立ち上がる。

ルーンの力はもうまったく残っていない。

体は限界に近く、膝が震え、今にも倒れこみそうだ。

だが玲治は駆け出した。

進む先にに大きな夜鷹が見えようとも、その爪が自分を襲い、地面を幾度となく抉ろうとも。

ひたすら前に駆け出した。

「リルウ!!」

空から何かが落ちてくる。

それは地面にせまってきていて、少女は為す術もなく死に狩り取られようとしている。

もうその瞬間は訪れようとしていた。

(間に合え・・・!)

「うおおおおお!!!!」

最後の力を振り絞って手を伸ばした。

そして――、

気が付けばリルウを抱きかかえていた。

「……………レイ……………ジ？」

胸に収まった少女が驚いたような顔をする。

「どうしてこんなところに？」

「お前の声が聞こえたような気がしたただけだ」
そんな少女に優しい声で語り掛ける。

「一体何を言って……………」 「護ってやる」……………「え？」
少女の言葉を途中でさえぎる。

「俺がお前を護ってやるよ」
その一言でリルウは顔を真っ赤にした。

体力を使いいきり、意識が朦朧としている玲治の脳内では
「お前はほんと迷惑かけるよな……………」
みたいに構築されていたのだが。
そんなことには玲治もリルウも気がつかない。

（あーあ……………顔真っ赤にして……………怒ってや……………がる）

「悪……………いな、いまのは冗……………だ……………」
ふっ、と身体中の力が抜け、瞼が落ちる。
そこで玲治は気を失った。

「あ・・・・・・・・」

突然のことでリルウは頭が回らない。

と、やっとそこではっとし、辺りが砲撃の最中であることに気が付いた。

「もう、こんなところで時間つぶしてる暇なんてなかったのに！レビテーション！」

自分と地面に転がって気を失っている玲治を宙に浮かべる。

そして急いで飛び始めた。

みんなと一刻も早く合流しなければ。

「後で詳しく聞かせてもらうんだから！！」

言葉では冷静を繕っているものの、口元の筋肉がゆるんでしまうのはどうしても止められなかった。

第十一話 使い魔の印（後書き）

前回の話を時間を戻してちょっと違う場面から映してみました。

玲治の力がバリバリ活躍しましたね。ワーイ

頑張ってかいたんですけど如何だったでしょうか？

次回でここまでのお話、完結編です！

期待を乞います！

ではでは

第十二話 それぞれの決意（前書き）

うむ、意外にいい感じのが書けた。

書き終わりが遅いんで朝ごろに投稿させてもらいませうか。

最近ゼロの使い魔のアニソンとか久しぶりに聴いてみたところ、かなり感動しました。たまには埃被ったCDを掘り起こしてみてはいかが？

第十二話 それぞれの決意

城に着く頃には、ガリア艦隊はもうシェーンブリッツ城へ砲撃を加え始めていた。

レビテーションでは船の速さには敵わないのだ。

尖塔の一つに着弾し、そこから上が吹き飛ぶ。

飛び散る石の破片がリルウたちを襲う。

やむを得ずリルウは魔法を使って風で落石を吹き飛ばした。

制御のなくなった玲治が地面に落ちる。

「お嬢様！探しましたぞ！さあお早く！」

リルウの姿を見つけた老執事が手を差し出す。

「ラトラン！お父様とお母様は？」

「ご無事でございます！夫人はすでに避難されました。今からそちらに向かいますぞ、ヒーリング！」

ラトランと呼ばれた老執事は玲治に向けて魔法を唱えた。

「ん……………」

何という威力だろうか。

たった一度の魔法で玲治の意識が戻ってきたらしい。
だがまだ目を開かない。

「この分なら、あと数分で気がつくでしょう。流石に体の痛みまでは治せてはおりませんでしょうが」

そう言ってラトランは玲治を肩にかついだ。

「さあお早く！」

そしてリルウの前を走り始めた。

その後をついていく。

石造りの階段を降り、砲撃により壁が崩れた道を進んでゆく。
向かった先は城のすぐ横に隣接して建造された格納庫だった。

中に入ると一つの小柄な船が帆を広げて発進準備を行っているのが見えた。

「リルウ！無事だったか！」

声の方を振り返ると、父が走り寄ってくるのが見えた。後ろには母上も見える。

「ああリルウ！良かった」

そう言ってマリー夫人がリルウに抱きついた。

ラトランは近くの椅子に玲治を下ろす。

「お母様、お父様このままでは私たち全員ヴァルハラ行きです。一体どうすれば?!」

「そこに高速艦がある。あれなら両用艦隊も追いつけぬだろう。それを使って隣国のトリステインへと向かうのだ。国境を越えれば、さすがに奴等も他国まで押し入って戦火を広げるわけにもいくまい。リルウは中に入って艦長にもうすぐ出発すると伝えてこい。」

「お父様とお母様は？」

「ワシは遅れたものに指示を通さねばならぬ。なに、すぐに行くから船の中で待っておれ。マリーもだ」
夫人が何かを言おうとしたのを遮る。

リルウは頷くと船に走っていった。

ノアイユ公夫人も後を追うが、途中に振り返り、悲しそうな表情を浮かべて目を伏せていた。

「……………おい」

「む、なんだ起きておったか」

椅子に座って、というかいつの間にか座らされていた玲治がゆつくりと立ち上がる。

「嘘だろ、いまの」

「何を言うておる。ワシはそれを行う為にここに残るのだ。嘘など言ってはおらぬ」

「で、最後には死ぬと」

玲治はノアイユ公から視線を話そうとしない。

すると目の前の男性は笑い出した。

「戦の前とは大違いだな、少年よ。目があの時とは全く違うわ。ワシの行動もお見通しというわけか」

「いや、もう時間がないってのに普通だったら遅れた人間なんて構わずに逃げるだろ？」

自分なりの戦略論を述べてみせる。

「ふむ、ワシの考えが浅かったか」

あご髭を手でいじりながら天井を見る。

「その通りじゃ。ワシはここで死ぬことにしたのじゃ。この城はワシの生きてきた証。こここそ墓標にふさわしかろう。」

そんな答えに玲治は憤りを感じる。

「だったら残されるリルウは？ あんたの奥さんは！？ あんただけの勝手な思いで悲しませていいのかよ！？」

ノアイユ公はため息を吐いた。

「こうなることはワシにも分かっておった。ジョゼフにこのように命を狙われることも。」

ワシが生き延びても、また追ってきてその牙を納めようとはせんだろう。

それならば、ワシだけがここに残って死んだ方が、娘にもマリーにも迷惑掛けんで済むだろうに。」

「……………」

諦めたような表情。家族と別れるのがどんなに辛いものか。

「娘のことだが、今まであいつには散々迷惑を掛けてきた。我が家系に生まれたからには、常に誇りと剣を持ってと教えてきた。」

できればずっと見守って、あいつが幸せになるのを見届けてから死にたい。

だが、ワシが生きることであいつの人生を壊すのもどうかと思うのじゃ。」

娘を思う親の心。他人だからだろうか、そんなものがヒシヒシと伝

わってきて玲治を揺さぶる。

「それにワシは看取られて死ぬよりも一人で死に逝くと決めておつたからな。」

と乾いた笑いを浮かべる。

「独りではありませぬぞ」

横から声が掛かった。

老執事、ラトランがノアイユ公に歩み寄る。

「私は何十年とここで閣下と共に過ごして参りました。私も最後までお供させてもらいますぞ」
そう言つて深々と頭を下げる。

「私達もお供させてください、閣下」
「この身は貴方に捧げると決めたのです。どうか墓までご一緒させてください」

続々と忠誠なる臣下や兵士たちが集まってくる。
彼らは口々にノアイユ家への忠誠を謳いあった。

「フン、勝手にしろ」
そう言うノアイユ公の表情は怒こつているとも笑っているともつかない。

その時、格納庫の天井の一部が城壁の崩壊した石によって崩れ落ちた。

「ふむ時間か。少年、玲治といったか」
今まで輪の外にいた玲治に視線が集まる。

「お主もまだやるべきことがあるう。早くここから立ち去るがよい。
ワシらのことは構うな」
もう行くべきか迷う玲治の背を後押しするかのよう言う。

「ああ、分かった。」
もう説得の余地などないと悟った玲治はうなずいた。

そしてその集団から背を向ける。
「じゃあ皆さんお元気で」
そう言うとき家臣らが顔を見合わせて、笑った。

「おおそうだ、少し頼みがある」

振り返る。

ノアイユ公は首に着けていた何かを外した。

「これをマリーに渡してくれ」
手渡されたのはペンダントだった。

十字架のような形で真ん中に緑色の石が嵌め込まれている。銀色の
光沢が垢で随分と汚れていた。

「ああ、渡しておく」

「それともう一つ、リルウに船の中の本箱を開けるように言ってく
れ。鷲の絵が描かれておる」

「ああ、そう言っておく」

玲治は背を向けた。

「玲治」

もう一度振り返る。

「お前の道は自分で決めろ」

父が息子に話し掛けるかのような、思いのこもった言葉だった。

「……………ああ」

それでもう一度背を向けた。

船に向かって走り出す。

もう振り返らなかった。

「まったく娘思いのいい父親だな」

ラトランが口ひげをいじりながら面白げに笑う。

「フン、何の事かさっぱりだな」

それに対してノアイユ公は惚ける。

「それにあの少年に対しても中々親切でありましたなー。まるで親子のようで」

「試してみたいのだ、ワシは」

「と申しますと？」

ラトランが聞き返す。

「あやつは戦いで驚くほどの力量を発揮しおった」

「そういうばあれにはわたくしめも驚かされましたな」

「それが実力なのか或いは使い魔の印のせいかはワシには分からん。だが大きな力を持てば恨みや妬みを買うだろう。

あいつはワシのようになるのか……試してみたいのじゃ」
願を掛けるかのように目を閉じて言う。

「……さて、と、まずはあの船に攻撃が行かないようにさせますかな」

老執事は聞かなかったフリをした。

玲治が乗り込んだのを見届けると、老執事が呟く。

「無理して腰を痛めても知らんぞ？ 老いぼれめ」

「おや、閣下の方こそワタクシめのような老いぼれに遅れをとるなどという醜態を見せませぬよう」

冗談を言い合うノアイユ公とラトラン。

「では若い我らはさらにがんばりませぬとな！」

その回りの臣下たちも笑いに笑った。

この時間が人生で最後であることを知りながらも。

戦争は何時なんどきにも

終わることを知らない

（戦争は終わらない）

終結は絶えることのない憎しみを糧に

永遠と遠くへ

（憎しみが憎しみを呼び）

果たして終わりは来るのだろうか

（平和のための糧となる）

争いと隣り合わせのまま

人はなお先へ先へと進み続ける

（人はそれに気づきながらも）

憎しみのない平和な世界を求めて……

（終わらない螺旋を歩き続けるだろう）

『とある軍人の遺した言葉』

「艦長さん、出してください！」
乗り込んで一番に叫ぶ。

「乗員連絡！制限解除！全速力で離脱！」
りようかい
「ヤー！」

一気に出力が上がり、風石の力で船が浮く。
高速艦は一気に夜空へと飛び立った。

「お父様は！？」

リルウが中から飛び出てくる。

「……城に残った」

「……………え？」

信じられないという顔をする。

「嘘……でしょ？」

「本当だ」

「そっ………そんな！」

リルウは甲板の柵に登って飛び降りようとする。
それを慌てて引き止めた。

「離して！まだ間に合う！まだ——！」
玲治の腕を引き剥がそうと数秒の間もがいていたが、ついにその場にうずくまってしまった。

「……………！！」

声にならない声をあげる。

それがあまりに悲痛で玲治は目を逸らすしかできなかった。

「リルウ……………」

ノアイユ公夫人が出てきて、そっとリルウを抱きしめる。

「あの人は行ってしまふのね」

夫人の目に涙が浮かんた。

そして泣きじゃくるリルウを立たせ、肩を抱いて中に連れていった。

「あなたにこれを渡してくれて言っていました」

リルウを椅子に座らせた夫人にペンダントを差し出す。

玲治の方を向く。

「これは……………」

そっと手にとる。

「……大嫌い」

夫人はボソッと呟いた。

「これはあの人と私が結婚したときに、私がプレゼントしたものです。いつも全然身に付けてくれないと思ったらちゃんと持っていたのね」

「俺に手渡すとき、首から外していました。多分いつも肌身離さず持っていたんだと思いますよ」

「そう。あの人って本当に恥ずかしがり屋なんだから」

「ありがとうございます。レイジさん、これ程嬉しいことはありません」

そう言って夫人は涙を拭って微笑んだ。

「あとリルウ。お前にも伝えるよう頼まれたことがある」

リルウは顔をあげた。

「な、……に……？」

「鷺の絵が描かれた木箱を開けてみろってさ」

リルウはパツと立ち上がり、走り出した。

その後を玲治は追いかける。

木箱はあっさりと見つかった。船の中央である広間にその箱が置かれていたのだ。

飛び付くように箱に手を伸ばす。

そして開いた。

その途端、リルウの動きが止まる。

震える手でゆっくりと中のものを取り出す。

玲治もそれが何なのか覗き込んだ。

一式の衣装だった。

白色の、頭をすっぽりと覆ってしまいそうなベレー型の帽子に、ノアイユ家の紋である、剣と杖の交差紋が刺繍されたオーバーコート。

ただ雅で豪華というものではなく、何年も経っているかのように古びていて、装飾という装飾は家紋以外はまったく付いていない。

「リルウ？」

玲治が声を掛けるが答えない。

ノアイユ夫人がその場に近寄ってあつと驚く。

「家長の証………」

ノアイユ家の一代目当主が身に着けていたといわれる衣装。

先祖より代々受け継がれてきたというそれは、家長の正装として着られ、時代を経てもなお風格を漂わせている。

その当主の証がここにあるということは………

「あの人は最初からこのつもりでいたのね」

二重の意味で。

一つは先ほど玲治に言っていた城に残るということ。

そしてもう一つは。

「リルウ」

夫人はリルウに向き直る。

「今からあなたが、このノアイユ家の当主よ」

リルウは目にたまった涙を拭う。

そして顔をあげ、力強く頷いた。

「はい。」

顔は泣いてぐしゃぐしゃだけれども、

心を決めた少女は、剣と杖を手にとった。

帽子を被り、コートを身に付ける。

ゆっくりと歩いて甲板に出た。

もう城は彼方に行ってしまう、姿は見えない。

リルウは杖を抜いた。

「ラグース・ウォータル・イス・イーサ・ウインデ……レーゲン」

辺り一面に氷の一際大きな粒が無数に舞い始める。

「電？」

手に取ると、手の平ほどあるそれは、体温に溶かされてなお大きい。

辺り一面幻想的な世界が広がった。

月明かりがゆっくりと降る氷の粒を照らし、反射した光が星の瞬きのように輝く。

船に乗っていた船乗りや召し使いたちが、立ち止まって空を見上げるような光景だった。

「……お父様、もしこれが見えるのならばどうか安らかに眠ってください」

リルウがそっと呟いた。

きつと誰にも聞かせるつもりはなかったのだろう、ほんの微かな声だった。

だが隣にいた玲治には聞こえていた。

「ああ、きつと見えてるはずさ。どんなに遠かろうが」

それを聞いて微かにリルウの顔に笑みが戻った気がしたのは、別に玲治の意識過剰ではないのだろう。

『お前の道は自分で決めろ』

別れ際、ノアイユ公が発した言葉。

玲治が思うには、使い魔として召喚された自分が、主人を護っていかどうすべきかは自分自身で決めろと言うことなのだろう。

（使い魔か……………）

玲治は今日あった皆さんの出来事を回想しながら、この風景を眺めていることにした。

この日、シェーンブリッツ城は陥落。同時にリルウの父、ノアイユ公、ルイ・ド・ノアイユの戦死を遂げた日となる。

だがそれは、政府の報復を恐れてか、表沙汰にはされずに、領民の

口伝えによって少しずつ広がっていったという。

第十二話 それぞれの決意（後書き）

ヤバイ、何も言えねえ（、D、）

兎に角頑張ったのは確かなんだが……………
別に物語が暗くなっていくなんで大丈夫ですよ（？

題名「それぞれの決意」

あまり表現できたか知れませんがどリルウの父は身を犠牲にするこ
とを選び、リルウはノアイユ家を担うことを決意した。
玲治も使い魔がどうこういつて終わり。
中途半端だったかもしれませんが、すいません。

でも原作的雰囲気とかでた気がして一応満足

家長の証ってどう表現すりゃいいの？ってな感じにすごく迷いまし
た。なにかいい案無いもんですかね……………

それにしても夢中になりすぎて勉強が疎か。

明後日試験だというのにいいのかコレー！？

というわけで次投稿は遅くなりそうです……………

あ、そうだ

実は今回で第一部完な感じなんですよ。

良かったらこれまでの完想なんか書いてくれると嬉しいな♪な♪

リルウのオーバーコート……インパネスコートの部類。シャーロットホームズが着るアレみたいなのだったか。

ラグースレーゲン……ルーン語はゲルマン語からの派生との事でオリジナリティを添えてみました。「レーゲン」は「雨」の意味です。

実はこれリルウの二つ名に関わります

第一話 トリスタニアへ！（前書き）

お久しぶりです。
黒蜜です。

えー、書いちゃいました……………

明日も試験日最後なんであいいかと

というか土日気が付いたらこれに手がいつちゃって集中でき中田。

（ノ、ノ、ノ）

そんなことはさておき今回より始まります、第二部！

第二部が始まります！

大事なことなので二回言いました。

話数も一からカウントですね。

今回は玲治たちがトリステインへ向かう！……………前の話になります

ではどうぞ！

第一話 トリスタニアへ！

息を潜める。

ゆっくりと――簡易式の短弓に矢をつがえる。

ラグドリアン湖を北側――トリステインへ数百キロメートル。

陽が頂上へ昇り、また深い地平のそこへ少しずつ降り始めた頃。名も無き森の中で一人の少年が草影に隠れていた。

目的は何であるか、というと、

少年が狙いを定める数十メートル先。

陽光射し、小鳥さえずる森の中で食事中の一匹の雌鹿がいた。

つまり食料調達である。

（のんきに草食んでるとこスマン！）

心の中でそつと謝ると、矢を放した。

ビィィィィィィィィィィ！

鋭い風鳴り。

「うおっ!？」

思わぬ展開に少年は声を上げた。

引き方が悪かったのか、あるいは矢をつがえる場所が高すぎたのか。

獲物目掛けて飛んで行くはずだった矢は、物凄い轟音を従えて空高く舞い上がっていった。

それに気がついた雌鹿が慌てて駆け出す。

「くそっ！」

弓を放り出して、剣を放ちながら走るが、最初から距離をとってたたため追いつけない。

とその時、鹿が逃げるその横の茂みから、一人の女性が飛び出した。

両手に小刀を握って鹿の背に飛び付く。

そして小刀で鹿の喉を掻き切った。

どさりと地面に倒れ込む。

数秒の間もがいていた鹿の目から光が消える。

「すまん、クラリスさん。なんかミスった」

メイドという身分でありながら、狩りをもこなせるその女性に頭をかきながら謝る。

「いえ、未経験なのは承知しておりましたから、これも訓練の一環と捉えていただいて構いません」

服の埃をぽんぽんと落としながら立ち上がる。

ちなみに彼女は、動きにくいメイド服のままだ。

返り血を浴びないのかと玲治は心配したが、色々と計算して喉を切ったらしい。

彼女の服は真っ白なままである。

「そうか……俺もあの時みたいに素早く動けたらと思うんだがな…

…」

玲治は呟いて自らの左手を見る。

玲治の力……あの時衝動のように湧いてきた力は、あの日を境にしてぱったりと反応しなくなった。

それで玲治は剣ではなく弓を使ったのだ。

とは言っても動きの早い鹿に剣で挑むという無謀な行動は、はなからクラリスが却下したが。

（たぶん何かきっかけがあれば、またあんな感覚が起こるんだろうな……）

体が本当に軽くなったような軽快な動き。普通の状態ならば、途中で力尽きていただろう体力も、ルーンが熱を帯びる間は絶えることがなかった。

この『使い魔の印』というものがなければ、もしかしたら自分も他の兵士たちと供に、地面に紅い華を咲かせたまま転がっていたのかもしれない。

そして一番記憶に残っているのが、頭に直接響いてくるかのような声だ。

きつと一種の直感の類だと玲治は思っていた。

辺りの殺気を鋭敏に感知し、その直感によって攻撃を避ける。自分でも驚くほど武器が掠りもしなかった。

だが、裏を返せば『玲治』自体ではなく『ルーン』が戦ったということだ。

（俺にはまだ力が足りない）

玲治はそう思った。

「どうなさいましたか？レイジ様」

どうやらしばらくの間立ち止まったままでいたらしい。
クラリスが怪訝そうに覗き込んでくる。

「ああいや、何でもない」

何でもあったから考えていたのだが。

「そうですか。ではそろそろお嬢様のもとへ戻りましょう。皆さん大喜びすると思います」

「ああ、さっさと帰るか」

クラリスはあえて深入りするなどという野暮なことはしない。

二人は荷台に積んだ獲物を引いて、フネに向かって歩き始めた。

数十分歩くと、森の中にある開けた場所に到着する。

「おおっ！こりゃあ立派な肉の登場だ。若造！いいもん捕ってきたじゃねえか。腕がなるぜ！」

鹿を見て、肩を回すのはいつぞやの筋肉コック。

唸る腕筋、ああ俺もあんな風になりたいもんだ……なんてことは一ミリも思わない。

「コック長、あとはよろしくお願いします」

「おうよ！任せとけ！今日の夕飯は豪華だぜ」

クラリスが丁寧な頭を下げると、筋肉コックは胸を叩いた。

どっちらせと鹿一匹まるごと担ぎあげた筋肉をおいて、そのまま玲治とクラリスは船内に入った。

「お嬢様、ただいま戻りました」

リルウの自室に入り、クラリスが淡々と報告を始める。

「今日の収穫は成体の雌鹿を一匹でした」

「ただ――」 「お帰りクラリス。ねえ、『アレ』見つかった？」
玲治の言を待たずしてリルウが訊ねる。

最近はいつもこうだから仕方ないと、玲治は首を振った。

「いえ、今日も見つかりませんでした」

「そう、やっぱり王都まで徒歩で行くことになるかしらね」

そう言ってため息を吐く。

高速艦が不時着してからもう1週間は経つ。

「風石が足りません。残念ながらこれ以上の飛行は不可能です」
そう言って船長は頭を下げた。

『アレ』とは風石のことだ。

土石、火石といった四大魔力の結晶の1つで、その石によって、この船が飛ぶことを可能にするらしい。

そしてその石が切れた今、船は着陸を余儀なくされた。

元々、高速艦は試験段階の装備であり、より早くを課題としているために燃料効率がすこぶる悪いのだ。

実を言えばこの4つの石、地表にはほとんど存在しない。

リルウもそれは分かっているのだが、一刻も早くという焦りから何となく希望を抱いてしまったのだ。

「なあ、トリスタニアだっけ？何でそこにいく必要があるんだ？」

「それはここが外国だからよ。私達は一応国境を無断で踏み越えた、いわば犯罪者なのよ。そうならないためにも、この国の管轄に行つて亡命の申告をしなきゃいけないのよ」

「丁寧なお答えどうもお嬢様」

「……何かあったら伝えてちょうだい」

玲治のふざけた物言いにも突っ込む余裕などないらしい。壁に寄りかかって窓の外を眺めながら何かを考え始めた。

「行きましょうか、玲治様」

クラリスが退出を促したので、少し迷いながらも、一緒に部屋を後にすることにした。

シェーンブリッツ城で起きた数々の出来事は彼らの心に深く傷をつけた。

此度の戦いで何千人もの人間が死んでいった。

この船で脱出できた人間は、玲治とリルウ、ノアイユ公夫人とクラリスを合わせて、船乗りと城の召し使い達のみであった。

兵士は一人も乗っていない。粗方は戦場で死に、少数が自力で逃げおおせたくらいだろう。

だが生き残った者全てが悲観で動けずにいるわけではない。

未だ悲しみに暮れているリルウもそれでいて実は前を向いている。

夕飯を終えてゆっくりしていると、玲治の元に一人の執事がやって来た。

「レイジ殿、お嬢様から広間に集まりますようにとのご連絡です」

「ん？リルウが？」

「はい。今後の指針を決める重要な話にございます」

（なんだ？昼のことと何か関係があるのか？）

部屋を出ていった執事を追うようにして玲治も広間に向かった。

広間はすでに人でごったがえしていた。

どうやら玲治だけにではなく全員に話すことのようなのだ。

「えー・・・・・・・・っと、ではこれより重要な話をします」

玲治の最後らしく、それを見留めるとリルウは話し始めた。

自らの召使たちとはいえ、流石に何十人の大人たちの視線をあびるのは緊張するらしい。

リルウは手をせわしなく動かしている。

「我々はトリステインの王都まで船で向かう予定でした。ですが生憎ながら風石が切れてしまったため――船長が申し訳なさそうに頭をたれた。――」
「――近くの村で馬を借りて、それでトリスタニアまで向かうようにします。」

「しかし馬車を借りられたほうがより経費を安く済ませられませんか？」

一人の召使がリルウに疑問を投げかける。

そう、城からほぼ着の身着のまままで逃げてきた彼らには、あらかじめ船に積んである予備資金程度にしか持ち合わせがない。

「ええ、でもこの人数で行くと目立つでしょうし、それではいつガリアからの刺客に襲われるとも分かりかねないわ。だからトリスタリアまでには少人数で行くことにします。

その間他のみんなはこの船で待機していてください。すぐに王都から人を派遣しますので」

辺りにざわめきが走った。

マリー夫人が手を上げる。

「ちよつといいかしら？ 逆にもしその人数でかけて襲われたらどうするつもりなの？ もしここで待つ私たちの方が襲われた場合は？」
なかなか鋭い意見である。

「その場合は極力正面衝突を避け、逃げに徹します。街中まで逃げれば相手も迂闊に攻撃は出来ないでしょうし。それに少人数でも戦力になる人を連れて行けば問題ないわ。それでええと……」

それに対して予め考えていたのだろう答えを返した。
だが待つ人々にまでは頭が回らなかったらしい。

一生懸命頭をひねっているが、答えが出てこない。

「それならば私めにおまかせあれ！」

集まった人々すべての目が、ある一点にたたずむ一人の男を捉える。

玲治は口をあぐりと開いた。

「……いや、形容詞的表現で、それほど驚いたということだ。
なんとそこには筋肉コックが立っていたのだ。

しかも何故か上半身裸のままポーズを決めている。

「この鍛えられた上腕！！幾年を経たこの妙なる腹筋！！我が肉体が降りかかるすべての災厄を防いでみせましょうぞ！！」

「マッツォン、あなたがいると助かるわ」

マリー夫人が筋肉コックの立候補に拍手を送る。

（あいつマッツォンって名前か・・・・・・なんて名だ）

見た目と名前があれほどマッチする人間はそういないだろう。皆が拍手を送る間、マッツォンはポーズを決め続けていた。

「他に何か意見はあるかしら？」

リルウは広間を見渡す。

「我らはお嬢様、いえ姫殿下にいつまでも従いましょうぞ」

そして一同がさっきよりも大きな拍手を送った。

「ありがとう。私たちが行ってくる間、少しの辛抱をお願いするわ」
そういつてリルウは壇上から降りた。

「レイジ、クラリス」

集会が終わり、人々が少しずつ部屋に戻っていく中、リルウが二人の名を呼んだ。

「ん？なんだ」

「明日の夜が明ける前に出発したいんだけど、あなたたち二人に来てもらっていいかしら？」

ついさっきの話の事だ。

どうやら少人数とはこのメンバーのことらしい。

「ああそういうことか。だが俺は足手まといになるかもしれないぞ？」
あの時の自分の力がルーンの力で成り立っていたことを自覚している以上、リルウの誘いに少し躊躇ってしまふ。

「平気よ。いざとなったらクラリスだっているし私も戦いなら少しは慣れてるつもりよ。あなたもやれるだけの事してくれればいいのよ。一応私の使い魔なんだし」

「……………ま、そう言うんなら分かった。行こうか。ここにずっといるのもつまんねえだけだし、俺もその王都ってのが興味あるからな」

「決まりね」

玲治が頷いたのを見てリルウは微笑む。

「では私は馬の手配をしておきます」

そう言うとかラリスは船から降りていく。もう日が暮れたというのに村まで行くのだそうだ。

「明日の朝だから準備を済ませておくこと。いい？」

人差し指を突き出して『忠告！』というなんとも可愛らしい仕草をする。

「了解ー」

玲治は軽く欠伸を噛み殺しながら答えた。

「じゃあ解散。おやすみレイジ」

リルウが人気のなくなつた広間から出ていく。

（俺もそろそろ寝るか。どうせ準備するものなんてないようなものだしな）

己の『主人』に続くようにして玲治は部屋に戻っていった。

次の朝。
まだ陽も昇らぬ早朝。森はうつすらと霧が漂い、静寂に包まれていた。

「ふあ、ねみいな」
まだ肌寒い空気に思わずコートをきつく巻く。
船から降りて少し先にクラリスが、三匹の馬の横に立っているのが見えた。

「おはようございます。レイジ様」
クラリスは何やら沢山の荷物を抱えていた。

「おはようございます。すごい荷物ですね」
「はい、王都までは馬で2、3日程かかります。その間の衣食住に不備の無いよう、最低限の荷物を用意したのです。」
「最低限ねえ……」

玲治から見れば「どこが遠い外国に旅行でもいくのか？」というぐ
らいの量である。
といっても玲治は外国旅行はしたことないのだが。

と後ろから声が掛かる。
「お待たせ。みんな揃ってるわね。じゃあ行きましょうか」
振り返ると、前に町に一緒に出掛けたときの黒のジャンパーズカー
トを着たリルウがいた。

「お、おう」

まさかあの時の服装で出てくるとは思わなかった。
正直、リルウの髪の色だとそれを引き立てる暗色の方が似合っているなと思った。

リルウはとことこと歩いてきて軽い身のこなしで馬に飛び乗る。
それに続けてクラリスも馬に飛び乗っていく。

「どうしたの？早く乗りなさいよ」

「あー、俺馬に乗るの初めてなんだよな」

「へえ、じゃああんた元の場所ではなにで移動してたの？」

「大概は徒歩だが、遠出のときは自動車だとか飛行機を使うな」
「ふーん」

玲治は馬に飛び乗ろうとする。

「よっと」

跳び箱の要領でいくとなんとか乗れた。

「これからよろしくな」

深蒼の眼をした鹿毛の馬をそっと叩く。

「さあ、トリスタニアに出発よ！」

一行はリルウの掛け声と共に王都までの長い道のりを歩き始めた。

リルウが先頭を進み、その後ろをクラリスと玲治が従っていく。
その旅路の中、

（もし、）

1つの考えがふと玲治の頭をよぎる。

（もし刺客とやらが出てきたとき、俺はどうすればいいんだろうか）
勿論、自分の力が許す限り剣を振りたい。

帯刀したバスタードソードの柄をそつと握る。

でももし護りきれなかったら俺は

「レイジ様」

隣から声が掛かりそちらを向く。

「安心してください。あなたの『力』は自ずと発揮されるはずですから」

「？」

謎めいた言葉。

頭の中でそれを転がしてみても意味が掴めない。

もう一度クラリスの方を見る。

すでに前を見据えていて、こちらを向く様子はない。

「……この女性は一体何を知っているんだろうか。」

太陽は昇り、既に新しい日が来たことを知らせていた。

第一話 トリスタニアへ！（後書き）

第二部、一話どうでしたか？

特に話は進んだわけではありません。

ですがいろいろ重要なこともありました。

これから玲治のルーンの真相が段々と明らかに・・・

後はトリスタニアですね。

トリステインです。

ルイズ達もう鼻の先！

感動のご対面が迫ってますのー。

では今回はこれにて失礼
次回、お楽しみに！

第二話 トリスタニアええええ!! (前書き)

やっとこさ書き終えた

いつもながら書く遅さに嘆く

O
r
z

第二話 トリスタニアええええ!!

玲治たちが出発したその日。

所変わってトリスタニア。

「殿下、先ほどの名高き大泥棒が捕まったそうですぞ」
痩せこけた男がうら若き少女を前に深々と礼をする。

長きにわたる気苦労ゆえか、長身に関わらず身は痩せ細り、その顔は骨張っている。

民衆にとある動物に例えられるのもその所以だ。

「というと世間を騒がせたフーケの事ですか？」

しかし少女は大して興味なさげだ。物憂げな顔で爪をいじる。

「はい、魔法学院に潜んでいたようで、あろうことかあの宝物庫が破られてしまったそうです」

「まあ。流石に伊達ではありませんね」

頬杖をつき、窓の外を流れていく雲を眺めた。

白魚がごとき指、佇まいはまるで百合のように美しい。

同年代のどの娘にも勝るその美貌は、その何気ない仕草にも高貴な風格と可憐さを引き出す。

「ところがかのものは魔法学院の生徒によって捕らえられたそうで

すぞ」

少女が耳を傾ける素振りを見せないことに耐えた様子もなく話を続ける。

「生徒に泥棒退治を任せるなど……無事に過ぎたからよいものの、大事でも起こせば外交問題にまで発展するとうのに……。もう少し学院の教師らには自覚を持ってもらいたいものです」

「それでしたら次のユルの曜日に学院に赴く機会があります。その時にわたくしがそのようにお伝えしますわ」
そしてため息を一つ吐く。

「何かお悩みでも？」

「……悩みも何ありませんわ！ええ、ゲルマニアに政略結婚だなんて、何て素晴らしいことでしょう！嬉しい限りですわ！」
少女は苛立ちを隠さずに答える。

「我らがトリステインは他国を相手に取るにはあまりに小さい。ましてやアルビオンでは阿呆共が不穏な動きが見せているのですぞ。小国の運命は殿下の肩に懸かっているのです。我が儘を申さないで下さい。」

あなたは――

「王家の血筋を継ぐものだから、でしょ？」
男の言葉を少女が引き取る。

「……分かっていますわ、そんなこと」
そしてまたため息。

「どうして好きな人と結婚してはいけないの……？」

それは心からの叫びだった。
先ほど男の言葉に無関心だったのもこれが関わっていたからとみえる。

「それも貴^{たかき}き者の定めです、アンリエッタ姫殿下」

玲治たちが出発してから二回太陽が沈み、二回双月が昇った。
最初こそ馬の背に乗るのは腰が痛い玲治だったが、
二日も乗るとそれなり慣れたもので、リルウが駆けなかったこともあり、それほど酷くもなかった。

長年踏み固められて道となった道を進む。
その間特に会話もなく、退屈なので周りの風景を眺めたりした。

時折放牧された牛やヤギを見かける。

ブトウ畑を見つけたので聞いてみたらワインの産地なのだという。

そんな風景を横目に流しながら一行はどんどん進んでいった。

当初懸念された襲撃は全くなく、平和そのものだった。

夕日が沈みかけた頃、

「王都はもう少し先よ。明日の昼前につくはずだわ。今日はここで野宿にしましょう」

というリルウの一言で玲治たちは馬から降りて夕飯の支度を始めた。意外にワイルドなお嬢様である。

焚き火を囲って各々食べ物を口に運ぶ。

ちなみに食卓を彩る料理が尋常ではなかった。

以前城で見たことがある——玲治はリルウの使い魔ということ
で優遇されていたが食事は他の召し使いたちと同じものだった——
リルウやノアイユ公達が食べていたものとそう変わるように
見えない。

まともな設備もなく焚き火と鍋でこんなものができるものか、と思
うほどにクオリティが高いのだ。

「うまい。こんな何でもできるクラリスさんはリルウと同じように
どこかの貴族なのか？」

あまりに完璧超人なので思いきって訊ねた。

「いえ、私はお嬢様に仕える身。それも教会前で公爵夫人に拾われ
た孤児です」

ペコリとお辞儀しながら答える。

「へえ。つまりは才能と努力の結果って訳だな」

「まったくホント、クラリスは何でもできるのよね。私が魔法の練
習で滅茶苦茶にしたお城の中とか中庭がいつの間にか元に戻って
るんだもの」

何故カリルウが胸を張る。

「お嬢様、私のみにもなってください。あれほど重労働な事はないのですよ?」

それを見てクラリスが疲れたように言う。

「いつも感謝してるわクラリス。ところでどうやって元通りにしているの?」

「あれをこうして、それをああしたのですよ」

「えー」

そんな感じに夕食の時間が過ぎていった。

夕飯も終わり、無駄に大きなリルウ用の寝室テントを用意していると、

「!」

唐突にクラリスが立ち上がった。

心なしかその額には汗のようなものも見えた。

「どうしたの?クラリス」

リルウが心配そうに訊ねる。

「……やはりここまで無事でいられたことが奇跡だったようです」

「!!もしかしてガリアからの？」

リルウは慌てて立ち上がる。

玲治も近くの木に立て掛けたグレートソードを掴む。

「いえ、まだ分かりませんが……森の方から来ています」

耳を澄ますと成る程微かに声が聞こえる。

それが少しずつ大きくなってきている。

どうやら複数いるようだ。

と、玲治はある事に気がついた。

「唸り声？」

声と思われたそれは獣が威嚇するような音に変わる。

パキッと枝が折れる音。

森の奥深くの暗がりに目を凝らした。

ガサリと音を立て、唸り声をあげるそれは少しずつ輪郭を伴っていく。

そしてついにその正体があらわになった。

「なんだこいつ？」

異様な生き物だった。

体こそ人間とそう変わらないのだが、頭に豚のようなものがついている。

そして各々手には木の棒や石造りの斧がみられた。

特有の悪臭が辺りに漂い始める。

「プギイ！ピギー！」

「プギイイイ！」

異形は手に持った太い棒を振り回して唾を飛ばしながら口々に喚いた。

「オーク……ですか」

「全く余計な心配させてくれちゃって」

そう言うとりルウはめんどくさそうに呪文を唱える。

リルウの回りに空気中の水を凝結させて出来た氷の矢が数本出来上がる。

「プギウギー！！！」

そして得物を振り回しながら突進してきたオークに向けて放った。

「プギヤアアア！！」

「プギー！ーイイイイ！！！」

グサリグサリと氷の矢が突き刺さる。

あるものは腹に深々と。

あるものは大きな口に掬い込まれて倒れ込む。

一番先頭にいたオークの首の根本に突き刺さり、その上が吹き飛んだ。

数匹に群れていたオークたちはリルウの矢^や衾^{ふすま}によってあつという間に壊滅した。

「あーあ、全くやんなっちゃうわ。こんな気持ち悪いもの見せられて」

戦いの最中に飛んできたオークの衣服を気持ち悪そうに摘まんで投げる。

「はて……この近辺には亜族は見かけられないはずでしたが？」
クラリスは思案顔で首をかしげる。

「いいのよそんなこと。たまに鹿が人里に降りるのと同じよ」
そう言ってリルウは寢室に向かう。

「俺の主人様は随分とこええな」
目の前の血溜まりを見て、しかもリルウの悠然とした様を見て啞然とする。

「これくらいでそんなおびえないでちょうだい。殺らなきゃ殺られるのよ？当然の結果だわ」

「その通りだ、逆賊の娘よ」

（殺気！？）

咄嗟に玲治は剣を振った。

玲治めがけて飛んできたマジックアローが弾かれ焚き火に墜ちる。
一気に爆発して火の粉が飛び散った。

「ふっ！よくも当てたものだ」

いつの間にか一人の男が立っていた。
声からしてまだ30にもならない若い男なのだろう。
顔は黒い面に隠れて見えない。

「ガリアの手先ね。名乗りなさい！」

「生憎と小娘に教えるほど私の名前は錆びていない。そうだな、北花壇騎士とでも言えば分かるかな」

「北花壇ですって？」

名前を聞いたリルウの顔が青くなる。

「ガリアの暗躍部隊……」

ガリア王国にはヴェルサルテイル宮殿のそれぞれの方角に設けられた花壇が存在する。

南薔薇花壇、東百合花壇……。

その名前を冠された騎士部隊は、ガリア王国の治安と発展に大きな成果をあげてきた。

ところが宮殿に北花壇は存在しない。

陽の当たらぬ場所に添えつけても意味を持たないからだ。

だから同じように北花壇騎士も、表向き、は存在しない。

つまりごく一部のみが知る、陽の当たらない、多岐にわたる裏の仕事をとり扱うのがこの、北花壇警護騎士団、なのだ。

しかもその団員が揃いも揃って精鋭揃い。

任務遂行率は未だ九割をきらないとか。

「成る程、あなたがオークを呼び寄せたわけですか」
クラリスが臨戦態勢を整えつつ男を見据える。

「クヒヒ、よくお分かりで」

仮面に隠されて見えないがどうやら笑っているらしい。

笑い方が真っ黒な仮面と相まって男にこの上ない不気味さを感じる。

「亜人共に殺せるかと試してみましたがやはり不可能でしたな」

「何故私たちを狙うの？」

リルウが男から目を離さずに聞く。

ちよっとでも不審な動きをすればすぐにでも攻撃を加えるつもりだ。

「悪く思わないで下さい。私とて殺るか殺られるかに成り立っているのですから」

真意が汲み取れないその言葉にリルウは首をかしげた。

「……さてと、お話はこれで切り上げだ。そろそろ任務に移らせていただく」

男は形式を重んじる人間らしい。

奇襲などもせずにあくまで自分のペースで進めていく。

「わたくし、北花壇警護騎士ボーン（亡骸）いざ参る。今から逆賊の娘を――」

「殺す」

その瞬間、男が何人にも分身した。
風系統最強呪文、偏在の魔法だ。

「「夜は長いぞ？覚悟しておきな」」
分身たちがそれぞれの口で同時に喋る。

「さあ、ワルツを踊ろう」

第二話 トリスタニアええええ!! (後書き)

どうでしたでしょうか？

現れた刺客！事態は金箔です！

ここでひとつこちらから質問を。

最近はこのぐらい長さ（4000～6000字）ですが短すぎたりしないでしょうか？

より多くの方からの感想を募集しています。

「〴〵が面白い」など一言でもいいので是非お願いするでげそ

あなたの感想が僕の元氣So Fight!

第三話 北花壇騎士（前書き）

現れた刺客、北花壇騎士のコードネーム「ボーン」。

対峙する玲治たちはどう切り抜けるのか？

続きをどうぞ！

第三話 北花壇騎士

「偏在！？まさかスクエア！？」
リルウの狼狽えた声がする。

黒い仮面を被った男が目の前に1…2…3…7人。
寸分の違いもない容姿、形。
内一人は本体なのだろうが全く見分けがつかない。

（どこのクローン技術だよ！！）

「今の内に逃げろ！ここは俺が何とかする！」
玲治は二人を後ろに庇うように前へ進みでた。

正直いってあんな不可思議な力を使う相手と対峙して勝てる気がしない。勝つ当てもない。

だがこの場合の勝利は本来、玲治が同行する目的であるように相手の任務とやらを阻止すること。
つまりは逃げ切ればいいはずなのだ。
他の二人を先に逃がせば持ち前の運動神経と脚力を使ってなんとかなるのかもしれない。

そんな不確定要素しかない勝機だったが玲治は盾となる覚悟でいた。

「おや。気丈だな。」

何が可笑しいのか男は笑う。

「まあ君の覚悟を挫くようで悪いけど、逃がすつもりは更々ないよ？」

ヒュンと風の唸る音が聞こえ、気がつけば“偏在”が取り囲むように立っていた。

「君たちはもう舞台から下りられない。」

男“たち”は杖を構え、呪文を唱え始める。

それぞれの杖先から緑色のライトでセイバーな剣が現れた。

……玲治視点で言えば、一瞬で刃が飛び出てまばゆく輝く剣など某星間戦争のジェ○イの騎士たちが所持しているアレとしか言いようがないのだ。勘弁。

「私は絶対逃げない！」

既に逃がすタイミングを逸してしまったりルウが叫ぶ。

「父上を侮辱した！許せない！」

頭に血が上ってしまったのか、我を忘れている。

（チクシヨウ、やるしかない）

予定と大きく逸れてしまったが、戦う人数が増える分だけ一人当り

の負担は大きく下がる。

それで何とかきり抜けられればいいのだが。

だがそれよりも女の子に戦わせるということ自体に抵抗を感じていた。

三人から数メートル離れて囲むようにしていた北花壇騎士が“ライトセイバー”を構え、一気に走ってきた。

「来るわ！」

リルウの一言で玲治は覚悟を決めた。

とそのとき、

「！」

左手のルーンが熱く燃え始める。

そして突然、前触れもなくあのときの『声』が頭の中に響き始めた。

《前方より中段刺突》

『声』が相手の次の動作を告げる。

玲治はそれに従って、前方からのまばゆく光を放った剣尖を横へ跳ぶことで回避した。

素早く体勢を整える。

何を条件にして聞こえるのだろうかなど疑問は山々だが今は考えている余裕はない。

次の攻撃も『声』に従って避ける。

「踊りのパートナーは一人に二人、」

七人の男の口から一斉に放たれる。

見ればリルウ、クラリスそれぞれに二人ずつついていた。

「――死ぬまで激しく躍り狂え」

『喜悦』という人間らしい感情のこもった声。
であるがゆえにその狂気がさらなる恐怖を呼び、背筋を撫でる。

「私の父上はっ、」

リルウは腰に提げたレイピアを勢いよく引き出す。

「逆賊なんかじゃない！」

近付いてきた男へ神速の刺突を繰り出した。

避けられないとみたのか、男はブレイドを戻して風の盾を展開する。
刺突の速度が和らぎ、そのうちに体を逃がす。

「ああああ!!」

逃がさないとばかりに男に飛び掛かっていった。

《背面より袈裟斬り》

「!」

そんな時にも次の攻撃が迫る。

玲治は咄嗟に後ろを向いて刃を交えた。

「ぐっ!」

いつにも増して強い衝撃。

突っ張らせた足が後ろに引きずられる。

《後方より剣撃。上段より振り下ろし》

(なに——!?)

先ほどの“男”が加わり、挟み撃ちの形となる。

「くそっ!」

剣を傾けてなんとか剣尖を外すと、そのまま上からの斬撃に備える。

ガンッ!

男の“ライトセイバー”が玲治のグレートソードと十字形に斬り結ばれる。

一瞬の隙について飛びすさる。

（俺にも二人がかりで来るってのかよ！）

最初不意を突かれたことに苛立ちを感じる。

自身の持つ剣を見る。

グレートソードの刃が目に見えるほど大きく欠けていた。

「余所見してちゃ駄目ダヨ？」

「！」

息を整える間もなくまた戦闘に突入した。

もう何時間と経った気がする。

いや、既に朝日が迫っているのかもしれない。

それとも時間の密度が高すぎて本当は数十分にも満たないのかもしれない。

「う……くっ」

何度も挟み撃ちに遭い、避けきれなかった光剣が腕を掠め、玲治はもうボロボロだった。

持っていたグレートソードは幾度ものつばぜり合いで刀身半ばから

ポッキリ折れてしまっている。

「んねいっ！たあっ！」

リルウが魔法を詠唱しては放ち、迫り来る刃をレイピアでいなしているのが見える。

流石戦い慣れているとはいえ、相手は嘲笑うかのようにクルリクルリと避けていく。

その額には汗が見え、息遣いも既に荒い。

クラリスはというと驚くべき反応速度で男の斬撃を避けていた。むしろ相手に傷を負わせるぐらいまで圧倒している。

男の方もクラリスが厄介と見たのか、玲治が剣戟を交わしている偏在よりもさらに激しい追撃を行っていた。

「っ！！」

格段に動きの増した偏在の光剣がクラリスの脇腹を掠めた。

彼女の顔に苦悶の表情が浮かぶ。

常時着ていた白いメイド服が既に泥まみれ、出血で血まみれだ。

「ハハッ、素晴らしい動きだ！今日の獲物は活きがいいなあ」

少し離れたところに立っている、おそらく本体だろう北花壇騎士の男が笑って言った。

玲治たちが苦戦を強いられているのに関わらず、男が余裕綽々よゆうしゃくしゃくであることに焦りを感じる。

「でもまあ、役者さんが疲れちゃったみたいだね。これでオシマイにしようか」

玲治たち一人につき二人の偏在、そして最初からまったく一歩も動かずに見ていた北花壇騎士が急な動きを見せた。

唐突にすべての偏在の杖がこちら――玲治を向く。

《全方向より斬撃》

「!？」

考える間もなく、避ける暇もなく、全身を見えない刃物で切り刻まれた。

頬、首筋、手の甲、腕……。

本来なら致命傷ではないが、浅くもない、深い傷を浴び全身から血が吹き出す。

本来なら。

致命傷にならない傷で死に至る要因は、夜、冷えた外気に晒され続けること、そして激しい運動を行い続けることだ。

今まで戦い続け、体が酸素を渴望しているときに血液の多量出血。

身体中が燃えるような熱さに包まれ、玲治はその場に倒れ込んだ。

(……まだこんな手が残っていただなんて……)

初めから男は舐めてかかっていた。

六体の分身を作り出すと、自分は少し離れたところで腕を組みながら見ていたのだ。

それを狙って放たれたリルウの氷の矢なども気だるそうに杖を振って吹き飛ばす。

玲治たちが近づこうとする度、それを偏在たちが邪魔をする。

——そう、玲治たちは戦いという場で“踊ら”されていたのだ。

男はただ、台本を手にしながら席に着き、“愉快な見世物”を見ていたにすぎないのだ。

「レイジ！」

遠くから自分を呼ぶ声が聞こえた気がする。

……意識が飛びそうだ。

待て、ここで寝たら二度と戻れないぞ……。踏ん張るんだ。

ほら……。まだ二人は戦ってる、立って助けなきゃ。

護るって言ったのは誰だ？

（異……世界とか……。ふざけ……。てやがる）

ああ……。ねる……。な……

玲治は真っ暗などこまでも続くような穴に落ちていった……。

第三話 北花壇騎士（後書き）

ああああ………主人公がやられた……

どうしよう……？

主人公いない物語になっちゃうよ。

次話、「玲治、さよなら」
とか？

いやいやそんなことないですって！きっと素敵な主人公補正で何とかなるもんですって！

・・・多分

次回をお楽しみに！

第四話 **R a d i a n c e o f S n o w** (前書き)

もう最後の投稿から5日経ってしまった……………

ごっつすみません m () m

言い訳しますとあの、ごっつ体が疲れていてめっさ眠かったんです
><

学生って疲れまする。

第四話 R a d i a n c e o f S n o w

「……んん」

意識が少しずつ戻り始めた。

瞼に射す陽光、背中に感じる柔らかい感触。
そして埃っぽいが親しみ馴れたこの匂い。

ああ、この時間が好きだ。

目覚めと眠りの狭間を意識が行き来する時間。これぞ至福の時。

眠気に身を任せてベッドの上で横たわり続ける。

部屋に忍び込んだ冬の寒さが玲治を襲う。

おもわず毛布を抱き抱えるように引き寄せた。

コンコン。

だれだ？俺の楽しみを邪魔する奴は？

程無くして扉が開く。

「あんた、いつまで寝てるつもり？」

そしてガバッと一気に毛布を剥がされる。

「…んだよ母さん？せつかく気持ちよく寝てんのに。今日は休みだろ？」

「んなこと言って、今日は平日も平日だよ。ほら、寝ぼけてないでシャキッとする！」

と目の前の（自分が言うのも何だが）細身で美人な女性に叱咤される。

「おかしいな……………」

感覚だともうそれなり日が過ぎたんだが……………。

まあ長い夢見てたからか、きつとそのせいで錯覚しただけだろう。にしても面白い夢だったな。

後で思い出してみよう。そう考え、ふと時計を見て驚く。

AM 8:05

学校の門限は八時半、既に遅刻へのカウントダウンが始まっていた。

「惰眠貪った罰ってか、くそつ。早いところ準備して出かけ……………
…？」

とそこまで来て思い出した。

「やべえ、鞆学校に置き忘れたまんまだ」

放課後友達と駄弁ってたときに気がつかず出ていっちゃったんだ。

「まったく、あんたのそういうところは変わらないわね。ほら！こ

れ！」

そう言って母が俺の胸になにかを突き出す。

学校指定の黒い鞆。

特に飾りは付いていないが、その傷の場所、色褪せ具合。

見まごうことなどない、俺のものだ。

中を確認してみると、昨日の持ち物がそっくりそのまま入っていた。

「俺の鞆……どこにあった？」

「ほら！友達が持ってきてくれたのよ。外に待ってるわ。隅に置けないわね♪」

と頬に両手を当てて何故か嬉しそうに身を振らせる。

「……………なんのことだ？」

訳がわからず無意識に声のトーンが下がる。

だが母親はそれを照れと勘違いしたらしい。

「あら、ごめんなさいね。深入りはしないわよ♪」
と手をヒラヒラと振る。

そして、女の子待たせちゃ駄目よ？と言いつつ残して部屋を出ていってしまった。

「何言ってるのかさっぱりだが……………」
結露で曇った窓を手で拭いて、外を覗く。

「！」

見覚えある顔。間違いなく彼女――姫野佳奈だった。

早く行ってあげないと頬を膨らまして一人でぷんぷんしながら行ってしまうそうだ。

玲治は服――を着替えようとして、元から着ていることに気づく。

鞆を肩に担ぐと猛スピードで階下へと降りた。

「いつてらっしゃい」

「ああ！いつてくる！」

もどかしげに靴を履くと外へ飛び出した。

「おそい」

案の定彼女は頬を膨らませて立っていた。

「すまん、姫野……まさか来ると思わなかったから」

「あれ？昨日放課後に言わなかった？朝一緒に登校しよって」

「……言ってたかもしれないな」

昨日、放課後に話した中にもしかしたらそんな会話があったのかもしれない。

「あはは、まだお寝坊さん？じゃあ目覚ましにいいことしてあげよう♪」

というが早いのか、佳奈が一気に迫る。

そして頬に感じる暖かい何か。

「あ……?!!」

あまりに不意を突かれた玲治は不覚にも動揺を隠せなかった。
情けない声が出てしまう。

「ふふっ、これでバッチリ! お目々もパッチリ!」

玲治を出し抜いたのがよほど嬉しいのか、まさに跳び跳ねるような喜びようだ。

だが目に見えて顔が赤い。真冬の朝だというのにランニングでもしたかのように上気している。

どうやら照れ隠しにオーバリアクションをしているらしい。
そんな姫野がなんだか可愛く思えた。

「……確かに強烈だが……俺じゃなくて大事な奴のためにとっておけばよかったのに」

「なら今が一番大事! それにね……」
姫野が上目遣いでじっと見つめる。

「私たち、……付き合ってるんだし……」

「姫野……」

ぐはっ、何て可愛いやつだ。
正直これにはグッと来たな。

なんだか何も考えられない玲治は道のど真ん中で姫野を抱き締め――

「って何やってるんだ俺は！？遅刻するじゃねえか！」

腕時計を見てゾツとする。

AM 8..22

既に残り八分だ。ダッシュでも間に合うかどうか。

「しまったああ！非常事態発令中?!」
隣の姫野がやたらとあたふたしている。

「おい、走るぞ！レディゴー！」

「えっ、ちょっと待っ」

玲治は姫野の返答を待たずに走り出した。

「うわぁん！昨日の今日だよ！反則！」

何やら後ろから嘆きが聞こえるが気にしない。

構わず走り続ける。

構わず走り……………

走り……

走

「遅いよ！玲治君！」

気がつけばあっという間に姫野に追い越されていた。

「くっ！体が鈍ったか」

思うように足が進まない。

雲か何かに乗っているようだ。

「おっくれちゃうよーはやくー」

そして姫野は物凄い速さで駆け抜けて見えなくなった。

「まっ、待てっ」

取り残された玲治は何とか追い付こうと奮闘するのだった。

……………結局学校に着いたのは門限の後だった。完全な遅刻だ……………。

授業中、席に着きながら頬杖を突き、窓の外を眺めやる。

「――えー、少し外れるがこれは心理学でも取り上げられる事で――」

頭に入らない言葉の羅列をそのまま受け流してゆく。

空は満遍ない白い雲に覆われていた。

(なるほどだからいつもより寒かったわけか)

「――デジャブなどとも言うが、既視をともない――」

吐く息は室内に関わらず既に白い。

(そーいや昨日も走ったよな……)

あれは手加減して勝たせてやったんだっけ……？ 姫野の怒ったような表情が見物だったなあ……

「……い……つき…………」

放課後は夕焼けが綺麗だったな………姫野のやつも劇の練習とか言いながら結局は俺と一緒に居たかったただけだし……

「おいっ！ 朝月！」

ふと名前を呼ばれて前を向く。

「今日はやたらとボーッとしてるな。大丈夫か？」
教室中から心配そうな視線が集まる。

「ああ、すみません。お気遣いなく」
そして姿勢を整えてノートをとりにかかる。

「そうか。えー………っと、………何話してたっけな？」

途端教室は笑いに包まれる。

「先生、ちょっと笑わせないでくださいよー」

「そうですよ、デジャブがどののと言ったじゃないですか」

「ああそうだったな」

先生はポリポリと頭を掻く。

「えー、つまりは既視と言うものは人の健康状態に意外にも関わっているということだ。話を元に戻すが――」

（既視……ねえ）

ノートにペンを走らせる。

その時間からはもう少し授業に集中した。

ただ、頭のもやもやがとれないので帰ったらじっくり休もうと思った。

学校も終わり、放課後。

今日も平和な一日が過ぎ去り、玲治は帰路についていた。

「今日はなんでだか何時にも増して調子が悪かったな……」
寒空の道を歩きながらボソツと呟く。

運動には自信があったのだが今朝も姫野に追い抜かれてしまった。
いつもなら身が入る授業もぼんやりと空を眺めて過ごした。

“何か忘れてる気がする”

霧がかかった思考の中、それだけが玲治の頭を駆け巡る。

「大事なこと……あったっけ？」

授業中思っていたこと。

（昨日、劇の練習だったか……？）

違う。

直感がそう告げる。

学園祭もないのでまず劇など誰もやらない。

あの時、俺は姫野がドッキリ作戦をすると待ち構えていたのだ。強いて言えばそれが劇と思えたのか。

そして言うまでもなく、姫野は俺に告白した。

今日を振り返ってみる。

朝、目覚めると姫野が家に来ていた。鞆を届けに来たらしい。

（俺たち付き合ってたか………？）

あのときの姫野が吐いた言葉。

『付き合っている』

それは身に覚えのない事だった。

俺は付き合っつてと言われたとしてもまず頷かないだろう。
意外とそういうものに奥手であるのは承知である。

……………例えば相手がクラスメイトで才色兼備の少女だとしても。

言い知れない感覚が玲治を襲う。

考えるほど目の前が霞んでゆく。

『この世界』はナニカがおかしい。

その時、ある事実が頭に浮かんだ瞬間、玲治は駆け出していた。

勿論学校だ。

空は白く、吐く息も白い。

空からは白いものが降り始めている。

世界は『白く』染まりつつあった。

時間はもうない。

「はあはあ……………」

放課後の教室。

そこには人影があった。

「やっと来たね♪朝月君」

後ろ手を組んでクルリとこちらを向く、姫野佳奈。

「このままずっとこうしてるかと思ったけど安心したよ」

「まさかな、夢の中で過ごしているだなんて想像も出来なかった」
息を整えて少女に歩み寄っていく。

そう。これは『夢』だ。

「どうやって気がついたの？」

「考えてみれば矛盾ばかりだったさ。それに先生が言ってただろ、
既視感」

“昨日”に約束などしていない。鞆を届けに来たのに、一緒に登校する予定だったなどあまりに露骨だ。

動けれども、走っても人には追い付けないのも夢たる証拠。

“今日”は“昨日”の記憶が歪んで起こされただけなのだ。原形が
“昨日”なら既視感も当然のはなし。

「そこまでわかってるんだ。凄いね」
少女は嬉しそうに笑う。

「ああ、俺はまだ死ねない。あっちにはリルウが危険にあっている。
」

「お前も一緒に飛ばされたしな」
やっと思ひ出したことがあった。

目の前の少女は一緒に異世界に召喚されたのだ。そして多分違う場所にいるはずだ。

今まで忘れてしまっていたことが悔やまれてならない。

「また戻るんだね？」

「ああ、もちろんだ」

「ふふ、あっちでまた会えるといいな♪」
静かに肯定して、姫野はやさしく微笑んだ。

「ではそんなあなたにヒントをあげまーす」
おどけた口調で話始める。

「まず始めにこの世界はあなたの思念で出来ているから、一日経ったように感じるけど本当はほんの数秒しか経ってないよ。脳ってすごいね！」

「本題に入るよ？ 朝月君は今危険な相手と戦っているね。どうにか切り抜きたいけど相手は見えない攻撃をしてきてあなたは気絶した。風は目じゃどうやっても見えないね。でも例えば雪が舞っていたら

姫野は窓を開け放った。

冬の寒風と共に無音の雪が入ってくる。

雪は室内の暖気煽られて、細かく揺れながら静かに落ちていく。

「！」

「これなら見えないものも見えるよね」
にっこりと笑う。

段々と積もる雪。

——世界が白くなっていく。

——頭の中が真っ白に——

「いってらっしゃい、朝月君」

最後に少女の声が聞こえた気がした。

喧騒が戻る。

血の臭い。金属の嫌な香り、そして地面の土と草の臭いが鼻をつく。

玲治は目が覚めた。

同時にこれまでの戦況と今の状況を確認する。

……どうやら気絶してから程経たないらしい。
だが玲治のまわりにはちよつとした血溜まりが。

（うへっ！体がいてえ。それに動くのも辛い）

指先に力を込めるがそれでも体に激痛が走る。

（なんとか動いて戦いに戻りたいが……）

と視界の端にリルウが映った。

「それ、それ、活きのいいお嬢ちゃんももう限界かな？」

「っ！まだよ！」

血だらけ、泥まみれ、服もあちこち破れながらもなお強がる。
そしてその回りには4体の偏在が駆け巡っている。

（あの野郎………）

玲治の体に沸々と煮えたぎった感覚が流れ出す。

ぜってえただじゃ置かねえ！

一気に力が戻る。

玲治は紅い水溜まりから跳ね起きると、目にも止まらぬ速さで少女の元に駆けつけた。

折れた剣を思いっきり振り下ろす。

不意を突かれた偏在はひしゃげて消えていく。

1……2……3……あっという間に4体すべての偏在が掻き消えた。

「なに！」

「レイジ？どうして！」

双方は驚愕に目を見開く。

「あの傷で立ち上がるだど!?!」

「リルウ! 氷雨だ!」

間髪入れずに叫ぶ。

「!! どうしてそれを……?」

「はやくしろ!」

「ラグース・ウォータル・イス・イーサ・ウィンデ・レーゲン!」
言われるままに呪文を唱える。

途端周囲に氷の塊が形成されていく。

玲治は片っ端からそれを叩き碎いた。キラキラと破片が舞い始める。

「デル・ウィンデ!」

まだ残っている男の偏在たちが放った“見えない刃”が玲治たちを襲う。

だが不可視は空気中の塵とぶつかり可視となった。

素早く対応した玲治は剣技でそれらすべてを相殺した。

「うおおおお!!」

怒りに身を任せて、直ぐ様偏在に飛びかかる。

今までとは桁違いの速さにもと7体いた偏在は全員為す術なく掻き消えた。

「ふう……時間切れだ……ここまで耐えられる人間がいるとは思わなかったよ」

男の顔が玲治たちを向く。

「俺はお前を許さねえ!」

折れた剣を相手に突きつけるようにして吐き捨てる。

「君はまったく興味深い。もう少し戦っていたいが、この続きはまたの機会にでもさせていただくよ。オルケヌス!!」

男が叫ぶと一つの鳴き声とともにすーっと巨大な鷹が舞い降りた。その足を掴んで男は空高く舞い上がる。

そして一瞬で暗闇に紛れ見えなくなってしまった。

「怪我は大丈夫か？」

自分を柵にあげて目の前の少女に問いかける。

「何であんな無茶を！」

「俺だけ寝てたら誰かを護るなんて言った示しがつかねえんだよ」

「なっ……………」

それを聞いてリルウは“あの日”の言葉を思い出す。こんな状況だというのにまたしても顔が赤くなる。

「バツカじゃないの……………」

「そういうのは時と場合を選びなさいよ……………」

視界がフラットとしてくる。

そしてリルウは前のめりに倒れた。

その体を玲治は優しく抱き止める。

この戦いで精神力を激しく消耗したのに最後にあれだけの大技を使ったのだ。

よく見ればすやすやと寝息を立てている。その寝顔を見て思った。

この安らいだ顔を守ろうと

「クラリスさん後を頼みます」そう言って自分もぶっ倒れた。もちろん少女への最後の配慮に背中からという危ない倒れ方で。

「了解です」

メイドはようやく安穩が来たのだと肩を下ろす。

「朝……ですか」

東から朝日が登り始めていた。

とにもかくにも狂気の舞踏会は終演を迎えたのだ。

第四話 **R a d i a n c e o f S n o w** (後書き)

どうでしたしょうか……？

いやーラブな話は書くのが難しい（ほとんどそんなの入ってなかったけど）

色々考えた末の力作なかんじ（6000字越えた！）ですがごり押しは否めないところあるかもです。

いいんです！多分

勢いがあればこういうのは大丈夫なんです！多分

最後に、二部からの登場人物紹介を次辺り投下します。

それを見て物語の筋なり掴めたら幸いです。

今後ともよろしく願います

ん、誤字脱字等々、発見次第ご報告願います。

登場人物紹介（前書き）

おはようどこんにちはを和えまして、Hi!

今回は登場人物の紹介を色々としてみましょうと言う企画です。

ま、要は吐き出したいだけやな。

でもこれを読んで少しでも物話を理解していただけると幸いです。
米 プラスあるふぁは消えました^^; すまそ

登場人物紹介

第一部及び第二部にかけての人物像を分かりやすく？説明！
基盤は三話前の人物紹介です

朝月玲治

当初16歳。未だ16歳

身長176cm

体重59kg

本物語主人公。

某高校一年生。

作者ですら最近名字を忘れていた。

日本的容姿（黒髪で黒い目）をもつ。高嶺ではないが雰囲気イケメン。これモテ男の常識。

召喚されたときの服装は、学校の制服に上着の紺色のコート。

これがデフォルトで、どんなに戦いでボロボロになってもあら不思議！いつのまにか元通り。これファンタジーな物語でよく見られる不思議な現象。

………というのは冗談で破れたり汚れる度に魔法や有能メイドさんの手によって直してもらっている。

（所持品は携帯電話、はさみ（現代における極めて原始的かつ有用な存在）、ボールペン（現代におけるry））

成績は中の上と無難だが運動能力はかなり高い（100mを14〜15秒台）。

冷静に物事を判断する方で、また自分よりも他人を優先する傾向がある。

一度感情に火がつくとかなり手こずる。とにかくコワイ。これだけは言える。

だが怒らない。紳士。周りに手を焼かされてもきつと紳士。

使い魔として賜った印は「ティワーズ・エオロー」。意味は「軍神の恵み」。

（相手の行動を読むことと、一定の身体能力の向上。）

これからの成長に期待。

姫野佳奈

16歳

身長155cm

体重不詳

本物語サブ主人公兼ワンオブメインヒロイン。

某高校一年生。主人公と同じクラスであり運動神経も成績も優秀な明るく快活な女の子。

基本ポジティブ思考。

誰からも好かれるクラスの人気者。

高校に居た当初、玲治のことが好きで告白したが、返答は聞けずじまい。

玲治とともに異世界に着き、エルフのルクシャナの家に飛ばされ、気がつけば仲良くなっているという、伝説的人間。彼女の誰にも物怖じせず、人当たりの良い性格がそうさせるのか。

異世界についてははじめは動揺していたが、むしろ好奇心のほうが勝り、町に出かけたいと言うほど。

これからすこしずつ物語にでてくると。思い、ます。

リルウ・ヴェルシャル・ド・ノアイユ

15歳と10ヶ月そこら。（夏の日生まれ）

身長148cm

体重不詳

ワンオブメインヒロイン。

細くさらさらとした銀髪が印象的な女の子。

ガリア王国公爵家長女。

軍家であり、最盛期が彼女の父であるルイのとき。

ブルボン家（でるかな？）などの上層とも血縁関係にあり、トリスティンのルイズとほぼ同じ立ち位置。

魔法属性は風と水のトライアングル。特に水寄り。虚無ではない。昔幼いときに、氷の雨を降らせてみせたことから二つ名は「雹雨^{ひさめ}」。
※氷雨ではない。
杖はレイピア。

自尊心は高いが、社交的。父上と母上を誇りに思い、自分も然り。また通常の貴族と違い、生活において平民と密接な関係であったことから、平民ともよく接し、ルイズや他の貴族っ子ほど差別は酷くない。

だが恋愛事情に関しては疎い。
恋愛よりも文武に励む法なのでそういった機会がなかったという一因もある。

性格的に言えば、S。親しくない人間には他人行儀だが、ひとたび仲が良くなると……。とにかくS。これだけは言える。でもきつと可愛いから結局みんな見逃してくれる。

クラリス

25歳

身長164cm

体重56kg

サブキャラ

茶髪なメイド。髪を結い上げていて大抵は無表情。ノアイユ家に仕

えるものとして、決然としているべきとの意志から来ている。

感情の起伏はあるがほとんどをポーカーフェイスを保ち続ける。

教会に捨てられていたのをマリーにもらわれたため、ノアイユ家に厚い忠誠心がある。

両親不明の悲しい過去。

本人曰く、「触れる程度には武術を学んでいる」とのことだが、実は達人級。

玲治の教師として剣術を教えていった。

リルウが子供の頃から躰係兼遊び相手であったためリルウと親しい関係であると共に一目おかれている。

そんな彼女になぜカリルウは頭が上がらない。

ルイ・ド・ノアイユ

56歳

184cm

66kg

リルウの父。本名をルイ・マルク・アントワーヌ・ド・ノアイユ。ガリア王国の軍事力の大半を保有していたが、ガリア両用艦隊の登場により既に過去の話となった。

オルレアン派であったためにジョゼフに狙われ、シェーンブリッツ城にて戦死を遂げる。

娘思いのいい父親とよく言われるが、当人は頑固に否定する。

魔法系統はリルウと同じく風でスクエア

余談だが、自分の軍隊として重装甲兵隊、歩兵隊（剣士、槍士、銃兵士↑この時代では珍しい）、砲兵隊、騎馬兵、竜騎兵、をもち、総人数はおよそ5000、この他に特攻隊（日本の神風ではなく強襲班）も配備していた。

大半をシェーンブリッツ防衛戦によって失うが、一部は逃げ延びてトリステイン、ゲルマニアに隠れている。

手持ちの軍艦は旗艦「ドレッド・ノート」をはじめとする計22艦。また高速艦の研究も進めており、玲治が使用したのが事実上の初出陣。

マリー・ド・ノアイユ

48歳

とある大公家の長女。

22の時にノアイユ家へとお嫁入り。

生まれつきより体が弱く、

リルウも同じになるのではないかと憂いでいたが、杞憂に終わる。

緑の石がはめられた古十字架がルイとの結婚の思い出の品。

誰にも分け隔てなき柔和な性格でおっとりした感じとも言う。いつも笑みを絶やさない。

コック長マツツォン

ノアイユ家専任シェフ。

マツチヨで2mを超える大男。兵士が束になっても敵わない。でもただの厨房の監督兼コック。

頑固で一直線な性格だが腕の立つ人間で、ノアイユ公と息があったのかそのまま起用。

彼は玲治らと共に高速艦に乗り込み、料理を振るい、場を盛り上げようというも筋トレを欠かさない。

マルトーとは同じ料理学校での親友でありライバル。

もう、筋肉としか言いようがない。

北花壇騎士『亡骸』

20代後半か？

突如現れた刺客。

黒い面を被り、戦いに悦びを見いだすある種の狂人。

『亡骸』の由来は偏在の使用にずば抜けて長けているため。風のスクエア。

おそらくワールド以上の力量の持ち主でワル者。

※数値はあくまで指標です。実際の数値とは若干異なる場合がございます。

登場人物紹介（後書き）

読み返してみると、序盤が本当に短い^^；

加筆してこようかな。

あ、話の筋は変えないのでご安心を。

さあて水増しをしようか、グヘヘ……………

次回はまた物語に入りますが正直何から書こうかまだ迷っています。

期限内には投稿するのしばらくお待ちください。

第五話　それが人生と言うもの（前書き）

はい☆来ましたZE★

という挨拶は軽く受け流してください。

え？なに？だったら書くな？

いやー何言ってるんですかアンさん。

私はね？こういう冗談が通じる人間が好きなんですよ？

学校じゃ一人で好きなように過ごしてる方が多いけど………けどや
っぱり（ry

無駄話はおいて本編へ進んでください♪

第五話　それが人生と言うもの

目を覚ました玲治は、馬車の中で寝ていることに気がついた。ガタゴトと揺れる乗り物と流れる風景からしてどうやらそうらしい。その身体に温かい藁がかけられているのに気づく。

くんくん、これが太陽の匂いというものか、悪くないものだなあ、もう少しこの心地よさを味わっていたい。

そう思って横になったまま目を閉じる。

瞼の裏には大草原と牧場が見える。

茜色の屋根と、汚れていながらも手入れされた白い壁。

空は綿飴的フワフワ感が漂う某少女が教えてオジイサンとかいいながら飛び乗りそうな白い雲がまばらに飛んでいる。

囲いの内側には羊らしきモサモサモフモフした生き物がたくさんいる。かわいい。一家に一台どうですかお嬢さん。

そんな情緒的な雰囲気風景の風景を思い浮かべていると本当に動物の声が聞こえてきそうだ。

ほら、ブーブーとかハハ、豚でも乗ってるのか。

そのとき、頬に熱い吐息がかかった。

「ふは、やめろよくすぐたい」

それでも一向に離れようとしなない。むしろ段々と近付いてきた。
何か柔らかいものが押し付けられる。

そう、丁度唇のような……………

玲治はそっと目を開けた。

ピンク色の何か。つぶらな瞳がこちらを覗き込む。

あー……………もうなにも言えない。

玲治は絶句した。

「ぶひぶひ」

目の前のピンク色の生物をどうにか押し退けて、今の俺は何か農業
大好きっ子の霊がとりついたのだと無理矢理納得した。

「あら、起きたの？」

御者台の方へ向かうと、それに気がついたリルウが声を掛けてきた。

「ああ、起きてすぐ嫌な思いさせられたがな……………」

「あら、いい夢見れたんじゃない？」

意味ありげな笑みを浮かべる少女。こいつ確信犯か。

「さてはお主……謀りおったな」

「ふふ、少なくとも寢床にはなったじゃないの。まあ正直場所とるから追いやっただけだけど」

「………快適な馬車の旅ありがとうございます」

玲治が皮肉を込めてそう言うと言わんと少女は笑った。

あの襲撃の後、玲治たちは体力回復のために丸一日留まらねばならなかった。

本来なら二度目を襲撃を避けるため、すぐにでも王都へ行き、宿なりとるべきだったのだが、あの状態では移動はままならなかったのだ。現に今、行き掛かりの旅商人の馬車に同乗させてもらっている。

先に気を取り戻したのはリルウの方であった。

魔法の使いすぎで精神力が切れていたとはいえ、休めば回復するものらしい。対して玲治は満身創痍の状態で身体の限界以上に戦ったわけだ。生きて目が覚めたのが不思議なくらいである。

「そのまま『あっち』で目を覚ませばよかったのに」

というリルウの冗談ともつかない冗談を軽く受け流しつつ、これからどうするかを聞くと、

「あんな変態じみた刺客にまた襲われるのも敵わないからどこか匿

つてもらえる場所が必要よね……………」
と思案顔で顎に手を当てていた。

「うお……密度やべえな……」

トリスタリアに着いてまず目についたのが人の山。それはもう山である。

「そうね。外国とはいえこれは中々の人混みね」

何やらやたらと大きな地図を広げてじっと見つめている。

通り半ばで立ち止まっているため、通行客の非難めいた顔が何べんもこちらを向く。

「なのによたらと通りの狭いのな」

幅員は馬車が二台すれ違うことができる程度。歩行者が通るスペースはそれほどない。

「? これでも一国の首都よ?」

リルウは地図を覗き込むのを止めて、不思議そうな目でこちらを見た。

「いや、俺の国ではこの二倍はある」

東京都心の歩行者天国は幅が二十あるんだったか。測らんから分か

らないが。

そういや一昔前は幅員100メートル近い道路もあったな。ま、あれは大陸からの使者を歓迎するためとか諸々の理由が重なってできたんだろうが。

それにしてもこの“ヨーロッパのような”国はこうも大通りが狭いものか。

「二倍って……！何が彼らをそうさせたの？」

「人間てのはいつだってでっかいものを追いつめる生き物なのさ。ところでその地図、やたらにデカイが一体何が描かれてるんだ？」
玲治の言葉に固まっているリルウに近寄って覗きこんでみる。

羊皮紙でできたその地図の上には、不規則でジグザグな線が大きな弧を描くようにして引かれている。何かミミズののたうったような文字が書かれているが、たぶん海だろう。なんか波みたいな記号があるし。

そしてその途中途中に内側へ線が引いてあり、交差を交わしたまた弧に戻っていく。

所々山や湖が描かれ、今まで俺たちの通った道が赤く記され

「なんじゃこりゃ？世界地図じゃねえか」

見れば見るほど大陸というのだろう、むしろヨーロッパに似た形の輪郭が浮かび上がってくる。

「こんなもんで町中の詳細とか分かるわけないだろうが」

「う、煩いわね……こういうのは雰囲気が大事なのよ！馬鹿にしたら痛い目見るわよ！」

雰囲気て。いやもうかなりイタイ目で見られてますよお嬢様。

「というか素直に道教えてくださいとその辺の衛士にでも頼めよ」
ちなみに彼の有能なるメイドは数分前に、本日の泊まる宿を探しに
人混みへ消えていた。

「違うわよ。城がどこにあるか何て見ればわかるわよ。この大通り
を進めば城に辿り着くのもわかってるんだし」

「じゃあ何探してるんだ？」

「ええと……ほら！北花壇騎士との戦いでレイジの剣が折れたじや
ない。代わりのものを買おうと思って」
と何故か急にもじもじとし始める。

「リルウ……………」

なんて優しいやつなんだ！意外にもいいところあるじゃないか。
今まで馬鹿にしていた俺が恥ずかしい。

玲治は口を開き、敬愛すべきリルウに

「だから人に聞けって。地平線目指すんじゃないんだから」

「うう……………」

可愛いからって容赦などしないのだ。

トリスタニア深部、つまり王宮へ近づくとその荘厳な造りをした宮殿が玲治を圧倒した。

何と言うか………日本のそれと違う派手さ、雅さとも言えないのか。そんなものがひしひしと伝わってくるのだ。

宮門に近づく玲治たちの姿に気づいた衛兵たちが見留める。

「む、汝らの名と用件を名乗られよ」

「私はガリア王国より参ったものです。亡命申請を行いたい。取次ぎ願えますか？」

「ガリアからの………！？しばしお待ちください」

なにやら慌てたような衛兵は相方を残して宮殿の中へ掛けて行つた。

「なんだ？もしかして俺たち指名手配？」

「そう、ね……。違うといいんだけど………」

まもなく兵士が戻ってくる。その後ろには小太りの男が額に汗を滲ませて掛けてきた。

「お待たせして申し訳ない。わたくしはトリステイン外務卿のギョーム・デュボワと申します。ささ、中へお入りください」

男に進められるままに入っていくと、応接間に来た。壁際に書類用の棚、戸棚が並び、中央には机とソファが配置されている。

リルウは来客用のソファに腰かけ、対面にギヨームが座る。玲治は一応護衛の名目もあり、立ったまま壁際へ寄った。

「この度は遠いところからご足労でございました」
男は低姿勢で語りかけた。

「貴殿はトリステインへ亡命を希望のようで、宜しければその故お聞かせいただきたいのですが」

「ガリアでは王党派とオルレアン派の対立が激しいのはご存じでしょう？ 私の家は現王ジョゼフ政権の政敵と見なされ、数週間前、粛清と称して襲撃に遭いました。」

ギヨームは目を見開く。

「それはそれは……さぞかし大変でありましたことでしょう」

「私たちは勇敢に戦いましたが王軍側の艦隊によって壊滅、一隻の船によって命からがら脱出しました。そして……私は父上を失いました」

その声に若干悲しみが混じる。

「生き残ったものは私達を含め32人。今も追われる身。一昨晚も

こちらへ向かう道中、花壇騎士と名乗る男に襲われました。もうガリアに留まる術などないのです。」

ギヨームは目に涙をためて、リルウの話を聞いていた。

感情移入しやすいのか、意外に簡単に許可を下ろしてくれるのかもしれない。

そして話が終わるとギヨームは、

「お父上の非業、お悔やみいたします」
といって頭を下げた。

「ではこれから亡命申請の手続きに入りたいのですが、手続きには条件があります。一つはその身が国際手配となっていないこと。身柄の引き渡しは強制ではありませんが、外交に際して指名手配されている者を匿うことは、極めて関係悪化の一因となり得えます。恐らく『犯罪者』を保護することはないでしょう。」

「二つ目は政府側の支援が行えないということです。ある程度の範囲、居住区については、制限を強要することになります但提供は可能です。ただし、経済面、衣・食に関しては政府側は責任を持つことができません。」

「なっ！それはあんまりじゃないのか!？」

突然突き付けられた現実思わず口を出してしまう。

「……残念ながら破ることは罷りなりませぬ。」

ギヨームは心底悲しそうに返した。

何十年と現実を見てきた彼のその姿は本心からのものであって、決して虚偽などではないのだろう。

それを見ているうちに玲治はつい目前の利害に目が眩んでいたことに気づき、恥じた。

要するに、『俺たちに不利でない限りは匿ってやる。隠れ蓑も貸してやる。』

ただし、後は野垂れ死のうが関係ない。他の事は自分でやれよ。』ということだ。

それは非道い物言いかもしれない。

だが考えてみれば難民というのは社会的にもかなり地位が低い。例え元居た場所で王族をしよう。権力の頂点にたつていようと。一度外へ出れば“そういったもの”は何の価値もなくなる。

『地球』に居た頃もそういう報道を幾度か目にしたことがあるが、まさか自分が『難民』となるとは思わなかった。

「……………どうする？」

己の主人である、歳も変わらぬ少女に答えを促してしまふ。

「わたしは」

ポツリと呟くように言う。

「例え自分が蔑まされようと気にしない。私が父上と母上の元に生まれたこと、それが私の誇りだもの。」

『名誉に殉ずるならまず誇りを尊べ』……父上に教わった言葉よ。」

他人の評価である『名誉』。その何倍もの価値があるのが自分だけが決められる『誇り』であるということ。

「ふむ、それでは審査のためにお名前を拝借させてください」
少女の意志を読み取ったギョームが促す。

「私の名前はリルウ……リルウ・ヴェルシャル・ド・ノアイユ
よ」

一区切り、一区切り。噛み締めるかのようにゆっくり、ゆっくりと
言葉を紡ぐ。

「では、国際手配に記載されておりませぬか調べますので、今しばらくお待ちを」
そう言うときギョームは応接間から出ていった。

暫し流れる沈黙。
その中で玲治は思っていた。

（俺は………目の前の少女よりも弱いんだ）

リルウには目の前の危機にも狼狽えることなく自分の意志を貫く強さがある。

でも俺にはない。

今の今までただただ受け身で……異世界に来てから理不尽なことはかりだと投げ出していた……。

（誰かを護るって言ったくせに俺は自分すら上手く扱えていないんだ）

それは少年の頃、誰もがぶち当たったであろう大きな障壁だ。
口でどんなに大きな事を言えようと、行動と意志が伴わなければそ

れは無意味だ。

「もっと俺は強くなる」

この場に至りながらも、一昨夜の戦い、城での戦い、一コマ一コマ思いつきながら新たな決意を胸の内に秘めた。

ソファでじっと待っている少女を見る。

彼女は立派な意志を持って、己の行動に意味を見出だしている。だがその手は震えていた。

やはり“もし指名手配だったら”が怖いのだろう。

今俺が為すべき事、それは――

ポンとリルウの肩に手を置く。

不思議そうな顔をしてゆっくりと少女がこちらを向く。

「手が震えてるぞ？」

「……まあ少しは緊張もするわよ」

「大丈夫だ」

「え？」

「俺がついてる。だから安心しろ」

「……………」

一瞬キョトンとした顔をする。

そして、笑顔になり

「私より弱いのによく言えたものだわ」

「うぐっ」

「貴方がいると逆に目障りかも」

「ぐはっ」

なぜか矢鱈に厳しい言葉をかけてくる。

「この前は確かに最後上手く決めたけど、自分の身もまともに守れないなんて余りに低レベルだわ」

「……お、仰る通りでございます」

「まああれね、傷だらけでも死ななかったから罔としてなら十分に役立つわね。これからあなたは私の２マイル前を歩いて危険から私を守りなさい」

これから傷だらけが日常なのは御免だ。
それに地雷なんて埋まってないからな!?

「い、一生懸命罔やらさせていただきます!」

「毒味も宜しくね☆」

「イエス、マイマスター！」
直立して最敬礼で返事する。

「アハハハハ………」

「フフフフ」

そのあと可笑しくなってきた二人して笑った。

いや俺の笑いは何か諦めたような笑いだったが。

「ありがとう……レイジ」

「どうしたんだ急に」

リルウが急にしおらしくなる。

「あなたが居なかったらきっと、こんなところに居られずに何日も前に死んでたかもしれない」

「……………」

その表情からふざけて言っているわけではないと分かる。

死。重い話だ。だがそれは今の俺たちからすれば目をそらしてはいけないものとなっている。玲治はそのまま黙って聞いていた。

「城で死んでいった父上、いつも厳しくて優しくかったみんな、一緒に遊んだり笑ったりした町のみんな……………」

その目に何か光るものを感じて思わず目を逸らしそうになる。

「大事なものはみんな消えていってしまったけど、私達は生き延びることができた。それは少なくともあなたが居た事も大きいと思うの」

今まで無理をしていたであろう感情の奔流が一気に流れだす。

「だから私は、今はあなたを召喚して良かったって思ってる。後悔なんかしないわ」

そしてリルウは涙を拭いてそっと微笑んだ。

「…………俺もお前のその期待に応えられるぐらい強くなってやる」

これ以上は目の前の少女を泣かせたくない
とにかくはリルウを笑わせることができた、少しでも不安から遠ざけることができた。

今はこれだけで十分だと思っている。

ガチャ

と丁度そのときギョームが戻ってきた。

手に分厚い紙束を抱え、こちらを見て微笑む。

これは……………もしかして……………もしかすると……………

「只今調べ終わりました。調査の結果……」

玲治は思わず唾を飲み込む。

今だけは目の前の小太りの男が天使のように見える。

「結果は………」

「一週間ほど前、リルウ嬢の名で国際手配がなされておりました。残念ながら亡命は許可できません。誠に申し訳ない」

そう言うときヨームは同情と共に頭を垂れた。

「あーもうド畜生が」

普段吐かない悪態をいつにも増して強く吐く。

「……………なんか今だけはもうベッドに飛び込みたい気分かも……………」
リルウもやはり気を落としている。

結局、亡命の許可は下りなかった。ギョームは何度も何度も頭を下げていた。そんな姿を見ると怒るに怒れなかった。

ギョームの話によると、国際手配がされているとはいえ、相手国側からの要求がないかぎり無理に拘束はしないらしい。但し2週間以内に出国せよとの命令付きだが。

他の国に行こうと同じ結果が待つのみだろう。そう考えると頭が重くなる。

「なあ、これから一体どうするよ？」

「そんなの今は考えたくないー休むー」
自暴自棄気味のリルウがそのまま町を進んでいく。

玲治もそのあとを追いかけてようとする。

その時、

「あの、もしもし？」

後ろから声がかかる。

振り返るとそこには全身をフードで覆った人間が立っていた。

第五話　それが人生と言うもの（後書き）

過去最長！！

ワオ、驚いたなあ

初めの頃とは全く違う気がする。

まあ一番難しいのは物語の始まりと言いますしね。

そんな振り出しを駄文にした私はもう燃え尽きます。

二分で元に戻ります。

さて、今回、如何だったでしょうか？

人生一筋縄じゃあ活きません。

螺旋がごとき、また大木のごとき幾重もの枝分かれを経験して立派な（ry

まだわたくしめのような青二才が人生を語るには早い。

では次回お楽しみに！

していただけたら有り難いです。

（加筆修正しました）

第六話 それも政治というもの（前書き）

駄目だった

自分で

首を閉めていた

それに気づけば

まだ安泰かな

ドヤ？

自分で苦しい設定をしていたのかもしれないね。

でも何とかうまく仕上げて見せましたよー。みんなーこれから私は寝るー（え

では本編にどうぞであります

第六話 それも政治というもの

目の前に現れたフードで顔まですっぽりと覆った人間。

「お前は一体——ッ!？」

とその時、前に夜襲をかけてきた男が脳裏をよぎる。

（まさかまたあの花壇騎士かつ!？）

最悪の事態だ。まさか後ろを取られていただなんて！

玲治は迂闊さを呪う。さっと臨戦態勢をとる。

武器は持ってない。しかも街中だ。でもやはりやるしかないのだから。

体の前にコブシを掲げ、威嚇するように睨み付ける。

だが——

「ひっ」

フードを被った人間——

声からして女性だろうか——

はおびえたように後退る。あとずさむ

「?？」

それを見て玲治は一瞬戸惑う。

もしかしてただの一般人だったのかもしれない。

気を取り直して訊ねてみる。

「えーっと、……どちら様です?」

コブシを下ろして、戦意のないことをアピールすると、警戒しながらもおずおずと近寄ってきた。

「あの……ガリアから来られたと聞きました」

フードを被った女性は怯えながらも決然とした声で話し始める。

「宜しければお力添えになりたいのです。少し耳を貸していただけませんか？」

なんと、どうやら緊急事態（人生的に）の玲治たちを助けたいと言うらしい。

（なるほど……なら顔を隠すのも頷ける）

行うことが非合法的なのだから見せられないものなのだろう。

「んー、しかし非公式だと後々にリルウたちも困るからなあ………
…ってリルウ？」

振り返るとそこにいるはずのご主人様がない。

「そーいやあいつ、自暴自棄になってどっかいつちまいやがったな
……………」

『うなーダルいーもう疲れた寝るー』とかのたまったあと、一人で
気づかずに行ってしまったらしい。

一人で道知らぬ町で迷子になったりしないのか。というか俺を置いて
いくな。右も左もわからないってのに………人生が迷子になるだ
ろ。

「というわけで非公式はダメだ。残念だが断らせてもらう」

「非公式………？いいえ、あなたがたを正式に入国者として認めるのです」

玲治はまじまじとその女性を見た。

女性はフードの内側で恥ずかしそうにモゾモゾと動く。

正式に？もしかしたらこの女性は法を動かす力があるほどの権力者なのか？しかし今しがた王宮で断られたばかりだというのに、どうやって？

そんな思考が玲治の頭を渦巻く。

「詳しくは中でお話ししましょう」

黙りだんまりで顎に手を当てて考え始めた玲治を見かねて女性が王宮に促す。

「王きゅ………え？」

女性の指す方向は先程まで外務卿と面接を行った宮殿。

もう一度女性を見る。

フードの下に隠された表情は恐らく

微笑んでいる気がした。

「ふう……………」

トリスタニア宮殿の中でも一際豪華な調度品が並べられた王族の一室。

周りを侍女で囲まれた栗色の髪少女が一息をつく。

トリステインが王女こと、アンリエッタ姫である。

たったいま、式典に出席するためのドレスを仮縫いし終えたところだ。

休憩に椅子に座しているとところへ一人の侍女が紅茶を運んできて、少女の前にカップを置く。

アンリエッタはそれを手に取り、一口啜る。紅茶の香りが少女の疲れを癒す。

もう一度一息つく。

（さて……………とりあえずまだ時間はあるけど何をしたものかしら）

もう2、3ヶ月経てばゲルマニアの宮廷に召されるのだから少しでも思い出を残したいものだと思う。

（とりあえず久しぶりに王宮内を探検してみようかしら）

その時、子供の頃一緒に遊んだり泣き笑った女の子のことを思い、切なくなった。

部屋を出て廊下を歩く。

中庭ではおママゴトをしたこともありましたわね。ああ、あの柱にある傷……私があの子と喧嘩してつけた傷ですわね。手近なものを投げ合っているときにつけたのですわ。よくいざこざを起こしましたっけ。

あの時は本当にお転婆だった、と思い出して顔を赤らめる。

（でも今思うと無邪気でいられたあの頃の方が素敵だったのかも……）

幼き頃に思いを馳せるとやはり楽しかったことばかり思い出す。

今を考えると……正直憂鬱だわ。

「ルイズ………」

幼少の砌、遊び相手に与えられたその少女を思う。

（そう言えばあの子、魔法学院にいたのでしたっけ？）

何て考えながら歩いていると、王宮の入り口まで来てしまったらしい。

兵士が中へ走ってくるのが見える。そのまま一つの部屋へ消えていった。

ここは外来の人間も多く行き交うので、むやみに近づくことは禁止されていた。

「……………部屋に戻りましょうか」
そう言って踵を返そうとしたとき、

ボタン！

扉が開け放たれる音が聞こえ、先程の兵士が中から出てくる。
後ろからは小太りの――外務卿が額に汗をたぎらせて走り
出てくる。

「……………」

そのまま見ていると宮殿の外へと行ってしまった。

「こ、これは……………」
声が震える。

「久しぶりに面白そうな予感！」
少女の目が沸き上がる好奇心と共に輝きに満ち溢れた。

外務卿らが戻ってくる前にさささと応接間に忍び込む。
そして奥に置かれた戸棚に入り、素早く戸を閉めた。
戸棚の戸の上部は茶褐色のガラスで覆われているため、少しだけ部
屋の中が覗ける。

（こういうことをするのも久しぶりですわね）

期待と見つからないかと言う緊迫感で胸は高鳴っている。
まるで子供の頃よくして遊んだかくれんぼの真っ最中のようだ。

暫くして外務卿が二人の客を連れて戻ってくる。

（あら、子供？）

恐らく自分と同じくらいの歳の少年と少女。

少女がソファに座り、少年が立ったままにいることから少女の方が
高位の主従なのだろう。少年は身の回りの世話をする下男といった
ところか。

正直客人が歳もさほど変わらぬ少年たちでよかった。
歳も過ぎた中年の錆びた頭など好奇心を犠牲にしてまで見たくはない。

「この度は遠いところからご足労でございました」
扉越しに外務卿のギョーム殿のくぐもった声が聞こえる。

（脱線してしまいましたね。少しお話聞かせてもらいましょう）
と扉に耳を寄せて盗み聞きを始めるのだった。

.....

.....
.....
.....
.....
.....
.....

少女の身の上話からすると、どうやらガリアからの亡命者らしい。
30数人いるらしいがどうやら彼女らだけで王宮に赴いたようだ。

少女が父親を亡くした件に差し掛かると、思わずアンリエッタも涙
を溢した。

自分も数年ばかり前に前王である父君を亡くしたばかりで少女の悲
しみが共感できたのだ。

また暫くしてギヨームが出ていく。

「.....手が震えてるぞ?」

少年が少女の肩を抱く。

「.....緊張もするわよ」

「大丈夫だ、俺がついてる。だから安心しろ」

「.....、なっ!」

目の前の——いや、耳前にあるだろう光景にアンリエッタは耳

を疑う。

僕しもべであろうはずの少年からの、主従の関係とは思えない優しい言葉。

（まさかあの二人、でっ、ででででデキてるの！？）

あまりの展開にアンリエッタの頭が変な方向へ曲がって行く。

（も、もしかして主従の関係を越えてき、き禁断の愛！あんなコトやコンナコト！？まっ、まさかそんなことまでっ？）

王宮に缶詰めで、“そういったこと”が徹底的に排除された思考の中をフル稼働させて妄想を働く。

（はわわわわ……………）

自分自身の妄想に頭が煮えそうなぐらい熱くなる。

（いっけいけませんわ！私とて王女！そのようなことを考えていては花が散ります！鬼きに拐さらわれてしまいますう！）

だんだんと混乱してきて自分でも何を言っているのか分からなくなってくる。

（天で見守られている父上がお許しになりませんわ！母上がお許しになりませんわ！ウェールズ様が……………！）

（ウェールズ様……………）

アルビオンの皇太子の事を思うと、アンリエッタはなんだか冷静さを取り戻してきた。

（そうです……私は愛しい人ともいずれ離ればなれになるのですわ）
そう思うと、この部屋にいる二人の事が羨ましく思えてくる。

私に自由はないのにどうして貴方たちは!!

羨ましが妬みとなり、妬みが怒りとなってアンリエッタの頭に渦巻き始める。

ガチャ

遠くの方で扉が開く音が聞こえてきた。ギョーム殿が戻ってきたらしい。

「只今調べ終わりました。調査の結果……………」

（貴方たちも私と同じ運命よっ!! きっと名簿に載ってるわ!）
自身の身勝手といってもいい怒りを二人にぶつける。

お前たちも結局は囚われの身なのだ。

果たして

「……………国際手配がなされておりました。残念ながら亡命は許可はできません」

意図してか、はたまた偶然か。

アンリエッタの想いが伝わったのか、少年少女にとって悪い結果がギョームの口によって伝えられた。

（ふふふ……………いい気味だわ!）

我ながら醜い笑みを浮かべているのだろう。負の感情がアンリエッタの心を満たした。

やがて部屋の扉が開閉する音が聞こえ、外務卿と二人が外へ出たのを確認すると、戸棚から這い出た。

今までの籠った空気から解放され、新鮮な空気に触れる。
アンリエッタはそれを、負の満足感に満たされながら深く吸い込んだ。

「……………わたくしって……………」

「な、な……………」

（なんて罪深い事をしたのでしょうか！）

籠りきった頭が外の空気に満たされた瞬間。冷やされた頭が過ちを犯していたことを叫び始めたのだ。

（そうですね……………同じ境遇ならばそれを共感し、慰め合うべきでしたのに……………。なんて酷いことを考えていたのでしょうか）

今度は先程とは真逆、同情が芽生え始める。

なんとかしてあの二人だけは救ってあげたいと思った。

「でもどうしたら一体……………」！

きゅぴーん！

そんな擬音と共に頭の上にエクスクラメーションマークが乗った。

「いいことを思い付きましたわ！」

そう言って懷から取り出したのは麻色の体全体を覆うようなフード。緊急事態に備えて日頃から携帯するよう言われている品だ。

それを頭から被る。

（わたくしが、なんとかしてみせますわ）

そしてアンリエッタは扉に手をかけた。

「またここに入るのか……………」

先程嫌な思いをした部屋の前で玲治は立ち止まる。

「さあ、早くお入りになってくださいな」

「ああ……まあそうするけどよ」
扉に手をかける。

「む？あなたは先程の……？そして後ろの方は一体？」
玲治たちが応接間に入ってくるのを見留めたギョームが首をかしげる。

女性は部屋に入って戸を閉めると、被っていたフードを脱いだ。

「アンリエッタ姫殿下！？」

ギョームが驚きの声をあげる。
急に叫んだ小太り卿の真意をはかりかねて玲治はその場に立ち止まる。

「ん？姫？」

「ええ、わたくしはトリステイン王国の王女、アンリエッタと申します」

振り返って問いかけるような目で見れば、その少女が宣のたまった。

「へえ………姫様ねえ」

「……………」

「……………」

「……んなバカなことが起こるかっ？！はあ？何？ここにいる何で

もなさそうな女の子がお国のお姫様あ？」

「あ、あなたは後から驚きが来るかたなのですね……」

「俺はもう自分が信じられねえよ。騙されてる気分だ。いや、お前が姫様ってことは理解できたけどよ」

「こらっ！ 姫様に無礼なもの言いは許しませんぞ！」

「いいのです。ギョーム殿。今回は私から頼んでこちらにいらしてもらったのですから」

「はい？ それは一体何故でございますか？」

アンリエッタは一息置いた。

「ギョーム殿、あなたにこの方々に亡命許可をお願いします」

「へ？」 「なんですと!？」

ギョームは勿論、玲治も驚いた。

ここに来るまでに、公式に認めると言われていたとはいえ、まさかそっくりそのまま認めさせようとするとは思わなかったのだ。

「姫様!？ それをなぜご存知なのかは分かりませぬが、いくら姫様であろうとこればかりは従えませぬぞ。国際手配、しかもあの大国のガリアからの指名手配がなされた彼らを迎え入れるなど、国を滅ぼすことになりますぞ！」

外務卿が諭すようにして目前の少女に語る。

「分かっております。ですからわたくしも少し考えてみたのです」
ここで少女――アンリエッタだったか――は
考えを述べ始めた。

「ええと……？」玲治だ。朝月玲治――はい、レイジ殿
は貴方の主君の名に於いて指名手配となっているのでしょうか？」
その問いかけに玲治は頷く。

「でしたら偽名を使えばよいのです」

「偽名？」

「はい、容姿は取り替えることはできませんが、名前さえ変えれば
取りあえず法の目は誤魔化せます。そうでしょう？ギョーム殿？」

「……姫様には一本とられましたわい」
ギョームは頭を掻いて苦笑する。

（法の目って……一国の姫がこれでいいのか？）
王女という目の前の少女のお転婆っぷりに玲治は混乱する。

話はまだ続く。

「発覚の先送りと言われればそうかもしれないね。でも常に気を
張ることよりも遥かに良いと思うのです」

リルウの名で指名手配されているのだから違う名前を使う、それな
らば確かに捕まることもないし、咎められることもない。

その名前が本物と証明できれば、だが。

その点も把握しているのか、

「証明書を発行しますわ。国が認めるのですから偽名は偽物ではなくなります」

「……………どうしてさ」

「はい？」

「どうしてそこまで俺たちに親身になるんだ？王女ともなれば高々一人二人の命関係ないだろ？」

玲治はありのまま思ったことをぶつける。

確かにここまでしてもらえるのは嬉しい。むしろ喜んで受け入れたい。

でも何と言うか、やはりというか。接点も何もない他人からの厚遇には理由を問いたくなってしまうのだ。

「どうして、ですか」

栗色の少女は顎に手を当てて考え込む。

……………余談だが男がやってもどうも思わないが女の子がする途端に可愛らしい仕草に変わる気がする。

「やはり、同じ境遇の持ち主なら、例え一人二人であろうと救いた
いと思うものなのだと思います」

そう言って少女は微笑んだ。

「……………分かりました」

二人の目が今まで黙っていたギョームにいく。

「姫様のお心意義、しかとお見受けしましたぞ。私、ギョームは微力ながら彼らを支援いたしましたしょう」

とんだか『姫様にはもう負けました』とでも言いたげな、諦めた顔をした。

「本当ですか！感謝しますわ、ギョーム殿」

王女は目を輝かせて喜んでいる。

このようなことはもうこれ限りにしてほしいものですな、とギョームが言ったような気がした。

「ではわたしが名簿を調べあげて“偽名”の発行と証明書をお作りいたします。近いうちにお渡ししましょう」

（結局話は偽名で入国するという話で終わってしまった……）
まあ取りあえず身の安全は確保できるわけだし、一件落着とでも言っているのだから。

嘘をつかうことには抵抗もあるが、あれほどまでしてくれているのだ、悪いようにはなるまい。

「さて問題はリルウがどう思うかな……」
家訓とか誇りとか大事にするアイツの事だ、きっと偽名を使うのは嫌がるに違いない。

「まあそれは置いて………」

辺りを見回す。

「おっ俺は………」

「どこに行きゃいいんだー！ー！ー！」

彼はもう、迷子だった。

第六話　それも政治というもの（後書き）

長い戦いだった……………

如何でしたかね？

政治なんて裏で何してるかわかるもんじゃないです。

姫様にはこれから黒歴史を歩んでもらいますよ…………フッフ……………

さてと我らが主人公、玲治は迷子でした。おしまい。

次回はクリスマススイブ投稿になるんですよ。

なにかこう…………ズバーツときて、ドーンと来るクリスマスの話がしてみたいです（笑

では皆さんごきげんよう！

追伸、ところで最近巷で噂される「青少年なんたら条例」は二次小説も適応されるのでしょうか……………。

過度な規制はしないで適正な条例の制定を私は希望しますっ！><

第七話 トリスタニア非道事件（前書き）

途中ハプニングがありましたが無事かきおえました……………。

今回はシリアスなギャグパートです。

何言ってるかだって？

自分でも何いってるのかわかりません（笑

少しでも笑ってもらえる要素が入っていれば幸いです。

第七話 トリスタニア非道事件

夕暮れ時。

鳥は寝床に帰り、血求める夜の獣がゆつくりと起き出す時間。
からす けだもの

人々はその餌食となることを襲われることを恐れ、日の入りと共に
早々と戸締りを始める。

「ハアハア……ッ……ハアハア……」

そんな夜へと移り変わりゆく町並みを追い越し、ただひたすら走る
少年がいた。

入り組んだ道をまっすぐに走るその少年はまるで誰かに、いや誰か
を追っているかのよう。

十字路へ着くとその場に突然立ち止まる。

この世界のものではない靴が、キュツと音を立てる。

左を見る。

道は人もまばらで、露天もすでに残り少ない。

オレンジ色の陽光に照らされ、レンガ造りの壁がまぶしく反射して
いる。

右を見る。

沈みゆく太陽が見えるが、それを左手で遮り目を凝らす。

少年の目は、陽の光に照らされる絹のように滑らかな”何か”を捉

える。

「……見つけた」

にやりと獰猛な笑みを浮かべる。

足早に通り過ぎようとしていた買い物後のおばさんが「ひいっ！
！」といって仰け反って転ぶ。

袋に入れていた夕食の準備であろう食べ物が出端に転がってゆく。

だがそんなものは少年の興味をひきつけない。

そちらを見向きもせず、先ほどの”何か”を見つめたまま、じっと待つ。

それは吹く街風になびかれながら少しずつ道を進んでいき

立ち並ぶ家々の中、開きっぱなしであった扉の奥にすーっと入っていった。

「もうにがさねえぞ！！！」

少年は歓喜のあまり声高に叫ぶ。

近くを巡回していた兵士らが何事か！と振り向く。

「貴様！いったい何を考えているのだ！」

そういつて少年の肩に手を掛けようとしたとき、

「!？」

少年はその手を人間業とは思えない反応速度ですり抜けた。そして囲みつつある兵士らの穴を突き、一気に走り抜ける。

「おいっ！待てっ！！」

後ろから声。

「待つわけにはいかねえんだよ！！」

そして、そんな言葉に返す言葉。

「待てと言われて待つ馬鹿はいねえ！！」

加速力を手にした少年は、押し合いへし合いして互いを妨げる兵士の群れから一気に遠ざかっていく。

向かう先は先ほど見つけたばかりの獲物。

「今度こそっ！」

夕日に照らされるとキラキラ輝くように反射し

「あいつをっ！！！」

”何か”が入っていった建物の前に止まる。
扉に手を掛ける。

たなびく姿はまさに”銀色の風”で

「見つけたっっ！！」

扉を一気に開く。

”何か”を後ろに伸ばしたその可憐な少女は

「お帰りなさいっ!!」

「ただがっはっっ!!!!」

跳び蹴りで出迎えてくれた。

…

……

……

………。

ここはトリステインが首都、トリスタニアの中心街のとある宿屋。
その一室で一人の少年と一人の少女が己の正を求め、激しく争っていた。

「お前……何ゆえに跳び蹴りだ……イテテ………」

隣で看病してくれる宿の娘に感謝の辞を述べながら、目前で仁王立ちしている少女を非難がましい目で見つめる。

「実は跳び蹴りって、やる側とやられる側の息があった素晴らしいパフォーマンスだとは思わない？」

「ああ、やられる側は相当痛い目に遭うがな。でなんでだ？」
リルウの皮肉ったかのような話をスルーしてもう一度問いかける。

「アナタが迷子になった挙句、こんな遅くまで私を走らせたからよ」
こちらを睨みながら腕を組んで見下ろす少女はまさに鬼の形相。
……今のうちに神に祈れと本能がささやいている気がする。

ちなみに先程まで追いかけてきていた兵士たちはリルウの執り成し
によってなんとか帰ってもらった。

「んなまずは理由を聞こうぜ理由。跳び蹴りかます前にさ」

「じゃあ理由を教えてちょうだいな」

「その前にやっぱり置いていきやがったお前のほうが悪い」

「あーっ！なにそれ？！なに？私が悪いの？アナタの方がしっ
かりと付いて来るべきじゃないのよ。人間に生まれたのに母親がど
こかに行った子犬みたいな言い訳しないでちょうだい」
玲治の言い様にリルウが苛々とした口調で言い始める。
その剣幕に宿の娘が慌てて部屋を出ていってしまった。

「お前に犬の気持ちがわかるのかよ！？いや、そんなことはどうで
もいい。とにかく俺は右も左も分らないんだぞ？後ろについてき
てるか確認ぐらいして歩けよ」

「人ごみの中歩いているのに後ろばかり気にしてたらぶつかるじ
やないの」

「まあそうなんだがな……」
正論を言われて反論できない。

「それで抜けてから振り向いたのに、いつまで経っても来ないのよ？」

なんだかリルウが泣きそうな雰囲気を纏い始めた。

「慌てて戻ったのに全然見つからなくて、他の所に行ったんじゃないかってあちこち探し回って……それでもいないからもしかして攫さらわれたんじゃないかって心配したのに！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！お前、今まで探してくれてたのか……？」

衝撃を受けた気分だ。

二人で王宮を出てから二時間は経つぞ？それなのに今まで探していただなんて。

「当たり前じゃないの……せっかく玲治が来たのに……。居なくなれたら困るじゃない……」

そう言って手で顔を覆う。

「リルウ………」

玲治は深く感動した。

まさかそこまで俺の事を気にかけてくれていたとは！

「わ、悪かった。取りあえず前提抜きで俺が悪かった。だから泣くな！リルウ！」

「……わけで………」

「え？」

「と言うわけで心配させてくれやがりました私の使い魔、レイジには嚴重な罰を与えます。」

「……………は？何故に？」

見ればいつの間にかレイピアが抜き身で向けられているし、さっきまでの感動が嘘だったかのように殺氣立ってますし。

「色々と秤にかけた結果、私の心労の大きさが勝ちました。なんたって二時間走らされたんだもの、しょうがないわよ……………ねえ？」
そう言っただけでと微笑みながら近づいてくる。

「え、笑顔がひきつってますよ？ご主人様？」

「忠誠なる使い魔に感動しているからよ」

「い、痛みのあるご褒美は嫌い、かな……………とか」

「安心して。ちょこーっとだけ、苦しい思いはするだけだから。まあ直ぐに眠るから平気ね。永遠に」

一気に回りの空気が冷えてくるのがわかる。
比喩でも何でもなく、こいつはやばい！

「すまん、リルウ！実を言うとな」

「言い訳は後で聞きますわあ」

不吉な笑みを深めたかと思うと、杖から2メートルはある大きな氷の欠片が現れる。

やがてそれは高速回転を始め、脆い部分がバラバラと落ちながら形作られて行く。

やがて象でも貫けるんじゃないかという太い矢が……………

「お、おちつけ！話せば解る！」

「もんどー無用♪」

矢というよりむしろ槍に近い氷の塊は、回転しながらゆっくりと玲治へ迫ってくる。さながらドリルのようだ。

「おわっ!？」

動こうとしても殺気の跳び蹴りが効いてきたのか、あるいは殺気にやられたのか硬直して全く動けない。

もがくうちに槍は玲治との距離を無くしてゆき

「亡命の許可取ってきたんだよ！」

ピタリ。

その擬音が目の前の光景にふさわしい。矢は玲治に届く寸分先で浮いたまま止まっていた。

「どういうこと？」

「なんだかよく分からないが、この国の王女とやらが自ら外務卿に頼んだんだ」

「……………対価は？」

「たい、は？対価？」

「入国の条件は？王女は代わりに何を求めていたの？」

先程までの怒りを顔にしていた顔と違い、すでに真剣な表情でこちらを見つめている。

……氷の矢が浮いたままなのはご愛嬌なのだろうか。

「確か……自分も同じ境遇だからって救いたいとか言ってたな。条件は特には――ああ、あった」

「何かしら？」

「偽名で過ごさせてさ」

リルウが固まる。

すーっと、目の前の氷が溶けていく。

ポタポタと垂れる解け水が玲治の服にかかるがそんなものはどうだっていい。

「冷てえっ」

……どうだっていい。

玲治はリルウが怒り出すのではないかと身をすくませた。

ゆっくりとリルウが口を開く。

「それだけ？」

「それだけって……怒らねえのか？家名がどうこうとか」

「勿論侮辱された気はするわよ。負い目なんてないのに隠せだなんて。でもまあ捕まって血を絶やすくらいなら我慢できないことも……ないわ」

最後少しだけ言葉に詰まっていたがそれが答えなのだろう。

もう怒りも冷めたらしく、そう言って椅子に近寄り、ちゃんと座り込んだ。

そしてゆっくりと目を閉じる。

「そうか。早いうちに証明書も発行するとかどうとも言ってたから伝えておくぞ」

「わかったわ。明日はあなたの新しい剣を買ってあげるわ。今日は色々あって疲れちゃった。」

そういうが早いのか、既にすやすやと寝息が聞こえ始めていた。

「俺の知らないところでも色々と苦労してるんだろうな」
夕飯が出来るまでそっとしておいてやろう、そう思った。

「……俺の命って、そんな軽くはないよな？」

意外と先程の言葉に傷ついていた玲治であった。

次の日。

「それ、買い物よ！」

「へいへい」

朝もやがかった街中を二人の少年と少女が歩いていた。

「あなたは荷物持ちよ！」

「へいへい」

「昨日みたいに迷子になったら槍千本よ！」

「少しは情けをくれよ……」

そんなわけで今日は予定していた武器屋に赴いた。

カラカラとドア鈴が音を立てて来客の合図をする。

それに気づいた店主が奥から出てきた。

「なんだ子供か。冷やかしなら他を当たってくれ」
あからさまに嫌そうな顔をする。

「いいえ、私たちは客よ。そのような態度で接するのならば、王宮にその旨伝えておきましょう。」

「もしかして、お嬢ちゃん。貴族の方ですかい？」

「ふふ、どうかしらね？この店で一番上質な剣をお出しただけるかしら？」

「へっ、へい！少々お待ちを！」

店主は慌てて奥へ掛けていった。

「……全く、私が貴族でないかも見抜けないだなんて、商売してる人間とは思えないわ」

リルウはなんだか不貞腐れた顔になる。

「まあ格好じゃ見抜けないのは誰しもじゃないか？」

「私の髪は銀髪よ？街中でそんな人見かけた？」

「なるほどな」

因みにリルウの服装は、庶民服である。

「へい、持ってきたやしたぜ」

と、店主が戻ってきたようだ。腕には長い箱が載せられている。

「二週間ほど前まではシェパー卿の鍛えた剣があったんですが売られちゃいまして。よっと」

ゆっくりとそれをカウンターに下ろす。そしてゆっくりと箱を開いた。

出てきたのは目映いばかりの光を放つ銀色の刀身。鏢には流石貴族

御用達！と拍手を浴びそうな大粒の宝石が埋め込まれている。

「へえ！凄いいじゃないの！」

「そうでしょう。これはゲルマニアの一代職人、クラウゼウィッツ卿が鍛えたという代物でさあ。お嬢さんは運がいいですね。こんなにいい品が入るのは滅多にないことでは？」
と言ってニコニコしながら手を揉みしだいている。

「確かにこれはかっこいいな」玲治は見ていてそう思った。

銀色の剣身が華やかさと無骨さを両立させたシャープな感じを引き立てている。

「凄いわね……ちょっと手にとってもいいかしら？」
そう言うリルウの目は爛々と輝いている。

手を伸ばして柄を握ろうとした、が、

「い、いけやせんぜ！こいつこの店で最も高価な品でさあ。無闇に触らせないようにしてるんです」
慌てて、主人が剣を抱えあげた。

「へえ……おいくらですか？」

「エキュール金貨で2000、新金貨で3000でさあ」

「小切手で良いわね？」

「お、おい。そんなあっさり決めていいのか？」
リルウの急な判断を慌てて引き留める。が、

「？」

一瞬こちらを見た表情が、

『面白いことになってきたわ』と知っているかのように見えた。

さらさらとサインを書き込んでゆく。

「ありがとうございます」

店主がそう言って小切手を受け取ろうとするのをひょいと遠ざける。

「せっかく買うんだもの、実際に手に持って確かめてみたいわ」

「し、しかし無闇に人に触らせるのは……」

「あら、直ぐに私が買い取るのだから少し位いいじゃないの。でなきゃ取引はキャンセルね」

手に持っている小切手に両手をかけ、破くような仕草をする。

「わっ、分かりやした！ほら、どうぞ試し振りなさってくださいえ」
リルウのはったりが通じたらしく、店主は慌てて承諾した。

「よっと、これがクラウゼウィッツ卿の……？へえ、軽いわね」

「へい、軽くて丈夫、魔法の付与もかけられていやすんで鉄は一刀
両断でさ」

「軽いわね」

そんな店主の言葉を気にかけた様子もなく、同じ言葉を繰り返す。

「レイジ、少し持っていてくれる？」

「あ？いいがどうしたんだ？」

リルウに手渡されて、剣を握る。

それは他の剣に比べると、まさに羽毛のごとき軽さであった。

「さて、鉄も一刀両断と仰られていましたが
おもむろにレイピアを抜く。」

「まさかただの細剣に貫かれたりしませんわよねえ？」

「!？」

店主が驚いて制止の声をあげようとする間もなく、リルウは素早く
剣の腹を突いた。

精密に繰り出された刺突は狂いなく剣を捉える。

大した手応えもなく、あっという間に貫通した。

「ふう……………」

一つ息を吐く。

リルウはレイピアを鞘に納め直すと、店主に向かってにっこり微笑
んだ。

「私は“上質な”剣を出すように言いましたがあれが最高なのかし
ら？それとも」

「私に喧嘩を売っているのかしら？」

「ひいつ。すつすみやせん！どうか命だけのご勘弁を！」

リルウの剣幕に圧され、店主が土下座を始める。

玲治は手に持っている剣を調べてみた。

（あ、よくみりゃこれ、アルミだ）

この時代に極めて珍しい、というか自然に存在しないだろう純度の高いアルミニウム。

本物の銀と見間違うほどに光沢が眩しい。

（だからかあれだけ触られるのを嫌がってたのは）

人の脂が付くと余計に酸化を速めてしまい、銀と嘯けなくなってしまうのだ。

「別に命は取らないわ。ただ一つお願いがあるのだけどいいかしら？もし壁の中に閉じ込められたくなかったら、だけど」

「もっ、勿論でさあ！お嬢さんの言うことはなんだって聞きますあ！」

その答えにリルウは満足げに微笑む。

「宜しいわ。じゃあこの店に私たちが来たときはただで武具を提供すること。うーん、でも品質が窺わしいから取りあえずいい品が入ってきたら連絡して。物によってはしっかりお金も払ってあげるわ」

「そっ、それはちときび——」「でなければ今すぐにでも壁の中に——」「分かりやした！そうさせていただきやすっ！」

もう店主は涙目だ。

「ありがとう。あなたのご厚意に感謝するわ」
そう言って武具屋を後にする。

「あっ、ありがとうござえやした！姐さん！」
店主の見送りが妙に切ない。

「……というかほとんど強制だったじゃねえか」
あの後奪った――いやさ、買った剣やら新しいレイピア
やらで玲治の両手はいっぱいいっぱいである。

「だってあの人が付け入る隙をくれるんだもの。商売で嘘は命取り
ということを教えてあげたのよ♪」
そう言って前を進んでゆくリルウはホクホク顔で、心なしか足取り
も軽やかだ。

「因みに言うと、2000エキューだとかって持ってないだろ？」

「ええ、船にもそこまで多くは載ってないわ。勿論、さっき書いた
小切手も万全を期して偽名。まあ偽物だってすぐに分かったからそ
んなことしたのだけれども♪」

玲治はただただ圧倒されるばかりである。

リルウの新しい一面を見つけた、素晴らしい出来事だ、
……と思いたい。思い込め。

第七話 トリスタニア非道事件（後書き）

後々が凄いことになったるがな^^;

飛びげりで出迎えてくだすったリルちん。

まさかそんなことをさせることになるとはこれっぽっちも思っていなかった……！

結局かなり重い気がする……

黒いよ！リルちんが黒いよ！

黒蜜並みに黒いよ！

まだ物語で書きたいところがあるので投稿も早めようかと思う黒蜜です。

第八話 題名無し（あとで決めます（前書き））

書いてて思った。

『面白いのかこれ??.?』

自分で書いてるうちは面白いとは思うけど、客観的に見たらどうなんだろう？

C h r i s t m a s 要素を若干盛り込んだので早駆けしました^^;

あとで見直しと思います。

第八話 題名無し（あとで決めます）

彼の子は言った。

この世界はまっこと不思議に満ち溢れている、と。

彼の子は言った。

宇宙は好奇心のかたまりである、みたいな感じなことを。

彼女は言った。

『子供も飲めるワインと言えど何でしょうか！？』

「えーっとグリューワインかしら？」

「ぶっぶー、答えはウェルチでしたー。ジュースだよ？クリスマスだからって未成年はお酒はダメなのです」

“彼女”が現れてからおおよそ1ヶ月。

私たちは人間の言う“ゲルマニア”の一つ街に来た。

取りあえずは“彼女”が街にいきたいと言っていたので、一番近い場所に連れてきたと言うわけだ。

とはいえ、高台に上れば未だにサハラが見える地点。

より西へ、より北へ進めば沢山人もいるが、ここはまだ少ない方だ。その方が私にとっても嬉しい。

「ほらルーちゃん！みてみて！」

少し先の店で少女が呼んでいる。

「も、もうちょっとゆっくり歩いてよ」

抗議の声をあげるが全く気にした様子はない。

「ほら！不思議な帽子！」

手に持ったを頭に被って見せる。

「MPの消費が少し下がるよ♪どこぞの大賢者が変身したわけでもないただの帽子だけだね……」

そう言って“彼女”は自分の言葉に笑っている。

何が面白いのか自分は分からなかった。でもきつと凄いことに違いない。えむぴーってなんだろう？

「あなたは意外に物知りなのね」

私が感嘆しながらそう言うと、

「ん？いやいや、これは遊び半分ですよ。たいしたことじゃないよ」

こちらを見てにっこり笑う。

『やはり変わっている』

私はそう思う。

いや、言動が愚かとか知恵のない子だとかそう言う意味ではない。確かに私たちの暮らすこの世界のことは無知だった。

エルフとヒトの対立も知らなければ、ヒトの作ったものの食べ物を

刺すピン（実際はレイピア）とか、不思議な帽子（実際は民族帽）にすら驚いている。

（なのに私が知らないことも沢山知ってる。）

“彼女”は異なる世界、『地球』から来たと言っていた。

あり得ない話ばかりなのに、その口調は真実味を帯びてまるで嘘のような気がしない。

先程の“不思議な帽子”というのもきつとその『地球』の文明における高度な品物に違いない。ふふ……知的好奇心がくすぐられるわ。

「どしたの？ルーちゃん」

ふと前を見れば彼女が心配そうな顔で覗き込んでいる。道端で立ち止まっていたのだ。確かに何かあったかと心配されるだろう。

「何でもないわ」

そう言って、頭――特に耳――を隠すフードをなおす。

ヒトはこの耳を見ただけで大山鳴動、暴れだす。

まったく失礼極まりないわ。

「ねえ、ところでルーちゃんって……？」

「んー、愛称。せっかくだから何かつけてみようと思って」

にへらと屈託のない笑みが返ってくる。

一瞬その笑顔に見とれてしまった自分が恥ずかしくなり、頬が赤くなる。

「ん、どうしたの？顔赤いよ」

「な、なんでもないわ」

熱でもあるのかな、と言って伸びてきた手から慌てて遠ざかる。
フードをより深く被って顔を隠した。

「昔飼ってたフィッシュにルウって名前つけてたの。だから出来れば他のがいいかしら？」

「んー、愛称……愛称………」

彼女は顎に手をあてて考え始めた。

「大○さん。」

「ルー○柴とは一緒にされたくはないわ」

「じゃあシャ○ちゃん。」

「著作権てきにまずいかも……」

「クシ○ナちゃん？」

「宮■○監督があまりの容姿の違いにビックリするわね」

「金髪なのは一緒だけどね。てあれ？どうして知ってるの？」

「え？あ、あれ？わたし何か変なこと言ってた？何にも思い出せないんだけど」

「まあいいや、じゃあシヤ――」

「それ以上はダメッ！」

街の観光は楽しく(?)過ぎてゆく。

時が過ぎ、夕暮れ。

「そう言えば夢を見たんだ」

取った宿の一部屋で唐突に一言。

「へえ。興味深いわね。どんな夢だったの？」

私はまた面白い話をしてくれるのかと少し胸を躍らせた。

「んー。私が暮らしてた街にいたの」

「へえ、良い夢じゃない」

「それで何時も通り学校に通って友達と楽しく過ごしてた」

彼女は顔を綻ばせる。

「皆の顔が本当に目の前にあるかのように鮮明でね、いい夢見たなーって思ったよ。途中から雪も降って綺麗だったなあ」

「ふーん、明晰夢ってものかしら？あんまり伝説とかには詳しくないけど、いつか叶うんじゃないかな？また元の世界に帰れる、って」

「うん、“夢”、叶うといいな」
そう言って笑いながら、膝を抱えた。

フツと

笑みが消えて

「何処にいるんだろ……………」

ポツリと彼女が言った意味は、
私には推し量れなかった。

話は戻り、玲治たちの視点。

数日経ち、外務卿から連絡があり、王宮に赴いた。

「おはようございます。此度はご足労さまです」

外務卿のギヨームは相変わらず低姿勢な物言いだ。

「許可証を発行するとか聞いたがそうなのか？」

「はい、応接室にてお待ちください」

しばらくそこで待っていると、ギヨームが書類を抱え戻ってきた。

「こちらで新しい名を考えさせていただきましたところ、このようになりました」

一枚の紙が机の上におかれる。

玲治とリルウはそれを覗き込む。

貴殿、

Lilou Verchère de Noailles
(リルウ・ヴェルシャル・ド・ノアイユ殿)

は、これをもって、下記の通り改名いたす。

Laurence Chatelain
(ローランス・シャトラン)

「まあまあね」

そう言うリルウの顔はひとまず安心と言った感じだ。

「では最後にこちらを熟読したのち、宜しければサインを」

「ウイ」

リルウが束ほどもある契約書（？）に目を通していている間、暇なので玲治は部屋を見回した。

（そう言えばあの王女は何処で話を聞いてたんだ？）

かくれんぼの要領でいくと、戸棚か机の下の空間か、戸棚かカーテンの後ろか若しくは戸棚が怪しいなていうかそれしか他に置いてあるのがないんだが。

いや、魔法の使える世界のことだ、忍者ハットリのごとき体術や神隠しの術で見えなかったただけかもしれない。

なるほど、と玲治は思う。

姫様は忍者だったのか。忍者の家系。素晴らしい。

それなら城が襲われたときも王候は気づかれずに脱出できる。

まったく良くできたものだ。

まあやはり定石は戸棚に隠れることだろう。うむ。かくれんぼというのはこの歳になっても面白いものなのだ。俺はやらんが。

そんな玲治の思考は、高速道路を爆走中……………

「そう言えば」

と暴走を止めた思考がある一点に集中した。

「ところで王女様は何処にいるんだ？」

似通った話をしただけである。

「姫殿下は魔法学院の視察に今朝出発なさいました」

「魔法学院？」

はじめて聞く単語だな。

「はい、学生はそこで基礎学術、教養を教わっていくのです」

「ふーん」

「まったく管轄庁が内陸まで行かないとないだなんて不便ね」
リルウが話に入ってきた。

「というか契約書に入り込みたいんじゃないかってぐらい凝視している。上の空で話にまったく付いてきてないじゃないか。」

「確かにここ一点に内政の要が集まりますからな。ただ地方で不正ふせいを働かれるよりはここで対処すべきということですよ」

それになんの気なしに返答するこの男もなかなかの大物である。

ギョームが、……私も、辞職すべきですか、と自虐じみた笑いをしているのを見て、

慰めの言葉すらかけられない己をむず痒く思った。

「んしょと、書いたわ」

どうやらサインを書き終えたらしい。

ギヨームが紙を受けとる。

「確かに受け取りました。ではあなたをローランス・シャトランとして、トリスティンへの入国を許可いたします。歓迎しますぞ」

「有難う、まさかここまでしてもらえとは思わなかったわ。本当にあなたたちには感謝しきれないわ」

リルウがギヨームに礼を言ったので、玲治も頭を下げる。せめても、と深く礼をした。

「いえ、また何かありましたらご連絡ください」
そう言ってギヨームは立ち去っていった。

「うーんと、取りあえずは一件落着だが次は居場所の確保だよな。船に残してきた皆もいるし」
帰りの道すがら新たな課題に頭を抱える。

「そうよね……。ヤドカリだとあつという間に所持金が底を尽きるし」

「いっそ働くか、農場開いて」

何故か知らんが頭に農場ののほほんのんびりとした風景が浮かんだ。

「なによ農場って。アナタそう言う趣味があるの？」
リルウがあからさまに嫌そうな目をする。

「農家のおじさん舐めんなよ?! 年中重労働して平気でいるんだぞ!?!?!?! いや、農場大好きっ子の霊が取りついたんだ。スルーしてくれ」

またいつぞやの農業野郎か。

まったくあの変態騎士との戦いから頭がおかしくなったようだ。

「私たちみたいな子供が匿えて、母上や召し使いも安心して頼める素敵な場所はないかしら……?」

おっ、普通にスルーしてくれたぞ。これはこれでショックなんだが
どうということだおい。

「あっ!」

リルウが思いついた! とばかりに手を打った。

「孤児院なんか良さげじゃない?!」

「ふんふん、なるほどねー。子供たちに囲まれて楽しく過ごせるね。
俺もそう言うのは別に嫌いじゃないよー」

「だが違う!」

バン! と机を叩く振りをする。

「それはむしろ居候だ! 迷惑掛けてることになるだろうが」

「じゃあ、修道院は?」

「知らないだろうが俺は低血圧だ。修道院暮らしはいささかきつい」

「自分の事じゃない……」

リルウの声に呆れが混じる。

「じゃあどこが良いって言うのよ？」

む、俺に振ったか。

「……………少し時間をくれ」

道沿いに立ち並ぶ賑わう店々を眺めながら、考え始める。

「何時までもお待ちしてますわ♪」

いつそのこともうその余計な口は開かなくてよろしいわよ」

「……………」

辛口なリルウの言葉は無視して、真剣に腕を組む。

……………孤児院はだめだ、あそこは慈善施設だもんな。して修道院もだめだ。俺がどうだけじゃなくあれだけの人数を容易に受け入れるはずがない。

どこかで働くのなら、宿舎も提供されるだろうが、そもそもリルウは働くのは好きなのか？

さっきは農場と聞いただけで拒絶したし。

いや、ここはやはり強いてでも皆が入れる居場所は確保するべきなのかもしれない。

いっそのこと俺が農場を切り盛りさせて……………ってなんだ、まだいたのか邪念。悪霊はさっさと成仏しろこの。

なんにせよせめて俺だけでも働き場は決めとかねえとな。

とそのとき先程ギョームが言っていた言葉がふとよみがえる。

“――学生はそこで基礎学術、教養を教わっていくのです”

――魔法学院？

そう言えばまだ城にいた頃、いつぞやの稽古の後、クラリスさんがそんな話をしていた。

“お嬢様は城に籠りきり。

若き友どもとの戯れも許されぬ、不運なお方です、”と。

「ところでさ」

「あら何？まだ口があったの？」

「さっきから冗談きついな。いや、お前、少し前に学校止めちまっただろ？」

王子兄弟の亀裂によって。

無関係なりルウがその被害を受けた。

きつと今も学校に未練があつて、行きたいと思つてゐるに違いない。

「この国にも学校があるらしい。そこなんかはどうだ？」

「あー学校？いいわそんなところ」

しかしリルウは興味なさげだった。ヒラヒラと手を振る。

「なんでさ」

「私はね、決めたの。私の父上を殺したアイツにはいつか復讐するって」

「ジョゼフを殺すって」

玲治の背筋に怖ぞ気が走った。

えんしゅうぞうお
怨讐憎悪、その横顔には他の感情が見えない。

時折見せる可愛い微笑みも、何時も見せる堅い意思も、今のリルウが纏うオーラに触れていると別次元だ。
底無しの無限廊に陥った感覚が広がってゆく。

「殺すって……随分と急だな」

「急？ 私がいつから甘ったるい考えをするようになったのよ。」
声色がいつもとまるで違う。

玲治はこの少女に対して初めて“恐怖”を抱いた。
一瞬息がつまる。

「私の感情は全て、憎しみに帰属する。私達を虐げた無能王を許さない。少しずつでも力をつけて、何時か必ずは殺してやると

“あの日”から決めたのよ！」

いつしか少女は叫んでいた。

周りからの視線が段々と集まり始める。

“あの日”。

俺達のいた城が、王様の軍によって襲われた日。
船に乗って俺達は逃げた。

家長として、リルウが一族の重荷を背負いはじめた。
そしてリルウの父であるルイが亡くなった日。

「だから私には学校なんついたらない。そんなものは二も三も次のはなし。立ち止まらないわ。

この身が減ぶか、彼の敵が死ぬまで絶対に」

先程のように叫んでいるわけでもなく、ただ静かな口調で告げている。

だというのにその威圧感は何倍も増して圧してきた。

「それが……お前の誇りなのか？」

「いいえ、“私たち”の願いよ」

そう言うのと、立ち止まったままの玲治を置いて、リルウは行ってしまった。

人混みの中へ銀髪のが最後が隠れ、そして見えなくなった。

少しだけ、ほっとする。

周りが騒がしくなってきた。

これは一体どうしたんだ？

あいつが女を怒らせちゃったようだぜ。

ちっいいいよなあ若気はよお。

その場に佇んでいる玲治を囁し立てる声が聞こえ始める。

だが玲治はその一切を聞かずにリルウの事を考えていた。

あいつのためになることは一体なんだろう？

わからない。

自分だけではどうしようもない。

ただ、あいつが無理をしているんじゃないか、そんな気だけはしていた。

第八話 題名無し（あとで決めます（後書き））

な、ななゝ、名前が、なまえががががが

。。。／＼。。。。

中二っぽくてすみませうああ。

無名貴族を表現しようと思ったのですが、あまりの名前に恥ずかしくて死にそうだ……………。

（・ω・）

因みにクリスマス要素はグリューワインです。ホットワインとも言います。

クリスマスになるとヨーロッパでは赤ワインを温めて香辛料や砂糖を加えて飲むそうです。

アルコールが飛ぶので多分甘いんじゃないでしょうか……………。

私は勿論ウェルチです。

さて、ようやく礎が立ちました。何に理由つけて学院に行かせようか。むしろ理由なしでよくね？などと考えましたが時は待ってくださいませんでした。

今後の展開を楽しみにしていただけると幸い、光栄至極。

誤字脱字はご一報ください。

感想お待ちしております。

それでは

追伸、怨讐憎悪。ひびきはいいですがことわざではありません。ご注意ください。

第九話　遠い日の歌　前編（前書き）

ふう、遅れてすみません。

年越しと年明けの準備が忙しかったもので。

友達に年賀状でゼロの使い魔のキャラクターを描いてあげたんですが、割かし良い出来でしたよ。

とかそんなどうでもいい話は置いておいて、物語。

多分ここが節目だと思うので少し慎重に描いております。

駄文かもしれないです。

でも真剣です。受け取ってください。^^;

第九話 遠い日の歌 前編

あれからその日、

宿に戻ると、リルウはベッドで寝ていた。

暖炉近くのイスにはクラリスが座り、旅道具の整理を行っている。

玲治が部屋に入っていくと、それに気がついて顔を上げた。

「お帰りなさいませ」

それに頷きで返すと、ベッドに近づいてみる。

毛布が上下し、中からはすやすやと静かな寝息が聞こえてきた。

「寝てるのか？」

「はい、お嬢様はお休みになられています」

リルウの代わりにクラリスが答えた。

—————
にしては気のせいと思えないほど矢鱈に刺々しい殺
気が漂ってくるのだが。

「…寝てるのか？」

「寝ているのです」

「…そうか」

クラリスは微妙に無表情を崩して申し訳なさそうにしている。
リルウの体裁はあくまで”眠っている”ということにしてやってく

れ、ということなのだろう。

玲治は頭を掻いた。

あれだけ怒らせてしまったのだから、ひとまず謝罪の言葉は掛けておくべきだろう、と思っていたのだが仕方がない。それはまた今度にしておこう。

「一体どうなされたのですか？」

クラリスは、リルウが殺気を放っているわけを玲治にたずねる。

多分リルウは話しかけるクラリスを無視してベッドに入っていたのだろう。

「あー、そうだな……外でいいか？」

ひとまずここでは本人もいるから話しづらい。

玲治は部屋の外を指差した。

…

…

………。

「——んでだな、船に置いてきたみんなの事と、これらの事を考えていたんだが、最初は普段どおりだったのにいつの間にか怒り出してたんだ。」

宿屋を出て、その裏。建物と建物のある空間に玲治とクラリスはいた。

ここなら人通りも殆どなく、日当たりが悪いので四方の壁は窓がなく、盗み聞く耳もない。

「それで一ヶ月程前に城を攻めてきた、ジョゼフ……」ガリア王に復讐をしてやる”って叫んだんだ。」

「その原因は――？」

「ああ、多分、というか間違はなく俺が学校に通ってみないかと誘った事が原因だと思う。」

「学院：ですか」

クラリスは何か考え込むように腕を組んでいる。
というより話の最初から組んだままだ。
なんでだかその目付きは険しい。

「なあ、アイツはどうして急に怒り出したんだ？」

あの急な噴火は正直理解できなかった。
学校と復讐は、王政府の弾圧によってやめさせられたという事以外、それほど関係があるようには見えない。
むしろ自分で自分の怒りを助長したといっても過言ではないだろう。

”学校”のキーワードが何か古傷でも触るような言葉だったのか？
」

「確かに学院では毎日楽しく過ごされていたようで……。急にやめることになったのは級友とも会うことの出来ないということですから、さぞかし辛い事だったでしょう。ですがそれが怒りに起因するとはまでは考えに至りません。」

「理由は他にあるってことか……」

「その他にはお嬢様が何かおっしやられていませんでしたか？」

「うーん、ジョゼフが死ぬか自分が死ぬかって……そういえば『私たち』の願い』とか言ってたが？」

「私たち……」

クラリスは何か思い至るところがあるのかその言葉は繰り返した。

「わかりました、玲治様。このことは私からもお嬢様にも訊ねてみます。そろそろ日も暮れましょうし、この件はここで一旦区切りましょう」

空を見て頷いた。

裏路地だから元々暗いのだが、赤紫色の空はそれをさらに強めている。

「それともう一つ、申し訳ないのですが別室を使用していただいてもいいですか？」

クラリスにそう言われ、はたと気づいた。

あの部屋中を漂っていた殺気であるが。

寝たふりを気づかれたいのか、そうでないのか、この思念からは玲治を遠ざけようとする意思が見える。

つまりリルウは「一人にして」と言っているようだった。

流石に玲治もあの中を同室で居られる自信はない。

「そうだな。正直あの中は居たたまれない」

「お嬢様は私が見ておきますのでご安心ください」

クラリスはそういいながら、麻袋から金貨を数枚取り出した。

これを宿泊代に使えということだろう。

「ありがとう」

目の前のメイドに感謝の念を込めつつ、金貨に手を伸ばす。

玲治の手が、広げられた彼女の手が届く瞬間、

ガシッ。

「!？」

伸ばした手がいきなり掴まれる。そして体ごと引っぱられた。

大した力ではないのに、警戒していなかった玲治はあっけなくバランスを崩した。

玲治の体がクラリスの横に、前かがみの体勢でつつこむ。

それをクラリスが玲治の腰に手を当て、そのまま抱き寄せた。

ふっと玲治の耳に吐息がかかる。

女性特有のいい匂いが……………

「くれぐれもお嬢様を泣かせる真似は致しませぬよう」

玲治の耳にそっとささやく。

「!?!」

玲治は驚いて目を見開いた。

「…今回は必ずしもあなたのせいに抛るものではないでしょう。ですがもし、お嬢様を泣かせた暁には私があなたに刃なり包丁なり揃えて向かわねばなりません」

横目で見ると彼女は妖艶な笑みを浮かべる。

「それだけは玲治様のお心にお留めください」

パッと玲治は解放される。

「外は冷えます。中に入りましょうか」

彼女は既にいつもの無表情に戻っている。

小さく微笑を湛えながら、きびすを返して歩き始めた。

これは…直接的ではないがかなり恐いぞ……。

あまりの出来事に玲治はただ驚くばかりだった。

そして、

気づいたのだが――真面目にこのことを言うのは恥ずかしい

が――あのメイドはふくよかだ。

「へい、らっしゃーい！」

八百屋な掛け声をあげる陽気な中年の前にリルウが立つ。

辺りは45度の高さに位置する太陽からの光にあてられ、街を包む霧を掻き消しながら、比例するように大きくなる喧騒に包まれている。

「小型船一隻飛べる分の燃料を買いたいんだけど」

「小型船！船種によっちゃ差はあるが、二三日飛ばすにはこのぐらの量でこの値段だぜ！！」
といって八百屋さんはそろばんを弾いてリルウに見せている。

「小切手でいいかしら？」

「おう、構わんぜ嬢ちゃん」

玲治はその光景をリルウの左少し後ろで見ていた。
その隣にはラタンで編まれたバスケットを手に持つクラリスの姿が。

ここに来るまでには少し時間を遡る。

朝、起床。

「ん、どこだ？ここ」

寝ぼけた頭を掻きながら、回りを見回す。

見知らぬ部屋に玲治はいた。

と思って直ぐに昨日の事を思い出し、途端目が覚める。

（そうだった……昨日はリルウを怒らせちゃったんだ）

『怒る』

それはニュアンスが若干異なるのかもしれない。
リルウは憎しみを顕わにしていただけでもあるし、叫んだり暴れたりするのが『動』の怒りとしたら、リルウのは『静』の怒りだ。

あれはアレで怒ってなどいないと一蹴されればそれで終りだ。
……………どうでもいいかそんなこと。

（俺の発した一言であいつに火を付けちゃったんだ。もう少し気を付けるべきだったかもしれないな。人の痛がるような場所に触るなんて俺は）

仲直りができるのか。それが頭を回る。

多少のためらいを感じながらも二人のいる部屋へ行ってみると、

「おはよう、レイジ」

とリルウから笑顔が返ってきた。

玲治は驚いた。

驚いて思わず後退り、向いの部屋の扉が丁度よく、しかも勢いよく開いたので思いきり跳ねられた。出てきたのは小さな男の子で無邪気に駆けていってしまった。

体に鈍い痛みが走っていたが、

「何やってるのよ。今から出かけるから一緒に来てちょうだい」

と口に手を当てて笑っていたのが相当な衝撃ものだったので、ちっぽけな痛みなど吹っ飛んでしまった。

「……………一緒に？もう、怒っちゃいないのか？」

「別に？あなたに起こる理由なんてないけど？」

（と、言うことは昨日、俺が避けられていたと思っていたのは気のせいだったのか？）

と少し自分が考えていたことに疑念を抱く。

(とにかくここで謝ろう)

「リルウ、昨日は――」

「ほら！ぐずぐずしてないで付いてきなさい」

謝罪の念を伝えようとしたとき、リルウは慌てたように廊下を駆け、階下を下りていってしまった。

まるで何かを恐れて、逃げるように。

そのまま追うようにして後ろを付いて街を歩き、数十分。

その間、数度謝ろうとしたのだがその度はぐらかされ続け、気がつけば街の端にあるこの店にまで来たと言うわけだ。

『働きの牛ドン』

店の前にドンと置かれた看板には、大きな荷台を引く牛の姿が描かれている。

文字については識字ができないので、なんと書いてあるのか分からないが、絵を見ると恐らく輸送業、そしてリルウと八百屋のやり取りからして地球で言うガソリンスタンド、つまりは燃料店といったところか。

「まいどっ！風石、1400リール！」

競り落とし終えた後の掛け声よろしく大きな声で叫ぶ。

「早速だけどあなた達にこれを選んでもらいたいの」

「おう、目的地はどこなんかい」

「ラグドリアン湖まで運んでもらえるかしら」

「んだったら、そこに一番近い町に連絡してそこから運んでもらうぜ。運賃は安くつくから安心だな！」

そう言って豪快に笑い出す八百屋。

勿論、八百屋ではなく、運送屋兼燃料店だが。他に何か表現するに値しない一回コッキリキヤラなので以後八百屋の名前で続けさせていただく、と筆者からの天の声は誰にも聞こえてはいない。

「――最近じゃ御上の方々がアルビオンの貴族派に警戒してフネの飛行演習なんか始めてよ、風石の消費がぐっと上がりやがってんでえ。とすると軍港に風石が必要になる、運び手も必要になったんでってこの仕事に目をつけたってワケさ」

「へえそう」

身の上話をし始めた八百屋の言葉を、特に興味を持った素振りもなく相槌を打つ。

「前の仕事の同僚と一緒に始めたんだがよ、売るも運ぶも俺たちがやれば、そりゃ手間も掛からんし、一石二鳥ってわけだ」

「ふーん。良い観察眼ね」

「今じゃどの街にも支店を置くぐらい成功してな――」

ほれ、

領収書だ。当たりクジを引いたって訳だ。つまらん話に付き合ってくれてありがとな、嬢ちゃん」

リルウはそれを受けとると、身を翻して歩き始めた。

玲治は横にならんで歩くクラリスと共に、それに付いていく。

「これでお前の母さんやみんなをここまで呼ぶって言うわけだな？」

「ええ、森の中に何時までもいては気が滅入るでしょ。それに集まって皆の意見も聞きたいし」

今後の方針とかね、とリルウは付け足す。

「はあ、なるほど」

さて、玲治は今までの会話で気づいたことがあった。

貴族と言う身分があることから、身分差別は確実に存在する世界である。

だが玲治の頭の中にはリルウは町子供とも対等に接し、年長者に敬意を持つという人物像がある。

つまりは人一倍礼儀正しい。

それなのに今のリルウはなぜだかその人物像と相反する。

今朝もそうだが、まず相手の言葉には耳を貸す。八百屋に対しても一頻り売り買いをしたのなら礼は必ず言うはずだ。

領収書を受け取り、そのまま通りを歩く。何でもない仕草だが、リルウの場合何でもないものではないはずだ。この点は今まで一緒に過ごしてきただけでも十分にわかる。

明らかに普段とは様子が可笑しい部分がある。

いつもと行いが違うのは、やはり心が“何か”にいつてしまつて、回らないからではないか。

その“何か”はやはり……………。

（やっぱりしっかりと謝っておくべきだろう）
と玲治は考える。

そこでまたふと、

（そう言えば避けられてるよな？）
謝ろうとする寸前で。

内容が他の事ならば、それには返事をする。

だが謝ろうと口を開く度、鋭敏に察知しては、はぐらかされる。

（俺に謝られたくない……………謝るべきではない……………負い目？）

まさか。

どこに負い目があるのだ。

目の前を歩く少女を見る。

その表情からはなにか玲治に隠しているといった様子すらなく、悠然と前を向いて歩いている。

あるいは今日の何其と同じく、そのように振る舞っているか。

そうして時間が過ぎていき、気がつけば天道も真上より見下ろしている。

「そろそろお腹が空くことでしょう。お昼にでも致しましょうか」
そう言ってクラリスが持ってきたバスケットを持ち上げて見せた。

この機会なら

玲治は決心した。

どんなに内^心で考えたとしても、外^相には伝わらないのなら。

—— 先ずもって話し合うべきだと。

第九話　遠い日の歌　前編（後書き）

区切りが悪いです、すこぶる。

こんなところで区切ったら台本が台無し。

でも道は出来た、後は整備するだけ。

そこは人が通るようになり、やがて沿道には建物が並ぶ大きな道となるでしょう。

とか情景的な話で占めさせていただきます。

またすぐに会いましょう。よいお年を。

第十話 遠い日の歌 後半（前書き）

お疲れ様です……。

今私は……やりとげました……。

結局4日かかりましたよ、まったくなんなんですか！！

一万字超えてしまったついに。ははは、前半と後半の分け方おかしいだろ！！って言いたいです。

さてと、多分これは前半から読み直していくといいと思います。
長々としてすみません。

第十話 遠い日の歌 後半

お昼時。

一日の多忙もこのわずかな時間に身を休め、ゆったりとした時間が時を奏でる。

ホッと一息をつく、そんな時間であるのに、何故か玲治の心臓はキシキシとした痛みを訴えている。何かの発表前のような、そんな緊張が玲治の体に蓄積されていく。

ここ数日の間、リルウは少し様子がおかしかった。

いつものような…なんというか気丈さがない。まるで不安定だ。その原因を探ろうと玲治は思っている。

一行は街の端にある、芝生の広がる広場にやって来た。

人もまばらだが、遠くに子供の遊ぶ姿や溜池に素足を浸す一組の人間が居る。

そよそよとした風が心地よい。

「ここら辺で良いわ」

「かしこまりました」

リルウが立ち止まる。

するといつの間に持ってきていたのか、クラリスは椅子を三席にテーブルまで取り出していた。

玲治が驚く間に二人は何でもないように座る。

慌てて玲治も座った。

ああ、なるほど。

自分の座る椅子をよく見れば折り畳みものだった。この世界にはないと言う観念が働いていたのかもしれない。それにしても気になるのはどう運んできたのかだが、あえて気にしない。そんなことをぐだと考えると少し気が楽になった。

「いただきます」

視線を戻すと、既に並び終えた料理の数々があつた。

サンドイッチをメインとした軽食である。

前も見るとリルウはフォークとナイフでサンドイッチを切り分け口に運んでいる。

クラリスは紅茶を注いでいる。

……よし。では――

「あ」「煩い。食事中ぐらい静かにしててよ」

………まだ口を開いただけなんだが。

「だか」「食事中」

「……今話し合わなければしこりだけ残って、後々面倒になるだろ」

「……………」

リルウは無言でサンドイッチを口に行っている。

無言。

それは断固たる拒絶であり、暗黙なる容認である。どちらともとれるなら後者を選びたい。

「改めて昨日はすまなかった」

リルウはテーブルに落としていた視線を上げる。

「……だから何で謝るのよ。あなたは何もしていないし、私も怒ってなんかいない」

「そうか。ならいいんだ」

「それだけ？」

「いや、本題だ。……リルウ、お前何か隠してること、あるんだろ？」

リルウの頬がピクリと動く。

「…それを聞いてどうするのよ」

「あるんだろ？」

同じ言葉をもう一度繰り返す。

「それは……女の子なんだから隠し事の一つや二つ」

「そんなものを聞いてるんじゃない」
押し通そうとするリルウに口を挟む。

「俺も知るべき事はないのか？なんでそこまで『学校』に反応するんだ？」

今このときもリルウは大いに顔を歪めた。

「もしかして学校嫌いなのか？だったら無理強いはしない」

それにはいいえとリルウは首を振った。

「違うんなら、じゃあそれがなんで復讐とやらに關係してくるんだ」
下を向いたままぼそりとつぶやく。

「……私だけが行けるなんて、不公平じゃない……」
言葉の後ろが尻すばまりになってよく聞こえない。

「え？もう一度頼む」

「私には妹がいてね、少しだけど同じ血が流れてる。私とその子たちは小さいときから一緒に遊ぶ仲だったの。私が学院に通うようになってからもそれは変わらなかったんだけど……」

「……何でもないわ。ちっぽけなことだと思うだろうし、あなたには關係ないことだから」
一瞬ためらったかのような間の後、きっぱりと言った。

「關係ないって……。これから色々なことするんだろ？俺にも知る権利ぐらいあるだろ」
だがリルウは首を振った。

「余計な口は挟まなくて良い。貴方は私に付いてきさえすればいいの」

「……なに？」

玲治は耳を疑った。なんでだか血流が著しく乱れはじめる。

「だから、大丈夫よ。貴方は私に付いてくるだけでも十分に」
聞き取れなかったものと判断したリルウがもう一度はつきりと言っ

て

「……なんだそれ、馬鹿にしてるのか」
玲治はガタリと立ち上がった。

「え？ い、いきなりどうしたのよ」
玲治のトーンが急に下がったことにたじろぐ。

全否定だった。そう感じた。
存在も、していることの価値も意味も、すべてが。

「俺はいつからお前の下僕しもべに成り下がった？ 俺は人形か？ それとも、
歩けば勝手についてくる髪の毛か？」

「一体何を――？」

「俺は目の前で困っている奴は助ける。助けてって叫んでる奴を見
殺しにはできない。それは俺の性質たちだから変わらないだろう。見返
り？ そんなもの端はなから期待しちやいない。だがな……」

一呼吸。胸に手を当て、そして、

「俺は俺の意思でこの体動かしてるんだよ！ 自分の意思でここにい
る！ だのに、こんな場所に呼び出しておいて、関係ない戦争に巻き
込まれ、命を狙われて。挙げ句にはなんだ？ 奴隷のように付いて回
れ？ ふざけるのも大概にしろよ。」

足蹴にされてまでここに在る義務は俺にはねえ。人に振り回されな
きゃいけねえほど俺の命は軽くはない。復讐だとか、中途半端な気
持ちで人殺せるほど腐ってもいねえよ。恩を仇で返すような奴に、
用なんてねえ」

「わ、私にそのお情けで一緒にいるとでも言いたいわけ!?!」
リルウの顔が屈辱に紅潮していく。

「ハハ、良い言葉だな。そうだ、情けだ。お前が悲しんでるように見えるから、辛い目にあってたから、お情けで付いてきてやってただけだ」

「あなたこそ馬鹿にしないでよ! 私こそアンタみたいなやつ召喚しなければ良かったわ! もっと他に強くて従順な生き物が来れば良かった!」

「は?」

玲治の周りの空気がいっそう冷たくなっていく。
リルウはしまったという顔で口に手を当てた。

「……確かに俺は強くもない。走れば息も切れるし、魔法が使えるとか特別なものは持っちゃいない。結局は俺自身は御伽之国の主人公でも何でもない。日本で平和で暮らす、ただの凡人だ。やっぱり居るべき人間じゃなかった」

「ち、違う! 誤解だわ! 話を」

「何が違うんだよ!? 俺が従順とか勝手に勘違いしてくれるな。人に媚び入る野郎はただのクズだろうが。もっと他の奴が良いと言うのなら、今までの全てを嘘にして見せろ!」

怯えて弁解しようとしたリルウの口が開く前に、玲治は捲くし立てる。

より一層脅えて黙り込む少女を見ていると腹が立つ。

反論して見せろよ。俺を納得させて毒でも吐いてみせ

ろよ。

だが答えはなかった。

腕をギュッと掴んだまま、潤んだ瞳でこちらを見上げるだけだった。

思わずリルウに掴みかかりたくなる。

拳に力がこもり、無性にあの泣きそうなボケた顔を力いっぱい殴りたくなる。

「ッ！」

だがそんなことはしなかった。

怒りの捌け口に、背中に佩刀はいとうした剣を引き抜き、思いきり地面に突き立てる。

まだ真新しいグレートソードは刀身が半分埋まる勢いで突き刺さった。

息が切れる。

荒い呼吸。

ゆらりと立ち上がる。

「…………お前の事、もっと良い奴だと思ってたぜ。がっかりだ。ほんと残念だな」

そう言って、玲治は笑った。

冷えた眼差しで少女を見つめ、ただ冷酷に晒った。

「今のお前のために棒振り回して遊んでる暇はないんだよ、無責任な“お嬢様”」

最後の言葉にはありったけの皮肉を込めて。

玲治は街の外れへと身を翻した。

「ちょっと、……待ってよ……！」

後ろから少女の叫びが聞こえてくるが、身じろぎもしない。声はそのまま玲治を追い越していった。

そしてそのまま、人混みに紛れて居なくなってしまった。

「……………な、なんなのよ?! 私がそんなに間違ってたわけ!? 私がどんなに苦勞してるのかも知らないで! 私の気持ちも知らないで!」

眼から涙が溢れそうになる。

「お嬢様」

隣に佇む物静かな女性が己の主にと近づいた。流れ落ちそうなそれをそっと拭う。

彼女は先程のやり取りを、椅子に座ったままの体勢で静かに見つめていたのだ。

「今はまだ泣くときではありません。お嬢様も彼も、もう少し冷静になる時間が必要なのです。彼もきつと、正しいことが見えてくるはずです」

肩を持って、静かに言った。

どちらがそうであるかなど、明確な答えは言わない。

クラリスは地面に突き立ったままの剣を抜こうとする。

だがそれは元の体を維持したまま頑として動かなかった。

その光景はさながら石に突き立てられし聖剣のよう。

「……………やはり……お嬢様の気に掛けているのは“あの方”なのですか?」

剣を諦め、リルウに向き直る。

意味深な発言に、リルウは目頭に溜まるものを堪えながら頷いた。

「やはりそうでしたか……………」

（残念ですが、それは誤解のようですよ）

（どうすればこの状況を戻せるか）

メイドは今すべきことを考え始めた。

《同心の心、見つけたリ》

無慈悲な神は獲物を捉えた。

何であろうと見逃しはしない。

歩いていく。

煮えたぎる感情そのまま、顧みずに突き進む。

行く宛などどこにもない。当然だ。

知らない場所、知らない世界。知らない体系。魔法すべては似て非なるもの。

元より玲治は、いや、この世界はイレギュラーだったのだ。

もしここに友人などいようなものなら、直ぐ様殴りかかるか殴られた
い。

結局それは、ただの夢か幻なのだから。

歩いていく。

嘲笑うかのような街並みを越えて外へ外へ。

外壁を出て、また歩き続けた。

(話し合いか……………)

結局自分の鬱憤晴らしただけなのか。

結局アイツは俺の事何とも思っちゃいないのか。

結局俺はここに何故要るのか。

結局、結局……………。

気づけば小川の前まで来ていた。

ほとりには葉の生い茂る木が一本、葉を落とした木が一本。

この春を過ぎたばかりの季節に落葉する木などない。枯れてしまっ
たのだろう。

そのシルエットは無性に悲しげだ。

玲治は青々とした木陰に腰を下ろした。

渾渾と流れ行く水を眺めて長い、長い溜め息。

ドウシテコウナッタ。

全てのはじまりはあの日。

教室で歪みに足をとられ、何処までも続く深い穴に落ち、気がつけばこの世界。

あの日に俺の人生は狂ったのだ。
逃げられない監獄に閉じ込められ、出口のない迷宮に放り入れられた。

中には自分と釣り合わないほど強大な、角を生やした怪物が血に飢えて何処までも追ってくるのだ。

安住の地などここにはない。

まさに深い穴だ。

落ちてしまえばそれまで。

助けを呼んでも届かない。

もう逃げ場はなく、運命は決められたようなもの。

玲治はここに召喚した少女を呪った。呪わずにいられなかった。

あのまま日本にいたとしたら、朝起きて学校へ行き、友達と駄弁り、そして無為に日々が過ぎていく。

何でもない毎日が死ぬまで約束されていたはずなのだ。

ふと、共に異世界に“来た”少女をおもう。

（姫野はきつと元気でやってるのだろうか）

自分の今の状況を見て乾いた笑いをする。

今の玲治には悲観的な感情しかなかった。

そのときブオツと強烈な風が吹いた。

風に煽られて頭上の木が根本から折れそうなぐらいになる。

玲治は突風に顔の前に手をかざして対処する。

程無くして風が止んだ。

ミシミシと何かが軋む音が聞こえる。

視界の端に黒い物体が映った。

枯れた木の上に、先程はなかった羽の生えた奇妙な物体があった。

……鷹だ。

だがとてつもなく大きい。

頭から下までおそよ大人を超える大きさ。その重さに枯れ木が汗っている。

その翼を伸ばせば6メートルはいくのではないか、そう思わせる異質な存在がそこから玲治を睨んでいる。

（さっきの風はこいつの仕業か……？だがなぜ？）

「こんにちは、元気かい」

パツと後ろを振り向く。

すぐさま立ち上がりその声の主を睨み付ける。

忘れもしないあの声。

玲治たちを襲い、辛くも魔の手から逃れることのできた、憎き男。

「北花壇騎士……」

顔を黒い面で覆った男が背にしていた木の横に立っていた。

「一体どうやって!？」

何故ここまで近づかれても気づかれなかったのか。

「私は風使いだからね。その気になれば音すら無くすることもできるのさ」

その疑問にはご丁寧にも男が答えてくれた。

「何の用だ！」

「構えなくとも良いよ。今は仕事外だからやりあおうって訳じゃないし、君とは少し話をしに来ただけさ」

「：仕事で人殺すのかよ？」

「そうだね。私は仕事をしている。誇りある仕事だと言いたいね」

「そんなもの誇りにしようとか、あんたは人間じゃねえ」

目で射殺すぐらい男をねめつける。

先程の口論が蒸し帰ってくる。

「君たちの話、聞かせてもらったよ」

玲治の視線に対して怖がる風もなく、仮面裏からくぐもった声が返ってくる。

「？」

何の話をしようとしているのだ？

「愉快な話だね。君は高貴なる主に楯突き、一方的な論述で貶めたとは思わないのかい？」

「：間違ったことはいってないだろうが」

「嘘も真実。本心は現実。君は彼女の意思を汲み取れなかったね」

「なに？」

「いや、別にそんな事はどうでも良い。部外者だからね。失礼した」
相も変わらずこいつは訳が分からない。

結局こいつは何しに来たんだ。

俺を殺しに来たわけでもない。ただ遊びに来たわけにも思えない。

「いやなに、見ているだけだよ」
何か男が言っている。

「君が、私が反逆者の娘を殺す邪魔をしないためにね」

「!？」

突然の宣告に心臓が止まりそうになった。

「嘘言いやがったな！卑怯な真似しやがって！」

「うん？嘘？はは、何を言ってるんだ。君”とは”話がしたいって
言っただよ。この”私”が行っていることは命令にはないからね。
仕事外だっていっただろ？」

「く、くそ」

早くリルウたちの元へ向かわねば！
踵を返そうとしたとき、

「おっと、行かせはしまい」
ぶわっと疾風が巻き上がる。

次に目にしたものは巨大な鷹のまた巨大な爪であった。

抗えぬ大きな力で玲治は鷲掴みにされる。

「君には空の旅をプレゼントだ。自分が無力であることをとくと知ると良い。末期まで楽しみな」

偏在は空気に混じるようにして掻き消えていく。

そして玲治はそのまま空に運ばれていった。

ぐいぐいと勢いよく上昇する。

体に当たる風が、むしろ岩雪崩のようにガンガンと攻め立ててくる。強靱な足に掴まれて身動きが取れない。腕ごと掴まれているためどうしようもない。

雲に飛び込んだ。鷹はまだ高く高く上っていく。

「くそっ、なんだってこんな目に！」

雲を出た。

ぐっと、鷹が速度を落とし、止まる。

《これからあなたを離します。恨まないで下さい》

「はあっ!？」

よくわからない思念が頭に語りかけてくる。

こいつは落とす気なのだ。雲より高い、300メートルの上空から。落ちれば死は確実。

(そんなことさせるかっ)

玲治は鷹の爪の中でもがいた。理不尽に殺されるなどもう御免だっ

た。

それでもやはりぎゅちりと押さえつけられたまま身動きが取れない。

（なら―――）

次のタイミングを捕らえるため、体中に力を込める。

そして―――鷹は玲治を離した。

玲治の体が宙に浮かぶ。

「っ！！」

その瞬間、玲治はこめていた力を解放した。

重力に引かれて落ちていく体から腕を伸ばす。

その手は鷹の腿に当たる部分を掴む。

それを支点にして跳ね上がるように鷹の背に乗り移った。

それに気づいた鷹がぴーよると鳴き叫ぶ。

体を下に傾けて一気に落下していく。

玲治を叩き落そうというのだ。

背面飛行、急に加速したかと思えば羽を広げてがくんと速度を落とす。

羽はその構造から、握っても滑る。そのたびに玲治は前に滑りおちそうになった。

何度やっても落ちない玲治をみて鷹が痺れを切らしてくる。

ぴーよろぴーよろと叫ぶ。

（お前がその気ならこっちだってやってやるさ！）

玲治は反撃に出た。

鷹の首根っこにつかまり、自分が落ちないようにする。

そして鷹が背にいる玲治を落とすため、再び背面飛行をはじめたと

き、

「つつさあ!!」

その片羽根を無理やり折り曲げる形で引っ張った。

鷹が痛みにぴいと泣き声をあげる。

両翼のバランスが取れなくなった鷹はきりもみしながら落ちていく。

地面がぐんぐんと迫る。

「死にたくなければ言うとおりにしろ」

「ぴい……」

脅すような口調で言うと、鷹はおとなしくなった。

鷹を解放し、その背に静かに座る。

玲治をおそれてか、もう暴れることはなかった。

「良い子だ」

死に際から辛くも脱して、玲治は汗をぬぐった。

「よし!じゃあ今すぐ街に——ッ、……ここがいい。降ろせ」

鷹は地面に降り立った。

ぶおと砂埃が舞う。

その中に玲治は飛び降りた。

目の前に、銀髪の少女が黒い仮面の男と戦っている様子が浮かぶ。
いや映っていた。

(畜生が……。もうやってられるか)

だが玲治は歩き出した。

街とは真逆の、なんでもない広い広い草原へと。

後ろからは何か訴えるかのように、悲しげな目で鷹が見つめていた。
《ぴい…………》

「くっ!!」

男の放ったエアカッターが左腕を掠める。
服を切り裂いてぴっと一筋の傷ができる。血がにじむ。

人の殆ど居ない所で昼食をとっていたのが失敗だった。

ガリアからの刺客はこんな時を狙って襲ってきた。ずっと遠くから隙を狙っていたのかもしれない。

元居た人々も男が魔法を使い始めたのを見て慌てて逃げていってしまった。

近くの衛兵にでも知らせてくれればと思ったがもう数十分と経つのに応援が来ない。

今戦っている男が一人だけであることから、偏在が通り全てを封鎖して警邏が来るのを遅らせているのに違いない。

緑色に光るブレイドを纏った剣身がリルウを襲う。

「させません!」

クラリスが横から素早く飛び出て、ナイフを突き出した。

ブレイドはリルウから逸れたものの、ナイフは紙のように切れてしまった。

「邪魔をするな!!」

「うっ!!」

横入りに苛立った男がクラリスにエアハンマーを放つ。

数メートル吹き飛ばされたクラリスは気を失って動かなくなった。

「さて……邪魔者はもう居ない」

北花壇騎士がゆっくりこちらを向く。持つ得物がぎらぎらと輝く。

「くっ、デル・ヴィンデ!!」

「無駄だよ。」

男はリルウの放った風塊をブレイドを一振りして掻き消した。

「私の方が上手だ。風の魔法は私には届かない」

「ま、まだ!! ラグー——」

「遅い」

亜とも言わせぬ間に目の前に男が迫っていた。詠唱を中断してレイピアでいなそうとする。

だが焦りに見誤ってまともに受けてしまった。

ポキリと根本から折れる。

同時にそれは杖を失った事を表した。

「何で……」

もう為す術なく、リルウはその場にへたり込んだ。

男の力は前回の非ではなかった。何人もの偏在の中で、一生懸命戦った。

それなのに今、たった一人の男によってあっという間に追い詰められてしまっている。

初めから勝ち目などなかったのだ。

「お父様……………」

目から一筋の涙がこぼれる。

自分が叶えようとしていたものがどんなに遠く、どんなに険しいものだったのかを知る。

「そう言えば、あなたの懇意にしていた少年も見えませんかねえ。主をおいて逃げたのでしょうか、意気地のない」
そんなリルウに追い討ちをかけるかのように言葉を紡いでいく。

（れ、レイジ……………）

これ以上彼には迷惑をかけたくなかった。だから『ついてくるだけでいい』と言った。

彼が側に居てくれるだけで心強かった。だからどこかに行ってしまうわないか恐くて嘘を誤魔化そうとしていた。

でもそれは間違いだった。

彼は初めから、自分を犠牲にしても、私の我が儘について来ていたんだ。

不平も漏らさずずっと。

すぐそこに突き刺さったままの剣が、リルウの心を苛む。

何をしてもし抜けない、玲治の怒りのこもったそれが、リルウの心を苛む。

「なんでそんなに頑張ったのよ……………バカ……………ごめんなさい……………
…ごめんなさい……………」

もう涙が止まらなかった。

「き、さま……………お嬢様を泣かせては……………ただではおきま

」
「黙れ」

バンと破裂音が響き、クラリスはまたしても吹き飛ばされた。
地面に落ちて、ぐったりとする。

「ク、クラリス……」

這ってその元に近づこうとする。
だがそれを男が押し止めた。

「今度はお前の番だ」

仮面越しにでもわかる冷たい声。

「もっと泣くが良い。絶望は私の好物だ。その表情は劇の最後を飾るにふさわしい」

恐怖を煽るかのようにゆっくりと語りかけてくる。

「えう……ひっぐ、ううう……」

「クヒヒヒ……カーテンエンドだ。」
終演

恍惚とした声が無情に響く。

タガが外れたかのような不気味な笑い声。
ゆっくりとブレイドを持ち上げる。

「華を散らしてこれで終わりだああ!!」
断頭台のように振り下ろして

ザシュッ!!

辺りに鮮血が吹き散った。

「……………なんだと？」

「……………え？」

リルウは目をそっと開いた。

目の前に何か……………影？

涙でぼやけてよく見えない。

もう一度、拭いて、見た。

その背中では、自分を見放して、行ってしまったはずの、

朝月玲治の姿だった。

「どう、して……………？——っ！？」

思わず声を上げて、

玲治の右腕から勢いよく流れ出る赤い血を見て言葉を失う。

「あ…、あ……………」

腕の中間から、全部無くなっていた。湧き水のごとき吹き血がリルウの顔に跳ねていく。

「なんでだろうな……………また体張っちゃったよ…ははは、はははははは」

玲治の腕からどぼどぼと鮮血が吹き出る。

痛みを越えてむしろ何も感じられないという風に晒っていた。

「っ！何故だ？！オルケヌスが始末したはずだ！！」

「ヒヨロロ」

見上げれば頭上に鷹が舞っている。

「貴様！主人に逆らって何をした！！」

動揺する男の声も聞こえてか知らずか、

「[○]ピーヒョロロ」

鳴いて飛び続けた。

「くっ！！」

「は、はは、はははははははははははいてえな畜生が糞がふざけるなよてめえぶっころしてやるから覚悟しろ」

踞る少女を庇うようにして、目の前の男を睨め付けた。

「な、なんで……どうして……」

「リルウ！俺はなあ！」

玲治は絶叫した。

「中途半端が大ッ嫌いなんだよ!」

手の甲にルーンの刻まれた左腕を、突き刺したままの剣に掛ける。

「あああああああつつ……！」

真の主を見つけた聖剣のように、

呆気なく引き抜かれた。

そのまま北花壇騎士に飛び掛かる。

「デル・ヴィンデ！」

無数の風の刃が玲治を襲う。

だが玲治は、まるでそれが見えているかのように一閃。
全てを相殺する。

そしてあっという間に接近した男に“片手だけ”でグレートソード
を振り上げた。

「——っ!?!」

男は仮面の裏の顔を歪ませつつブレイドを展開。
頭上からの攻撃に備えて横に構える。
——が、

鋭い痛み。

何かが食いちぎったかのような激しい苦痛が男を襲う。

剣は男の腹を斬っていた。

大剣を振り上げたあの後、玲治はブレイドで防がれることが分かっ
ていた。

だから振り上げた剣の慣性をそのまま利用し、回転して脇腹を狙っ
たのだ。

両刃の大剣はその動きに支障を来すことがなかった。

「ガッハッ」

口元と切り口から血が吹き出る。

「お、覚えているがいい……………必ずや見えるまみえるだろう……………。次はその首切り落としてくれる」

男は頭上を見て舌打ちをし、

なにか呟いたかと思うと一陣の風が吹いた。

反射的に顔を覆う。

次に前を見たときには、もう男の姿はどこにもなかった。

「……………レイジ！」

後ろから少女の声が聞こえる。

なんでまたここに来てしまったんだろう。

鷹との空戦の後、そのまま遠くへ行くつもりだったのに…。

（なんだ……………結局自分はリルウの側にいたいんじゃないかよ……………
…）

自覚したのに2秒。

そして吹き出る血の量に気がつくのにもう1秒。

（わるいな、リルウ……………少し休むわ）

玲治の意識は段々と遠退いていく。

握力がなくなり、剣が手から抜け落ちる。
立つ力がなくなり、ガクンと膝が折れる。

そしてばたんと血が広がる芝生に倒れた。

第十話 遠い日の歌 後半（後書き）

お疲れ様です……。

前書きと同じ感じではじめました。

いやもう、途中で断念したくなりました。

一番初めに台本作ったんですけど、それを基にして書くのが本当つ
らかったです。

駄文ぶり？

自分、不器用ですから（・ω・）（キリッ

この数回、重いですね……。次回からもう軽い海苔でいきます。
ぶっちゃけこういうのばかり見せられても読者はよろこばんだろw
wwです^^;

大変長らく失礼しました、いやほんと。

ああそうそう、この回で明かされていない部分もありますが、次回
で教えます。

というかまあ、分かりますよね？だれが妹かなんて。

第十一話 アトガキ（前書き）

心情描写を描くのは難しい。

第十一話 アトガキ

「え？なんで？」

彼が目の前に現れたとき、最初に思ったことはそれだった。

私の前から居なくなってしまった。そう思っていた。

恐かった。

あの時、彼が私に見せた顔は目に焼き付いたままだ。

恐かった。

礼儀知らずだけど、優しかった彼が離れていくのが。

私が背を見せていたはずのその姿が今は私に背を向けている。

どうして。

どうして神は無情なのだろうか。

目の前には一筋の刃。盾になるものは私との間には何もない。
私は諦めていた。

杖すら失った私にこの形勢を逆転するなんてことはできない。

剣が振り下ろされていく。スローモーション。

走馬灯のように日々の思い出が駆け抜けていく。

厳しいけれど本当はいつも優しく笑っていた父。

小さい頃一緒に遊んだあの子達の笑顔。

いつもそばで微笑みながらいろんなことを教えてくれた母。

私に専属として、姉のような存在だったクラリス。

そして、レイジ。

今まで大変な思いばかりさせてきたなあ。

私に怒るのも当然なのかもしれない。

レイジの言った通り勝手に呼び出したのに、優しく接するなんてそんなことできなかった。

最後に謝れたら良かったのになあ……

え？そこに居るのは誰？

私の思考を黒い影が呼び戻す。

目から流れ出る涙でばやけて誰なのか判らない。

でも

この感じ。分からないわけがない。

彼だ。間違いない。

そう思うとさっきまで流れていた涙が余計に溢れてくる。

「中途半端が大ッ嫌いなんだよ！！」

何かの物語ヒーロー役が言うには少し下手かもしれない言葉。

「この僕が君の美しい顔に傷一つ付けさせないっよっ☆アハハハ」
みたいな気障でかつこいいいセリフではなかった。

それでも分かった。

彼はそんな見栄を張ったり、体裁なんかで来たんじゃない。自分の意思でここに来てくれたんだって。

ああ、彼は最初からそうしてきてくれていたんだ。

その力強い影は悪者を追い払い、ついに私を救ってくれた。

倒れ込んで気絶している彼の側に寄り添う。

腕の傷が酷い。目を逸らしたい。吐き気に襲われて、でも逸らさない。

自分の着ていた服を破り腕の根本辺りをきつく縛る。少しでも時間を稼げば十分に助かる見込みがあるはず。

そしてやっと駆けつけた救援部隊に身を任せながらふと気付いた。

胸が熱い。今まで感じたことのない不思議な温かさ。どうしてだろう。なんだろうこの感じ…………。

でも、

「悪くはないかも…………」

診療所に走る馬車の上、そう呟いた。

そして

あれから数日。

母様たちが昨日王都に到着した。

私たちは再会を大いに喜び、また起きた出来事を話し合った。

私たちが危険を辛くも乗り越えたことを話すと、母上は何も言わずギュッと抱き締めてくれた。

母様たちのほうでは一度獣人が群れで襲い来たらしい。

100以上の足音が響いてそのときはみんな恐怖に震えたという。

でもそんな危機を救ったのはあのコック長だった。

いきなり半裸になったかと思うと他のみんなが呆気にとられるのを余所に「筋肉神が降臨しとうあああああ!」とか叫びながら見る間にオーク達を蹴散らしていったらしい。

そんなこんなを話し、今、大事な話を持ってここにいる。

「はあ、早くレイジの目が覚めてくれないかしら」

窓から外を眺めつつ、溜め息を吐く。

朝日が昇って、既に数時間。

空気も暖かくなる頃。

レイジは未だに起きない。

血が流れすぎたためか、意識が戻るのは時間が掛かると医者も言っていた。

「うわあああああああああ!!!!!!」

「ッ!!」

そのとき、レイジがガバッと起き出した。

驚いて体ごと飛び上がってしまう。

「レ、レイジ！良かった！心配してたのよ」

「俺の腕！俺のツ！うってゲボウツ！」

レイジは半狂乱になにか叫んだかと思うと頭を抱えてまたベッドにたおれこんだ。

「むっ、無理しないでよ！腕が治ったとはいえ流れた血までは完全に戻ってないんだから！」

「ああああ……リルウか。俺はもう駄目だ……。お迎えが来たらしい……。三途の川が見うるぞ……。小石……鬼が流されてる！？」
病の床についたような事を言っただかと思うとまた暴れだすレイジ。
なんかへん？

「鬼が！舟！流されてる！……俺の腕はどこだ？」

ふと我に返ったかのように左手で右腕の辺りをまさぐる。そして

「治ってるじゃねえか！？」

目を驚きに見開いたかと思うと、その右手を確かめるかのようにそつと撫でていく。

「ええ、今いるこの診療所に素晴らしいお医者様がいます。なんでも『私に治せないものはない』とか」

「それなんて上条さん。」

「え？」

「いやこっちか？こっちの方なのか？」

そう言うのと左手を高く上げたかと思うとまた胸の辺りまで下ろすという動作を繰り返している。

「葉漬けはごめんだ」

「な、なによ。よく分からないけど……………」

「それともあれか？ アン○ン○ンか？ 俺がそうなのか？ 『ア○パ○マン！ 新しい腕よ！』とか言いながらバターなお嬢さんが怪力でぶん投げたのがこの腕なのか！？」

「ねえ……………「アソパソマソ奥が深けえよ！ やなっさんどんだけ思いついてんだよ」「ちよつと」超音速で飛ぶパンとかマジパねえww テラワロタ」……………」あれはある意味チートの先駆――

「ドッシャー！！」「グボゲブチョ！？」

「と作者に……………言わされました……………ガク」

↓

掌底アッパーを食らわされたレイジはそのまま後頭部からバゴツ！という小気味良い音を立ててベッドに倒れた。

「なんだ、作者様に言わされたのね。なら仕方ないか、後でじっくりオハナシしてきましょう」

ふうと溜め息をつく。

「さて……………じゃあ気を取り直してもう一度……………」

“パチン”（※指鳴らしです）

「うわあああああああ！！！！！」

意識が戻り、玲治はパチリと目を見開くと大きく叫ぶ。

「レ、レイジ！良かった！心配してたのよ？！」

「あ、ああ……リルウ、怪我はないか？」

リルウは首を振る。

「あなたのお陰で私はなんともない。クラリスも大きな怪我はしてないから大丈夫よ。そうそう、皆」

「そうか……。あいつはあのまま逃げていったんだな？」

リルウは頷きで答えを返す。

「…そういや、俺の腕治ったんだな」

「ええ、今いるこの診療所のお医者様が腕利きでね、あつという間とはいかなかったけれども元通りにまで付け直してくれたのよ」

「そうか」

沈黙が流れる。

なんと言って続ければいいのかわからない。

「……………」

「……………」

「…………あのさ」

「？」

「あんだだけ威勢の良いことお前に向かって叫んだのに怒らないのか？」

「え？」

「確かに俺は無理矢理ここに来させられた。巻き込まれで命を狙われたりもした」

話が進むにつれ、リルウの顔が曇っていく。

「でもさ、俺だけが正しいかと思えばそうでもない」

その言葉にリルウが『？』といったふうに顔をあげる。

「何て言やいいか……あのすこし前に北花壇騎士に会ったんだ。

ただの偏在の方ですぐに消えちまったけどさ。その時にそいつが言ってたんだ。『彼女の意思を汲み取れなかった』って」

玲治の話はまだ続く。

「その後ゴタゴタやられて大変だったけどさ、考えたんだよ、どういう意味なのか」

「……………」

リルウは黙って玲治の言葉に耳を傾けている。

「俺に余計な負担掛けたくなかったんだよな、『付いてくるだけでいい』って言ったのは」

「！」

リルウは驚きに目を見開く。

「思えば町で子供と遊んだときも、使用人と話すときだって、いつもお前は身分とかそういうのを傘に着たりしないで気を遣ってた。そんなお前がそこまで酷いこと言うわけがないよな」

「……………すまなかった」

「……………顔をあげてよ。男がそんな簡単に頭下げるようじゃ柔だわ」
「でもやっぱケリは付けさせてくれ！殴られても俺は構わない！」
顔は毛布を向いたまま、玲治は男として叫んだ。

「…はあ」

リルウは呆れたように溜め息をつく。
椅子から立ち上がる物音が聞こえ、近寄る気配を感じる。

いくら自分から言ったとはいえ、殴られるのは怖い。次に来るであろう衝撃に思わず目を瞑った。

そして――

「え？」

……………背に小さな掌を感じる。ぎゅっと抱くような力を感じる。
頭の上には一際柔らかいなにか。

「今顔上げたら本当に殴ってあげるから」
頭の上からリルウの声がする。

ということやはり――？あ…それか…………。

未知の体験に思わず顔が赤くなる。

「許すも何も感謝で一杯だわ。数えてみればこれで三度も命を助けられてるんだから。殴るだなんて私はそこまで薄情じゃないわよ」

「そ、それは良かった」

色々と動揺して、それが言葉にまで現れてしまう。

リルウも相当恥ずかしいのだろう。普通に話しているようで声が震えている。

やはりというか初ですなあ。

いや初なのだった。

「ねえ」

「な、なんだ」

「も、もしよかったらただけど」

その言葉に心無し熱いものが混ざり始める。
背に置かれた掌に力がこもるのを感じる。

「わ、私と、わ、わわた私と」

「ん？」

………こういう感じ、前にもあったなあ。

「わた、綿、綿谷、ワタワタしと！」

なんとなく展開が読めた。

あれだろう、姫野の時といい、今回も“そんな感じ”を匂わせておいて――

「私とっ！ 私っの使い魔としてまた一緒に居てくれる？！」
ドッキリだ！

「もっ ちろんだとモ ☆俺はいつまでもお前の使い魔の『まま』でい
るぜ！」

予想大当たりに大満足の玲治は堂々と気障風味で答えた。あ、キザ分はこの「☆」の部分だからソコんとこヨロシク★

.....

なんでだかりルウは黙ったまま

ドン！

「っ
て
う
お
！
何
す
る
！」

急に突っ返された玲治はベッドに後頭部DIVEした。

「……べつに」

「いやそんな不機嫌な顔されてはいそうですかで終わらないだろ。何かあったのか？」

「知らないっ！」

リルウは耳まで赤くしたままそっぽを向いてしまった。

「解らん奴だ。自分から抱きついてきたくせ、なに
——ちよ、やめ!？」

見ればいつの間にか帯刀もしていなかったはずのレイピアが……………。

（補足説明、似ているがコリシマルドという刺突剣です）

ヒュン！

「んのわっ！」

鋭い風切り音とともにレイピアが玲治めがけて飛んでくる。

玲治はそれを間一髪で避けた。

ザクンと後ろの壁にレイピアが突き刺さるのが見える。煉瓦だよな
おい…………

「あつ、危ないだろ！扱いには注意しろよ！」

「うるさい！もう一回腕切ったげるからこっち来なさい！」

「マジ勘弁！」

騒ぎも一段落し、リルウの意味不の怒りも静まった頃。

「あのさレイジ」

「……………なんだ」

引っ掻き傷だらけになった顔腕を擦りながらむすつとこたえる。

「学院に行こうと思う」

「おお、引きこもりもついに学校の楽しさに気がついたのか。善き
かな善きかな」

「あのね……………」

「……………続けてくれ」

「ええと、私、いままでは父上の仇討ちとか色々考えてて行こうとは思ってなかったの。でも気づいたわ。私はまだ未熟だって。あのボーンとかいう男は相当な手練れなんだろうけど、あれにいとも簡単に手玉に取られるなんて、復讐だなんて馬鹿みたい。やるならもっと沢山学ばなくちゃって思ったの。」

「そうだな。否定はしてやらねえよ。父親への気持ちは秤にかけられねえからな」

「あと、私の妹も苦勞してるのに私だけっていうのが学院から足を遠ざける理由だったのよね」

「お前、そう言えば妹いたのか？」

「従姉妹よ。彼女も私と同じように虐げられていたんだけどその子がここトリステインの学院にいるって分かったのよ！」

「ほう良かったじゃないか。名前は何て言うんだ？」

「彼女は王族で姓はオルレアン。名は――」

「シャルロット」

新しい朝を告げる鐘が鳴り響いた。

第十一話 アトガキ（後書き）

黒蜜＞フヒヒ。Sir1000ww。

おはようございます。こんにちは。こんばんは。Hi! アンニョンハセヨ。

最近東方にはまっています。

二次小説をおかきになる他の作者様、ほんつつと素晴らしい。和は私も好きです。音楽は三味線とか和みます。

んで読んでいて……

自分の物語の糞っぷりに愕然としましたorz
あれはもう文才とかそんなレベルじゃないです。
もっと恐ろしい、作者様の片鱗を味わいました。

話は戻りまして、

今回あとがきでした。

これで二部目は終了ってことにしましょうか、切りいいし。

次回から長らく殆どでていなかった姫様を描きたいと思います。
待ってるかたもいらっしやるとおもいますので。

こんなダメ作者ですがすみません。感想、誤字報告、批判お待ちしています。それではまた次回にあいま「なーに平和に終わらそうとしてるのかしら？」——「この声は!？」

? a>聞いて驚け! 見て笑え!

? b>前置きはおいという本題。私リルウ。今日は大事なオハナシがあったきたわ

黒蜜＞はい。お出口はあちらになりますー

リルウ＞うん、ありがと。……さりげなくスルーしようとしても無駄よ？其処までバカじゃないから

玲治＞俺は普通にスルーされとるがな。帰るわ、んじゃ

黒蜜＞あはは……なんだろ。背中がすごく寒いや。風邪かな？僕もはやくお家に帰らなき

“ガシッ”

リルウ＞今日は中々面白い話作ってくれたわねえ？お陰で私の使い魔が痛い子になったじゃないの

黒蜜＞いやー、ボケキャラいないもんでどっか犠牲にしないと成り立たないって言うか

リルウ＞ちょっとオハナシしましょうねー

黒蜜＞うわーだれかタス

第十二話 なんとラクエスト!! (短) 前半 (前書き)

ほのぼのとしたものを描きたかった……
それだけだったのであります。

手抜きですみません日空けまくってすみません (汗)

第十二話 なんとらクエスト!! (短) 前半

勇者はいざ冒険の旅へと出かけたのだった
——
とそんな言葉からはじまるストーリー、今からスタートなう。

二人の勇者ははじまりの町を出、壮大なBGMの中、草原を突き進む。

近隣にあったキャラクター像に対して5マス程度しかないちっぽけな森を突き進み、
次の町へ——

と、突如画面が黒く点滅しだし、緊迫した音楽が脳内に流れ始めた。

《目の前にモンスターが現れた!!》

「おお、はじまって早々もう敵ですか……さてルウちゃん。これは一体なんですか？」

片方の勇者がもう一方に話しかけた。

「一杯いるわねー」

「確かにぞろぞろやって来ますがこんな生き物初めてですよ。さ、

触っても大丈夫ですか？」

好奇心を刺激されたか、手をワキワキ、目をランランとさせている。

「止めておいた方が良いわよー。その子達、犬みたいな顔してるから分かると思うけど、集団で生活していてね」

「なるほど。確かに野生の狼や御犬様も縄張りを作ったりしてそこで暮らすんでしたね。部外者は追い出したり時に噛み殺したりして」

「ビンゴ♪その通りよ。つまり私たちね」

二人の少女は背中をお互いに合わせる形で回りを見回す。

コボルトAがあらわれた。コボルトBがあらわれた。コボルトCがあらわれた。コボルトDがあらわれた。コボルトEがあらわれた。コボルトFがあらわれた。

「今猛烈に殺意を向けられてるわね……………」

一番先頭に立つ、背丈は人間の子供ぐらいの、犬の頭をした生き物が得物の棍棒を脅すように地面に打ち付けている。

「グルルルル！！」

「ウグルル！」

「モケー」

地を揺るがす唸り声が辺りに響き渡る。

ある者は威嚇するように、またある者は美味そうなものを見るかの目でこちらを向いている。

顎からよだれが滴り落ち、なんとも不気味である。

「どうする？ 私としては同じ土地に生きる者としてあんまり殺し合
いはしたくないのだけれど……」
長い金髪を腰あたりにまで伸ばした、エルフのルクシャナがいささ
か気乗りしないと言った風に肩をすくめる。

余談だが、エルフは普段、穏便な生き物である。ただ、人間が「こ
こ、俺の土地ww異論は認めねえよkswww」と粹がっているが
ため争うようになり、お互いの種族を憎みあうようになったとか。
そりゃ当然である。なにせ『俺のものは俺のもの、お前のものは俺
のじゃない奴。勿論俺全部』の精神には誰だろうと怒る。ジャイ○
ンもびっくりである。

「私も同感……というかそんな殺しだなんて滅相もない！！ 生類
は憐れむべきですよ」

黒髪のショートヘアが特徴の、活発そうな女の子、姫野が頭を振る。

「そうよねー、こんな所で行使するのもなんだけど仕方ないか。」
ルクシャナは自分の手を前にかざす。

「眠りを導く風よ！ 我に相対す敵を眠らせ——」 「待って下さ
い！！」 「え？」

精霊の力を借りて行こう、ずばり精霊魔法！ を行おうとして引き止め
られた。

隣からの制止の声に、伸ばしていた腕を下ろす。
不思議に思って顔を姫野へ向ける。

「ど、どうしたの？」

「少しでも時間をください!」

姫野は背負っていたバックを地面に下ろすと、中をぐそぐそ何かを探し始めた。

コボルトが何で攻撃してこないかって? 訊かないで下さい。大人の事情です。

「んーと、たしか昨日かったからこのポケットに……あつた!!」
嬉々とした表情になると、それを手に立ち上がった。

「なにそれ?」

「ジャーキー」

その勇姿は己が利き腕たる右腕に、そして左腕に得物を携え、敵と相対した。

まさしくその姿は鬼神双刀、己が身一つで乱世を生き抜いた剣豪の生き写しである。

少女は瞑想をするかのように目を閉じた。

そのただならぬ威容にコボルトの群れに緊張が走る。

「グルルル!!」

「グルッ! ガアア」

「グルルルアアッ!!」

先頭に立っていたリーダー格のコボルトが片腕を前に振り下ろした。瞬間、残る5匹が姫野へと駆け出した。

「はああああああ……」

《カツ!!》

「おおお手ツ!!!!!!」

「ワンツ!!」

コボルトはぴょんと勢いよく姫野の足元に座り込んだかと思うと、尻尾を引きちぎれんばかりに振り倒し、御犬様よろしく右手を姫野の手に置いた。

「よくできましたーご褒美ですよー」

「ワンワン!!」

与えられたジャーキーをむさぼるようにして食べていく。まこと、幸せそうな顔であった。

「うっそ……」

ルクシャナは驚きを隠せない。

少女の掛け声一つに、この辺り一帯を支配していた、コボルトの群れがいとまたやすく陥落したのである。

「グルルツ? ガルル!!!!」

いや、もう一匹いた。

コボルト・リーダーである。

ドン・コボルトは突然の配下の心変わりに動揺を隠し切れず、叫びうろたえていた。

「グルルア!!!! ガルル・・・ガル! (お前ら一体何をしている!!! はやく彼奴を殺らんのか!)」

とそのとき、少女の目がこちらを向いた。

「グアツ!? (なっ!?)」

射抜くような視線。その瞳から発せられる力はドン・コボルトの身体を押しつぶすかのように押し寄せてくる。

どっと汗が噴出す。

「グルル！グルルア！（この人間め！許さんぞ！）」

ドン・コボルトは自らの威信にかけて、尚少女に対抗しようとした。

すでもう無駄だと分かっている。ただ、ここで負けたら…何かを失う。失ってはいけないのだ。絶対に。

そんな思いで棍棒を強く握り締めた。

「おや、まだ抗う力が残っていたのですね」

少女が元自分の配下であったコボルトたちから身を離し、こちらへ歩いてきた。

冷たく睨み付けるような眼光（そう思っているだけ）。その身体全体から幾多の戦場を切り抜けた歴戦のオーラが放たれている（ように思えただけ）。

「グ…グアアア…！」

ドン・コボルトは意を決し、捨て身の覚悟で少女に飛び掛った。にやり。

そんな擬音が響きそうなくらいに少女は顔をゆがめると――

「ほーら♪とってこーい」

「ワウーン…！」

ジャーキーを投げた。

自然と身体が、飛んでいくジャーキーへ向かっていくの感じながら、ドン・コボルトは思った。

嗚呼、これは祖先様の思し召しか、本能に抗えなかったのか…いずれにせよ我々は種族の誇りを失ったのだなあ、と。

《コボルトの群れをたおした!!》

「まさか食べ物一つで切り抜けられるとは思わなかったわ……」
ルクシャナが感嘆の声を上げる。

「『ほら、怖くない。お腹が空いていたただけなんだよね。』ってそんな思いで立ち向かったらすんなり出来てしまいました」

「ああ、なるほどね」
なにがなるほどなのか。

「ところでさー」

「うん？」

「後ろになんかぞろぞろと付いてきていますがこれもその副作用？」
後ろには先ほど餌付k・・・いや、討伐したコボルトたちが御犬様よろしく四足歩行で歩いてきている。

二本足だったのだが・・・退化したのだろうか。ただその尻尾の振りようが種族問わず、可愛い。
思わず笑みを浮かべる二人。

「ねえルウちゃん！」

「駄目よ？ ペットを飼うにはお世話が出来ないと。それにこんなに沢山面倒見切れないわ」

姫野のそのキラキラとした目に本心を見抜いたルクシャナは即答する。

「えー、ちゃんと世話するから、ね、ね？」

「めっ！」

「そんなぁ……」

しゅんとうな垂れる姫野。

それを見て流石に言い過ぎたかと思ったルクシャナ。

「……………駄目と言ったらだめなんだからね？」

「……………」

「……………」

「…お願い？」

「ちょ、上目遣いなんて殿方にでもやっていなさいよ?! 分かったから! 飼ってもいいから!! だからそんな目で私を見ないでー!」

森の中、上目遣いのその暴力的な力に免疫のないルクシャナは思わず赤面、木霊するような叫びが響き渡ったそう。

《万歳!!コボルトが仲間になった!!》

第十二話 なんとらクエスト!! (短) 前半 (後書き)

みんな知っている!! 《ピーー》クエスト!!

スママセン!! 殴らないで下さい! そんな目で見ないで下さい・・・

因みにアホな娘という設定はありません。極めて奇策な持ち主であります。発想が常人と離れているだけです。

次回は多分(ん?) 真面目に書くんで。どちらの主人公の話もそれなり進めていこうとおもいますんで><

これが何かの話に通じれば……とか無責任なことをいってみたいり
……

受験生の皆様、センターお疲れ様でした。

私立の方もまだあるのか。どちらもいい結果であると願っています!

See you again. I'll back
soon.

第十三話 なんとらクエスト! (仮) 後半 「落ち着け」 (前書き)

前回の話はこれで完結。思い返すと何を書きたかったんだと思った
り…………

まああれですね、ギャグ要素です。

パッチを当てて修正しました。

Ver. 1.01です

第十三話 なんとラクエスト！（仮） 後半 「落ち着け」

「名残惜しいけど私はこれ以上一緒には行けないわ」
ルクシヤナが寂しそうな顔で一步先に立っている。

「叔父様たちにも無断で来ちゃったから多分みんな怒っているわね」
そう言ってチロと舌を出す。別れが惜しいのを悟られたくないのか、
姫野にはなんだかそれが無性に物悲しく映った。

「ええ、私こそ本当にお世話になったわ。見ず知らずの私にここまでしてくれるなんて」

「フフ、こちらこそ色々と学ぶこともあったから感謝しているわ。
お互い様よ」

二人はしばらくの間見つめあった。

「じゃあ……もしまたどこかで会えたら……会えるといいね」

「ええ。あなたも探してる人見つかるといいわね」

遠退いていくルクシヤナの後ろ姿が見えなくなるまで眺めていた。

「さあ、いきましょか！」

さて、犬を飼うことになった姫野。

犬だよ。

イヌを捕まえたと言う設定になったんです。うん、そうしよう今決めたもう決めた。

さて、そこで問題が発生する。

未開の地が多く、人の手が加えられていないハルケギニアでは自然が豊富である。

また、犬衆は元来自然に暮らしてきた。危機に際しては自らの知恵と力で切り抜ける。そしてその飢えた腹は自らの手で潤す。つまり、鹿の群れや、自分等と体格に差がある亜人すら狩りとる。集団から離れ孤立した子供を狙うのである。

そのイヌ科特有の統率のとれた狩猟方法は、まさに脱帽すべき点だ。そんなことから、食事引いては生命の面の扶助はコボルトには必要がない。

では一体何が問題なのか。

「そんなもん、ここを通してたまるかあああああああああああ
！」

という端的且つ簡潔な言葉 by 衛兵 at 関所。
お分かりいただけだろうか。

「いや、わからない」の方には関所の衛兵が佳奈達の前で検閲しているところを想像してもらおう。

亜人なんて誰が通そうか。ナマモノ取扱注意である。

「そ、そこをなんとかありませんか？ いぬですよ？ 犬。」

姫野には何かフィルターが掛かっているらしく犬に見えるらしい。まったく、どう見てもイヌじゃなくてコボ r . . . イヌでしたねはい。

「貴様らなに考えておるのだあ？！我々人間にとってはもう何百年も前から仲間を殺されてきた仇敵なのだぞ！」

「……………」

そう言われると姫野も黙り込むしかない。人の命が失われていくのは悲しいことだからである。

「分かったのならそいつらはこっちに受け渡せ！」
衛兵の一人が麻袋と縄を取り出して近づいてきた。

「一体何を……………？」

「決まっているだろう。殺処分だ」

「殺処分ですって！？」

殺処分。

国、地域に問わず、町の中に飽食に残った残飯を漁る犬猫が増えはじめた。その数を減らすため行われるようになった、いわば現代の大量殺戮である。時に毒の混ざった餌を食べさせ、毒ガス室に入れて殺す。

…嗚呼！なぜこんなにも悲しい事が今も行われているのでしょうか？我々は何故同じ過ちを繰り返してしまうのでしょうか！」

「……一人で何をやっている？」

衛兵は呆れたような目でこちらを見ている。

姫野は演劇よろしく片腕を頭上に持ち上げ、もう片方を自分の胸に当てて立っていた。

「コホン」

場を紛らすように軽く咳払いをする。

「お願い！もうやめて！」

姫野は取り乱した風になって、衛兵の腕にしがみついた。

「ええい、やめんか！」

「非暴力から本当の自由が生まれるんだってマハトマも言ってたじゃないですか！」

「知らぬわ！さっきから訳の判らんこと言いおってからに。ややくそ！邪魔をするな！」

焦れた衛士が姫野へ腕を振り上げた。

「何をしている？」

そのとき、後ろから重々しい声が聞こえた。

振り返ると一台の馬車とボディーガードらしき数人がこちらを向いて立っている。声の主であるふくよかな男が馬車から見下ろしていた。

「民を守るべきお主が女子供に手を加えてどうする。一体何があっ

ただ」

「はっ、こちらの方が亜人を持ち込みたいと申しはじめまして」
衛兵たちは直ぐ様佇まいを整えて敬礼をした。こちら辺を牛耳る誰かだろうか。それとも噂に聞く貴族と言うものだろうか。

「ほう、亜人とな」

男は興味を持った風に身を乗り出した。

「そのコボルトがそうなのか？」

「はっ、左様です」

「ふむ」

男は暫し考え込むように顎に手をやっていたがいきなり豪快に笑い始めた。

「卿?! 一体どうされたのですか？」

連れの一人が慌てて駆け寄る。

「いやいや。時代の先端を逝くものがまさか無産階級にも現れようとは思わなかったもんでな。その見慣れぬなりの少女よ。お前が亜人どもを運んできたのか？」

「え、あ、はい」

「面白い! なら、ワシにソイツ等を譲ってくれ。金なら出そう。最近、貴族の間では亜人のペットが流行っているらしくてな。それに乗っかってみようと言うわけだ。」

「それは多分貴族派の連中のことですよ……。それに一体どうやって運ぶのですか？」

「お前たちが魔法なり使って運ぶのだ。なあに、すぐそこがトリスタニアだ。さほど苦勞はしまい。……で、売ってはくれんかね？」

「そんな折角のペットが………」

「犬の面被った異形児みたいな格好しとるコボルトをペットにしようなど周りに気の触れたと思われるぞ。」

「た、たしかに……」

姫野は目頭が熱くなるのを感じた。もしかしたら自分は夢見ていたのだろうか。郷愁というか、小さい頃イヌを飼っていた思い出がこんな行動を取らせたのだろうか。

こんなところを朝月君に見られたら恥ずかしくてもう面と向かえないよ。

姫野は涙を拭き取り、顔を上げた。

「分かりました。あなたにこの子達を預けます。大事にしてやってください」

「ああ。きつと幸せにして見せる」

「嗚呼、卿は気が触れられたのだ………」

ドナドナドーナードーナー荷馬車がゆーれーるー

こうして彼女は、淡い胸の痛みを乗り越え、また一段と成長するのだった。

という謎の感動オチ

第十三話 なんとらクエスト！（仮） 後半 「落ち着け」（後書き）

イイハナシダッタナー（；ω；）

別れとは辛いものですねーうん。

さてグダグダとやって来て且つ更新が襲い、黒蜜ではありますが、次回から学院に潜入する話をします。

ええ！学校ですよ！これで原作キャラとようやく……；ω；

G o t o s c h o o l . 学校へ行こう！

まだまだ未熟ですがこれからも応援よろしくお願いしたいです。

告知・PVが10万越えましたーヤター

第十四話 『SSS』始動! その名も『School life』がSt

お久しぶりでございます。黒蜜です。

7日振りですね、申し訳ない。

言葉選びとか話の構成にエラク時間が掛かってここまでぐだぐだうわっしょーい

ちなみに時間配分は六日間は精神統一に使いました。書き上げは今日をつかつ、やめてー殴らないでー!

ハルケギニア。

朝月玲治、その存在がこの地へ現れてから早一ヶ月。

彼は何でもなかった日常から切る離され、地球とは違う別の世界へ転移した。

そしてガリア王国という見知らぬ国で、ひとりの少女に出会う。

彼女は彼の主人であると宣い、そして、彼に接吻を施した。

これが――後に世界の命運を大きく変え、史実と異なる事象を引き起こす引き金だとは――誰も夢にも思わなかったであろう。

貴族。軍人生まれ。魔法使い。

支配階級に生まれた彼女、リルウ・ヴェルシャル・ド・ノアイユはまた、統治者であるガリア王ジョゼフに命を狙われることとなる。幼少よりの愛着ある家も、今となっては瓦礫の山。

敬愛する父、数多くの犠牲を払い、隣国トリスティンへ落ち延びてなお暗躍部隊の動向に怯える日々が続いた。

そして最大の転機が訪れる。

『亡骸』と呼ばれたガリア北花壇騎士。そのたった一人の力が、修羅場を幾度となく潜り抜けてきたはずの彼女を、いともたやすく振じ伏せてしまったのだ。

父の仇をとるにはあまりに無力であることを痛感したリルウは、そして自分の側に常に居てくれた、護ってきた少年を見つめ考える。

もしかしたら自分は、未熟であつたのかもしれないと。

貴族たるものとして、一つ家の長として、一人の魔法使いとして、そして一人の少女として。

彼女は決心した。

学びの戸を叩くのだ。

今度こそ迷わない。いつかの安らぎを勝ち取るためでもある。己の切なる願いを成し遂げるため邁進するのだ。

都の鐘は鳴っていた。遠く彼方平原まで響き、背中を押すかのよう
に。

そう、朝が始まったのである。暗い夜は過ぎ去った、これから本
当の一日の始まりだ。

第十四話 『ゼロの世界へようこそ！学院入り編』

もうまもなくお昼時を迎えようかと言う頃。授業の合間の教室では
ある噂が花を咲かせていた。

『おい、知ってるか？新しくくる転入生の話』

『知ってる知ってる。噂じゃかなりの美少女らしいぞ』

『それは本当かね？ 是非ともお茶をご一緒したいね！』

『はっ、二股かけてフられたお前が何を言う。お前なんかに見向きもしないって』

『な、なんのことだかさっぱりだね……ハハ、ハハハ……』

「ふーん。美少女ねえ……。どんなに綺麗なのか見てみたいわ。ま、私のこの美貌には敵わないでしょうけど。ねえ、タバサ？」

五芒星をあしらったマントを身につけ、白いワイシャツにプリーツスカートという学生姿の赤毛の女性が、隣に座り黙々と本を読む少女に同意を得ようとしつつ、誇らしげに髪を払う。

女性らしい甘い色香、豊満な体は、地球であるところの未成年に関わらずどこか大人びた雰囲気を纏わせている。

「……………」

タバサと呼ばれた少女は、だがそんな親しげな彼女に返答もせず、手に持った本から視線を変えようとしない。

前者の女性が燃えるような赤毛なのに対し、こちらは澄んだ蒼い髪。眼鏡を掛けたその横顔は例えるなら理知的な図書委員の少女といったところか。

寡黙で読書好き、いつも自分だけの世界を持つと言う点、あながち例えも間違っではないだろう。

「その転入生は天性の才能の持ち主って言うけど本当かしら」

「私は私。他人は気にしない」

ふっと顔をあげ、ぼそりと呟く。かと思うと、またすぐに本に視線を戻した。

「貴女はいつもマイペースよねー。そういうところが良いのだけれ

ど」

そう言ってキュルケはタバサの頭を撫でた。心なしか気持ち良さそうに目が細まる。

そんな仕草を可愛いと思いながら、キュルケは今巷（学院）を賑わせることについて考えていた。

どこからそんな情報が来るのか知らないが、最近は転入生の話が学院中を賑わせている。

曰く、王家の忘れ形見である。

曰く、多学多才で才色兼備。その魔法は山をも砕き竜をも怯えさせる威力を誇るが、無骨さなど微塵も感じさせない可憐さを持つ。

曰く、その姿を既に目撃した生徒もいて、あれは雪に覆われた御山の峰のように綺麗な銀髪を棚引かせていたという。

曰く、そして今学院長室にいて、話をしているところであるとか。

王家の忘れ形見だなんて、よくある出任せも良いところじゃない。しかもそんな化け物みたいな魔法が使えるだなんてどれだけ凄い宝石よ。噂なんて信じないけれど要らぬ恨みを買いそうね。

と赤毛の少女は一步離れた目で事を見ていた。情報を鵜呑みにするような阿呆ではないのだ。

「ねえルイズ。今度の転校生、あんたと違ってとっっても魔法が上手なんですって？」

「なによキュルケ。バカにしてるの？ バカにしてるのよね？」

「あら、ごめんなさい。そんなつもりじゃないのよ？ 別にあなたが魔法が使えないから嫌味で言ってるんじゃないって、ただ小耳に挟んでおこうと思っただけよ」

「きい！ やっぱバカにしてるんじゃない！」

桃色髪の誇りと家柄“だけ”は一人前の少女、ルイズが癩癩を起こしてこちらに向かおうとする。

「まあまあ、落ち着きなよー」

「何よサイト。ご主人様を無視してキュルケの肩を持つって言うの？」

「いやいやー、ルイズには無い胸に変わりまして怒らない旨を伝えるべくーギャアアアー!!」

それを、隣に居た変わった服装の少年が宥めようとして（?）、むしろ油を注いで逆に鬱憤晴らしに蹴られまくっている。

つい最近には、極機密事項で戦争下のアルビオンまで遠征してきたという功績があるはずだが、どうやら主人である彼女には認められていないらしい。

「ホント、からかい甲斐のあるわねえ」

この女、情報の活用には無駄がない。

（なんにせよ、私たちには結局関わりのないことかもしれないわね）
いつものようにこの犬がっ！　犬の分際で！　とか叫びながら少年を蹴り倒している様子を、面白そうに見詰めていた。

そして丁度その時の話である。

中央塔天辺に位置する学院長室。そこに二人の少年少女が椅子に座って白髪の老人と向かい合っていた。

「ふむ、ワシがこのトリステイン学院の校長を務めておるオスマン
ぢゃ」

目の前に居わす威厳のある風格の老人がこれまた重々しく名乗った。

「王宮から転入の旨は聞いておる。ローランスといったかね？」

「はい。私がローランス・シャトランです」

学院長の問いかけに“リルウ”が答えた。

入国の条件。もうかなり前の事で読者殿は忘れているかもしれないが、偽名で過ごせと言う命だった。

王立学院の手続きのために、王都で申請をしていたわけだがどうやらすでに伝わっていたらしい。

「ふむ」

オスマン学院長は一つ唸りを上げると、腰を深く椅子に降ろした。

「そしてこちらが私の使い魔のレイジです」

「どうも、これから世話になると思います」

玲治は歳上に敬意を表して丁寧な口調で言った。

「うちの主人が迷惑掛けます」

「フオッフオツ、面白いことを言うのう」

オスマンは顎髭を手でしごきながら愉快そうに笑った。

「正しくは、君の方が主人じゃね？夫婦的に」

「ハハハ、これは一本取られましたね」

「フオッフオツ」

なぜか打ち解けたように笑う老いぼれと野郎。

少女のひきつった笑いが怖い。おお、後が怖い。

「お主たちはガリアからの留学生と聞いておるよ。ここ数年内紛が

絶えずさぞ辛かったじやろう？」

「え？なぜご存知で？」

「おお、慌てなくてもよいぞ」

一瞬ドキリとしてひきつっていた顔がさらにひきつるリルウだが、目の前の老人が大して驚きふためく様子もなかったので、疑問の目でじっと見つめた。

「ワシのは節穴ではなくてな、君が高貴な生まれであることは一目で見抜けるわい。オヌシのような者がただの『城守』な訳があるまい。何か深い理由^{わけ}があつてこそそう名乗っているのだとな」

どうやら偽名を使っていたことは直ぐにばれたらしい。

リルウと玲治に緊張が走る。

オスマンは再び口を開いた。

「何にせよ学院という場所には遠い国々からそれなりの事情を持った者が集まってくるもんでな、ワシは詮索などという賢しい真似はするつもりはないのじゃ。

君の過去を問うつもりはない。これからはワシの生徒の一人じゃ。遠慮は要らん。存分に学院生活を楽しむといい」

そう言つてオスマンは慈愛に満ちた笑みを浮かべた。

「トリスティン学院にようこそじゃ。教師を代表して歓迎するぞ」
二人は一樣にほっとする。

「今日は長旅で疲れたじやろう。自室で休むといい。明日から授業に出るのじゃ」

二人の少年たちは促されるままに外へ出ていった。

カチャと戸の閉まる音が聞こえ、後に静寂がおとずれる。

オスマンは外に誰もいないことを確認するとため息をついた。

自分の腰掛けに深々に体を沈めると、キセルを取りだして吹かし始める。

吐いた真っ白な煙が天井へとゆっくり上っていった。

「……全く宮中の奴は何をかんがえておるのやら。只でさえガリアは国内情勢が緊迫しておるに、気を引くような真似をして」
学院長室の窓から外を見下ろす。

何人もの生徒達が広場で戯れているのが見える。

「ああ、ワシは疲れた。このまま辞めて遠くに行ってみたいのう……
…のう？ ミス・ロングビ……」

かつていた尻好みの秘書の名を呼び、それに気づいて口をつぐんだ。

「……新しい秘書でも雇うかの」

数秒感、懐かしむような沈黙が流れ――

「今度のは胸の大きな秘書がいいのう！」

学院の天辺。現役助平の夢を見ているかのような笑い声が響いていたと言う。

「ついに！　きたー！」

学院寮に割り当てられたリルウの部屋に、歓喜の叫びが響き渡った。

「やけにテンション高いなおい。さっきまでの真面目そうな空気はどうした？」

「そんなものはそこら辺に置いてあるわよ！」
興奮しているのか、やけに饒舌である。

「その置いてあるってなんだよ？俺が拾っておけばこの場は凌げるのか？」

「匙は任せたっ！」

そう言うとりルウは据え置きベッドに飛び込んだ。

「わふー」

なんというか、ハイである。

「はあ……苦勞してたんだな」

玲治は生暖かげな優しい目で見詰めていた。

つい数日前の事。北花壇騎士の襲撃を捨て身の勢いで防いでから日も新しい。

そういえばあの時なぜか従順だった巨大な鷹は、腕をも直した診療所の直ぐ傍にじっとしていたのを見つけた。しかし札を言うつもりで手を触れた瞬間、ハッと我に返ったように大空に飛び出していた。

主人の元に帰ったのか、後の行方はわからない。

（まあ、考えるだけ無駄なんだよ……ファンタジーなこの世界、何が起るのだから）

あれは鷹の元に神のご意向でも降りたとか、取って付けたような理由で玲治は納得することにした。ま、あんなこと二度と起こるまい。

「あーっ!?!」

「うおっ!?! 何だ? 急に叫び出して」

「レイジ! 今からシャルを探してくるわ! 何処か学院の中

にいるかもしれない!」

ガバツとベッドから跳ね起きると、部屋を飛び出していった。

シャル——つまり遠い従姉妹にあたるシャルロットという女の子らしい。

理由は他にもあるのだが、その子がこの学院にいると言うこともあってリルウはここまで来たのだ。

「やれやれ——」 「見つけたら引き留めておいて!」

またリルウが戻ってきた。かと思うとそう言い残してまたどこかへ行ってしまった。

「忙しいやつだ……って俺、その従姉妹がどんな顔なのか全く知らないのだが」

頭を掻き掻きため息をつく。

「取りあえず、俺は校内散策といきますか」

ついでに従姉妹さん探し……って名前だけしか知らないじゃん、詰んでるわ。

などと考えつつ玲治もリルウの部屋を後にした。

伏線とか絶対に書いてないところある！ボロボロだー！

と作者は泣きたい思いに駆られております。

今からでも遅くない、書いて間あいだに挿れていこう……。

ところでこの回書いてて気づいた。

《間違いなくハードルが高いつつつつ！！》

あの一、作中には補足説明とかしてませんが、玲治達が学院に到達したのは、サイト達がアルビオン行った後なんですね。ウェールズ氏、なむーん。つまり事後って訳です。

他の作者様は大概原作の最初からイベントこなしていつてますが、これ……………途中参加ってどう書きゃ良いのよ？てなわけでリスナーの皆さん、オラに力を分けてくれ……。

次回、早ければ明日投稿できるよう頑張りたい。原稿？もちろん今から書くんだよ！フィーリングだ！フィーリングだ！

第十五話 続き。 だから題名はいらない（前書き）

宣言通り今日投稿できる！

やればできる子なんだと証明した瞬間。歴史に載るわ。

今回、内容は『接触』のテーマで。この数話は続きものなので、深いところの掘り下げと細かい話は後になりやす。

Side法を使ってみた。どうだろ、使い勝手はいいのかもしれないね。

第十五話 続き。 だから題名はいらない

（Side リルウ）

私は逸る気持ち抑えきれずにいた。

何年もの隔たりがあつたが、彼女は元気だろうか。私の事を覚えてくれているだろうか。

子供の頃が思い出される。

長い髪を揺らして草原を駆けてくる女の子。それに捕まるまいと逃げる私。

遊びは追いかけて。屋敷からこっそり抜け出しては、いつもこの草っ原で一緒に遊んでいた。

小さかった私たちの背丈くらいにまで草木が伸びているが、その目に映える青い髪が目印となり、逃げるのはさほど難しくもない。

私よりも小柄だった彼女は、その生い茂った蔓草に足をとられて、少しずつ私との距離が開かせてゆく。

すると彼女は顔をくしゃりと歪め、「待ってよー、リルウお姉ちゃん！」と泣きそうな声で叫ぶのだ。

その頃のシャルは泣き虫だった。怖い夢を見ては夜中大泣き。

私が屋敷に泊まりがけで行ったときも、寂しいから、と言って抱きついて離れようもしない。

そんなシャルが泣くのはいつもの事、もっと強くさせなくちゃ！

とあの頃は常々思っていた。

お姉さんと言われる自分が何となく照れ臭くて、でも嬉しくて、お姉さんらしく振る舞おうとしていたのかもしれない。

「ルール違反はだめだよー！鬼はちゃんと捕まえなくちゃー」

私は後ろを向いて叫びつつも足を緩めない。

後ろの草を掻き分ける音が小さくなっていく。

最初は楽しくて夢中になって走っていたのだが、ふと。気づけば後ろから追ってくる気配がしない。

「シャル？」

足を止めてじっと耳を済ませる。

返事は風が草木を揺らす音だけ。

「どうしたの？　ねえ返事してよ」

今までと打って変わって不安と焦りが胸を蝕み始める。彼女の身に何かあったのではないか、そんな考えが頭をよぎる。

「シャル！？　シャルロット！」

私は元来た道を引き返し始めた。

あちこちを見回しながら駈けていく。だがやはり背の高い草に阻まれてよく見えない。

先程までなんとも思わなかった草丈が、今はとてつもない脅威に感じる。

「シャルロット！どこ？」

ああ、このまま見つからなかったらどうしよう。怪我してるかもしれない。獣に襲われて大変な目にあっているかもしれない。やっばりこんなところで遊ぶべきじゃなかった

「わっ！！」

「きゃあ！」

突然の横からの脅かしに思わず尻餅をつく。

「ふっふーん、やったー！ドッキリ成功！」

どうやらリルウはシャルロットの罠に今まで嵌められていたらしい。まんまと騙せたと喜色満面で跳び跳ねるシャルロット。

その様子を目をぱちくりさせて見ていたリルウだったが、ほっとしたと同時にぷっと笑いが込み上げて、二人して笑いあった。

その後お屋敷に帰って、かんかんになって待っていたイザベラにこっぴどく怒られたような。

でも、あの時のシャルの喜んでいた顔。どんな子をとっても、あれだけ楽しそうで、幸せそうな顔をする子などいないだろう。

「……………」と、思い出に浸ってる場合じゃなかったわ」

気がつけば廊下に立ち尽くしていたらしい。人気の無い廊下だが、リルウは少し恥ずかしくなった。

「さて、シャルはどこにいるのかしら？人に訊けば分かるかしら？……………」

Side リルウ end

「うえ……………すげえ人の山……………」

先程学院中に鐘の音が鳴り響いたかと思うと、にわかに辺りが騒がしくなった。

と同時に美味しそうな匂いの立ち込めてくる。

つまるところ昼食の時間なのだ。

「はあ、そーいや腹減ったもんだ」

一様にマントを着込んだ集団がひとつ方向へ歩いていくの見かける。

「一先ずお先に腹ごしらえさせてもらうぜ。リルウ御嬢様」

ついていくとそこは大きな食堂だった。

いや、食堂の域を越えている。

壁に施された極彩色の絵画。

人形たちの舞踏会を象ったような彫像も繊細で美しい。

そんな中で歳も殆ど変わらぬ少年少女が当然のように食事、談笑していたのだ。

「これが、貴族ってやつか……………」

玲治は畏縮した。

どんな豪気な勇者でも、目の前の光景を目の当たりにすれば呆氣にとられ、思わず後退るだろう。

こんな中に堂々と土足で踏み込むような不作法さは持ち合わせていなかった。

「邪魔だよ、君」

「おうっ?!」

ドンと強い衝撃が背中を襲い、玲治は前によろめいた。振り返ると肩を怒らせて奥へと入っていく少年の姿が。

一瞬だけこちらを気にするような目で見ていたが、何もしないで立っていると安心したようにそのまま行ってしまった。

「なんだあれは。人にぶつかってきたかと思えばじろじろと………」

玲治は咄嗟に怒りの沸き立つのを感じたが、他者からの迷惑そうな視線を肌を感じ、冷静になった。

（よくよく考えてみると俺が入り口に立ち尽くしていたのがまずかったんだろう。とりあえず脇に寄るか）
だが旨そうな食事を前に指をくわえて見ていては、腹が膨れるどころかますます空腹が酷くなるばかりだ。まったく腹が立つ、腹だけに。

なんて冴えないギャグを考えていても仕様がなない。

丁度カードを押して通りかかった、黒髪のメイドの女の子に声を掛けてみることにした。

「あー、ちょっといいかい？」

「あ、はい。なんででしょうか？」

仕事を邪魔して迷惑ではないかと、玲治は躊躇いがちに呼び掛けたのだが、メイドの方は丁寧な仕草で立ち止まってくれた。

「邪魔して済まないとは思いますが、俺が食事を出来るような場所はどこ

ここじゃないか？」

「え？ 貴族様は食堂のお食事がお気に召しませんでしたか？」
メイドは焦点のぼけたような質問を返してきた。

「ん？ 貴族？ 俺は貴族なんてそんな大層な身分は持ってないぞ？ ハルケギニアであるところの平民だ」

「えっ！ 平民だったのですか？！」

メイドさんは何故か驚いたとばかりに口に手を当てる。

「その、マントを着ていらっしやいますから、てっきり……………」

「？」

身に覚えの無いので自分の姿を見た。

地球から着てきた黒い……………コート。マント？

「いや、これはただのコートだ。防寒着だ。似ているがマントじゃない」

「防寒着……………ですか？ こんなに暖かいのに？」

「ここよりも少し暖かいところから来たもんでね。感覚が元の場合に慣れて寒いんだ」

「へえ、遠いところからいらっしやったのですね」

説明するが、この季節（換算推定5月）には北国、つまり日本の東北とトリステイン（フランスと仮定）では温度に別段差がない。

だが日本の方が、季節による温度変化が激しいために、玲治は寒いと感じても現地民は暑いと感じるわけだ。という筆者の考えである。因みに玲治は東北生まれだ。

「……………さっきぶつかってきた野郎も俺が貴族じゃなかった一瞬迷ったのか？」

ぶつかってきた後の何か安心したようなあの顔。おそらく辻褄が合う。

「あの、私シエスタと言うんですけどあなたは？」

「玲治だ。朝月玲治」

「レイジさんですか。あの、私が思い込んでるだけかもしれないですけど、レイジさん、貴族らしいところ…あると思いますよ？」
もじもじと恥ずかしそうにして玲治を見上げる。

「ん？貴族らしいところ？」

玲治はシエスタの顔をマジマジと見つめた。

ほんのりと赤みがかかった頬が、瞬く間に真っ赤に染まる。

「い、いえ！別に大した訳ではないのですが、雰囲気と言いますか落ち着いていると言いますか！」

慌てたように両手を前に突き出してぶんぶんと振る。

ふと、この娘は日本人に似ている気がするな、と思った。

黒髪に清楚さを感じるし、控え目な所が彼に郷愁を起こさせた。熱でもあるのでは、というほど彼女の顔は赤いのだが、それすら気

づかない点、恐るべし。

「そうか、誉められるのは悪くないな。ありがとう、シエスタさん」

「あ、いえ！礼なんて…それとさんは付けなくても構いませんよ？

シエスタと呼び捨てにして貰って構いません」

「じゃあシエスタ。早速だが君に頼みがある」

「はっ、はい！なんでしょうか？」

「…腹が減った」

斯くして玲治は厨房にお呼ばれされた。

そして厨房に入ったとたん第一声がこれである。

「おう！お疲れ！ん？なんだシエスタ。隣の若造は？新入りか？新入りだよな？おっし、早速だがお前に仕事を与え——」 「マルトーさん！この方はお客様です！」

シエスタが止めに入ったときには、マルトーの鍛えられた両腕によって何故か玲治が持ち上げられていた。

「…ブルートゥース。お前もか」

玲治は一人呟いた。

なぜにして俺は、持ち上げられにやならんのか。

ノアイユ家にいた筋肉コックといい、流石鍛えられた漢は違う。脳みそまで筋ッ肉でできているようだ。

「あん？いま何か失礼なこと考えなかったか？若造」

「いえ、滅相もない」

なんかこういうの相手にするの苦手だなーと思いつつ、面倒沙汰を避けるため否定しておく。

「ったくしゃあねえ。シエスタの客なら歓迎しねえとな。お前名前は何？」

「朝月玲治…です」

「よっしゃ、レイジ。そこに座って待ってろや。今暖かいのを出してやる」

厨房の料理は別嬪物だった。筋肉コック同様腕は確かなようだった。

だが玲治は思った。

願わくば。

願わくば『漢の歓迎』は二度と御免であると。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
e
d.
. .

第十五話 続き。 だから題名は知らない（後書き）

「シエスタが可愛いです。でもタバサの方がもっと可愛いです」
→キリンさんとゾウさんが好きな女の子のネタ。分かる人挙手（笑）

はい、今回は久しぶりの主要キャラの登場。

書く予定なかったけど筆進めていくうちこんな展開に。

玲治君東北生まれなんですよ？ 中央高地でも問題なさそう……。

最後の方はオマケ？ うん、オマケです

まあ結果オーライ。次に行きましようの事です。

次回タバサだせるかな？ かな？

それでは皆さん。サヨナラ、さよなら、サヨナラ。

第十六話 飛天許さじ。ヒトガタ許すまじ。(前書き)

おはよう皆さん。そしておやすみ。

今回ふざけてないから。うん

第十六話 飛天許さじ。ヒトガタ許すまじ。

「ごちそーさま。ありがとう。『シエスタ』。とってもおいしかったですよ」

「お粗末さまです。喜んで頂けたようで良かったです」

厨房にはシエスタ、玲治、マルトーの三人だけだ。他の使用人たちはまだ仕事のために外で忙しくしているよう。シエスタらは玲治の相手をしているためにここにいるが、食後く今はもう仕事に戻るのだろう。

「なんでい、俺には礼の一言もねえのか。シエスタにだけ言いやがってよー、ったく最近の若いやつは……」
シエスタにだけ礼を言ったのが気に入らないらしく、腕を組みながら横目で睨めつけてくる。

「いや、マルトーさんの作った料理は最高でしたよ。ただ――」

「おおっと！　　そうかそうか！　　やっぱり俺の作る料理は御馳走だったか！　　だよなあ俺の料理は最高だよな天才的だよな！？」

「うぐえおっ、えええ！　　そううですともうおおお？！」

「マルトーさん！？　　レイジさんがつぶれてしまいますよ！」

玲治が誉めた途端、さっきまでとは打って代わり、その筋肉質の腕で玲治を羽交い締め……もとい抱き締めるマルトー。

力加減を誤って、玲治が押し潰されそうになっている。気丈にも頷きかえすのがなんとも痛々しい。

（その接客力が壊滅的なんだよおおおお！！）
とは言おうとしても、今度は頬を擦り付けてくる大男に為す術もなく。

「聞いてくれよお若造。俺は毎日毎日朝昼晩ここで腕を振るってることによお貴族の小僧ときたら『やれ、俺の分だけ少ない』だの『あな、なんて味だ、俺はもっと薄味が好みなんだ』だのクレームばかりなんだぜ？ 嘗めていやがるよなあ？ 俺の料理を旨いとも言わねえくせしてよお」

「ばえゝ、ゾウベすぬえ……（はい、そうですぬえ……）」

「俺たちがあくせく働いて、出した料理を鼻で笑いやがっていつもいつも苦い思いしてたんだよおー」

「げぼっ、ひゅうひゅう……」

「俺を誉めてくれたのはお前さんで三人目だー！」

「マルトーさん！ 死んでしまいます！」

「おっと、いけねえ」

シエスタのいよいよ悲痛な叫びにようやく気がついたか、『げぼっ』となにやら危ない音をたてた、顔面蒼白の玲治を解放した。

「大丈夫ですか！？ レイジさん！」
噎^むせる玲治の背中を心配そうに擦る。

「……今俺は……三途の川を見たぜ……」

今だ真っ青な顔でそう呟く横顔には、なにか真に迫るものがあった。思わずシエスタは息を飲む。

「マルトーさん！ レイジさんは私の大事なお客さんなんですよ！？」
もっと丁重にしてください！」

「済まねえなあ、つい嬉しくなってよお」

シエスタはキツとマルトーを睨み見据えた。マルトーも流石にやり過ぎたと思ったのか、きまり悪そうに頭を掻く。

「にしても『我らの剣』がいるのにもう乗り換えたのか？」

「ふえっ!？」

マルトーの意味深な発言に、思わずシエスタは素頓狂な声をあげる。同時に、ぽつと火の付く勢いで顔が真っ赤になった。

「ななな何言ってるんですか。別にそんなことはないですから！
というよりサイトさんと私はまだそんな関係じゃ……」

「『まだ』、ねえ？」

「はううう……」

ニヤニヤするマルトーの一言で、遂にシエスタは俯いてしまった。助けを求めるようにこちらをちらちらと見ているが、『いや、俺に言われても』と玲治は首を振る。

「だっはっは！ そんな照れることはねえシエスタ。『我らの剣』
とならむしろ大歓迎だぜ」

「そ、そんな……」

嬉しいような恥ずかしいような。つまり、嬉し恥ずかしの様相で、シエスタはマルトーに背中を叩かれながらはにかんでいた。

本当にそいつの事が好きなのだなあ、と玲治はぼんやりと考える。

（ん？）

その時玲治は先ほどの会話に何か引掛かる言葉を聞いた気がした。

（サイト？）

「なあ、マルトーのおじさん。サイトってーのは一体？」

「ああ、ちよつとばかり前に貴族の誰かが召喚したらしくてな。ロバ・アル・カリイエってなところから来たってんで異国の服を来てるんだが、召喚して早々、なんと貴族の小僧を負かしちまいやがってよ！俺らに希望を与えてくれたんだ。まさに我らの剣よ！

ちなみにそいつは俺の料理を認めた二人目の男だ」

「そう、か……」

マルトーはさも自分の事のようにその男の事を語った。誇らしげに胸を逸らし、鼻息も荒い。

だが、その内容は玲治の疑問を証明するようなものではなかった。

（ロバ・アルカリ・イエってどこから来たのか。日本人かなとは思ったんだがやっぱ気のせいか……）

そこまで考えたところで玲治は席を立った。

「ん？もう帰るのか？」

「ええ長居しすぎだろうし、流石に仕事の邪魔かと」

「……………」

「……………」

「？」

「「忘れてたっ！」」

口を半開きにして玲治を見つめたこと約十秒。

二人同時に叫ぶと、尻に火でもついたかのように慌て始めた。

「しまった！俺としたことがまだデザートが出来てねえ！」

「どうでしょう?! もう二十分もありませんよ?!」

「二十分か、よしなんとかなるかもしれねえ」

そう叫ぶとマルトーは厨房の奥へ駆け込んでいった。

「シエスタ。マルトーさん大丈夫か? 俺、良かったら手伝うけど」

自分の面倒を見ていたせい、ということもあり、手伝いを提案する。だがシエスタは笑顔で首を振った。

「大丈夫ですよ。よく考えるとあまり大騒ぎするようなことでもありませんでしたし」

「あとどのくらい残ってるんだ？」

「えーと、デザートの旅開始どすっぽかしでしたから、ほんの50

0人分でしょうか？」

「ごひゃ……」

あまりの数の膨大さに玲治は絶句した。というかどれだけ怠慢こいてたんだマルトーのオッチャン。

「やっぱり俺が……」

「いえ、レイジさんは私のお客さんですから手伝わせるなんてできません。それに、マルトーさんがなんとかると言えばそうなるものですから」
そう言っただけで屈託のない笑みを浮かべる。

「そういうものなのか？」 「そういうものなんです」 「そうか」 「はい」

「じゃ、じゃあ、俺はこれでお暇させてもらうわ。ありがとなシエスタ」

「はい♪ 良かったらまた来てくださいね」

今今、玲治は厨房を出て学院散策に、シエスタは厨房の奥へお仕事に行きました。

玲治は後ろ髪を引かれる思いをしながらも、満足したお腹を擦り擦り、少し浮かれた気分です歩いていました。

広場に差し掛かると、段々と人がふえてきます。

するとあちらから、マントを着こんだ女の子が歩いてきました。青いショートヘアの小柄な女の子です。

静かな目に探究心を湛え、本を顔の前に広げ夢中になって読んでいました。

玲治は新鮮な学院のようすに目を向けて、その姿に気がつきません。

段々と二人は近づいていきます。

そして、擦れ違いました。

今度はマントを着込んだ三人組の男の子がやってきます。

三人とも明らかに敵意の籠った目で玲治を見つめています。

玲治は初めてみる架空の生き物と思われた青い竜や赤い蜥蜴、宙に浮く目の玉に興味津々でそれに気がつきません。

段々と四人は近づいていきます。

そして、すれ違

わなかった！

ドン！と何かにぶつかる衝撃に玲治は我に返る。

「おい、お前」

ひよろりとした三人組の一人が凄みを効かせた声を玲治に掛けた。テーブルに座り、笑い交わしていた少年少女が急に静まり、こちらを向く。

辺りは緊迫した沈黙に包まれる。

「……すまない。前を見てなかった」

玲治は素直に己の失態を認め、頭を下げた。

「いや、まあそれもあるんだけどちょっと違うんだよねえ」

だが、何か争点が違うようで、今度は太った少年が口を開いた。

ニヤニヤとしながら、自分は貴族ですよーといった風に気障ったらしく額にかかる髪を払う。……目の毒だ。

「はあ」

玲治は首をかしげつつ、少し身構えて目の前の三人組を見た。

玲治を憎しみの籠った目で見つめる三人の少年。背が高いのと、太ったのと、ちっこいの。

いわゆる典型的いじめっ子。

だが何故恨むような目で見つめるのか分からない。もしかしたらこの前ぶつかった男のダチかとも思ったが、それだと本人が居ないのだから辻褄が合わない。

目の前の三人組との接点が全く考え付かず、疑問は膨らむばかりだ。

「なあ、お前」

今度はちっこいのと称された、金髪で、頭一つ二つも違う背丈の男の子が玲治に声をかける。

どうやらこいつがリーダー格らしい。

三人の内、真ん中に居ることといい、どこことなく尊大な感じがすることと相まってそんな気がした。

「なんですか？」

「いい度胸してるよな。平民のくせして」

「は？ 読経？ そんなの一度もやったことないぞ」

「惚けても無駄だ！」

ちっこいのは声を荒げた。金髪が怒りを反映するかのように逆立っていく。

観衆はとぼちりを恐れていそいそと退散し始めた。

「お前は今、物凄く無礼な行為を働いた！」 「極めて無礼だ！」 「全くだ！」

上からちっこいの、ひよろいの、豊かなの。

「いや、身に覚えがないんだが……」

「身に覚えが無いだとう？」

デブの目が細まる。体は太いくせしやがって。

「お前は我らがタバサ様とすれ違った！ 無礼だ！」 「極めて無

礼だ！」 「ま（ry）」

「タバサ様？」

「そうだ！ あちらにおわしますが、我らがアイドル、タバサ様だ！」

ちっこいのの指し示す方へ顔を向けると、本を読みながらいつこへか歩いていく少女の姿が。

「お前はタバサ様の御前にて頭を下げようともせず、ましてやすれ違った。これは重罪だ。我らファンクラブにとって暗黙の了解であった『スレ違い御用』を破ったのだ!」「破ったのだ!」「や(r y」

「いや、それってファンクラブ内の話だろ? 俺は関係な「お前のような奴は」――!」
ずっと、懷から杖を取り出すのを見て思わず玲治は固まる。

「お前のような奴は生かしてはおけぬ! 我ら『タバサ様愛好会』を代表して危険因子は抹殺だ!」

「なんでだよ!?!」

理不尽な論説に反論しなくなった玲治だが、放たれる無数の魔法に身の危険を感じ、背を向けて逃げ出し始めた。

「待て! 逃げるつもりか!」「逃げるな!」「(ry!」

「逃げなきゃ殺されるだろうが!」

追いかけてくる声と魔法に背を向けつつ力一杯叫ぶ。

その額には『よく分からない恐怖に直面した』ことで一筋の汗が見られる。

最も、魔法は玲治の体を一つとして掠りもしない。

ルーンの力によるものだが、相手の意図を読み取り、事前に予測すること避けるというものだ。

なんでだかこのときほどその力に感謝したことはなかった。

理不尽な怒りほど脅威に値するものはないのである。

(かと言ってこのまま追いかけてこしてたらいずれ捕まっちゃう)

そう、相手は魔法を使う身。その力量は計り知れない。
玲治といえども体力に限界はあるのだ。

「ここであつたばれえええ！」

「くそっなにか手はないのか！」

その時玲治の頭にある案が浮かんだ。
辺りに目を走らせる。何かを探すようにして、ある一点に目を留めると、そちらへと向きを変えた。

「そこのお嬢さああああん！　ちよつと止まってくれえええ」

そう、あの『タバサ』とかいう女の子なら、この事態を丸く収められるかもしれない。そう思って声を掛けたのだ。

幸いこの広場を出たすぐに歩いている姿を見つけた。

「汚いぞ貴様！」

その姿へ向けて猛スピードで駆け抜ける。玲治の先に崇拝するタバサを見つけ、危害を加えることを恐れてか、三人組の放つ魔法が止まる。

それを好機とばかりにさらにスピードを上げる。

「タバサとかいうお嬢さん！」

あと数十メートルというところでようやく耳に届いたか少女は立ち止まった。

本を片手に持ったまま振り向く。

青い髪にこれまた見事な蒼い相貌が玲治を捉える。

「助けてくれ！　君のファンクラブとか名乗る奴等に追われてるんだ」

「無関係」

一言だけそう告げると、もう用はないとばかり歩き始める。

「ちょっと待て！せめてこいつらをどうにかしてくれ！君の言うことなら何でも聞くはずだ」

ようやく手助けしてくれるのか女の子は振り向いた。
杖を取りだし、何かを呟く。

そして三人組に制裁を与えるべく杖を下ろした。

「……………本の邪魔」

ぶおと猛烈な突風が吹き荒れ、玲治を吹き飛ばした。

「えーマジかよ……」

風に飛ばされ数メートル。

ようやく地面に落ちた玲治は回転しながらその身を全身打ち付けた。

「痛ってえ……」

全身痺れるような感覚に襲われながらも腕に力を込め、ゆっくりと身体を起こした。

「ふふふ、もう観念しな、平民」

視線を上げるとそこには三人組の獰猛な笑みが。

「その体じゃ、もう君は逃げられないよ。大人しく罰を受けるんだ」

「逃げられない……か」

「ああ、君に逃げる術はない」「(ry」「(ry」

玲治は吹っ切れた。

「そうか。じゃあ仕方ねえよなあ」
ゆらりと立ち上がる。

「逃げられないってんなら、お前らを叩き潰すまでだ。今まで散々やられっぱなしだったが覚悟は出来てんだろうなア？」
そう言って不敵な笑みを浮かべる玲治。

その豹変ぶりに三人は思わずたじろいだ。

「な、何を言い出すかと思えば、君は貴族に逆らおうって言うわけかい？」

「なーに、礼儀の悪い子供を仕付けるだけだ。取って置きのモン出してやるよ。お前らをビビらせるようなすげえモンをなあ！」
そして玲治はポケットに手をつ突っ込んだ。

「見ろ！そして喚け！これが俺の最終兵器だ！」
バツと何かを取り出す。

三人組はビクツと身体をすくませて、恐る恐る玲治の持つものを見つめた。

「なんだい？　それは？」

「見ての通り最終兵器、『爆発的書き心地Dimpleー？バースト“シャーペン”』だ！」

「「「なんだとっ!？」」」

三人組は一樣にしてその迫力に圧され、後退る。
玲治の演技はなおも続く。

「くくく……お前らそんなところに立ったままでいいのか？　愚かなやつらだ」

「ど、どういう意味だ!」

体型がまことにふくよかでいらっしやる男の子が額に汗をたぎらせて叫ぶ。

その表情はまさに目の前で恐ろしいものを見ているかのよう。他の二人も同様だった。

「教えてやろう……俺がこのボタンを押しただけで、こいつの前に立つ奴は真っ黒に染まる……つまりは心を奪われるのと同義ツ!」

喝の籠った玲治の一声に、またしても三人組は後ろへ下がる。

「心を奪われては俺が持っている『抹殺完全消去“イレイザー”』がなければ廃人のようになる……そしてお前らの身体を俺の意のままに操ることが出来る……」

「そんなものがあるわけないだろう?!」

ちっこいのが気丈にも叫ぶが、相変わらず玲治の笑みは消えない。

「そうか？　ここまで無知な奴がいるとは思わなかったな。だったら試してみるか？　今ここで!　お前らの体でな!!!」

「三つ数えてやる。その間に一生操り人形となるか、我が身にすがるか考えろ!　さーん……」

「そんなものは存在しない、へ、平民がそんな危険なものを持つて
るわけがないよ！」

「そ、そうだそうだ！」

デブちゃんが叫び、それにひよろんが賛同する。

そうは言うが、未知なる恐怖に顔はすでに真っ青だ。

「にーい……」

「……う」

「うわあああああ」

「ま、待て！」

とうとうデブッコロが恐怖に耐えられず逃げ出した。

リーダー格としての威厳を保つべく、ちっさいのがおデブさんを引き留めようとするが、それを引き剥がして学院に駆け込んでいった。

「く、くそっ！ 俺ももう駄目だあ！」

ついにはひよろりまで臆病風を吹かし、鶏おデブさんの後を追って
駆けていく。

残るはちびっこのみとなった。

「僕は貴族だぞ……？ そんな嘘に騙されるわ、わけが……」

「いいーち……」

ゆっくりと、いたぶるように。

段々と玲治の顔が鬼気迫るものになっていく。それに従いちっこのの目が潤みはじめる。

そして――

「ぜえ口おっ！」

「うわあああああ！」

今まで気丈に耐えてきた、三人の中でも一番背の低い男の子は、ついに戦線を降りた。

尻尾を巻き、這這の体で逃げていくのを暫しの間見つめる。

「お前の最後まで戦った勇氣は…認めてやるぜ……」

一人広場に佇み、黄昏るような目で空を見上げた。

……カチカチとシャーペンを押しながら。

「あ、やべ。芯が折れてる……」

そんな間の抜けたような言葉は誰が聞いたとか、聞かなかったとか。

とそこに、

「あーら、これはこれは。こんなところでなにしてるのレイジ？」

ビクッとどうしようもなく体が跳び上がる。

ガチガチと壊れたロボットののような動きで振り向くとそこには――

銀髪の少女の格好をした、

鬼が立っていた。

(……凄い。三人を相手にして無傷で勝つなんて)

遠く建物の影から見つめる一つの影。

自然と杖を持つ力が強くなる。

グッと握りしめられた杖は、先祖代々伝わるものであり、ふしくれ立ったそれは主の影よりも大きい。

(いや、元々学院の生徒の力量はそれほどでもないはず。生徒を三人あしらうのは簡単なことかもしれない)

しかもあの三人組は新米一年生の底辺クラス……どうしてか私を追いかけて回すようだったから、読書の気が散って嫌だった。わざと魔法で彼を向かわせてみたけど、お陰で少しは懲りたかもしれない。

(でも彼は一体何者………?)

さっき話しかけられたとき、よく見ればコートの裏、見たこともない素材の服だった気がする。いや、どこかで……そう丁度ルイズの召喚した使い魔が着ていたような。

と疑問に小首をかしげるその数秒後、彼に近寄っていく一つの姿を

見て驚きに目を見開く。

（どうして……？）

何時かの記憶。

それでも懐かしく、忘れられない一人の姿。

それが多少の違いはあれど目の前数十メートル先に立っている。

体が震える。

（そう、そういうこと……）

杖をギュッと握りしめて影は立ち上がった。

身を翻し、その光景から目を背ける。

そして歩き始めた。学院内にある自室に戻るため。

まずは考えねばならない。

彼は一体何者なのか。実力は今だ推し量れない。

（そう、まずは彼から）

影は決意を胸にして、その場を後にした。

第十六話 飛天許さじ。ヒトガタ許すまじ。(後書き)

何となくだか作者の本音が入っていたような……？

「体は太いくせしやがって」とか？ (笑)

批判、甘んじて受けます。

これは酷いと思ったらは非言ってください。

玲治が披露したものはシャープンです。ええ、ただのシャープンです。

第十七話 俺が俺でアイツがあいつで（前書き）

お久しぶりです。黒蜜です。

かれこれ休載日から17日も経過していました。テスト疲れとか、あまら手がつかなくて……

ようやく話も纏まりましたので、投稿させていただきます。次回からは普段通り4日程度で投稿を心がけよう。

第十七話 俺が俺でアイツがあいつで

やあみんな（・・ω・・）

俺はサイト。

好きな食べ物は何焼キバーガー、趣味はインターネットという、どこにでもいる極普通の高校生だ。“だった”というのが正しいのかもしれないな。

でもな、それがたった1ヶ月ちょい前に一変したんだ。

信じられないかも知れねえけどよ、俺、今魔法の世界にいるんだぜ？

……今画面の前にいる奴笑ったよな？

まあそうだよな。今時魔法の世界にいるんだって叫ぶ奴は頭が逝っちゃまった奴くらいだよな。

でもよ、俺の頭はまともで、本当に目の前に存在してるんだ！

俺が体験したことを今から書いてみるが、秋葉原からの帰りのことだ。俺は修理してもらったパソコンを片手に歩いていた。そしたら道路に変な鏡みたいなのが現れたんだ。不思議に思っただけで石投げ入れてみたりとか適当にいじってたら、吸い込まれて気がついたら魔法の世界だった。

んでそこで見たのが知らない人間たち。演劇みたいなマント着て、外人だった。

マジであせったよ。考えてもみろよ、知らない土地で何十人に囲まれてるんだ。ドッキリ番組か何かだと見当違いなこと考えてたけど、あれは精神的にヤバイ。集団心理ってどんなに恐いか分かった気が

する。

でだ、これまた信じられねえことだけど、なんと俺、女の子にキスされたんだよ！

……なんだ？　今度は画面の向こうから殺気が……？　気のせいだよ、うん。

その女の子はルイズっていう名前なんだけどこれが本当可愛くてさ、外見だけは。

蓋を開けりゃ、高慢ちきで高圧的で俺のことを犬扱いするような奴なんだぜ？　ったくありえねえよマジで。

その性格のせいで周りからは離れられてる気もするし、魔法ができないから「ゼロ」ってあだ名で呼ばれてるんだ。俺も最初の頃はネタにしてよくからかったな。そしたら飯抜きにされた……。

でもさ、なんかこう、時折見せる貴族としての誇りっつーのか？　ルイズには結構見直すところがあるんだよな。

……見た目は俺的に好みだし、守ってやりてえとかそんなこと考えてるけど……。

成り行きでなっちまった使い魔だけど、俺はこの世界にいる間だけはルイズと一緒に居たいなって、そう思うんだ。

この前だってあのワールドとかいう髭ロリコン野郎に裏切られて辛い目にあってた。

だから俺がルイズのことを護ってやるんだ。

「サイト？　何してるの？」

「うわああルイズ!？」

突然横に桃髪の女の子が現れて、サイトの心臓は飛び上がらんばかりに跳ねた。

咄嗟にして、立ち上げていたノートパソコンの蓋を閉じる。

「何よその驚きよう。一体何してたっていうのよ」

「アハハ……別に、何も？」

「……………」

白々しいサイトの様子にルイズの目が細まる。

（や、やばい。思わず怪しまれるようなことしちゃった……ああ何でいつも俺は）

直前まで本人への思いを書き連ねていたわけだから、至極普通の行動かもしれない。サイトは気恥ずかしさゆえに体が動いてしまったのだ。だがこの少女の場合、時によっては命にすら関わる危険な過ちであったとサイトは後悔する。

「サイト？ その『のーとぼそこん』とやらで何をしていたのか、見せなさい」

ルイズの疑問の目がサイトを射抜く。そこには種火ほどの怒りの芽が垣間見えた。

（くそっ、どうにかして切り抜けねば……。にしても何で不機嫌なんだ？）

とそこまで考えが至るに、ふとルイズの手に何かが抱えられているのを目にした。

「ん、ルイズ？　その本は何？」

ルイズは手に一冊の本を手にかけていた。革作りの装丁はボロボロ、開けば中の頁が脆く崩れそうなほど古く感じる。ルイズは睨む視線をそのままに答えた。

「始祖の祈祷書よ。姫様のご婚約の際の祝詞を捧げる事になったの」

「姫様が？　やっぱり結婚は免れないのか？」

「……ええ。さぞかしお苦しいことでしょうに」

なるほど、それでルイズは機嫌が悪かったのか。友達思いの優しい子だな、とサイトは独りごちる。

「姫様も大変だよな。好きでもない男と結婚させられるなんてさ」

「まったく、本当にその通りだわ！　　よりにもよってあのゲルマニアの好色皇帝に！　妾がたくさん居るのに今度はトリスティンにまで手を出そうって訳！？　　いくら政略で仕方ないとはいえ、あまりにも不憫すぎるわ！」

「うんうん。ごもつともだな」

サイトは腕組をして神妙に頷いた。

「で？　　一体何をしていたの？」

「うっ……」

たたりとうなじに汗が流れ落ちる。話題転嫁でなんとかあると思っただけがそう簡単には騙されなかったようだ。

「なんだか文字が沢山並んでいたようにも見えたけど、一体何を書

いていたの？ まさか……私の悪口とかじゃないでしょうね」

「べ、別にルイズのことをゼロって呼ばれてるとか書いてないから安心し」

「ぬぁんですって?!」

バチバチとルイズの回りの空気がはぜる。

「げげげ!? 　なんで怒り出すんだよ!?」

「もうゼロって呼ばないと思ってたのに、また私の悪口を言うわけ!」

「んなこと言ってないだろうが! 　かつてに解釈するな、まだ話は終わっちゃいねえってのに」

「言ったじゃないの! 　今私のこと『ゼロ』って!」

安心どころか、むしろ種火の、ほんの苛立ち程度だったものが、怒りにまで発展する結果となってしまった。こうなってしまうてはルイズは聞く耳を持たない。
ルイズはおもむろに杖を取り出すと、ゆっくりとパソコンの方へ向く。

「お、おい、なにするつもりだ……」

「こんなものにご主人様の悪口を書くんだったら、こ、こここの世には必要ないわよね」

「バカよせっ!」

バーン！

一瞬の発光と衝撃が部屋の空気を揺るがす。

その直前、間一髪サイトはパソコンを机から取り上げていた。サイトはパソコンを胸に庇うようにして抱き抱える。

置いてあつた位置には机の黒焦げた跡が。

「何するんだよ！　これは俺が日本から持ってきた唯一の持ち物なんだぞ！　ちょっとムフフな画像とかダウンロードしたばかりの音楽とか一杯入ってるのに！」

「うるさい！　私がこんなに真剣に悩んでるのに、あんたは支えになるどころか、悪口書いて遊んでるだけじゃないの！」

「誤解だって！　　うわっ」

バン！とサイトの目の前の空気が爆発する。衝撃にサイトは床に叩きつけられた。

「もっとお仕置が必要みたいね！　　地に這いつくばりなさい、この犬！」

「じよ、冗談じゃねえよ！」

鬼気迫る表情で杖を向けるルイズ。もう片方の手には始祖の祈祷書はなく、代わって革製の鞭が。

思わずサイトは部屋を飛び出した。

「待ちなさい！」

かくしてサイトとルイズの鬼ごっこが始まる。

そう、あの時玲治はポケットに辛うじて入ったままでいたシャーペンしか持っていなかった。

いつも帯刀しているグレートソードもリルウの部屋に置きっぱなしである。

「そう。確かにあの時は実力行使ではなく、言葉による誇大な恐怖を煽り、戦意を喪失させた。とても良い判断だったとおもうわ。おー偉いえらい」

そう言ってリルウは背を伸ばして玲治の頭を撫でる。

「やめい、恥ずかしい」

玲治はきまり悪そうに身じろぎをする。数秒間のリルウの撫で撫で攻撃により微量に精神的なダメージ。

「私達には味方となるべき存在がこの学院にはいないわ。近付いてくる者が好意を持っているかも知れない。むしろ――“――亡骸”のように好戦的な輩がいるとも限らない」

ふざけているのか真面目な話をしているのか、どちらなのかよく分からないリルウだが、玲治は黙って聞く。

「私達がここに來たのは単純に学問のためとか、私が従妹と会っためだけじゃないわ。もっと大きなことが待ってるもの」

「おう、勿論理解しているとも」

玲治は力強く頷いた。

「俺は、お前のしたいことには、口は挟むが否定はしないぜ」

「ありがとう」

玲治が自分を支援してくれていることを感じて、にこりと微笑む。

「それにしても貴方も結構慣れてきたのかしら？ なんだか歩き方も様になってるわね」

まじまじと見つめながら言う。

「いや、それは前から変わらんと。」

「身だしなみもきちんとしているわ」

「作者が何も考えないからずっと制服とコートのまんまだ」

「……………纏うオーラが変わったわ」

「なんだ？ さっきから誉めちぎって。何か良いことでもあったのか」

「んー特にないけどーそうね」

たたと前に駆け出して玲治の前に来るっと振り向く。銀色の長髪はふあさと広がり、キラキラとしている。思わず玲治は見惚れた。

「前から思っていたけど、案外カッコいいわね、レイジ」

「そうだなー、郭公はまあ良いよなあ。あの独特の鳴き方は杜鵑と並ぶ日本の風物詩として元来より人気のある鳥だな」

「多分それじゃない」

「違うのか？ 杜鵑の方に目がいく人間が多いから、ああ風流の

分かる奴とはこういう御方であるか、となかなか称えていたのだが」

「風流って言われても、私それがどんな鳥か……ってもういいわ」
はふと溜め息をつく。

（恰好いい、ね）

隣を歩くリルウを横目で見ながら、玲治も小さく溜め息を漏らす。

あの流れから鳥の話が来るなどは全くないことは百も承知である。
ただ、恰好いいと言われて、か恥ずかしくなったのだ。

今まで行ってきたこと、それはもしかすると、いや、全て場に流されるままに來ていた。

人死にの起こる場面でも、必ずしも自らの意志のみで動いていたわけではないだろう。

そんな自分がしてきたことに“恰好”良かったことはあったのだろうか。

そう自問するが正直想像もつかない。

トリステインで北花壇騎士との交戦をして、あれから玲治は考えていた。

今までは、この世界に來て全てが不本意のまま巻き込まれた、そう思っていたことは否定できない。

だが、自分の身を守るため、周りを傷つけさせないため、これから
はもっと強くあらねばならない。すでに惰性や時流に任せることは
できないのだ。

（もっと強く。これからの俺は、俺自身が決めた道を進むんだ）

そんな心意気が玲治の心に芽生え始めていたのだった。

とその時。

（殺気?!）

左手のルーン『軍神の恵み』が、反応して熱を帯び、莫大な気配を感じた。

前方数メートル先にある曲がり角から、まるで毒ガスのような殺気がじんわりと玲治の肌を撫でる。寒気を感じて玲治は身震いをした。

「リルウ。ちょっと離れてろ」

「え? 何?」

訳も分からずキョロキョロするリルウを押し戻して、壁伝いに身を滑らせる。

物凄い圧迫感だ。視線が突き刺さるように痛い。ルーン特有の『相手の動きを読める』というのがフル稼働して、まるでこの学院自体が玲治に殺気を向けているかのような錯覚を覚える。

困惑。

そのまま曲がり角まで来た。こちらは寮塔に続く道か。来て間もない臃げな記憶から学院の構造を捻り出す。

背を壁につけて用心しながら気配を探る。

すぐそこに…誰かがいると言う気はしない。ただ、段々と何か近づいてくる。

二人組だろうか、堅い石床をそれぞれ全く異なる靴音が、人気のないこの廊下を賑わせている。

時折聞こえる「犬! ……犬!」と怒気のこもった叫びが、事の重大さを物語っていた。

(粗方その女の子が、野良犬でも紛れ込んで部屋を散らかされたのか)

玲治は被害者である女の子に同情の念を抱いた。これは犬をとちめてやる手助けをせねば。

玲治は身構えると、犬(?)が曲がり角に達するのタイミングを見計らって飛び出した。

「犬確保っ！お……？」

「うわああああ、たすけてええええ！！」

「待ちなさああい！ サイト！」

……犬？

顔は良く見えなかったが、少年の声が聞こえた瞬間咄嗟に玲治はその男を避けた。

その時に足掛けて転ばせることも忘れない。

「ぐがっ！！」

追いかけられていた男は計略通り、玲治の足に引っかかって前のめりに倒れた。

その腕から投げ出されたパソコンが数メートル先へ吹っ飛ぶ。

……パソコン？

「ふっふっふっ、もう逃がさないわよ！」

「ごめんルイズ！

逃げたのは謝るから！

だから勘弁！」

追っ手の桃髪が特徴的な少女に退路を完全に絶たれ、慌てふためく男。じりじりと壁に追い込まれながら、腕を前に突き出して女の子に制止を呼び掛けている。

彼の着込んでいるものは、この時代にないであろう恐らくナイロン製の青のパーカー。そして日本の黒髪。そして手にしていた、決定的な品、ノートパソコン。

導かれた結果はただ一つだった。

「おい、お前……!」

「なっ!？」

玲治が吃驚して声を上げるのと、男が俺を転ばせたのは誰だとばかりに振り向いたのと同じだった。

「日本人か!？」

「罪人にはバツを!」

「ぬわあああつつつ!」

少女が手にしていた杖を降り下ろさず、魔法を使うのも面倒だとばかりに少年に飛び蹴りを叩き込んだ。

飛び蹴り十壁に激突の二段コンボが炸裂。少年は息絶えた。

「お、おいしっかりしろ!」

慌てて駆け寄るが返事はない。

リルウが事の顛末を見届けて近寄ってきた。玲治の後ろから恐る恐る少年を見ている。

「ふう、あんた、ありがと。お陰でこの駄犬を成敗できたわ」

少年を追っていた桃髪の少女は、何でもないといった風に髪を後ろへ流す。その仕草ひとつにも気品が見られたが、玲治にとってそれ

は問題外だった。

「どうしてくれるんだよ！　　氣い失っちまったじゃねえか」

「付け上がったあの犬が悪いのよ。当然の報いだわ」

「そうじゃない！　　ああくそ、医務室はどこだ？」

「心配しなくても直ぐに覚めるわよ。……随分と慌ててるけどサイトがどうかしたの？」

「こいつは……俺と“同じ国”の人間だ」

「「えっ？」」

リルウ、そして桃髪少女ルイズが驚くのはほぼ同時のことだった。

第十七話 俺が俺でアイツがあいつで（後書き）

ようやくの邂逅。長かった。

グダグダやって全く進まないストーリーですが、一つ目標を越えたところでしょうか。

誤字脱字、感想お待ちしておりますー。ではでは

第十八話 人生まだまだコレカラダ（前書き）

とりあえず笑ってごまかしたい。あははははは

話の指針が決まりました。

一つ、しばし原作ルートを通っていいこうと思います。

本作でも出来る限りの描写はしますが、原作の部分は補完してください。

次回から大きく出ます。一気に動きます。

第十八話 人生まだまだコレカラダ

ドン！

16、7ばかりの少年が魔法学院の某所、芝生が敷き詰められた広場に立っている。

春も過ぎようこの頃、暑苦しくも紺色のコートを上衣に、学校☆指定の制服を着ていた。

上のボタンを外し、動きやすく締めを抑えている。幾度とない死戦に遭ったためか、どこか古ぼけて見える。

びゅうと風が吹き、前髪がなびく。

額に汗が滴り落ち、その表情は真剣たるものだ。

ドドン！

その少年から数メートル先、こちらも16、7ばかりの少年が青のパーカーに破れたジーンズと言う無造作な格好で立っていた。

片手をポケットに差し込んで、グッと拳を握りしめている。

そのパーカーはポリエステル製か、ナイロン製か、実に悩ましいところであ「うっせえ、邪魔すんな」—— あい、すいましえん。

もしそこに、

「お前たち学校はどうしたんだい」

近所のおばさんが話し掛けてくれば、土手の決戦宜しき彼らの真剣さは台無しであっただろう。

だが、そのような合いの手はいつまで経っても入れられことはない。作者の怪電波は流れてきたが。

それは、ここが日本ではないからだ。いや、地球でもない。

異世界だ。

そこには日本も、ポリエステルのパーカーも、もちろんパソコンも存在しない。

そんな場所に何故か二人の地球人、しかも同じ日本人が居合わせている。

何万、いや何億何兆数えるのも愚かしいほどの確率である。むしろ奇跡と言っている。

そんな好事に恵まれながら、二人の少年は互いを睨み付けていた。

「名乗ってなかったな。俺の名前は朝月玲治。異世界に飛ばされた、ごく普通の日本人だ」

最初に口を開いたのは玲治の方だった。

向こう側のパーカーの少年に声を飛ばす。

「俺はサイト。平賀才人だ。異世界で使い魔やることになった、ごく普通の日本人だ」

「……平賀」

右手の拳をぐっと握りしめ、玲治はサイトを睨み付けた。

「俺は今、目の前の光景が信じられない」

「ああ、同感だね」

「平賀」

「なんだ、朝月」

玲治は静かな口調で言った。

そう、目の前の光景が信じられない。ただそれだけの理由で二人は対峙していた。

そして前々から考えていたことが玲治にはあった。

「俺は異世界（こせかい）に来て、色々なことに遭って、思ったんだ」

「もし、ここで日本人に出会えたのならとにかく先ずは殴りあうってな！」

そう言うが早いか、玲治は駆け出した。

「俺も、同感だ！」

言い様にサイトも駆け出す。

「「うおおおおっ！」」

お互いが交じわり、拳を振り上げたのはほぼ同時だった。

鈍く重い衝撃音が広場に響く。

互いの顔面を殴り付けた二人はその体勢のまま止まっていた。

「ぐっ！……痛えな……夢でも幻でもない、本当にいるんだな……」
玲治の体が打ち震える。

「おお、我が心の友よ！」

「久しぶりだな！ 俺の国！」

二人はひっしと抱き合うのだった。

相手は魔法の世界だ。

魔法でも夢でも幻でもなく、目の前に存在する。それを二人の拳が証明してくれた。

「なによあれ……」

おんおんと抱き合う二人の男を見てルイズは引いた。

「何で殴ったの？ んでなんでその後抱き合うの？ ローランスは分かる？」

「さ、さあ……どうでしょうか？」

何故か敬語で答えるローランス（リルウ）。

困ったような顔をしてその様子を眺めている。

二人は異世界から来た“使い魔の主人”ということで必然的に知り合いになっていた。

「同郷の士ということで懐かしさあまりの行動……？」

「ふんふん♪ 青春ねえ、これは」

熟した女声に振り返ると赤毛の女性が立っていた。
学院の制服を着ているため17歳前後だろうが、女性的な身体をしていて豊満な胸が目につく。思わずリルウはむっとなる。

「どういこと？ キュルケ」

その少女の名前だろうか、ルイズが聞き返す。

「だ・か・ら、青春よ♪」

「あんまり勿体振ると、怒るわよ」

「あらあら、コワイコワイ」

ルイズの睨みにも全く動じない。髪を後ろへ流しながら続ける。

「男の子って、拳で語り合うって言うのかしら、とにかくああやって仲良くなるのよ」

「「へえ」」

ルイズとリルウが気の抜けたような相槌を打つ。
なるほど、判らんとでも言いたげな。

「良薬はッ！」

「甘い方が飲んでくれるうっ！」

「そうだな！ 医学の基本だなっ」

遠くから誠にハイであらせられる少年二人の声が聞こえる。
吹き出したのはキュルケだけだった。

「ところで」

不意にキュルケがリルウの方を向く。

「あなた見かけないわね。もしかして噂の転校生？」

「え、えと……」

突然の振りにわたわたとしてしまいそうになったが、気を落ち着かせる。

リルウは満面の笑みで答えた。

「はい！ 今度、このトリステイン魔法学院に転入することになりました、ローランス・シャトランです」

「ふーん」

きゃぴとしたローランス（リルウ）をキュルケはまじまじと見つめる。

少しやり過ぎたかとリルウは内心焦る。作り笑顔のせいで、正直あまり使わない頬の筋肉がピクピクしている。

決してリルウは自分に嘘をついているわけではない。

何と言うか、激しいのだ、人見知りが。

「私はキュルケ・フォン・ツエルプストーよ。噂通りに中々可愛いじゃない」

「あ、ありがとうございます！」

どうやら気づかれていない。それどころか不覚にも誉められて嬉しくなってしまった。自然と笑みが溢れて、きゃぴ☆とするはずが、にやけ顔になってしまった。

可愛いて、可愛いって♪

私最近そんなこと言われてないわね。

今度みんなに聞いてみよつと

……とその前に玲治にも聞いてみなきゃ♪

「ま、私の方が美人だけど〜」

「……………はあ」

こ、こいつ……私の今の嬉しさ返してよ！

「まーた、あんたはそうやって人を虚仮こけにする」

「別に虚仮にしてなんかないわよ。ただ私の方が勝ってると思っただけよ」

「どこが？」

「んー、ルイズと比べるとしたら……全部？」

「ムカつく！ キュルケ！ あんたには淑女らしさが足りないわ！ これだからゲルマニア人は嫌なのよ」

「あのねルイズ。わーたーしーは、自分に自信を持ってるの。ルイズの方こそその気の短さは淑女らしくないわよー？ 男の子にも好かれないんじゃないかしらー？」

「んんぬぬぁにをう！」 「何よ」

どうやら口喧嘩が始まってしまったらしい。ルイズは怒気に顔を真っ赤にして、キュルケは髪の毛を真っ赤にしてお互いを罵り合う。

目の前でしゅっぱっぱと行き交う口舌の争いを前に、二人の性格をじっくりと吟味する。

（ルイズの方は典型的な貴族思考ね。曲がったことが嫌い、誇りと品位を重んじるタイプかしら。私と似てるところがあるかもしれないわね。短気な所が珠の傷だけど、ヴァリエール家は確か………有数の大家だったような………？）

今もキュルケと齒を剥きながら口喧嘩をしているのが公爵家のご令嬢とはにわかに信じがたい。

胸など子爵級ではないか。私の方が位が高いわね。

とりあえずリルウはルイズに目を付けておくことにした。
何って、別に胸じゃないから！

（キュルケの方は自尊心が強いと言うよりは嫌みとかそういうった感じはしなかったし、裏表のない性格ってところかしら。）

「ルイズ、キュルケ」

リルウの声に二人はこちらを向く。

「これから、是非宜しく願います！」

一礼するリルウにぱちくりと目をしばたかせるルイズとキュルケ。
直ぐに自分等の醜態を恥じると、

「こちらこそ。きつとこの学校も直ぐに慣れるわ」

「ええ、いいお友達になれるわ、きつと」

打算で友達になるつもりはない。

せっかく学びの舎で友と語り、友と学ぶ機会を得たのだ。きつと、また楽しい時間が入るはず。みすみす逃したくはない。

なんとなくだが、この二人とは、仲の良い友達になれそうな気がし

た。

「今日からこのクラスに転入する方を紹介しますわね」
ルイズらのクラスの主任でもあるシュヴルーズ先生が教室の教壇上からみんなに告げる。

わっ！と教室中がにわかに騒がしくなる。

異世界、地球、どこにいてもこんな風景は変わらなかった。

「静かに！ 失礼ですよ。………さあ、入ってきてください」
シュヴルーズの声に呼ばれて現れたのは一人の少女だった。

おおーと歓声に沸く。

この世のものかと目を疑いたくなるようなさらりとした銀髪。整った顔立ち、華奢な体つきには、鹿を彷彿とさせる。

「今日から皆さんと共に勉学に励むこととなりました、ローランス・シャトランです」

教室を見回しながら少女は言った。

途中、昨日知り合いになったルイズやキュルケを見つける。
ルイズは顔を赤くしてそっぽを向いてしまったが、キュルケは手を振ってくれた。それに手を振り返す。

「皆さんこれからよろしくお願いし

挨拶を終わらせようとして、とある人物に目が留まってしまった。

「……………」

彼女もこちらを見つめている。

「シャルロ、ツト……？」

果たして、それは探し求めていた、幼き頃の思い出深き従妹だった。

何時かのこと

トリステイン魔法学院と外の世界を分ける門の外、二つの人影があった。

リルウと玲治である。

二人して立ち並ぶそのすぐ横には一台の馬車が停車しており、一人の御者が中の荷物を下ろしているところだ。

「ありがとう、クラリス。こんなところまで運んできてくれて」

「いえ。お嬢様のためなら例い地の中水の中草原の中泥沼の中火の中であろうと厭いません」

「どこぞのポケ○トモ○スターみたいだな」
玲治がすかさずつつこむ。

クラリスが運んできたのは武具だった。今腰に提げているコリシュマルドは杖としても使うために元から所持しているが、その予備、防具などは一切持っていない。そのためにわざわざ学校まで取り寄せたのだ。

「――因みに提供は武具屋のオジサン……………ご愁傷様です」
こんなに卜られて、自殺まで思ったりしないか、玲治は南無と手を合わせた。

「というか学校にこんな持ってくる必要はないだろ」
リルウがクラリスに持ってこさせた武具は、レイピア、グレートソードというお二人愛用の武器に加え、刀身の波打った剣や湾曲刀、対刺突剣用のソードブレイカー、腰当て、手甲、兜……と防具にかけても余念がない。挙げ句の果てに銃器まであるのだから驚きだ。

「まさか何処かに戦争に行くのか？」
そんな心配そうな玲治の問いに、リルウはコロコロと笑って答える。

「そんな訳ないじゃないの。もう、レイジったら」

「じゃなんで」

「部屋の中に飾って置こうと思って。
職業病って言うのかしら？　実を言うと近くに武器がないとよく

眠れないのよー。以前トリスティンまで野宿していたときもナイフ握っていないと中々寝付けなかったのよ。いやだ、困ったわねえ……」

「危ないな?! ナイフ握って寝るとか怪我したらどうすんだよ!?!」

「何故か起きたときに顔に傷ができてたりします」

「ちよっ! 待てリルウ! 死にたくなかったら自重しろ!」

「てへっ☆」

「てへっ☆じゃない!」

「あっ! 見てみて! この銃凄いだから! ゲルマニアの職人が作ったものらしいんだけど、ホイール・ロック・ウォー・アックスって言って所謂銃剣よ! 銃の先に斧がついてて近接格闘にも使えるようになってるわ」

そう武器を語るリルウの目は爛々と輝いている。完全に逝っている、こいつはやバイ、近づいちゃイケナイ人の目だー、と玲治は本能的に感じた。

「あっ忘れてた。俺、平賀の飼ってるハトに餌をやりにくんだっ
た。じゃっ」

「あつまだ話は終わってないわよー! これからホイール・ロック方式の構造と問題点の話をしようとしてたのに!」
そういう間にも玲治は学院の奥へ走り去ってしまった。

「まったくもう……あ、そうだ。ねえクラリス」
ふと、以前キュルケに言われた一言が頭をよぎり、

「はい、なんでしょう」

「私って可愛いかしら？」

「勿論ですよ、オジヨウサマー」

そう答えてあげるメイドの姿は実に健気だったとか。

第十八話 人生まだまだコレカラダ（後書き）

ようやくとリルウとタバサの邂逅。

そしてオマケのリルウの性癖。

皆さん枕元におかないと眠れないものってありますか？

私には特にないですけど強いて言えば本ですね。読みながら寝る。
最高。

第十九話 雪風と雹雨（前書き）

3月11日、このたび起きました東北沖大地震。

被災者の皆様の頑張る姿に心からの敬意と、亡くなった方々に心からの哀悼を。

報われる日は遠くありませんでしょう。

おはよふございます。黒蜜です。

最終更新から一ヶ月も経ちそうなの時、ついに投稿しました。
ゆっくりしていった結果がこれだよ。。。まったく。

もう一話分書き終える予定でしたが、あまりにペースが遅いので、
このまま投稿します。

第十九話 雪風と雹雨

「シャルロット、ト……？」

果たして、それは探し求めていた、幼き頃の思い出深き従妹だった。気のせいではないのか？という疑問が脳裏によぎるがリルウはそれを数瞬もしないうちに否定した。

何故ならあまりにも明快な話だったから。

その髪色は蒼。青の中でもライトスカイブルーと称される髪色を持つのはオルレアン家のみ。正しく王家たり、そしてそれはシャルロットであることの証明であった。

だが、これだけでは確信出来ない。

魔法や染料を使えば、誤魔化しは幾らでも利く。

最終的に決め手となったのはリルウの直感と言う、極めて曖昧なものだった。

幾ら過去を振り返ってみてもシャルロットの姿形とほど遠く、やたらと真面目振ったような顔をしている。

面影もないのに、だが只ひたすらに、この子で間違いないという確信ばかりが、心に、頭に広がっていくのだ。

共に時を過ごした仲だからこそ分かる感覚……纏う雰囲気は昔のシャルロットに似通ったところがある。

少女は真顔でこちらを見ていた。リルウの視線と、彼女の視線が絡み合う。

暫しの間、リルウは固まっていた。

リルウは内の中に焦燥にも似た感情が込み上げてくるのを感じた。全身が痺れるように震え、心臓がどくと強く跳ねる。

嬉しいのだ。再び、会えたことが。嬉しくて堪らない。嗚呼堪らない。

数秒の後、硬直から解放されたリルウは、少女に対し何ら疑問を持つことなく、ただただ満面の笑顔で叫んだ。

「やっと会えた！ シャルロット！」

この時、私は予想だにしていなかった。

まさかあんなことが起きるなんて……

「おーおかえりー」

夕方、リルウが自室に戻ると玲治は机の前に座って剣を磨いていた。

机に器具を置き、特殊な研磨用の液体が染み込んだ布で磨いている。以前ガリアの城でクラリスに教習していたときの事、剣を使うのと同時に手入れの仕方も教わったことがある。

クラリス曰く『一流の兵は剣技と等しく整備が出来なければならぬ』とのこと。

あの頃はもうしようもなく地球への未練を引きずってばかりで、それほど重要に思っていなかった。

だがハルケギニアに体も心も慣れてくるとやはり思うのだ。

武士が剣のお手入れをすることは、美女が肌のお手入れをすることに等しいと。手前の武器は常に万全にしろと。何を言ってるかわからないね、うん。

まあ剣を磨くことは長く使う秘訣であるため、最近となっては一回は行うようにしていた。

部屋の戸を開き、リルウが入ってくると、それに気がついた玲治も顔を上げる。

そして元の剣磨きに戻ろうとしーの、ぎょっとしたようにリルウを見ーの。

「ど、どうしたんだ!？」

「何がよ……」

玲治は慌てて駆け寄る。

リルウは肩を落とし、視線を床に向けていた。いつもの毅然とした態度からすれば明らかに様子がおかしい。

玲治が心配そうに顔を覗き込むと嫌がるように顔を背けた。

そのとき玲治はその瞳に光る何かが見えた気がした。

「何があったんだ？」

椅子に座らせ、机の上の雑多の道具類をどかすと自分も対面に腰を下ろす。

そして今にも泣き出しそうなリルウにゆっくりと語りかけた。

一瞬、迷うようなそぶりを見せたかと思うとぽつりと呟く。

「シャルロットが……」

「妹さんのことか……会えたんだな、良かったじゃないか。でもどうして泣いてるんだ？」

「……………いって……」

「え？」

「私のこと……知らないって……………っ！」

リルウはポロリと一粒の涙を溢し、堰を切ったようにぼろぼろと涙を流し始めた。

「ううううああああああ……………！！！」

「な、泣くなよおい。しっかりしろって！」

玲治は慰めようとするが、ますます酷くなるばかりでどうしたら良いか分からず、おろおろとする。

（知らない……？ リルウと妹さんは大層仲が良かった筈だろ？

それを覚えてないだなんて……。それとも何か理由があって…

…?)

そんなことを考えるが、耳に切ない声を聞くと胸が苦しくなってくる。

心に突き刺さるようなリルウの悲痛な泣き声を聞いていると玲治は何かしなければならぬと思い、落ち着けとりあえずリルウを泣き止ませなきゃと自分に言い聞かせた。

自分の持ち物から水筒と『地球』のコンロに似たものを取り出す。そして熱するのに丁度よい容器を探しだし、水筒の水を移し替える。とそれを火にくべた。

お湯が出来上がると茶葉を淹れる。そしてそれをティーカップに注ぐと、未だ泣き止まないリルウの前に差し出した。

「ほら、これを飲めよ。温かいもの体に入れば少しは楽になるぞ」

「……………」

リルウは湯気の立ち昇る紅茶を無言で受けとる。

鼻を吸り、しゃくりあげたりするリルウだったが、ゆっくりとカップに口をつけた。

部屋にはリルウが紅茶を飲む音だけが妙に大きく感じられた。

ようやく落ち着いたのか、泣き止んだリルウが両手にぎゅっと握り締めたカップへと視線を下ろしている。

目の周りを赤く腫らしたままでそれがなんとも痛々しい。

「ねえ、玲治…」

「なんだ？」

玲治は不器用ながら出来るだけ優しく声を返した。リルウの音が陶器のように壊れやすく儂いものに感じられたからだ。

「私ね、ここに来たらシャルロットに温かく迎え入れられんじやないかって思ってた」

玲治は黙って傾聴した。

「でもね、それは間違ってた。あの子は……別人だった。私の事をまるで目の前に敵がいるみたいな目で見てるの………冷たくて、悲しそうな目で………。それに」

「シャルロット、全然笑ってなかった………」

そう言ってまた涙目になる。

ふむ、と玲治は顎に手を当てて考え込む仕草をした。リルウに代わって冷静に考えなければ。

以前リルウから聞いた話だいつも笑みを絶やさない、それはそれは愛嬌と幸せを振り撒く娘だったとか。

それが全く笑う素振りも見せないというのは異常であることは間違いない。

まあ年が経って真面目さが際立った、と言えばそれまでだが。

リルウを敵視するとは一体どういうことなのだろうか。好敵手にこそあれ、竹馬の友とまみえたのなら、流石に喜ぶだろう。自分がそれほど社交性のある奴とは思っていないが、少なくとも自分はそうする。

何かまだ重要な手掛かりが見つからない。

「まあ、なんというか……妹さんも苦勞してるんだろうよ。リルウが知らない内に何かあったのかもしれない。妹さんが酷く傷つくような事件はなかったか？　例えば、大事にしていた人形が飼犬に食い破られた、とか」

取り敢えずリルウから情報を聞き出そうと、一つ質問をして見た。

返答は

「そんな、何年も会ってないんだから細かなことなんてわかる筈ないでしょう」

……………ごもつともです。

打開案がうまく取れずに、また思考の渦に沈もうとしたとき、リルウの独り言が耳に入った。

「でもやっぱりあれが原因なのかもしれない……うん、きっとそうなのかも……」

「うん？　『あれ』って？」

「知ってるかしら？　私たちが居た国……ガリアで王位継承問題が起きたって」

ん、なんか聞き覚えのあるようなフレーズが……？

記憶の中にある言葉の混沌達とリルウの今言った言葉に何かしらの接点が見えた気がする。

元高校の成績中の上（笑）の頭を捻り、捻り、抱え、ようやく思い至った。

「そういえば俺がハルケギニアに来たばかりの頃、クラリスが言っていたな。確か、国王の子供が二人いて、本来弟の方が王になる筈だったのに、兄の方が弟を殺して玉座に上ったっていう」

「あら、そんな昔の事、よく覚えてられたわね。」

「あの時はハルケギニアに来たばかりで切羽詰まっていたからな。人の一言無上の宝^{いちげん}ってやつだ。それに人を的にする鬼のような少女にいつ殺られるか困っていたね」

「私ってそんなに恐く映ってたの？ というかそれでもっと後の話じゃないの！」

「はは、そうだったな」

いいぞ、突っ込みを入れられる程度には元気を取り戻してるな。こうやって途中途中に笑いをいれるのも良い手みたいだ。

リルウは笑みを浮かべ、また真顔に戻ると言葉を続けた。

「――結局、兄の方 ジョゼフて名だけれど、ジョゼフは実の弟であるシャルル様を殺して現王として振る舞ってる。でもそれだけでは終わらなかったわ。敵対し、謀反を企む輩を全て葬った。叛逆心の無いものもただ弟君側というだけで管理職から外したり王都から追い出したり、激しい弾圧が繰り返されたわ。それに飽きたらず遂には弟方の夫人に毒を盛り、そしてその娘を軟禁した」

「ちょっと待てよ、その娘ってのはまさか」
ええ、とリルウは重々しく頷いた。

「この学院に“今”いるシャルロットよ」

「でも軟禁されていたんだろ？　屋敷なり何なり閉じ込めて。それがどうしてここに？」

「分からない。その頃から私の父も狙われるようになってあっちと交流が途絶えてしまったの。私も知ったのはほんの数週間前だったわ。でもその時にシャルロットは深い傷を負ったのかもしれない。父を殺され、母を病んで。」

そこまで言うとはっとしたように言葉を切った。

「やっぱり、私の悩みってほんの些細なことよね、馬鹿らしい。私がかんなちっぽけな事を考えて泣いてる間にシャルロットはどんなに辛い思いをして来たのだろう。だから私の事を恨んでるのかもしれない……」

「おいおい！　そんなに悲しい顔をするなって！」

段々とネガティブの底無し沼にはまりこんでゆくリルウを叱咤激励する。

「リルウの方こそ十分な位苦労してるだろうが。ここまでずっと頑張ってきただろうが。その事はリルウが一番よく知ってる筈だろ？」

父を失い、仲間だった兵士達すら何千人も逝ってしまった。

その辛さは誰と比較することなど出来やしない。リルウの心は見えない傷を負っている。

流れる涙を拭い、ここまで耐え抜いてきたリルウのなんと気丈なところか。

「そんな……私甘えてばかりで……いつもクラリスにも、玲治に

だって迷惑掛けて……」

また変な思考回路に繋がりがあって、まったく。

「良いんだよ、俺は。お前に付いて行ってやるって決めたからな。それに迷惑だなんて思っただけさ。クラリスだって、あんなにお前の事思ってるんだ、そんな訳がない」

「……ほんと？」

自信なさげにおずおずと尋ねるリルウに、玲治は力強く頷いた。

「ああ！　勿論だとも！　だからお前はもっと肩を楽にしろよ。もっと甘えたっていい。人の辛さを分かってやれるのも良いが、もっと自分にも気を使ってやれよ」

「……………あんたが言えることじゃないでしょ」

「ん？　なんだ返事が小さいぞー？　よく聞き取れなかった」

「何でもないわ。ありがと。お陰で元気が湧いてきたかも」

「かもは余計だ……まあいいか。妹さんの事もポジティブに、だ。俺も協力するからな」

「うん！　きっと、シャルロットは何かの間違いね！　明日また話し掛けてみるわ」

そうにつこりと微笑むリルウを見て、ようやく玲治は安堵のため息をついた。

（王族……王位継承……弾圧……毒……妹さんがリルウを敵視する理由がまだ分からない。混沌を再構成するには、まだ欠片が足りない

い)

自分が淹れた紅茶をお代わりし、美味しそうに飲む少女を眺める。
もう時間が経って冷めているだろうに。まあ喜んでもらえたのなら
こっちとしても満足だな。

……リルウはこの件、前向きに考えているようだし、悪いようには
なるまい、きっと。ここはリルウはの裁量に任せても大丈夫だろう。

そう思い、玲治は『んじゃ、また明日』と告げてリルウの部屋を出
た。

「やっと会えた！ シャルロット！」

教壇から呼ぶ声が遠く聞こえるのは気のせいかはたまた自我がそう
させるのか。

心の中でこっそりため息をつきながら、ゆっくりと正面を見据えた。

そこにいるのは記憶にも鮮明な女の子。

やはり、昔から変わっていないのだなと思う。

たおやかな銀髪を靡かせ満面の笑みを浮かべて。

『少女』はこちらを見ている。

背は以前に比べてかなり伸びたように思う。

一つ下とは言え小さな頃は殆ど変わらなかった気がするのに……

幼少の頃を思いだし、昔を懐かしむようにタバサの目が細まる。

いけない。

タバサは小さく首を振り思考を切り替える。

そう、まだ油断してはいけないのだ。

「シャルロット？」

やはりその名に反応して、誰かが声をあげる。

予想通り、誰かの声が私の名前を呼んだ。

その疑問の声呼び水となったかのように、教室中がざわめいていく。

拙い。

この学院で実名を明かしたことはない。

隣に座り、私とリルウを交互に見つめる親友にさえも。

私はタバサ。

大多数の生徒が考えるように、無表情、無口、無感情の三拍子の揃った、謎の多い子。それを演じなければならない。

常に本を手放さず、一般生徒が逆立ちしたって読めない難解な書物を涼しい顔で読む不思議な子。人と殆ど関わらない孤独な一匹狼。

それが私なのだから。

そのスタンスが崩れてしまうと非常に拙い。

任務を行う身として、自分の身分を隠すためにこの立ち位置が最善であり、無難であるというのに。

でも、それ以前に私は――

「違う。私の名前は、シャルロットじゃない」

気づけば声を上げていた。

と同時に私の中にざわめく感情が込み上げてくる。

悲しみ？怒り？どちらともつかない思いに首をひねらせながらも、それを持ち前の冷静さに心の中に押し込めた。今の私の感情などどうでもいい。

問題はそこではないのだから。

「え？」

戸惑うようなリルウの声が私の耳に届く。

当たり前だと思っていたことが、急に否とされたことに困惑している。

(……チャンス)

私はここに打開する一手を見つけた。

私は敢えてここで沈黙した。銀髪の少女が真偽を求めて私のほうを向く。

ここで私が訂正してもリルウ、生徒たちの疑問は解消しきれない。

後々にも残り続ける可能性が高い。

だがここで、他者からの証言が入れば、私の立場は確固たるものになる。

それも人の上に立つ人物——そう、教師のような人物の言

葉なら——。

幸いにもその役を引き受けてくれたのは生徒の上に立つシュヴルーズだった。

「ええ、ミス・シャトラン。彼女の名はタバサですよ」

何ら動じた様子もなくまるで生徒の答えを正すかのように告げる。

普段と変わらない、泰然とした教師の様に周りの生徒もそうだな、と疑問を霧消させていく。

ほう、と心の中で私は感嘆の声を上げた。

予想していたとはいえ、彼女の人望の厚さといい、落ち着いたさまといい、少し過小評価していたかもしれない。

「……私はタバサ。あなたが言っている人とは別人」

そんな教師への遠慮のない考えをしつつ、すかさずタバサは答えた。

「う、うそ……」

「来たばかりで、まだ顔も覚えていない生徒も多いでしょう？
きつとそのせいで間違えたのだわ」

シュヴルーズが彼女のフォローにかかっているが、リルウはまだ腑に落ちない様子でいた。

「さあ、新人生の紹介も済みましたし、そろそろ授業を始めさせて
もらおうかしら？」

なおも食い下がろうとしたリルウが口を開こうとしたとき、シュヴルーズがもう終わりとばかりにパンと手を叩いてみせた。

そして生徒のいる方へ指差しリルウを促す。

「あなたもみんなと触れ合いたいのは分かるけど時間も時間ね。後は休み時間などになさいな」

「……はい」

外面に穏やかな笑みを浮かべ、内には有無を言わせぬ迫力を秘め。リルウは仕方ないと空いている席に歩いていった。

「さて、これから私の授業に移りますわ。前回やった錬金術につい

ての続きよ。『土の魔法に関する創造理論』53頁を開いて……」

周りの空気が授業へと切り替わっていく。その中一人分の視線が私の横顔を見つめているのを感じた。

先ほどのまでの会話がまだ信じられない、そう言いたげな顔をして。

そんな様子には私は自分の持っていた”疑問”がもしかすると間違っていたのか? と思いはじめる。

生徒たちが教科書を見るのに合わせて私もその振りをしながら考える。

彼女は——ひよつとすると、”回し者”ではない?

今までの反応から見て事実を知ってここにいるとは考えにくい。

私を見たときの反応、私の名前を知ったときの反応。全てが素の驚きのように思う。

もしあれが演技なら脱帽すべきかもしれない。現にこんなにも動揺させられているのだから。

例えリルウが潔白無実であったとしても、まだもう一人いる。

タバサはこの前からできた黒いコートを纏った黒髪の少年を思い浮かべる。

こんな暖かい季節に厚手のコートを羽織るなんて不気味。

そしてあの後、一介の生徒とはいえ、3人の魔法使いを相手に撃退したのも事実。

あれを物陰で見っていた時、私には何が起こったか理解できなかった。黒髪の少年がポケットから何かを取り出したかと思うと、生徒たちのほうが怯えだして一人、また一人と逃げ出していった。

あのコートの中には何を秘めているのか。

”回し者”だとするなら、暗器を隠し持っている可能性も否定でき

ない。

ここに來た理由は私の監視か。

あなたが与える任務はすべてこなしているのに……どうしてそこまですて私を追い詰めようとするの？

いけない。落ち着かなければ。こんな程度の低い脅しに惑わせられるようじゃ今の私には母を救うことなんて夢のまた夢。

……私はタバサ。任務をこなすただの人形。それ以上でも、以下でもない。

（それでも）

やはり警戒はすべき。特に得体の知れないあの少年は。

既に手立ては打ってある。シルフィードに頼んだから、接触して何か調べだしてくれるといい。

学院の刻を知らせる鐘が鳴り響く。

「――今日はここまでに致しましょう。次回は今回の話の応用に移ります。復習をしておくこと」

そんな定番の言葉と共に教室内の緊張していた空気が一気に解放される。

わぁっと息を吐く者もいれば、伸びをする者、窓の外に顔を出した己の使い魔と戯れる者、食堂へ階下に急ぐ者……動作は様々なれど思い思いにくつろぐ様子が見られる。

そんな中思いつめた様子で一心に一人の少女を見つめているもの
がいた。

リルウである。

（こんな筈がない……私がシャルロットを間違えるわけがない）
もう一度、問い詰めてみなければ。

「タバサ!!」

教室を出て行く後姿を追ってその名を呼ぶ。

前が見えない位に本を顔に近づけて歩く少女は、こちらに気づかな
いのかそのまま歩き続けている。

「ちょっと、話がしたいのだけれど!」

ようやく追いついたリルウがその肩に手を掛けて引き止める。

「……何?」

タバサ、そう名乗った少女は鬱陶しそうにこちらを見る。

「あなた、本当はシャルロットでしょ?! 私が間違うはずなんて
ない」

「驕り。あなたは自分に過信しすぎている。それにさっきも言った」
半ば詰問気味のリルウに対し少女は冷めたような表情でこちらを見
ていた。

「私はタバサ。シャルロットじゃない」

「そんな…私、リルウよ! ノアイユ家の長女。覚えてるでしょ?
ほら! よく一緒に遊んだ——っ!」

哀願するように答えを求めるリルウの言葉は突然さえぎられること

になる。

目の前に突きつけられたのは少女の背丈よりも大きな杖。

「同じ事を言わせない。これ以上邪魔をするようなら遠慮はしない」

「……………」

「どんなに言っても同じ。私はあなたのことなんて知らない」

「っ!!」

絶句して立ち尽くすリルウを余所に、少女は先までと同じように手に持った本を顔の前に持ち上げて読みながら立ち去っていった。

「そ…ん、な……」

後に残ったもう一人の少女は立ち去ったほうをいつまでも眺めていた。

「よう、玲治」

「おうなんだ、平賀か」

リルウが元気になったところで部屋を出ると、ぼったりとサイトに

出会った。

日本からの現地移住者、平賀才人である。少しニュアンスが違うかもしれない。

「なんだよ平賀って。サイトで言いよサイト」

名前で呼ばれないことが不服らしく、ぶーと抗議の声をあげる。

「俺に名前で呼ばせるには友達ポイントがあと50は足りねえぞ」

「んだよそれ……てか俺ら親友じゃないの！？ 拳で熱く語り合った仲じゃないの！？ ねえ！」

「力で友達が出来るなどと思っていたのか？……ふっ、なんと浅はかな。青春などという理想論と現実の違いのだよ、君」

「酷っ！？ なんかカッコイイ事いつてるけど酷っ！」

「そう言うわけだ。友達ポイントを上げるためにもこの荷物を持ってくれ」

「さりげなくパシらせようとしてる！ お前そんな奴だったのか！ 絶望したっ」

「……慌てるな。冗談だ」

何やら悶絶して廊下に転がるサイトを（いや人の目気にならないのかよ。大物だなこいつ）と楽しげに見つめる玲治。

二人は昨日知り合ったばかりなのだがお互い似た様な境遇の為か、すぐに親しくなった。

彼は東京都民、都会っ子だそうで、東北の街生まれの玲治にとっては、中々の憧れの対象であったりする。

東京から東北までの距離は数百キロも離れている為、滅多にいくことはない。そのため首都圏の流行り、その他諸々の情報に疎く、つまり「隣の芝生はとても綺麗だな、ちよつと君そこんどこどうなのよ」効果が働いている。

というのが『東北出身朝月玲治』からの『首都圏出身平賀才人』との関係である。

まあ、そんな地球の話は今の彼らにとってはただの雑談ネタにしかならないものであり、

実際の彼らの関係はこうだ。

『好敵手』。そう呼ぶにふさわしい。

前述したように、彼らは似たような境遇に合っている。

いきなりハルケギニアにつれてこられ、契約させられ、ドタバタetc...なのだ。

そして、最終的な彼らのポジションは使い魔の在るべき在り方、主を守る剣に収まった。

玲治こそ幾度もの困難を乗り越えたとはいえ、平賀サイトとて例外ではなかったようだ。

その辺りの詳細はまだ詳しくないが、極秘任務を頼まれて、とある国にメッセンジャーとして出向いたとか。

それも王女という止む事無きお方からの直々の命を受けて、世間に知れ渡らぬよう隠密裏に行ったのだとか。そう語るサイトは誇らしげで、玲治が中々大した奴だな、お前と称えたと鼻の穴を大きく開いた。

その旅路は壮烈を極め、空賊に襲われたり、実は自分たち密使の中に裏切り者がいたり、戦争の前線がすぐそこまで来ていたのを間一

髪で逃れたり――など聞いていてハラハラする内容だった。

いやー、お前は本当大した奴だ、この極秘任務、最後までうまく成し遂げられたな、極秘任務。と拍手を贈るとそれほどでもーあるかもねwwwとか言っていた。俺はもう知らんぞ。

……話がそれってしまったが、つまるところ両者共に数多くの修羅場を潜り抜けた一人前の剣士なのだ。

玲治は考えた。

この、平賀才人と共に鍛錬を積み、もう二度と北花壇騎士の時の二の舞を踏むことはなくなるかも知れないと。それに対戦相手が元々師匠として玲治を鍛え上げたクラリス様しか御座りませぬ故、彼女の都合が合わない限り相手はいない。現時点でもクラリスは王都のノアイユ家の面々の所で何かしているらしいし、なんと効率的なことか。

遠くの危ない（力量的な意味で）メイドよりも近くの危ない（？的な意味で）少年、というわけだ。

今度一本やらないか？と聞いたら快く応諾してくれた。

俺の剣技が火を噴くぜ！……とまで自信過剰じゃないが、俺の実力が高いことが確かめられる。

楽しみだな……ふふふ。

「ところで玲治。夕飯はまだなんだろう？」

「あ、ああ。これからいく所だが？」

「よおーし、じゃ親交の念も込めて一緒に食おうぜ！ 厨房に行くとシエスタが優しく出迎えてくれるんだ♪」

なにやら嬉しげに鼻を伸ばしてご愁傷さま。まる。

「おお、それはいいな。……筋肉接待はない、よな？」

「筋肉接待？　なんだそれ？」

「あ、いやこっちの話だ。気にすんな」

俺の大胸筋に飛び込んでこーい！！！！ハーーハッハッハッハッツツ！！！！

……とか言いながら寄られたら軽く死にたくなる。

流石に今回もあるわけないな。うん。

田舎娘っぽいシエスタは確かに好みだし、気が合うから楽なんだよな。そっちの方を期待しませう。

「ルイズは俺に膝だの何のいつて鞭で叩いたり首輪つけられたりで厳しいからなあ。あのシエスタの優しい微笑みが胸にぐっと来るよ……」

なんか、平賀の方は切実な感じなんだな……ご愁傷さま。ま（ry
てか、それ、危ない。両者の合意の下で成り立たない一方的な許諾である場合、それは犯罪として警察に取り扱われるべき事象ではありませんか。

「しかもシエスタ、なんか俺の事熱っぽい眼で見るとだよ。もしかして俺の事……俺リア充wwwwwwあー！ーっ！！！！」
なんか、こいつ危ない。

叫んで正面指差して……やっぱり、こいつと友になってよかったのかと不安にならざるを得……

「ぎゃー！！！！！！」

「ぬおう！？」

サイトにもう少し落ち着くように声を掛けようとしたとき、サイトが忽然と消えた。

何を言っているかわ（ry

ふと、先ほどまでサイトが指を差していたほうから大きな気配を感じ、振り向くと。

おっきなりゅーがいました。

「きゅいー！！」

外見と裏腹に可愛い咆哮を上げる竜。

口から人間の足みたいなのが覗いて……って平賀！？

「うおおお！？ 大丈夫かー！！」

「……！！！！……！！！！」

竜の口からもごもごとくぐもって声が聞こえる。どうやら生きているらしい。

「く、くそっ！！ でもこのままじゃ平賀が……何か、何か武器はないのかっ！」

未来のネコ型ロボット、トラ之助宜しく荷物を慌てて漁る。

大型動物に太刀打ちするには近接武器はまず不利すぎる。以前『亡骸』の大鷹の背にしがみついていた時も振り回されていたからこんな馬鹿でかい竜にも質量で押し負ける！ てか剣はリルウの部屋に置いてきた。邪魔だからと持ち歩かないでいたのが裏目に出たか。没。

次にあげるなら麻酔！ 外傷よりも内から侵食する神経性毒ならこんな馬鹿竜だって耐性は低いはず。

そんなに冷静に考えても、持ってるわけねーだろバーロー！ 応援を呼ぶか……流石に拙い。叫んで助けを求めてもその間に竜に

何されるか分からねえ。平賀の身に何かあったら手遅れだ。それに叫んで竜に触発する事も考えると駄目すぎる。

ここまですが後日談で語られたコンマ数秒の思考。

そのとき荷物の中に入れてまさぐっていた手の中に確かな感触を感じた。

「ええい、ままよ!!」

玲治は”それ”を握り締めて竜の方へと駆け出した。

「おい馬鹿竜（馬鹿でかい竜）！！　これを見ろ!!」
「きゅい？」

竜の頭がこちらを向いた瞬間、玲治はぱっと持っていたものを掲げた。

肉の欠片、最終奥義、旅行、災害、あらゆる面に万能料理!!

ジャーキー!!!!!!!!!!!!

「きゅいーーーー!!」

肉の美味しそうな匂いにつられて竜が一段大きく叫ぶ。
開かれた口からサイトが放り出されるのが見えた。

そして、それが玲治の最後に見た光景だった。

「良かつ」

ジャーキーに目を奪われて襲い来る竜。
ぱつくりと開いた口はジャーキーを持つ腕は愚か玲治の身体ごと飲

み込んでしまった。

「玲治ーーーーー!!!!!!」

ああ、もう少し考えて行動すればよかった……。

それと皆、ジャーキーは乾燥肉だから日持ちはいい。これから備えて防災袋に入れとけよ……

後の話。

「ただいまなのねー!!」

自室で本を読んでいると、窓がバン!と開き、一人の女性が転がり込んでくる。

一糸纏わぬその格好に、部屋の主は眉ひとつ動かさない。

「…何か分かった？」

「ん? あの男の事なのね? 分かったのね!!」

「何?」

「あいつ、とっつつつてもいい奴だったのね!! お腹が空いて
いる私にお肉をくれたのね!!」

「……………」

「な、なんなのね? どうして黙ってるの——痛い! 何するの
ねー!!」

「使えない……」

第十九話 雪風と雹雨（後書き）

シリアスな話にしようと思ったけど、中途半端になった・・・。

今回一人称が難しかったです。

普段三人称が多めで、そちらの表現の難しさに閉口していましたから、一人称の方が楽だろうと思っていたのですが・・・うーむ、侮っていたか。

そしてジャーキー無双。

愛着なんてないです。ネタです。

題名を「この中に一人、従妹がいる!」としようとしていたのは全くの余談。

第二十話 ”戦争勃発数分前”

ハルケギニア、その一角を小さく占有するトリステイン王国。

そのまた東の方、ゲルマニアとの国境をなす土地には、広大な森林地帯が広がっていた。

交通の網も未だ殆ど張られていないため人の気配はまったくしない。

「わーたすけてー」

しかし今日は特別、或いは奇特にも、そんな森の中から、一つの助けを求める声が聞こえてきた。

森の片隅へと視線をおろせば、豚ともはたまた巨漢ともつかぬ奇妙な生き物の群れが、環をなしている。中央に位置するのは、見まごう事なき一人の人間。

この土地では———この世界では珍しい東洋系の顔立ち。もうそろそろ春を過ぎ、夏へ移ろうかというこの季節に、何故か紺色の防寒用コートを着こんだ少年の姿が。

その少年を囲むようにして亜人は威嚇し、手にした得物を振る。有るものは涎を垂らしているものもいた。その目に映る少年の姿は、亜人たちにとっては美味そうな食べ物にしか見えならしい。

少年は生理的な嫌悪を感じているような苦々しい顔を見ると、再び「わーたすけてー」

命乞いの叫びを上げた。

己の命に関わる切迫感はどこへやら、どこかやる気のなさげで芝居染みたものを思わせる。

その背中には少年の身丈ほどもある、幅広の大剣が鈍い光を放ち、血を見る瞬間を今遅しとばかり待っていた。

それに気づかず、亜人たちは己が優勢を信じふがふがと鼻息を荒くさせる。

「はあ……何でこんな目にあってるんだろうな」

危険に“わざと”身をさらし続ける玲治は、深いため息をつき、周囲を取り囲む危険にやるせなく目を通していく。

何故、玲治がこんな辺境の森の中亜人たちと戯れている(?)のか。その説明は後述するキュルケの一言で尽きる。

「宝探し、しましょ♪」

つまりはあれである。新しく来たばかりの玲治と親交を深めるの会、みたいな感じだ。

聞くところによると、そもそもキュルケは前々から宝の地図を買っていたらしい。なんというか貴族たちに最近宝探しという遊びが流行りらしく、貴人の暇つぶしに最適なのか王都や市街地には宝の地図が良く出回るらしい。それに目をつけたキュルケが宝の地図を買ったのはいいものの、使う機会がなかったということ。

とそこへやって来た玲治とリルウ。

絶好のチャンスキター(・∀・)ー！ー！(キュルケ談)

そして今に至る。

キュルケは二人の転入後の一段落終えた休日に目をつけ、校長室へと向かった。

「うむうむ、若いもんには夢と青春溢れるような冒険が必要じゃからの♪ 行ってよし！」

とのオールド・オスマン言を受け（キュルケが出てきたときの校長の顔は鼻の下が伸びていたと言う）、一行は夢と冒険の旅へと出発したのだった。

良い口上に祭り上げられたのではないかとも思ったが、玲治はこの『宝探し』に乗った。

トリステインへ逃げ延び、ガリア側からの直接的な謀策は皆無と言っている。

ここ、トリステイン学院は国営であるため、詰まるところその生徒へ手を出せばそれは外交問題に発展するからだ。

それを考えてから否か、述べたようにガリアからの攻撃は音沙汰無し、『亡骸』——北花壇騎士。得体の知れぬ仇敵——

——も行方知らずとなった。

しかしながら安全であるはずの学院から抜け出し、何ぞ身を危険に晒さんや。（いや晒s（ry）。

玲治としては、リルウの学校生活復帰には最大限の尽力を果たしたかったのだ。

現代社会に於いては、脱引きこもりは益々重要な問題となっていると言うか、これで生徒達（数人だけ）と仲良くなれば良いと思っただけで。いやいや今は中世時代な感じだからそう言う考えはあまり広くはないかもしれないが。

それに妹様の件や、ガリアとの様々な問題がリルウの気をすり減らしているような気がしたわけで。

しかもあのタバサって娘はなんとシュヴァリエらしい。よく分から

ないが強い事の証明らしく、『亡骸』の急襲にも耐えられるか、それとなく訊ねたら「尽力する」との答え。「大丈夫だ、問題ない」とかそんな答えじゃなくて、自分の力を過信しないととても重みのある答え方だ。これは期待していいだろう。

結果、その話が出たとき、玲治は直ぐ様オーケーを出した。

（息抜きになればいいと思ったんだよなあ……）

従妹の件で涙を溢したリルウの姿が、今でも玲治の脳裏に焼き付いている。

別に宝探しで魔物と戦ったりするからってリルウが戦闘狂で宜しいならば戦よヒャッハーみたいな想像は全くしていない。それでストレス発散とかどれだけバトルジャンキーな………といやいやそんなことはどうでもいい。

ここまで色々話が逸れてしまったが言いたいことはただ一つ。

おぜうさま、欠席であります（＾０＾）ゞ。

………今の話と全く関連性がないと言うのならそれは謝ろう。しかし説明をする気にもなれんほど疲れているのだ、分かってくれ。

かれこれ宝探しは朝方から始まり数時間、数十回に及ぶ。

そんな中玲治に当てられていた仕事は四、であった。

玲治「親交を深めるにしては随分な役回りだな」

キュルケ「そう？ なんだか屈強そうだったからいいかなーって
思っただけど」

玲治「何故かあまり嬉しくない：とりあえず前衛にしてくれ」

キュルケ「それならやっぱり『囃』でいいじゃないの♪」

玲治「いやだから言い方が問題なんだって！」

サイト「お前なら……やれる」

玲治「目を逸らして言うな！ お前がやれ！お前が」

サイト「えーだって怖いんだもん（はあと）」

玲治「地獄に堕・ち・ろー！」

ギーシュ「ふははは！ お主の力、私に見せてみよ！」

玲治「誰の真似かな？かな？」

シエスタ「玲治さんなら……きっとやってくれると思います」

玲治「ん、んーそう、だな」

タバサ「……あなたならきつと適任」

玲治「んぬああその目はあやめろお!!?.....あー畜生……」

……とまあ大体こんな感じだった。※一部自己解釈と要約有り。

「あんな感じの理由でずっと囹をやらされているのだからもう訳がわからないな……」

溜め息をつき横目で彼らの居る方を見る。

亜人がこちらに気を取られている隙に彼らは巣窟—————
は廃屋のようだ—————に忍び込んでいる。———今回

一応見張りとして入り口に立っているタバサが心配そうにこちらを見つめてくれているのが、荒れた心にグツと来る。

いやいつも無表情だから心配してくれてるのか分からんがな!

俺の脳内タバサは心配してくれてる!そう思おう!

最後結局諦めたけど、別に、タバサの上目遣いにノックダウンしたとか、期待に込めてやろーじゃねーかーヴァーローとか、そんなわけでは……なあ?

……あー、くっそやっぱ断ったときゃ良かった。こんなに死にそうない目に遭うとかもう少し考えとけばとか何で誰も代わってくれない特に平賀!お前はヘタレか!怖いのか!ならごすじん様のベッドでぬくぬくと丸まってる!表出てくんない日本の恥だ!……は言い過ぎか。

「「グガグガ、ぴぎいいヤアアア!」」

ふと、亜人の咆哮に意識を現実に戻す。凄まじく低脳な声が耳障り、その人なのか家畜なのか分からない姿に目障り。というか作者のセンスがないことで大きな変化を遂げた亜人の叫び声。むしろこれは天才的な領いk(ry

「あーいっそ死にたいなー……」

疲れた思考はもうマイナス系。
もう一度溜め息をつく、トントンと靴を整える。

背中に差していたグレートソードを引き抜いた。木漏れ日に反射する光がちらろと踊る。

見たところ総勢は15、6。

「これが終わったら、問答無用で平賀を殴るんだ……」
それ、死亡フラグ。

「我がグレートソードの力、伊達ではないぜ！」
「「ギャア！」」

玲治が啖呵を吐くと同時、亜人が一挙に押し寄せてきた。

玲治の左手のルーンが光り出した。

Side. タバサ

「我がグレートソードの力、伊達ではないぜ！」

その真意を探り当てたとき、タバサは玲治に称賛を上げずにはいられなかった。

多勢に無勢という状況下、単に短剣で挑んでも勝ち目はない。
しかし玲治の持つ得物はグレートソードだ。通称ツヴァイハンダー。
ゲルマニア生まれの、『対多人数武器』。

数世紀前の、平民が貴族に反乱を起こしたとき際にも用いられた、
その重量と鍛えられた刃で歩兵を“鎧ごと”断ち切るもの。

そしてその重さゆえ個対個よりも個対多を主眼とした歩兵用の武器である。

（武器を熟知している。亜人に囲まれても取り乱した様子もなかった……）

さらに今までの動きを見るに、まるで相手の動きが読みきれているような、そんな卓越した動きを感じる。

そして玲治の左手にはルーンが浮かんでいた。

そこから考えると恐らくは彼女の使い魔か。

異常なほどの運動神経はそれに由来するものだろう。

（やはり、只者ではない）

思わず杖をギュッと握りしめてしまう。

一体彼は、どれ程の実力の持ち主なのだろう？

「……………」

目の前の光景に、タバサは思考を走らせ続ける。

初めは絶好調だった。

一閃した剣が亜人の横腹を抉り飛ばす。背中側に回した剣が亜人の手首を切断、手首がついたままの棍棒を掠め取り、剣の横腹で投げ飛ばす。

斧を振り上げていた亜人の鳩尾に直撃。悶絶し、前のめりになる体

を下から上へ。斬り付けられた亜人の頭は、遅れて肩からずり落ちた。

見切り、擦り、時に受け止め、流し。

16もの思念が自分を殺そうと迫ってくる感覚には少し腰が引けるものがあるが、玲治はそれを今までの経験と鍛練の積み重ねで克服していた。

啖呵切って飛び出した手前、この程度は当然見込むべき戦果である。ただ、その後が悪かった。

横一閃したグレートソードが数匹の亜人を薙ぎ倒したとき、相当量の血が噴き出、それが目に入ったのだ。

「ッ……!! イダッ……!」

“運悪く”、それが勝機を容易く分けてしまうのは戦いの常識。

玲治の両目に入った血は極微量。だが、それだけで絶句するほどの痛みが目を襲った。

汗が目にはいった時も染みてかなり痛かったりする。

加えて入ったのが“亜人”の“得体の知れない”血液であった。

目が溶けるような痛みと視界を完全に失った恐怖感に、玲治はパニックに陥った。

「う、あああ……!」

闇雲に、我武者羅に剣を振り回す。

切っ先が何かを切った感触。

怒号が森に響き渡る。

「目が、目がっ!」

ヒュン！と質量のある何かが顔の横を掠める。確認したくて目をこじ開けようとしても再びの激痛がそれを許さない。もう相手が何処にいるのかすら分からない。絶体絶命だった。

その時。

「ギャアアアア！」

亜人の叫びが響き渡った。

「！？………！！」

一瞬玲治は何が起こったか全く分からなかったが先程のそれがタバサの放った魔法であるという解に行き着く。

タバサの援護射撃が、玲治に襲い来る亜人を討ったのだ。

（何やってるんだ俺は！　これくらいで動揺なんかして！　）

あんなに小さな子だって冷静じゃないか。しかも俺の方が年上なのに助けられちゃって……このまま無様な姿晒し続けていいのか！？　良い訳がない。あるものか。

玲治は自分の心を頬を叩くように鼓舞した。

心の目で見えるんだ。お前ならやれる。

「ありがとう！タバサ」

玲治は叫ぶと呆気に取りられたような顔をするタバサを背にして、剣のグリップを強く握った。

心の目とか、玲治は修行を積んだ仙人でもなければ神人でもないから持ち合わせてはいない。ただ、唯一、人には無いものを玲治は持っていたはずだ。

相変わらず視界は戻らない。

それでも

（殺気なら見える！）

冷静さを取り戻した玲治には良く“見えた”。

殺気が織り成す次手、亜人の意図するもの、何から何まで。

「読める！読めるぞ！」

最早天空の城の大佐と化した玲治は、亜人にイカヅチ（剣）を落とし、プリンみたいに（ギッタギタノボッコボコ）しました。はい、ここ長いんで省略と。

「待たせたわね！ シエスタのところに戻るわよ」

キュルケたちがお宝らしき小さな木箱を抱えて戻ってきたのは、玲治が亜人を倒し終わってすぐのことだった。

「はい、これで応急処置はしましたよ。失明はしないと思いますので安心してください」

「ありがとう、シエスタ。本当、君みたいな子がいて助かったよ」

「いえ、大したことはしていませんから」

そう言うてはにかむシエスタ嬢。

ピッ、ザー

こちら玲治。状況を報告する。

休日を利用した財宝探索初日は、キュルケら潜入部隊による財宝発

見で終わりを告げた。

聞いたところ中々嚴重に保護されていたらしく、木箱自体にも魔法で開かないよう細工が施してあったそうだ。ギーシュ曰く、貴族の誰かから強奪した後そのままの状態で中身がある可能性が高いとの事。土属性のエキスパートなギーシュが今箱を開けに取りかかっている。

今まで数カ所、地図の指す場所に出向いたが殆どがガラクタばかりだったからな……最後くらい良い思いで締めたいところだ。死にそうな思いもしたし。

そして今はここ、ベースキャンプシエスタでシエスタのスマイル0円タイムを堪能しているところだ。

ついさっきシエスタに礼を言ったのは目の応急処置してもらったからだ。ただの血なら平氣らしいが……あんな不潔な野郎の体液だからな。ともすれば失明も現実味を帯びてくる。

だからシエスタが荷物に救急箱一式揃えていたときには、そりやもう、安堵の溜め息を吐くってやつだった。後で何かお礼しないとな。

おっと忘れていた。

「よおー平賀。ちよつといいか？」

「ん？ どうしぎゃあああ！！」

こちらを向いた平賀の背に回り込むと思いきり首を締め上げる。

「てめえ、男だろうが。少しは戦ってみろよ。『こわい』（はあと）とかほざいてないでな。今日はマジにキレたぞおい」

「うげえええわわわかった！ 分かったから今すぐその腕を退けてくれ！ じゃないと俺が死ぬ！」

「死ぬと言えはお前がキュルケたちと一緒に宝を探す間に俺はオークの群れに囲まれて死にそうな思いしたな。あれは目の痛みといい、汚臭といいそりゃあもう酷かったぞ。全くご挨拶じゃないか」

「うわああごめんなさいごめんなさい許して頼むからああああじぬ！じぬ！」

「レ、レイジ？ 提案した私も悪かったわ。だからその腕を離してあげて？ じゃないとサイトがほんとに死んじゃうわ」

キュルケが焦ったように玲治に駆け寄る。

「お、お？ 悪い平賀。やりすぎたな」

玲治としては冗談のつもりで首を締めていたのだが、力を入れすぎていたようだ。

すつと腕をサイトから離す。

「ぐはっ」と嫌な声を出してサイトが喉を押さえた。

「わ、わるかった……明日は役を逆にするから……ゆ、許してくれ……ガク」

「……こわい」

「そんな怯えなくても。タバサ」

「今の絞め技は、下手をすれば折れてた」

「……マジか？」

コクコクと頷くタバサの言葉に玲治は少し反省する。

「開いたぞ！」

とそこへギーシュの歓喜の叫びが響き渡った。

「さて一体何が入ってるのかしら？」

「やっぱ貴族だから宝石とか？」

興奮を抑えられない様子のサイトが声を弾ませて言う。お宝と言う

ものに一際ロマンを感じる性らしい。

「もっと素敵な何かかもしれませんよ、サイトさん」
その隣で目を輝かせたシエスタが箱の開く時を待つ。

「さあ！ 開けるよ」

ゴクリ。

誰もが、箱の中身が明らかになる瞬間に今や遅しと心をときめかせた。

ゆっくりと木箱の蓋が開けられていく。

数秒後、一同の顔には

落胆の表情が浮かび上がった。

夕食を終えて、陽の沈んだ空がそそよと涼しい風を流し始める。
玲治たちは森の開けた土地にキャンプを設営し、そこで一夜を明かすことにした。

今日のベストオブ苦労人だった玲治は、夕食を食べ終わるととうとうとしはじめ、早めにテントに引き上げてしまった。

キュルケやギーシュ、サイトは明日はどの地図の所へ行くのか、焚き火を囲んで選定をしていた。

そのうち夜も深まり、焚き火の火は消え、辺りは静まる。

ここいらの亜人の住処はあのボロ屋一件だったため、彼らを襲う魔物は全くいない。安心して眠れる、静かな夜だった。

皆が寝静まっている中、一人夜の散策を決め込んだ者がいた。

タバサだ。

護身用にはいつも手放さぬ大杖を手にし、いつもの無表情のまま森をゆっくりと歩いている。

ただ、長く付き合っているものなら判るであろう彼女の微妙な表情は、名付けるなら“暗い”。

（失敗だった）

今日の事を振り返り、タバサは心中で溜め息をつく。

（下手に出すぎた）

あの時、亜人に囲まれなにやら身悶えしている彼を見て、今魔法を撃てば、間違いなく仕留められると思ってしまった。

あれだけの人数だ。“もし”死んでしまってもおかしくはない。大穴を穿つような得物を持った者もいたし、今の力量なら魔法を撃つても亜人にやられたと勘違いさせることも出きるはずだった。

“事故で死んだ”とでもなれば上も私に手出しはできない。

完璧だった。

人を殺す罪悪感か、一矢報いることの興奮か、はやる心を抑えて私は正確に狙いを定めた。

小屋からは、誰も見ていない。

私は躊躇うことなく彼に向けて氷の矢を放った。数瞬後にはオーク

になぶり殺され、全身傷だらけの彼の死体が残る――はずだった。

ところがその筋書きは見事に覆された。

彼は死角――亜人の隙間を縫って迫る矢をすんでのところで避けた。代わりに矢はオークの喉に突き刺さった。

私は目を疑った。

彼は目に何か入ったように押さえていたし、オークに囲まれてこちらの動作は全く見えなかったはずなのだ。それなのに、まるでそれも分かりきっているかのように首を少し横へ動かただけで避けてしまった。

驚くべきはそれに終わらなかった。

いつも冷静なはずなのに柄にもなく唾然としていたタバサへと、玲治は礼を言ったのだ。

自分を攻撃した相手に礼を言う者などどこにしようか。いや、勿論玲治は見えていなかったのだから、勘違いでそう言ったのかもしれない。

しかしそれが、タバサに酷く胸の痛みを覚えさせたのだ。

（当然の報い。……のはずなのに……）

罪悪感が、良心の呵責が、今でもジンジンとタバサを苛み続ける。

（もう少し、彼のことをよく知るべきかもしれない）

ふと気がつけば湖の畔にまで歩いてきていたらしい。静かな水面を双月が綺麗に色づかせている。

「あの木箱……」

最後キュルケたちが運び出してきた小さな木箱。
装飾の欠片もない、古ぼけた小さな箱。

中身は手紙だった。

一人の、兵士となった男からの、戦場から家族へとしたためた何十
何百の手紙。

確かにそれは宝だった。

他人には何の価値もない紙切れだけど

彼らにとっては一語一語が大切で。

家族だけが、それがどんなに価値のあるものか理解できる物。

「……………」

タバサは自分の心が大きく揺らいできているのを感じた。
ぎゅっと杖を握り締める。

「お母様……」

私はお母様を、あのようにした者から救うのだ。

それ以外は、何も、いらない。

杖を湖へ振り下ろす。

バシャン！と大きな音とともに水しぶきが上がる。水面はその衝撃
でできた波に大きく揺らいだ。

いつしか赤と青の一对は雲に隠れて見えなくなっていた。

翌朝

「……、んで、次はどこに行くんだ？」

朝も早起き朝月君が、伸びをしながら訊ねる。

「もう大体当ての有るところは行き尽くしたのよねえ。後はガラク
タか、”いかにも”な感じね」

丸めた地図を幾つも腕の中に収めるキュルケ。

「ん？ ”いかにも”？」

「名前を誇張しすぎて自分から『偽者ですよー』って感じのよ。例
えば」

「竜の羽衣」

「あ」

朝食を作っていたシエスタが驚いたような声を上げる。

「それ、私の村にあります」

タルブ村——村はずれ——神社っぽいなにかにて

玲治たち5人（シエスタはタルブの親御さんに会いに行っているらしい）は目の前に鎮座する異質な存在を凝視していた。

「おうい平賀ー。これはおったまげ、だな？」

「……………」

「平賀？」

口をだらしなく開け、瞬きもせぬまま、サイトは”竜の羽衣”に近づいていく。

サイトが手で触れると左手のルーンが光り輝いた。

「まったくこんなものにドラゴンの名を付けるだなんて、正直あき

れて物が言えないね。これに『竜の羽衣』とつけた人間はドラゴンを見たことがないんだな」

腕を組んでうんうんとうなづくギーシュ。

キュルケはそれに賛成なのか、同調する。

「板を付けたカヌーって感じね。形的には鳥に似てなくもないけど羽ばたけないわ」

「羽ばたかない鳥は飛ばない！　ここの村人も随分と風変わりな伝承を信じ込んだもんだね」

：隣でこうも飛行機Ⅱ飛ばない談義をされると、どうも指摘したくなってくるな。むずむずする。

「いいや、まあ飛べるぞ。これ」

「「え？（なんだって？）」」

「おいおい、レイジ君、きみはもう少し頭いいと思っていたがね、こんな子供だましの話にだまされるとは思わなか「ヒヤッハーーーーー！ーーーー！！！！」なんだ！？」

奇声の上がった方へ皆の視線がゆく。

「こいつあ、最高にハイってヤツダアアアアア！！！！！Foooo
oooo！！！！」

見るとサイトが踊っていた。

「ちょ、サイト？！　急にどうしちゃったのよ？」

キュルケの焦り声にサイトは爛々と目を輝かせながら答える。

「だってよ！　ゼロ戦だぜ、ゼロ戦！　空に羽ばたく我らがゼロ戦！　これが興奮せずに――」

「いらんかエーーーーー！！！！」

絶叫に続く絶叫。「いられるかーーーーー！」と言いたかったらしいがもう何言ってるのかさっぱり。

「駄目だこいつ……そつとしておいた方が良い人間だ」

「ボクは親愛なる友を失ってしまったのだね」

「かわいそうにな、まだこんなに若いのに……発狂とは、くっ」

玲治はさも無念そうに顔を伏せる。

ギーシュもそれに習って胸に手を当て哀悼のポーズをとる。

「ちょ、待て！ 俺は無事だから！ ちょっと興奮しすぎただけだつて。しっかり両足で地面踏んでますから！！」

「……………」

「何で皆黙って……そ、そうだ！ シエスタにこれに乗せて貰えな
いか頼みに行こうんそうしよう」

周囲の『可愛そうな子がここにいるアルヨ光線』に耐え切れず、サイトはタルブ村へと駆け出していった。

「ま、とりあえずボクたちも村に戻るとするかね……」

サイトを追って格納庫から出て行くキュルケ、ギーシュ。

ん？ タバサは？

玲治が辺りを見回すと、タバサはまだゼロ戦を眺めていた。

「おうタバサ嬢や。ゼロ戦に興味があるのかえ？」

冗談交じりな玲治の問いに、タバサは二つの瞳をこちらに向けた。

「あなたも、これが何か分かるの？」

「一応な。ゼロ戦、正式名称が零式艦上戦闘機で……まあ分からないか。飛行機だよ。飛行船みたいに空を飛ぶ」

「何に使うの？」

「んー、空を飛ぶため……つてのが結構大きいんだけど……こいつの本質的な用で言う……戦争だな。こいつは戦争の道具だ」

タバサは何も言わずに黙って聞いている。

「俺が前にいた国ではな、あーかなり遠くてどこかは分からないが、最初はちょっとした国同士のいざこざだったのが遂には世界中巻き込むような戦争が起きたんだよ。そんなときに人々が使った武器が銃、船、車、そしてこの飛行機ってわけだ」
一旦そこで言葉を区切る。

「お互い数え切れないぐらい人を殺しあって、結局分かったのは『戦争は愚か』なんてふざけたキャッチフレーズだけだった。最悪だよな。数文字足らずの言葉見つけるために人を沢山殺したんだぜ?」

「あなたは戦争は嫌い?」

「嫌いだな。ああ。戦うこと自体は何も悪いとは思わないが、何も殺しあうようなことは……」

玲治は今までのことを思い出す。

「……やっぱり良くないよな」

「……そう」

タバサは少し考えるような素振りを見せると身を翻した。

「そろそろ行く」

「おお、皆心配するだろうしな」

そして格納庫から出て行くときふと玲治は気になるものを見た。

「海軍…少尉、佐々木 武雄? はーこのゼロ戦の持ち主だった人かな?」

ここはお墓みたいなものなのかな、と玲治は一人手を合わせる。

果たして、玲治の発したこの言葉。耳にしたとある人は後にこう語る。

「墓石を初めに読んだのは玲治」

第二十話 ”戦争勃発数分前” (後書き)

はあ…とりあえず、活動報告で言っておりました、テストの結果でも言っておきます。

数学！赤点、（、＼、）ノやつふおーい

その他は大体平均以上、で総合順位が15位以内入ったわ。

……あら微妙な数字なこと。

数学伸び代が大きいということどこを次伸ばせばきつと…！
人へへ）

あと宿題がなあ…めんどいなあ…高校生疲れるわほんと

身の上話は大体このぐらいで良いや。

ゼロ戦なんすが、とりあえず原作に沿うことは間違いないしつす。

ただね、派生いろいろあるからそれ何がいいか迷うんよ。

原作は多分A6M3なんだろうけど、（ネタバレ注意）どっかの巻で500kt飛行したっていう文があったんですよ。

おかしいだろですよ全く。926km/hでしたら、ゼロ戦吹っ飛ばわ！（空中分解的な意味で）

てなわけで私的には翼とか防弾武装が拡張された、A6M5が良いです！！はい！

ま、500ktなんかむr（ry。

解説・・・ゼロ戦がなぜ空中分解するのかというと、ゼロ戦の形状とプロペラ仕様に由来します。矩形翼だったかな？そういったまっすぐな翼は、翼の機体側と、端っこでは、通り抜ける風の速さが全く異なるのです。

つまり、レシプロエンジンでは最高速度は720km/h辺りが限界なのですが、翼の端っこ辺りはそのときに軽く音速を超えてしまいうんですね。

音速を超えるとソニックブーム（衝撃波）が発生し、機体を激しく揺さぶる他、破損、運が悪ければバラバラになるというわけ。

（プロペラも同じように、ポッキリ折れてしまうのだ）

だからよい子はレシプロで音速超えようなんて思っちゃいけないゾ！死ぬからマジで（＾0＾）、

第二十一話 忘れてたけど、これ軍記物っぽいね（前書き）

今回からーくオリキャラ登場です。

実在した人なんで、まあググリヤワカリマス。

途中でバテましたが許してください。

第二十一話 忘れてたけど、これ軍記物っぽいね

ハルケギニアに面する大海を北西に数百リーグ突き進んだ時、不意に頭上に影を落とす大きな物体が目映る。

それは一塊の巨岩と形容できそうな、”大陸”——アルビオン。

大質量の物質が平然と宙に浮かぶ様はまさに異様であるとしか言いようがない。

島——空を大海原と例えるなら、アルビオン大陸は青の世界にぼつりと存在する孤島のもうでもあった。

ハルケギニアからそっくりそのまま挟りとられたように、太陽が燦々と照らす大陸上面には山、川、森、湖・・・所々には人の住むと思しき村落や城下街もあるようだ。下面はゴツゴツとした礫質の層が垣間見る事ができる。そして大陸の”端”から流れ落ちる水が水蒸気となって、島の下半分を雲が覆い尽くしていた。

見ようによつてはそれは雲に支えられて浮かんでいる様にも思えた。

などと、アルビオン大陸を端から表していると、遠くに雲の切れ間から、小さな黒い点が浮かび上がった。

時間の経つにつれ、次第に大きくなっていく。

アルビオン大陸に後数リーグと近づく頃には、黒い点は一艘の船であるとして認めるようになった。

所属国を表す旗が、風を切るたびにはためく。新興国家である神聖アルビオンの物であった。

戦艦や竜母艦といった戦闘用の大きな船ではなく、それらの護衛や物資輸送に用いられる一回り小さな船であった。

但し、両舷には各10門の大口径の大砲が鎮座していて、それらにしては些が多い。

あるいは重要人物が乗っているのか

船は、少しずつ速度を落としていくと、島の下半分を覆う雲の中へとゆっくりと姿を呑み込ませてゆく。

もし島に激突でもすれば、破損はおろか墜落も有りうる。だがそれは杞憂とばかりに危なげない飛行で船は奥へ奥へと突き進んでいく。

その先で見つけた船一つ分の大きさの穴を通った先には、港のように大きな船が並べられた、港湾施設だった。

「アイアトン殿！ よくぞご無事で！」

「ただの下見だ。有事である方が不自然だろうな」
接岸した船から降りてきた男は近寄ってきた大臣に軽く会釈する。
精悍な顔立ちの男だ。

「クロムウェル皇帝陛下はどこにいらっしゃる？」

「ああいえ、でしたらわたくしがご案内——」 「その必要はないよ」

大臣が案内しようと腕を広げたところに、丁度クロムウェルがこちらへ向かってきていた。

「これは陛下！ 御身自らお迎えくださるとは」

アイアトンは聖職者のような格好をした男が近づいてくるのを見て、歓喜と驚きの声を上げた。

「いやなに、私としても報告が待ち遠しかったところだ。おかえり、アイアトン將軍」

神聖アルビオン王国皇帝であるクロムウェルが島の港湾部まで降りてきた事に、港の兵士は色めきたつ。

それに手を挙げて返すと、クロムウェルはアイアトンに手招きした。アイアトンは神聖アルビオン帝国の建国前から、クロムウェルに付き従ってきた大将であった。

そんな彼にクロムウェルは絶大な信頼を寄せていた。

今回の間諜行為も、腕にも人柄にも信頼のある彼に任せていたのだ。

「どうだね？ 近々行われる結婚式の準備は」

廊下を歩きながらクロムウェルは問うた。

軍靴と革靴の石床を叩く音が静かに響く。

「順調のようで。二週間後のニューイの月のダエグの曜日に予定通り執り行われるそうです」

「それは喜ばしい限りだ！ 祝いの儀には我々も是非参列したいものだね」

皮肉ともとれるクロムウェルの発言にアイアトンは複雑な表情をする。

「しかし殿下。 私目の長年の経験が告げております。 トリスティンとゲルマニアが同盟を結んだ今、

宣戦布告は危険を伴いますぞ」

アイアトンは機嫌を損ねぬよう、丁寧な口調で言った。

彼の話はもつともだ。

近頃小国のトリステインは強国のゲルマニアと軍事同盟を結び、神聖アルビオンと真っ向しようとしている。

先ほどの結婚話も彼女とゲルマニア皇帝との歳の差結婚を言っていた。そしてその政治の道具として使われる予定なのがトリステイン王女だ。皇帝という地位を除けば、娼館街をうろついても可笑しくはないようなアルブレヒトに、国の清廉なる白百合を嫁入り（憶測ではハーレム入りか）させるとは……トリステインも本気のようだ。

この式典が終われば初めてトリステインとゲルマニアの軍事同盟の締結が完了する。結託した二国を相手する国力は残念ながら神聖アルビオンに見込めるかわからない。

となると勝機は締結を完了する前、結婚前夜の無粋な押し入り、と言うことになるのだが、これも些か難しいのだ。

「君の心配はありがたいが、なに、問題はないよ」

憂い顔をするアイアトンを余所にクロムウェルは涼しげだ。

「それは……何故でしょうか？」

軍人であるアイアトンに、クロムウェルは不敵な笑みを浮かべると、答えた。

「トリステインとゲルマニアは未だ同盟の締結を終えていない。ということとはゲルマニアの介入はないと見ていいだろうか？」

「はぁ……なるほど」

つまりクロムウェルの言いたいことはこういうことらしい。

軍事同盟を結んでいないゲルマニアには、宣戦布告を受けたトリステインとの共闘への拒否権が存在する。いくら結ぶ手前とはいえ、人の争いに進んで介入するほどゲルマニア皇帝も頭が悪い訳ではない。そんなところへ時間も兵員も割くのは惜しいと言ったところだろう。

誰しも面倒事はごめんだ。

仮にゲルマニアがトリステインを有用な国と見ているのならば、加担する可能性も無くはない。だが昔ながらの伝統に縛られ、衰退し続ける”小国”に価値を見いだすのだろうかと言われれば、それは否だろう。

さらに、神聖アルビオンは両国と不可侵条約を結んでいる。

これを利用するのが今回の”作戦”であるわけだが、不可侵を侵す行為は強い批判浴びることになる。

『ゲルマニアは金で爵位を売買する』という現在でも風当たりの強い彼らにとって、さらに評価を下げるようになっては、不味いはずだ。クロムウエルのように、相応の覚悟がなければやっていけない。

「ですがそれは可能性論に過ぎません。自国の国力、相手国への優勢、兵士らの士気……勝利への確信を持ってして戦争を行うのが、常套というものです」

「大丈夫だ。それも問題ないよ。前にも言ったことがあるだろう？
我々の後ろにはガリアがついていると。それに――
クロムウエルは立ち止まり、後ろを振り返る。」

「我々にはレキシントン号がついている。負けはない。そうだろう？」

そう言ってクロムウエルは微笑んだ。

レキシントン号

軍将として、肯定せざるを得ない言葉だった。

新技術によってより遠くへと砲弾を飛ばすことが出来るようになったカノン砲。威力も従来に比べて遥かに高い。両舷合わせて108門、船体の真下にも死角を補うための大砲が据えられている。通常

の戦艦が片弦2，30門程度なのを比べればその強大さは歴然といえよう。

このような超が付くほどの大型戦艦が古造戦艦に負けることがあるのか。ありえない。

その差を目の当たりにして、まだ戦争を行うことに躊躇うことができようか。臆病風を吹かしたとして信用を失うことは間違いなかった。

「……………そうですね。あの大砲の前に立ちふさがるものはいかなる物も吹き飛ばす。……非礼をお詫びいたします。皇帝陛下」

「気にしなくともいい。誰でも戦を始めるときには不安は付き物だよ」

「左様で。……ところで、ガリアからの支援の声明は届きましたか？」

「今のところはない。本格的な戦争になったときに、ガリアは艦隊を供出してくれるそうだ。宣戦布告の時は我々の力のみで勝利を勝ち取る」

「私は陛下の崇高なる目的のため、尽力しますぞ」

「頼もしい言葉だ。期待しているよ、アイアトン将軍」

さてさて宝探し二日目、初っぱなからすんげえ宝物を見つけてしま

った、玲治ご一行。

シエスタ嬢のお宅拝見、あわよくば乗せてもらえるかと思っていたサイトであったわけだが……

「あれは私の祖父の物でなあ……一応形見だから大切に保管してはいるが、使い方がよく分からんのだよ」

そう言って竜の羽衣があそこにある経緯を掻い摘んで話始める。何十年前も前、竜の羽衣がここタルブ村の近くに不時着したこと。中からでてきたのがゴーグルを着けた変わった衣装の若者だったこと。竜の羽衣で飛んできたと言っ、もう飛べないと続ける、なんだか信用味のない事を言っていたこと。

「使えるものなのかすら分からんがな」
腕を組みながら苦笑するシエスタの父。

祖父の威厳を尊重して使えるとは思っているが……といった複雑な表情を浮かべている。

「えー、頼むよー、シエスタの父さんー。動かせないなら少しだけ、少しでもいいから俺に貸してくんない？」
手を合わせてお願いするサイト。一同は呆れた顔でサイトをみる。

「おいおい、サイト。それはいくらなんでも不躰と言うものじゃないかい？ それにあれが動くなんてわけが……」

「動くんだYO!!!」

「ひっ」

サイトのとてつもない剣幕に思わず後ずさるギーシュ。

「あれの燃料タンクが空だった。つまり、シエスタのおじいちゃん

はガソリンが無くなったから降りてきたただけなんだ」
サイトとシエスタが見つめあう。

「だから、シエスタのおじいちゃんは嘘は言ってない。あれは飛べるんだ」

「サイトさん……」

なにやら感激に頬をゆるませたシエスタが、うっとりとした顔でサイトを見つめている。

「お父さん！ サイトさんに竜の羽衣をお貸しできませんか？」

「む、そうは言うがなにせ祖父の物だからな……勝手に」

「お・貸・し・で・き・ま・せ・ん・か？」

「わ、分かった分かった！ 別に扱えない物を傍に置いておいても宝の持ち腐れだ。使える物に渡した方が祖父もきっと喜ぶに違いない」

「やった！」 「やりましたね！ サイトさん！」

その言葉に、おおはしゃぎする二人。

それをシエスタの父は全く娘にはかなわんよという苦笑混じりの顔で眺めていた。

「ただ、祖父の遺言にこんなものがあってだな……」

タバサと話し込んでいたため、遅れて村に着いた玲治とタバサ。

「ん？平賀にシエスタ。どこに行くんだ？」

向かいから駆け足気味でやってくるパーカーの少年とそれに追隨する麻服の女の子。

「おう玲治！ゼロ戦使っていいってことになったんだがちょっとな。悪いが後で話す！」

「その前にシエスタの家を教えてください。どこだか分からない」

「三丁目の田中さんの家を過ぎた辺りだ。じゃあな！」

「お、おい！」

呼び止めようとしたがよっぽど急ぎらしく振り返ることもなく格納庫方面へ走り去ってしまった。

「……シエスタ」

「わ、わかりました」

とりあえずシエスタの言った通りに家を教えてもらい向かった。案外そう遠くもなかったので迷わずにたどり着く。

サイトの言葉もあながち間違いではなかった………というかこじつけすぎだろ。

家におじゃまさせてもらうとなかなか清潔感にあふれた住居だった。奥で年長らしき年上の男性がいたので挨拶をするとシエスタの父だと名乗った。

「あら遅かったじゃないの。二人してどうしたの？　もしかしてで

きちゃった？」

皆の集まる横に座ったところを、赤いのが顔を近づけてきた。玲治とタバサを交互にみて冷やかす。

「痛い！」

「…………ふざけると殴る」

「殴ってから言わないでよう！ 悪かったわよ、冗談」

「少し世間話してただけだ。それより平賀はどうした？ やたらに急いでいたが」

「石碑を見に行ったのだよ。 シエスタの曾おじいちゃんの名を拝みたいってね」

茶化して言うギーシュ。玲治の頭の上にしばしば？マークが浮かび上がっていたが、サイトが格納庫側に行ったことと、さっきまで見ていた墓石を関連づける。ああなるほどそういうことか。

「…………となるとシエスタは日本人の血が流れているということか…………」

「ニホン人？」

聞き慣れないのか片言で繰り返すシエシエファザー！。

ただ、人種を指すというのは分かるらしくそれを呼ぶニュアンスで聞き返す。

「シエスタのお父さんは知らなかったんですか？ 多分一度は聞いたことあるんじゃないかと。ほら、佐々木って名前もここらじゃお目にかかれない字ですし。大二本帝国海軍ーだとか、色々耳慣れな

言葉も口にされてたと思いますよ」

「むう・・・確かにそんな気もするが・・・ところでレイジ君。君に祖父の名を教えたかな？　ここじゃ一度も口にしていないはずだが」

シエスタの父の目が急に鋭くなる。

「え、ええまあ、墓標にその様に書いてあったと・・・」

唐突なシエスタの父の変わりようにたじろぎながらもあったことそのままだに伝える。

「他に書いてあった文字は？」

「確か・・・」「海軍小尉　佐々木武雄」でしたが」

「なる、ほど・・・な」

玲治の内心の不安を余所に、問うたシエ父はそのまま黙り込んでしまった。

「??」

口を結んで、黙ったまま玲治を見つめるシエ父。無言なのが場に重たい雰囲気をつく始める。

どうしたのかと口を開きかけた時、丁度サイトたちが戻ってきた。仏様の供養が終わったらしい。

「ただいま戻ったぜ！」　「戻りました」

帰日も駆けてきたのか少し息を切らしてはいるが、話をするには何の問題もないようだ。その声には興奮の色が伺えた。

「おお、はやかったな」

サイトは切れた息と気を落ち着けるため深呼吸をする。

「墓石に書いてあったのが分かった。『海軍小尉 佐々木武雄 異界に眠る』、だ!」

決まったとばかり喜色満面で叫んだ。

だが――

「ふーむ……」

言われたシエスタの父はますます複雑そうな表情をするだけだ。数秒の空白時間の後、ようやくその口が開かれた。

「すまないが遺言の相手はもう決まってしまったよ」

「ここにいる、レイジ君だ」

「はい？」

遺言？ 決まった？ 一体何が起きた？

玲治にとって話が断片的で、真相が掴めてこない。遅れてきたからその前にもしやこの『遺言』につながる話をしていたのだろうか。やはりタバサも同じらしく、普段の無表情もどことなく？ マークだ。

「どういうことだ？」

玲治は周りを見回した。

ギーシュ、キュルケ、シエスタ、サイト、シエスタの父――

皆程度の違いこそあれど驚いた様子で玲治を見つめている。

驚いてるのはこっちのほうだろが。

「私の祖父が遺した遺言があつてね――」

苦笑混じりで事の発端が紡がれ始める。

「墓石の字を読むことができたものに、あの竜の羽衣を渡せとあつた。つまり君が、竜の羽衣の所有者だ」

「は？」

いまいちピンとこない。

「俺のゼロ戦……」

「サイトさんしっかり！」

ぺたりと床に座り込むサイト。

「何言ってるんだいキミは。もともとサイトのものじゃないだろう」

「あら、残念ねサイト。もう少し早く来ていたら間に合ったのに」
口々に呆れたり、慰めたりしているギーシュやキュルケ。

「俺……ゼロ戦に乗るのが夢だったのに……」

ははあ、なるほどな。

ようやく玲治は話の内容が掴めてきた。

玲治がシエスタ家に来る手前、サイトは急ぎでゼロ戦のある格納庫

まで行くところだった。つまり、あの時既にシエスタの曾祖父の遺言の内容を知っていたのだ。

しかし件の刻まれた文字を確かめるべく、サイトが戻っている間、それに気づかず先に玲治が書かれていた文字を伝えてしまった。

あの時のシエスタの父の顔、もしかしたら渡す予定だったサイトに對して無駄骨負わせた罪悪感を感じていたのだろうか。

そこまで考えると、玲治はすでに考えを固めていた。

別段長く考えることでもない。玲治はゼロ戦を欲しいとはこれっぽちも思っていないかったし、

それにそうだ、平賀は友人ではないか。

「平賀」

そうと決まれば玲治は既にサイトに歩み寄っていた。

「なんなら二人でゼロ戦所有するってのどうだ？」

「ほ、本当か！」

ガバリと先ほどの意気消沈ぶりが嘘のように、「嘘だろ」とばかりに玲治を見つめる。

「まあな。遺言てのには別に一番先に言った奴って訳でもないし。ですよね？」

「ああ、もちろんだとも」

シエスタの父に視線を向けるとなにやら微笑ましげな顔をして頷いた。

「それに、だ。俺には操縦の仕方もあるからいいし、こういうのは好きな奴にやらせた方が、飛行機も喜ぶってものだ」

「れ・・・玲治・・・うわあああああ!」

サイトは感極まったように泣き出すと、玲治を抱きしめた。

「うおっ、なんだ野郎、泣くなくつつくな俺の服が汚れる離れろおい平賀!」

「うおーんおんおん・・・ぼんどうに・・・あゝりがどう・・・ううゝう・・・」

「なーんか青春って感じよねー」

「そうかい?」

「・・・みつともない」

二人の友情がーまた一段とー深まったー(ウルルン風)

その後ゼロ戦をギーシュのコネによって学院まで竜騎に運ばせた後、二日目の宝探しが始まるわけだが、目を一度負傷して、流石に二日目も玲治に迷惑をかけてはいられないと言う皆の意見もあり、今度はサイトが囃役兼退治を担うこととなった。

サイトは幸せ絶頂で何もかもぶったKILL!なヘヴン状態で駆け回り、それはそれは成果をあげたわけだが、その辺の物語はまた今度のお話。

べ、べつに、サイトが大活躍する描写書くのがめんどくなくなったとか、前期待せちゃったけどデルフリンガー出すのがめんどくてまあ

いいかって思ってるとか、そんなわけじゃないんだからね！

第二十一話　忘れてたけど、これ軍記物っぽいね（後書き）

……と結局黒蜜は面倒になったから投げただけです。

原作に無い裏話感をはじめに出してみたつもりでしたが、いかがでしょう？

まああれね、色々ご高説してましたが適当に堅い言葉使ってそんな感じにまとめあげれば、あら不思議、軍記物完成。　そういえば軍記物ってなんだろう。

なかなか話が進まないんで次から原作部はしよるかもしれませんが。もし原作とかアニメとか見てない方いたらごめんなさい。黒蜜はこれで全力なのです。

次は戦争はじまるか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5680o/>

あなたに囚われた

2011年7月20日22時09分発行